目　次

詩「火矢嶺」外六編……青木昭成　1
黒い影の絵……三戸岡道夫　6
【連　載】
前橋公園殺人事件（二）……佐々木一郎　21
有院家の人々（八）……大和禎人　31
近藤富蔵の生涯（十八）……金子正義　41
編集子のメモ……48

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

「火矢嶺」ほか六編

青木昭成

火矢嶺

霖雨のあとで　石の鍬が
土に浮きあがったりする段々畑
誰も拾いあげようとしない歴史の
かけらを寄せあつめた風土
「村中でいちばんの見晴らしだで
　火矢嶺じゃ　蕎麦がうんと育つに」
と老いた父親が呟いていた
茜いろの空に染りはじめていた
「なんつったって　野良をやめる
　徒労だもん　ふんとに」
息子はうっむいて焦れていた
会話はとうとう繕われず
それから十五年　村は町に吸収されて
それから三十年　町は町のままで
火矢嶺では夏中　ちがやが白いつばなの波を
天にむかって送りつづけている

たもあみ

マウンテンバイクに乗って
たもを持って　少年が
土手の向こうがわへ消えていく
あの網をふるうと　むかしは
しぶ糸の網の目の
風をきる音がしたものさ
いまは　なにを採集するにしても
ナイロンの糸が風をきるから
手ごたえは無音だろうな

翔ぶおにやんまを待ち伏せして
なんて　もう誰も思いつくまい
反射神経も変質してしまったろうな

入らないで

顔をあげて遠くを見た目が
ふたたび芝生の面にもどるとき
公園の季節はあきらかに土色をおびている
落葉が縁石を洗いはじめるせいだろうか
「芝生に入らないで下さい」
ゴシック文字はていねいな横書きで小さい
いつのなにか泥が跳ねあがって　無聊が
慰められるように作ってあるのか
影をひいてポール時計が直立している
太鼓橋が背中をまるめてりきんでいる
こんなふうに風や陽に晒されている人工の姿は
なんだかサラリーマンのなりわいに似ている
だんだん無口なたたずまいに見えてくるころ
公園の季節は一通のメッセージのように
ただ垣根のあちらへ黙って送られてしまう

ある

きみにはある　和服だから
ぼくにはない　洋服だから
それは袂と懐さ　袖はゆうならば
「袖すりあうも他生の縁」で
ぼくにもあるが両手首にややあまる

ぼくは喋るまいと思いつつ
しかし　それが自慢である
ずるい手帳におろかな財布め
ふざけた櫛とまじめな名刺入れよ
と言いつつ　みんな内ポケットに
仕舞い込んでも嵩ばらない

でも　成ろうことなら
きみの袂と懐のそれぞれ内側を
ほんの一瞥してみたいもの
その訳を　ぼく自身が知らない
甲羅を経たからといって分からない
きみの匂い袋のうつり香のよう
ハンカチの刺繍のあやのよう
ただ何かが　好奇心をくすぐる

きみはかるく口を押さえて
咳ばらいする　すると何故か
ぼくは煙草と百円ライターと
左脇ポケットのうえからそっと
触れてみて気付くのだ
持ち合わせのないティッシュ
それが入り用だと気をまわす

習い性　というのはよけいな御世話
人生いろいろ　とあげつらうのは勝手
それでもぼくの右膝ポケットにはなお
印鑑と小銭入れと大きめのキーケースと
秘密らしくない秘密がおさまって仰々しい
かくて　和服だからきみにはない
そしてぼくにはある　洋服だから

不眠

きみは　きみの手鏡に
きみの手鏡を映したことがあるか
ぼくはこん夜　ぼくの横顔が
ぼくの横顔の向こうがわに
いくつ覗くかためしてみている

己にへだてられ
おのれの背後でいくたりもの己が
急速にとうざかり滑稽にみえがくれする
ぼくはゆくりなくも
おのれのことばの海原を遊泳している
あてどない空間を呼吸している

いま過去がすべてぼくの背後に
未来がすべてぼくの無明のなかに
蠢いて　ただ　時刻だけが
かぼそく絡みつくぼくの動悸を
すげなく置いてけぼりにして往く

だから躰に迫る闇にさからい
ぼくは　自分を裏がえしにして考える
枕に額をのせて問いかけてみる
きみは　きみにそむく己の背中を
おのれの視野でとらえることが
できるか

複眼

赤い屋根の
ロッジなど　並べて
風の複眼の
人いきれ
未知の世界から
くもの巣や木霊が
いそいそ　帰ってくる
公園のベンチで
太陽は蒼白に　ねむる
魂が一つ弾きだされて
目をつむる
バイクは盗まれる
じわり空地で
クレーン車が汗して
「いやあ
　それほどまで　むなしく
　ありますまい」
近年　ボンズは声だかで
死んだ土蛙の
腹よりもつまらない
のぼり窯の　煙突は
すやきの質でまがる
ざくろの実は
ほんとうに亀裂する
たえず生命のむく方へかたむき
脚の弓を　ふり　ふる
うまおいの髯

秋ぐち

真水をのむわたしの
小指の　ひえた容積
胸のボタンは
みじかい音の輪
ためいきの国から
ゆっくり浮かんで
羽毛が　軌跡になる

落書きが
土蔵の壁をいためている
日照りつづきの　閑寂に
釣竿をかついだ土地の人が
微苦笑している
貯水池の芯からあらわれて

道はなめらかに
蛇行する
ゆがんだガードレールに
からむ衝突の　ガラス　ゴム
オイルの散乱するにおい
記憶はひっくりかえる

「まんじ」季刊発行内規

（発　行　日）　（原稿締切）
春季号……二月一日　十二月三十一日
夏季号……五月一日　三月三十一日
秋季号……八月一日　六月　三十日
冬季号……十一月一日　九月　三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。

黒い影の絵

三戸岡道夫

（一）

ムンクの絵に、「叫び」という題名の絵がある。

燃えるような夕焼空を背にして、荒々しいタッチで、上半身の男の姿が描かれている。男は宇宙にひろがる何ものかから身を遮断するように、両手で耳をふさぎ、恐怖の叫び声をあげている。人間の内面の恐怖におびえる、狂気を鋭く表現した絵で、見る人は誰もが、自分が抱いている魂の恐怖の反映をそこに見る気がして、慄然たる思いにかられる。

この絵を見るたびに、清原弘子は、

（男は人生の淋しさに堪えかねて、絶叫しているのではなかろうか）

という狂気を感じた。

弘子は受持児童の藤上晃の絵を見たとき、このムンクの絵をふと思い出したのであった。

（狂気…？）

まさか。小学校四年生の男の子の絵の中に、人間の深部を覗くような狂気などが、あるはずがない。

（でも…）

と、弘子は思うのだった。

（この児童の絵の中には、なにか異常なものがある）

いま弘子の手許にある、晃の絵は五枚だった。いずれもが、弘子が四年二組を受持って以来、この半年間ほどに描かれた絵ばかりであるが、絵の異常さは、どの絵にも共通に現われていた。

最初の一枚。家族の団欒風景が描かれていた。あるいは、家族で夕食をとっている風景といっていいかもしれない。食卓を囲んで、お父さんらしい人、お母さんらしい人、それに男の子と、三人がテーブルを囲んでいる明るい光景であった。

が、その男の子と母親との間に、黒い影のようなものが描かれているのである。といっても、それは人間の形のようなものが、ただまっ黒に塗りつぶされているだけであったので、それが果して影なのか、それとも別の何かを現わしているのか、弘子にはよく判らなかった。

それは、見ようによっては、食卓の上の黒い大きなポットかなにかのように見えるし、テーブルクロスの汚点のようにも見えるし、男の子か母親の影のようにも見え、また、もう一人の人間が黒く象徴的に描かれているようにも思われた。

しかし、絵全体の色彩が明かるく、おおらかな描き方であるだけに、そこだけが画面を破壊しているように見え、弘子はなぜか、明かるい団欒の裏にひそむ内面が、切り裂かれてそこから黒い顔をのぞかせているような気がしてならないのだった。

この黒い影は、残りの四枚の絵にも、同じように描かれていた。

次の絵は、『友だち』とでも名ずけたらよかろうか。五、六人の子供が輪になって遊んでいる絵であったが、その中にも黒い影がいるのであった。が、それも黒く描いた一人の友達なのか、それとも誰かの影なのか、わからなかった。見方によっては、その絵を描いている晃少年の、内面の投影のようにも見えなくはない。

次はプールの絵。夏のプールで泳ぐ裸の人の群の中にも、黒い影が泳いでいた。四枚目は街頭風景。通行人に混って、黒い影が歩いている。五枚目は海の中。舟が浮かび、魚が泳いでいる。魚の中にも、黒い魚が泳いでいる。

（いったい、これは、何なんだろう）

弘子は首をひねった。

（どうして、こんな絵を描くのだろう）

弘子は絵を机の上にひろげたまま、児童の帰ってしまった教室の中を見渡した。

藤上晃の机は、中ほどから後の、右寄りにあった。弘子はその方へ視線を廻し、机に座った晃の顔を思い出していた。

身体は普通より大きめで、顔の引き締った、明かるい性格の生徒といってよかった。勉強にも熱心で、授業中もその席から、まっすぐ弘子の方に向けられている視線の強さが、印象に残る生徒であった。

（明かるくて、心配のない生徒）

というのが、弘子がこれまで晃に対して持っている印象であった。

弘子は教室を出ると、隣の教室へ入っていった。隣りは、学年主任の勝俣陽平の教室である。

「なにか、また、起きましたか」

弘子の姿を見て、勝俣は机から顔を上げた。

「ちょっと気になるものですから、ご意見を伺いたいと思いまして」

と、弘子は五枚の絵を勝俣の前に並べて、
「この黒い影なんです。絵は普通の子供の健全な絵なんですが、この黒いところが気になりまして…」
勝俣もしばらく晃の絵を、睨むように見ていたが、
「なにか、心の暗い影の、投影のような気がしますねえ」
と感想をのべた。
「先生もやはり、そう思われますか」
「一枚の絵だけにあるのなら、それは偶然か、いたずらといえるでしょうが、五枚そろってということになると、ちょっと異常な気がしますね。そんな子供なんですか、この生徒は。性格が暗いとか、ひねくれているとか、あるいは家庭環境が複雑だとか…」
「いいえ、そういう点がまったくないだけに、ちょっと心配なのです」
「時々、似たような絵を描く子供がいますね。お母さんの絵を描きなさいというと、顔がまっ白なお母さんを描いて、『これでいいの』という子供がいる。また、どんな絵を描いても、まっ黒や、灰色に塗りたくって、平気な子供がいる。いずれも、お母さんや、家庭へのコンプレックスが、原因になっていることが多いのです。心因性だと思いますね。本人へは、なにか聞いてみましたか」
「いいえ、それは、まだ。あまり本人を刺戟してもどうかと思いまして」
「やはり、何かありますよ。一度、それとなく聞いてみたらどうでしょう」
そんなことがあってから、弘子はその機会を狙っていたが、なかなかいいチャンスが見つからなかった。そうかといって、晃だけをわざわざ一人呼んで聞くのも、不自然な気がした。
そんなある日の図工の授業時間に、弘子は、生徒の絵の個別面接指導をやってみたらどうかと思いついた。絵の授業の時間に、生徒を一人一人呼んで、個別に生徒を指導するのである。
藤上晃の番になったとき、弘子は、
「この黒いもの、なんなの？」
弘子はさりげなく聞いてみた。
（それは人の影です）
という返事が返ってくるのを、弘子はひそかに願っていた。晃が『人の影』という明確な意識を持って描いているのなら、一応は安心だからである。
晃の顔に、ちょっと困ったような表情が走った。しかし、その表情はすぐ少年の健康な顔つきの中に消えて、
「とくに、なんでもないんです」
ぶっきら棒ともいえる口調でそう答えた。
「でも、この絵にも、どの絵にもあるわねえ。どうして…」
「理由って、とくにないんです」
「ないの、そう…」
「描きたいから、描くんです」
「描きたいからねえ…、そうなの」
「描いていると、自然にそうなっちゃうんです」
あまり教師の方から、理詰めに追究してもよくない、受身で対応していた方がいいと、弘子は、
（そうなの、そうなの）
と話を聞いていると、晃の心境の一端が、ぽつん、ぽつん、と洩れてきた。その心境は、たとえ大人でも適切に語るのは難かしい複雑さのようで、少年の口から適確な表現で聞こうというのは無理というものであったが、晃の断片的な発言を弘子なりに纏めてみると、
（べつに意識して、黒い影を描いているわけではない。ふと気がつくと、いつのまにか黒色の絵具を塗っている。だから、特にこれが『何だ』という意識はない。ただ、この黒い影を描かないと、なにかを描き残しているような気がして、落着かない）
晃の気持を大人の言葉で表現してみれば、このようなものかもしれなかった。
「なんとなく晃君の気持、先生にもわかるような気がするわ」
晃はちょっと複雑な表情で微笑した。
「ところで晃君のお母さんは、毎日おうちに居るんだっけ？」
勝俣先生から、『家庭環境』という言葉を聞いて以来、なんとなく弘子の心にひっかかっていたことを、聞いてみた。
「いいえ、会社へ行っているので、居ません」
「あら、そう。晃君のお母さん、おうちに居るんじゃなかったっけ」
「ちがいます。会社へ行っています」
晃は強い調子で、『会社へ行っています』を、もう一度くり返した。その言い方には、弘子に訴えるような強い調子があった。
「そうなの、いつ頃から」
「昨年の今頃からです」
たしか晃の母親は、会社勤めをしていないはずであった。すると、もう一年も前から勤めに出ていることになる。弘子は少しも知らなかった。
ひょっとして晃の絵の黒い影は、そのことと関係があるのではないかと、弘子はふっと思った。そういえば、晃の以前の絵には、黒い影はなかった。それが現われはじめたのは、この半年ほどのことだと、弘子は気がついた。
図工の個別指導の時間が終ると、その日の授業は終わり

だった。子供たちは、
「わーい」
「先生さようなら」
蜘蛛の子を散らすように、教室の外へ散っていった。
晃もランドセルを背おい、ズック靴をはくと、外へ出た。
すると、校舎の外れのところに、四、五人の同級生が、立ちはだかっているのが見えた。晃は瞬間、
（嫌だな）
と思った。そこに黒くかたまっているのは、橋本勇というクラスのいじめっ子と、その取り巻き連中だった。
勇は腕力が強い上に、すこし性格に狂暴なところがあり、クラスの中の何人かが、いじめの犠牲になっていた。晃もその中の一人で、これまでにも嫌な経験を二、三度、味わていた。その警戒心が、晃の中を走ったのである。
晃はその方角を避けて、すこし遠まわりして校門へ向った。
すると、晃の動きを察知したその中の一人が、矢のように晃の方に走ってきた。
「藤上君、ちょっと」
石井知夫という、いつも勇の走り使いの役目をやっている生徒であった。
「なに？」
「ちょっと、来て」
和夫は晃を促すようにして、歩き出した。晃は仕方なく、その後に従った。
校舎の陰まで来ると、晃はたちまち橋本勇の集団に取り囲まれた。身体の大きい勇の前に立つと、晃の身体は細っそりと見えた。
「晃、絵のことで、先生と何を話していたんだよう」
勇はいきなりそう言った。
「別になんにも…」
「うそつけ。黒い影は、僕のことを描いたんだって、言ったんだろう」
「言わないよ、そんなこと」
「なぜ、僕のこと、絵に描くんだよ」
「橋本君のこと？　橋本君のことなんて、僕、絵に描かないよ」
すると、横から和夫が、
「だって、晃の絵の黒い影、あれ橋本君にきまっているよ。いやがらせに、橋本君を黒い影にして描いているんだよ」
忠義顔にそう言った。晃が勇からいじめられている復讐に、晃が勇のことを黒い影として絵に描いていると、和夫が吹きこんでいるらしいのである。
「あれは違うよ。橋本君なんかじゃない」
「じゃあ、誰だよう」
勇の眼が狂暴に光った。

「誰でもない」
「嘘つけ」
横から和夫がふたたび言った。
「橋本君にきまっている」
「ちがうってば」
「じゃあ、誰だ」
「あれは人間じゃあない」
「人間でなければ、何だい」
「何だといわれたって、そのお…」
自分でも複雑な心の中は、よくわからないのである。ましてや、勇たちがすぐ納得できるように説明できるはずがない。
「それみろ、言えないじゃないか」
勇は晃の前へ一歩踏み出すと、
「僕のこと、馬鹿にしているんだな」
晃の肩をドンと押した。とたんに、右からも、左からも、晃はこずかれ、地面に倒れた。
「これから、僕のこと、絵に描くと許さないから」
捨てぜりふを残すと、勇は取り巻き連中を従えて、去っていった。

（二）

晃の母の君子が会社へ勤めに出るようになったのは、今からちょうど一年ほど前である。正確に言えば、晃の三年生の終り頃であった。
君子はコンピュータープログラマーとしての資格を持っており、若い頃はソフトウエアの会社に勤めていた。結婚してからも引続き勤務し、有能な君子は会社からも重用され、自分も仕事に生き甲斐を感じていた。だから、出来ることならこの仕事を一生続けたいと思い、結婚後も引続き会社に勤めていた。
問題が起きたのは、晃の出産の時であった。三カ月間の出産休暇が過ぎた後、そのまま会社勤めを続けるか、それとも育児のために退職するかの選択が、君子の前に立ちはだかったのである。
君子はできることなら、仕事を続けたいと思った。
しかし、会社勤めをしながらの育児には自信がなかったこと、また、夫の昭文も育児に専念するのが当然だという意見だったから、君子は残念ながらその時点で、会社を退職したのである。だが、君子はひそかに、育児が終ったら、ふたたび会社へ戻ることを、固く心に決めていた。
やがて、晃が小学校へ進学する時がきた。育児期間がやっと終了したのである。
（さあ、やっと子供に手がかからなくなったわ）
君子は長い冬の生活から解放された気分になり、夫に会社復帰のことを相談した。会社の方からも、ベテランの君子の会社復帰を歓迎してくれていた。

しかし、夫の意見は、

「小学校へ入ったといっても、まだ子供だよ。手がからなくなったというだけで、育児が終ったと考えるのは、早すぎる」

ということで、この時点での会社復帰は実現しなかった。

しかし、晃がそろそろ三年生を終ろうとする頃になると、もう君子は待ちきれなくなった。折りしも人手不足にあえぐ会社から、カムバックの打診を受けたのを機会に、君子は会社へ戻ったのである。

復帰するといっても、君子には十年ほどのブランクがあった。そのまま昔のポストに戻るのには無理があり、また、晃に対しても、あまり急な変化になってもいけないということで、とりあえず勤務時間にも余裕のあるパートという形で、しばらく様子をみることにしたのである。

だから、勤務時間は午前十時から、午後四時までの六時間で、幸い会社は家から三十分ばかりの所にあったから、

「これならば、朝だって充分晃を学校へ送り出せるし、また、夕方だって、充分夕食の仕度に間に合うし、大丈夫だわ」

ということで、さしたる問題はなさそうに思えた。

事実、最初の三カ月ばかりは、君子は判で押したように四時半になると帰宅して、晃を心配させたり、淋しがらせたりすることはなかった。

夫の昭文の帰宅は慢性的に遅かったから、親子三人揃っての夕食は、これまで同様にせいぜい一週間に一回ぐらいしかなかったが、君子と晃と二人揃った夕食は、これまでと少しも変らず、毎晩つづいた。

異変が起きはじめたのは、三カ月をすぎた頃からであった。

時々、君子の帰宅時間が遅れがちになるのだった。そんな時、きまって君子は、待ちくたびれている晃へ、

「ごめんなさいね。今日は会社が忙しくて、ちょっと定時に帰れなくてね」

とか、

「帰りがけにお客さんが来てしまってね」

また、

「途中でデパートへ買い物に寄ったものだから」

などと言って、ふくれ上ったデパートの袋を、重そうに運んで帰ってきたりした。

しかし、君子の帰りが遅くなるといっても、せいぜい三十分か、一時間程度で、従って五時半を過っても帰ってこないなどということはなかった。

そんなある日。

その日はどうしたわけか、五時半をすぎても、六時をすぎても、君子は帰る気配がないのであった。

(いつもなら、とっくにお母さんと二人で、晩ごはんを食べているのに…)

晃はうらめしげに、壁掛の時計を見上げた。空腹で、きりきり腹の底がしびれてくるようであった。

晃は仕方なく冷蔵庫をあけて、牛乳を飲んだ。煮物の残りがあったので、それをつまみ、それでも足りないので、菓子罐をあけてクッキーを食べた。

空腹感はそれで一応治ったものの、六時半を過ぎてもまだ母の姿が見えないと、

(いつになったら、帰ってくるのだろう)

晃のいらいらは、つのるばかりであった。

(いつまでも、なにしているのだろう。お母さんは会社の方が大切で、どうせ僕のことなんか、どうでもいいんだ)

晃が不安といらだちで、もみくちゃにされ、疲れ果てたころ、やっと君子は帰ってきた。

「どうしたの、こんなに遅くなって…」

晃が七時を廻った時計の方を見ながら、非難がましく言った。

「ごめんなさいね。どうしても今日中にやらなくてはならない仕事が出来ちゃって、晃のこと、気にはかかっていたんだけど、帰れなかったの」

「でも、お母さんはパートなんでしょう。パートだったら、きまった時間になれば、さっさと帰れるんじゃないか」

晃はかん高い声でそう抗弁した。

「きまりは一応そうだけど、実際働いていると、なかなか、きまり通りにはいかないのよ。それに、今日は、お母さんと一緒の係の人が休んでしまってね、その分までお母さんがやらなくてはならなかったの。さあ、早く晩ごはんにしましょうね」

君子は手早く夕食の仕度に取りかかった。

君子の料理の腕前は、あっという間に夕食を作り上げて、いつもの夕食の雰囲気に戻ったが、その時、晃の中に、暗い空洞のようなものが、はじめて口をあけたのだった。

それからというもの、学校から帰るとまっ先に、晃の頭は、

(今日もお母さんがちゃんと帰ってくるかなあ)

という不安感にかられるのだった。晃の中に、いつのまにか母親の帰宅への不信感と、夕食への不安感とが、蓄積されていった。

ある日、たまりかねた晃は、

「遅くなる日は、朝、晩ごはんの仕度をしておいてよ。そしたら、僕、一人で食べるからき」

と母親に頼んだ。いつ帰るのかわからない母親を、空腹をかかえて、いらいら待っているよりも、淋しくても一人で食べた方がいいと、幼な心に思ったのである。し

かし、君子は、

「でもね、お母さんはパートだから、遅い日がきまっているわけではないのよ。たまには遅くなることもあるけれど、定時に帰ってくれれば、ちゃんと晩ごはんの支度できるのだから、そう心配しなくても大丈夫よ。朝用意した冷いご飯を食べるの、いやでしょう」

そう言って、応じなかった。

晃の絵に、黒い影が現われはじめたのは、そんな頃からだといってよかった。

もちろん、そんな相関関係に、本人の晃が気づいているわけではない。だが、夕食への不安定感が晃の中のどこかで屈折して、黒い影となって現われていることは、まちがいないと清原弘子は思った。

(三)

そんな頃、あるハプニングが起った。

晃の黒い影の絵が、全国コンクールで一位になったのである。

上野の美術館の会場で、全国児童画展が開かれ、全国の小学校から厳選された児童画が数千点寄せられたが、その中の一位に晃の絵が輝いたのである。

選考の過程で評価されたのは、黒い影であった。入賞の候補作品が三十点ほどに絞られてきたとき、審査委員長の、

「あの黒い影の絵はどうだい」

という、ふとした発言が、決め手になったのである。

一同の視線が、晃の絵に集中した。

「今回の作品は、どれも一様にうまく描けてはいるが、個性がなくて、評価しにくいね。だから、今回は、『ユニークさ』という点に重点を置いて、審査したらどうだろう。そうでもしないと、決まらない」

「まったく委員長のおっしゃる通りです」

「となると、あの黒い影の絵はどうかと思うのだがな」

「ごもっともでございます」

「さすがに委員長のお眼はお高うございます」

「わたくしも実は、さきほどから、その黒い影の絵ではないかと思っておりました」

たちまち選考委員たちは、審査委員長の意向に、風に吹かれた草のようになびいた。

「題名は何となっているかいな」

「はい、『団欒』とつけてございます」

「うむ、団欒か。家族団欒の中の黒い影。色彩としても、面白いコントラストをしている上に、団欒という安らぎの奥にひそむ、人間関係の危うさのようなものを、幼い直観で、象徴的に表わしているように見える。ムンクの『叫び』の世界に通ずる鋭さが、あるではないか」

審査委員長の鶴の一声で、晃はあっという間に、全国児童画のチャンピオンに躍り出たのである。

この知らせは、直ちに学校へ通知され、学校長をはじめ、全職員、全児童に伝えられ、

(藤上晃は絵の天才だ)

と、たちまち晃は絵の天才に祭り上げられ、学校の中は大騒ぎとなった。

新聞記者が学校へ駆けつけてきて、晃の写真が、絵の写真といっしょに、新聞へのった。

一番よろこんだのは、母親の君子であった。

「晃、おめでとう。やっぱり、お母さんの育て方は、間違ってはいなかったわ。晃には絵の才能があると思って、幼稚園の頃から、ずっと絵の塾へ行かせていたのがよかったのよ。それが実ったのね」

そして、美術館で行われた授賞式にも、君子は晃に付き添って出席した。

「お母さん、会社休んでもいいの？　僕、一人で行けるからいいよ」

と晃がすこし迷惑そうにそう言うと、

「晃の晴れの授賞式じゃないの。お母さんが出席しないわけにはいかないわよ。会社を一日ぐらい休んだって、どうということないわ。晃のためですもの。会社の人たちもこの前の新聞を見て、みんな知っているわ。お母さん、鼻が高いのよ」

君子は大はしゃぎに、はしゃいだが、晃は内心で、

(授賞式なんかに行かなくてもいいから、そのぶん会社休んで、たまにはちゃんと晩ごはん作ってよ)

と冷い視線を母親に向けた。

こうして、

(絵の天才だ！)

というレッテルが貼られると、晃はにわかに忙しくなった。

絵を専門に担当する佐々木先生が、晃の絵の個別指導に当ることになり、あっちの展覧会、こっちのコンクールへと、絵を出品することが多くなった。

晃は名声に応えるようにと、一生懸命に絵を描いた。

そして、どの絵にも、トレードマークの黒い影を描いた。

黒い影は、あたかもブランド商品のレッテルの役目を果すかのようで、黒い影を見ると観衆は、

「ああ、この絵ね。この黒い影がすばらしいのよ」

と、感嘆の声をあげるのであった。

黒い影のない絵は、天才少年画家の絵として通用しないのだった。晃はせっせと、黒い影の絵を描いた。

やがて観衆は、黒い影は一つでは満足しなくなった。

「晃、黒い影を二つにしてみてはどうか」

佐々木先生の指導で、黒い影は二つになった。すると、絵の評価は一段と高まるのだった。

次は黒い影が三つになる。ますます絵の評価は高まっていく。

黒い影は、更に四つになり、五つになり、求められる

ままに晃は黒い影の数をふやしていった。ときどき晃は、
（どこまで影をふやせばいいのだろう）
ふっと、不安になった。しかし、そんなことを考える必要はなかった。観衆は黒い影を求めているのである。黒い影を描いていれば、観衆は満足し、佐々木先生や母親からはほめたたえられて、
（天才少年画家、藤上晃）
の名声は、ますます輝きをましていくのであった。

しかし、名声が高まるに比例して、晃の心は次第に淋しくなっていった。

ある日、学校の帰り道、まっ赤な夕焼空を見たとき、思わず晃は、その世間の名声を遮断するように、両手で耳を覆って、
（僕は天才なんかじゃない）
と、夕焼空にむかって叫んだ。

だが、晃の心のその声は、誰にも届きはしなかった。世間から見れば、晃は天才少年画家の名声をほしいままにして、幸福の絶頂にあった。その天才少年画家の心の内側に、
（お母さんが晩ごはんをきちんと作ってくれない淋しさに、悩んでいる）
なんて、そんな馬鹿なことが秘められているなんてことを、人々は信ずることが出来なかった。天才には淋しいことや、悩みなどが、あらう筈がないのである。そう見られていることが、晃の心をますます淋しくさせるのだった。

天才少年画家のレッテルを貼られてからは、担当の清原先生も、以前のように晃の方には心配の眼を向けてくれなくなった。
（清原先生、何でもいいんです。何か僕に言ってください。どうして、『黒い影がそんなにふえていくの』と、聞いてくれないのですか）
晃は遠くから清原先生の姿を見つめて、心の中でそう叫んでいた。

（四）

天才少年画家藤上晃の出身校ということで、学校の名声があがるに従って、学校ではにわかに図工教育への関心が高まっていった。
（図工教育のモデル校になろうじゃないか）
学校長の発安で、絵画特別教室が作られた。各学年から、絵の名手が二、三名ずつ集められ、一週間に三回、放課後、佐々木先生指導の下に、絵の特別訓練が始められたのであった。

絵画教室のある日は、当然、晃の帰りは遅くなった。日がとっぷり暮れてから、家路に着く。しかし、晃の帰りが遅くなっても、まだ母の帰宅の方が遅い日が多く、

晃は依然として、電灯のつかない、暗い、淋しい、寒い家へ一人で帰った。

絵画教室の中に、森井昌彦という生徒がいた。晃よりも一年下の学年で、色の白い華奢な身体つきの少年であった。

身体つきに似てか、絵も華奢な繊細な絵を描き、詩情の漂う色彩の使い方をした。どんな風景を描いても、そこには京都やハイデルベルクの、みやびやかな匂いが立ちこめていた。

その昌彦の絵の持つ高貴な詩情に、晃はひそかに、ある種の憧れと、恐れのようなものを抱いていた。憧れとは、自分もそのような絵を描いてみたいという願いであり、恐れとは、でも自分には描けないという絶望であった。そして、その憧れと恐れが、嫉妬の情に変るのに、それほど時間はかからなかった。

絵画教室の中で、無心に絵筆を動かしている、昌彦の細い首筋や、肩に、じっと憎しみの視線を投げている自分に気づいて、晃ははっと我に返ることが時々あった。その身体全体から立ちのぼる甘やかな、生活の幸福さのようなものを、ふと、目茶苦茶にしてやりたい衝動に、晃はつき動かされるのであった。

昌彦とは、家の方角が同じなので、一緒に帰ることが時々あった。

その日も、二人の帰りは一緒だった。

小学校は、住宅地と商店街との、間（はざま）のようなところにあった。二人の家は、その商店街を越した、学校側と反対の住宅地の中にあった。
「森井君の絵って、色がきれいだね」
歩きながら晃はそんなふうに話しかけた。すると、昌彦はちょっとはにかんで、
「そのかわり、特色がないって言われるよ。藤上君のような黒い影のある、強い絵が僕も描きたいんだ」
（こいつも、黒い影のことしか言わないんだ。よしてくれ。黒い影なんて、ただ描かされているだけなんだ。黒い影なんて、もう、たくさんだ）
晃は心の中で叫んだが、そんな気持が昌彦へ通じるはずもなかった。

やがて住宅地の路地へ入り、昌彦の家の前まで来た。あたりには夕闇がたちこめ、家々の窓は電灯の明るい色で彩られていた。

昌彦は晃の方を振りむき、
「じゃあ、また、あしたね」
そう言うと、家の入口へむかって走っていった。
「うん、さようなら」
晃もそう返事したが、走り去る昌彦の後姿に、晃は目くるめくような渇望を感じた。

道路から見える昌彦の家の窓は、電灯で明かるかった。明かるい家の中は、暖かで、幸せに満ちているように見

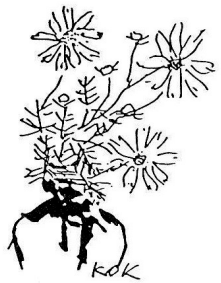
えた。
その家の中で、子供の帰りを待っている母親の胸へ、昌彦はきっと、
（お母さーん、ただいま）
と、甘え声でとびついていくのにちがいない。
（それに引きかえ、僕はどうなのだ）
と晃は思った。家に帰っても、誰もいない。暗い、冷い家が待っているきりだ。暗い玄関のドアの鍵をあける。家の中は、まっ暗だ。電灯のスイッチを押す。誰もいない、森閑と音のしない空間が、灯の中に浮かんでくるだけである。
（お母さーん、ただいま）
と言ったって、駆け寄っていく母親はいない。
そう思ったとき、夕闇の路地に立つ晃の中に、ふっと昌彦への殺意のようなものが走った。
翌日。学校へ行くと、晃は片貝隆介を探した。
隆介も晃と同じ学年から選ばれた、絵画教室のメンバーであった。
「森井ってやつ、どう思う」
晃はいきなり、そう聞いた。
「……」
隆介は晃の真意をはかりかねて、口ごもった。
「ちょっと、生意気だと思わないかい」
「うーん、そう言えば、そうだな。きれいな色なんて使っちゃってさ、たしかに、僕はほかの人とはちがいます、って顔、しているね」
「すこし、いじめてやらないか」
晃の口から、悪魔の言葉がすらっと出た。
「うん、面白いね」
その日の午後の絵画教室の時間。
佐々木先生からは、
「今日は、『公園の中』という題で描いてみよう」
という画題が示された。
十五、六人の生徒たちは、あれこれ、自分の体験や空想を交えながら、絵描きに没頭していった。
しばらくして、佐々木先生が職員室へ行って、居なくなった時、その機会を狙っていた晃が、
（おい、やろうぜ）
と、隆介の方に眼で呼びかけた。
二人は揃って、絵描きに没頭している昌彦のそばまで、歩いていった。
相変らず昌彦は、繊細な色彩を駆使して、そこにはまるで楽園のような公園の風景が描き出されていた。いつか佐々木先生が見せてくれた、ヨーロッパの印象派の絵のようだなと、晃は思った。
「やっぱり森井君の絵、きれいだね。まるで夢の国の公園みたいだ」
晃が棘のある言葉で言った。

「でも、藤上君みたいに、うまくいかないよ」
昌彦の言葉が終るか、終らないうちに、隆介の手がすっと伸びて、
「ここに黒い影を入れると、もっとよくなるよ」
そう言うと、黒い絵の具を、絵画の中央にべたっと塗った。
「あっ…！」
昌彦の顔がゆがんだ。
その引きつった昌彦の顔を見たとき、晃の中を甘い戦慄のようなものが走った。晃はやにわに隆介の手から絵筆をむしり取ると、
「一つじゃ足らないよ。もう一つあると、もっとすてきになる」
隆介の黒い影の横に、もう一つの影を黒々と塗り、
「影はね、なるべく大きい方がいいんだ」
と、黒い絵筆をぐいぐいと、何回も何回も、押しつけるようにした。
「やめてよ、やめて」
繊細な色どりの公園が、たちまち黒い嵐に襲われていくのを、昌彦は悲しそうな顔で眺めていた。
その時、入口のドアが開いて、佐々木先生が帰ってきた。
教室に流れる異常なものに気づいた佐々木先生は、まっすぐに昌彦の方へ歩いてきて、
「どうしたんだね」
黒く汚れた昌彦の絵を見た。
晃と隆介は息を飲んで、そのままつっ立っていた。すると昌彦が、
「藤上君のような絵を描きたいと思って、やってみたのです。でも、うまくいきませんでした」
と弁明した。事の真相をすでに察知している佐々木先生は、
「他人の真似をしても、うまくいくものではない。君は、君の描き方で、描けばいいんだよ」
そう言うと、
「なあ、藤上、そうだろう」
晃の方に鋭い一瞥をくれて、教壇の方へ歩いてしまった。
その日の夕方。
昌彦が帰ろうと、校門の方へ歩いていくと、
「おーい、一緒に帰ろうよ」
晃と隆介が、後から追っかけてきた。
仲なおりなのか、昼間の延長戦なのか、昌彦には判断できず、ちょっと不気味だった。
学校を出て、住宅街をしばらく歩くと、晃と隆介が足を止めた。
「さっきのことなんだけど…」
「なに」

昌彦はおびえを無理に隠して、答えた。
「どうして、自分で黒く塗ったって、言ったんだよう。僕たちに塗られたって、言えばいいじゃんか。カッコつけるなよ」
「だって…」
「僕たちを、こけにしてくれたね」
隆介の手が昌彦の肩を強く押した。昌彦はよろけた。
晃がその脇腹をなぐりつけると、昌彦は簡単に地面に倒れた。
「弱虫！」
二人はそう叫びながら、倒れた昌彦を足で蹴った。
蹴った靴の先が、昌彦の身体の柔らかさを感じたとき、晃は、いつか勇たちになぐられて倒れたときの、自分の姿を、昌彦の上に見出していた。
「もう、いいよ、帰ろう」
晃と隆介は、倒れた昌彦を残したまま、商店街の方へ歩きはじめた。
晃の気持は、晴々としていていいはずなのに、やりきれないような気持でいっぱいだった。こんなことがきっかけで、
（自分も勇のような、いじめっ子にだんだんなっていくのではないか）
と思うと、晃は自分の心が、恐ろしくなってきた。
クラス担任の清原弘子は、いつのまにか晃の絵の、黒い影のことを、心配しなくなっていた。
いや、心配しないというよりも、心配してはならないのだった。
晃は今や絵の天才であり、この小学校の栄光なのである。天才になったのは、ひとえに黒い影のおかげであり、だから、その栄光のシンボルのことを批判したり、心配したりすることは、タブーなのであった。
黒い影は、天才少年画家のトレードマークであり、晃は今もせっせと黒い影の絵を描きつづけていた。黒い影は次第にふえていき、今では五つも、六つも、黒い影が描きこまれている絵も、珍らしくはなかった。
心配してはいけないといいながらも、やはり弘子には、その黒い影が、気になってならなかった。
弘子はその絵を眺めながら、
（この黒い影の中の、どれか一つだけが、本当の黒い影なのだ）
と思った。
だが、それがどれなのかは、わからない。おそらく、晃本人にもわからないのであろう。
だが、わからなくても、本当の黒い影は、ちょうどムンクの『叫び』の絵のように
（お母さーん、会社へ行かないで）
と絶叫しているのにちがいないと、弘子は思った。

前橋公園殺人事件（二）

佐々木一郎



四

九月五日の「教育相談研修会」は、榛名山麓にある榛名神社の宿坊で行われた。
上田と蛭田は、昼近くなって、神社に着いた。標高八百メートルのここは、驚くほど涼しくて、さっきまで、前橋市内の猛暑の中を、ふうふういいながら歩いていたのが、まるで嘘のように思えた。ふたりは、すでに十数台のマイカーが駐車している宿坊の前を通って、急ぎ足で石段を上りはじめた。きょうの訪問は、内密にしてあるので、姿を見られたくない。そのため、深層心理研究所次長との面会場所も、わざわざ頂上にある本殿の社務所に設定してあった。
たどり着いた由緒ありそうな本殿の周囲は、峨々とした大小の岩が聳えていて、ふたりは、瞬時、深山幽谷の中に取り残されたような寂寥感を味わった。やがて、
「いやあ、お待たせしました」
穏やかな笑顔を見せながら、四十五、六才の、長身の男が石段を上ってきた。橋詰次長だった。江口もいる。
簡単なあいさつを交わしたあと、社務所の一室を借りて、さっそく研修会の結果を聞くこととなった。
「どうでしょうか？　きょうのようすは？」
「うまく催眠面接ができましたよ。江口君から聞いておりましたので、宇都木さんを被験者に選びました」
「あの宇都木先生が、うまく、かかったのですか？」
「ハハハハ、へかかったか〉は、よかったですねえ、……。ええ、うまく催眠状態に入りましたよ」
「あの闘志満々のひとが？」
「いや、熱心な組合活動家にかぎって、心が純粋な方が多いんですよ。ことばづかいは激しくてもね」
「それじゃ、すぐに？」
「わたしの指先をじっと見ていただいて、へあなたの瞼がしだいに重くなって、目を開いていられなくなりま

す∨と暗示をかけますと、すぐ首をがくんと折って、催眠状態に入りました」

「それで、すぐ、尋問に？」

蛭田部長刑事は、熱心のあまり、思わず、橋詰次長の瞳をじっと見つめた。そのとたん、なにかすーっと引き込まれるような恐怖に襲われて、あわてて目をそらし、ぶるっと体を震わせた。

「警察ではありませんから、尋問はしません。催眠は、意識水準が低下している状態ですから、ここに、純粋な心で呼びかけをするのです。もう、この段階になると、わたしの声きり聞こえなくなりますから、ことばを選んで、暗示をかけなければなりません」

「それじゃ、東照宮横ですれ違った話にストレートに入ったのじゃないんですか？」

上田警部補の質問の声も、大分、上ずっている。

「もちろん、そうですよ……。

宇都木さんより前になさった方と同じ手順を踏まないと、怪しまれますからね……。最初に、暑いカンカン照りの道を歩いているという催眠暗示をかけました」

「どうでした？」

「いや、さかんに汗を拭いておられましたよ。これは、ケース・バイ・ケースですけれども、実際の汗をタラタラ流す方もおられます。酒を飲んだという暗示で、顔を真っ赤にする方もおります」

「ふーむ」

「こういう催眠暗示をいくつか行ってから、本題に入りました。これも簡単に誘導できたのですが、顔や名前については、いくら質問しても、応答はありませんでした。これは、記憶が全然ないのだと思います」

「やっぱり、そうですか？」

上田と蛭田は、やや落胆したが、橋詰次長は

「しかし、すれ違ったときに、Xは、『あの、悪魔め！』とつぶやき、少したって、また、『恐ろしい男だ！』といったようですね。もちろん、だれのことを指したのかわかりませんが……」

「待ってください。ほんとうに、Xは、『あの、悪魔め！』と、『恐ろしい男だ！』とかいったんですね？」

「ええ……」

「間違いありません。わたしも、聞いています」

江口が口添えをした。

「うーむ、そうでしたか。そのほかには？」

「そのほかは、何もいわれなかったですね……」

国立大学医学部助教授から転入してきたという次長は、あくまで柔和な笑顔を絶やさずにいった。

「そうならば、あとは、本人に確認するよりないかな」

「あ、それは、やめていただきます」

「えっ、どうしてですか？」

「催眠中の記憶を全部消してあるからですよ。つまり、

本人に聞いても、何も覚えていないからです……。

催眠をかける場合に、一番心しなければならないことは、例外を除いては、この記憶を完全に消して覚醒させるということなんです。これを、充分に行っておかないと、長い間、頭の中にモヤモヤが残ったり、突如、あることに突飛な反応を示したりすることがあります。ですから、宇都木さんの場合も、完全に記憶を抜いてありますから、お聞きになってもむだです」

「そのとおりなんですよ。先輩……」

江口が、慰め顔でいった。

上田と蛭田は、さっそく、このことを、前橋署長に報告した。署長は、捜査課長を交えて、これを検討した。

「間違いなく、宇都木とすれ違ったXは、『あの、悪魔め！』とか『恐ろしい男だ』と、いったのだな？」

「はい、そうであります」

「一体、だれのことを指しているのだろう？」

「琴野田奥次郎では、ないでしょうか」

「ふーむ、琴野田ねえ……ま、Xを知るためにも、琴野田の身辺を、もう一度、洗い直す必要があるな」

「はい。さっそく、調べてみます」

「しかし、宇都木にただしても、彼は、まったく、覚えていないというんじゃ、話になりませんな……。

第一、催眠で聞き出したものなんか、法廷では、証拠能力を認めないでしょう」

「そう捨てたものでもないよ。課長。とにかく真っ暗だった闇に、いくらかでも灯がともったことは事実なんだから……。それに、みんなが、半信半疑だったXの存在が、かなり現実なものになってきた。これは、何といっても、チョウさんのお手柄だ……」

署長にほめられた蛭田部長刑事は、照れながら

「しかし、これからが、大変だと思います。『悪魔』だけじゃ、雲をつかむような話ですから……」

「うむ。しかし、チョウさん。現段階では、これは、貴重な情報だ。これを、生かすも殺すも、われわれの努力次第だと思うがね……」

「はい、そのとおりであります」

五

その月なかばに、市の中央を流れる広瀬川ほとりの遊歩道で、若い男の変死体が発見された。発見者は、市内「やぶそば庵」の若い女店員だったが、その通報を受けた前橋署からは、初動捜査員約四十名が駆けつけた。

黒山のように集まった群衆の好奇の目を避けながら、調査が続けられた結果、被害者は、「蛎沢種苗」総務部長蛎沢浩（三〇才）、死亡推定時刻は、昨夜十八日午後九時から十時までの間、死因は、頭蓋骨陥没――後方から鈍器のような物で強打されたため――による脳挫傷と

判明した。（この凶器は、のちほど、近くの砂地の中から、いくつかの足跡とともに、発見された。拳大の石で、指紋はふき取られてあった）また、所持品が紛失していないところから、犯行は、怨恨によるものと推定され、さっそく、捜査員たちは、聞き込みに取りかかった。

被害者の確認のために駆けつけた父親蛎沢黎吉（「蛎沢種苗」社長）は、蒼白な顔で、本人であることを認めた。「蛎沢種苗」といえば、群馬県内はおろか、関東でも屈指の大企業なので、尋問には、顔見知りの署長みずからがあたった。彼は、丁重に悔やみを述べたのち、

「浩さんは、総務部長さんでしたな……」

「ええ、来年は、常務にして、だんだん、社交にも慣れさせたいと考えておりましたのに……」

蛎沢は、そっと涙を拭った。

「失礼ですが、ご養子さんが亡くなられたあとは、どなたが、継がれるのですか？　若奥様ですか？」

「それが、署長さん、まったく考えていなかったのですよ。むしろ、わたくしの方が、体調を崩していて、少し休養をとりたいと考えていたところなんです……。ですから、腹が立って、腹が立って……」

蛎沢は、激怒していた。

「お察しします……。ところで、蛎沢さん、昨晩、浩さんが、家を出られたのは、何時ごろでしたか？」

「八時ごろでした。友達と会うといって……」

「そうすると、出掛けてすぐに、亡くなられたわけですなあ。あ、だれか、浩さんを恨んでいる者とか？」

「いいえ、お調べになればわかりますが、あれは、遠縁の子ですが、まじめな優しい子で、とても、ひとの恨みを買うなんてことは想像もできません」

その日のうちに、前橋警察署内に、「広瀬川殺人事件捜査本部」が設置された。本部長には署長が就任し、主任には、県警から派遣された吉岡警部が任命された。上田と蛭田も、二十名の専従捜査員の中に加えられた。

翌日、第一回捜査会議が開かれた。まず、本部長の訓示のあと、副主任横谷警部補から状況報告があった。

「『蛎沢種苗』は、明治以来の老舗で、資産もあり、社業も、評判どおり業績良好のようです。同族会社ですが、特に、一族内部の争いも聞いておりません。被害者は身内からもらった婿養子ですが、彼が死亡して得をする者は、目下のところ、特定されておりません……。社員間の問題は皆無とはいえませんが、社長の跡継ぎを殺害するほどのあつれきはないと見てよいと思います。友人も、小、中、高校、大学と調べてみましたが、これも、疑惑のあるような人物は、ひとりも、浮かんでまいりませんでした」

「蛎沢家の家族構成を聞かせてくれませんか」

「蛎沢黎吉と妻まさ子、このまさ子は、三十五年前のミス・前橋だったひとだ。娘洋子に、遠縁から婿をとった。これが、こんどの被害者で、現在、『蛎沢種苗』の総務部長、もちろん、将来の社長候補だった。孫は、明ひとりだ」

「ついでといっては、叱られるかもしれないが、琴野田家の方は？」

「琴野田奥次郎と妻あき江、ただし、あき江は、九年前に死亡している。奥次郎は、ＡＩＤ（非配偶者間人工授精）の専門家だ。長男は、真一郎。父没後は、琴野田医院院長を勤めている。妻真弓との間に長女久美子と次女ひとみがいる」

「あ、さっきの、女性関係はどうなんですか？」

若い田部井刑事がたずねた。

「うん。それなんだがね……。明というかわいい盛りのひとりっ子もいるし、夫婦仲も円満だった。しかし、あれだけのハンサムボーイだから、女性が放っておくはずがないと、ずいぶん、聞き回ったのだけれど、まあ、社交上のホステスや芸者を除くと、ほとんど、それらしい者がいないんだ。社員は、口が固いから、これから近辺の聞き込みを続けようと思っている」

「商売敵の線はどうですか？」

「これも、可能性は少ないね。なにしろ、あの家は先祖代々の資産家だ。前橋藩の生糸販売にも関与した家柄だからね……。一代で産を築いた者と違って、敵もあまりないんだ」

会議室を出て自室に向かう上田を、蛭田が呼び止めた。

「上田警部補。『蛎沢種苗』の女性問題を探るのには、うちの幸子の口を割らせる以外、方法がありませんよ」

「あっ、そうか。お嬢さんは、あの会社の社長秘書でしたね！」

「だから、警部補にお願いしたいんですよ」

「ぼくがですか？　それは、チョウさんが……」

「いやいや、近ごろの娘は、親のいうことなんか、聞きやしませんよ。『あたしは、社長秘書ですからね。社長の秘密は、口が裂けてもいえません』とくるんです」

「だったら、僕だって……」

「それが、そうじゃないんですよ。この間、うちにお見えのとき、『感じのいい方ね』なんていって……」

「……」

「だから、あなたが、尋問口調ではなく、楽しい雰囲気で聞けば、かならず、オチますよ。だから、取り調べ室ではなくて……。そうだな。どこかで、食事しながらなんてのは、どうでしょう？」

「ええっ、それじゃ、まるで、デートですよ！」

「デート、結構じゃないですか！　これで、捜査員たちが束になって掛かっても聞き出せなかった蛎沢浩の相手の女性がわかるのなら……。もちろん、食事代ぐらいは、わしが持ちますがね」

蛭田は、ニコリともしないで言った。

その数日後、上田は、ホテル・ニューマエバシの八階で、蛭田幸子と、フランス料理のテーブルを囲んでいた。

はじめ、しばらくの間、なかなかふたりの会話がかみ合わなかったのは、幸子は、（よもや、父親のお膳立てとは気づかず）あくまで、上田からのデートの申し込みと信じて、幸福感に浸っていたのに、上田の方は、勤務の延長という観念から抜けきれないでいたからだった。

しかし、彼が、途中からそのことに気がついて、話を合わせるようになってからは、一転して、若い美男美女の、楽しいデートに変わっていった。ふたりは、素敵なバックグラウンド・ミュージックに耳を傾けながら、映画の話、音楽の話、ファッションの話などなど……時間の過ぎるのも忘れて、語り合っていた。

ふと、上田は、阿修羅とあだ名のある捜査課長の顔が目に浮かんで、愕然として、われに返った。

「あ、つまらないことをお聞きして、気を悪くされると困るのですが、幸子さんの会社の、亡くなった浩さんが親しくしていた女性は、どんな方だったんですか？」

「えっ？　上田さんたら、急に話題を変えたりして、どうかなさったのですの？」

幸子はけげんな顔をした。彼は、あわてて

「いや、何でもないんです。ただ、あなたのお父様が、その方は、あなたとは比べものにならないくらい美しい方だと、おっしゃったものですから……」

「あら、父は、総務部長が親しくしていた女性のことなんか、何も知らないはずですわ……。社外秘ですもの。ホホホ」

「とんでもない。お父様は、前橋署の生き字引といわれている方ですよ。知らないことなど、ありません」

「……そうですの？　それにしても、その評価は間違っていますわ。たしかに、あたくしなど……。……でも、真弓さんだって、ふつうの美人ですわ」

「真弓さん？」

「ええ、琴野田真弓さん。琴野田医院の院長夫人ですわ……」

「あっ、琴野田！」

「でも、おふたりは、大学時代の先輩後輩の関係で、友人以外のなにものでもありませんでしたわ。ちょっと、トラブルがあったことは確かですけれど……」

幸子を家まで送り届けて、バス停まで来ると、さっき玄関で出迎えたはずの蛭田部長刑事が、立っていた。

「あれっ、チョウさん。いつの間にか？」

「そんなことより、結果を早く教えてくださいよ！」

蛭田は、傍らのベンチを指さしながらいった。

「彼が親しくしていた女性は、琴野田真弓でした」

「何ですって！　それじゃ、琴野田医院の院長夫人？」

「ええ、でも、大学の先輩後輩だった程度の交際だったらしいですよ」

「そ、それを、幸子は、あなたに　……」

「ええ、割合に簡単に打ち明けてくれました」

「ああ、何てこった！　赤ん坊のころから手塩にかけて育てた父親にもいわないことを、恋人には、いとも簡単に教えてしまうなんて……」

「恋人？」

「あ、いやいや、何でもありません　……。さ、出掛けましょう」

「こんな遅い時間に、ど、どこへですか？」

「決まってるでしょう。『蛎沢種苗』ですよ　……」

蛎沢夫妻は、奥の間で、ひっそりと、座っていた。

まさ子夫人は、青白い顔で、しきりに涙を拭っている。昔、ミス前橋だったという面影は、もうない。また、洋子未亡人は、ぼうぜん自失の体である。ただ驚いたことに、その容貌は、母親まさ子に瓜二つの美人だった。

蛭田部長刑事は、礼を失しないように、静かに用件を切り出した。

「浩さんは、琴野田真弓さんと親しくしていたそうですね？」

「えっ、どうして、そんなことを……。

あれは、誤解のないように申し上げておきますが、大学が同窓だっただけなのですよ」

蛎沢黎吉は、当惑したように、顔をしかめた。

「何か、真一郎さんとの間に、トラブルがあったとか……」

「はあ、そこまでご存じでしたか　……。たしかに、ありました。しかし、それは、まったくの誤解だったのですよ。ふたりは、互いに行き来したこともありませんし、まして、誘い合ってどこかへ出掛けたこともありません。たしかに、街で出会えば、あいさつぐらいはしたでしょうが……。

それが、先月末、浩が散歩をしていたら、前橋公園の遊園地の出口で、久美子ちゃんやひとみちゃんの手を引いた真弓さんとバッタリ出会ったので、つい、立ち話をしただけだったんです。そこへ通りかかった真一郎君が、なにを勘違いしたのか、血相変えて難詰してきたそうです　……。ずいぶん、口汚い罵詈雑言を吐いたようですが、あの子は、ご承知のように温厚な性格ですので、じっとこらえていたようです。

それを、あの陰湿な性格の真一郎君が、また、曲解をして、とうとう、あんなひどいことを　……」

まさ子夫人が、たまりかねたように、ハンカチで目を覆った。蛭田も、一瞬、たじろいだが、

「あなたは、犯人は、真一郎と考えておいでのようで

すね？」
「もちろん。そうです」
黎吉の顔は、怒りに震えていた。
「それには、何か、証拠があるんですか？」
「あの父親の、悪魔のような性格を考えれば、すぐ納得できますよ。その子ですからね……」
「悪魔、ですか？」
上田と蛭田は、思わず、顔を見合わせた。Xのつぶやいたことばを、思い浮かべたのだった。
上田が、ふたたび、たずねた。
「ひとつ、お聞きしますが、おふたりは、大学時代、何で親しくなられたんですか？」
「催眠術同好会で、一緒だったということです」
「えっ、催眠術ですか？」
ふたりは、また、顔を見合わせた。

六

「かみつけ会館」の夕刻は、かなり雑踏していた。
上田と蛭田は、ビールの突き出しを突つきながら、
「チョウさん。蛎沢浩が、Xだったということは間違いないようですね」
「ええ、決め手が三つありますよ。第一は、両者の足型が一致したこと。それに、あの日の午前五時ごろから一時間ぐらい、家を留守にしていたこと。これは、家族や、使用人たち、みんなが気がついていますからね。最後は、きのうの晩、黎吉が、琴野田奥次郎を『悪魔』と呼んだこと。これは、Xが、宇都木とすれ違ったとき、『あの悪魔め！』とつぶやいたことと一致します」
「しかし、それは黎吉であって、浩じゃない」
「警部補……。蛎沢家のみんなが、そう呼んでいたとは考えられませんか？」
「ふむ……。そうですねえ」
「わからないのは、あそこで、彼が、琴野田奥次郎に何をしていたか、ということですよ」
「まさか、催眠術をかけていたのじゃ……」
「ハハハハ。そこまでは考えませんが、最近はやりの催眠商法の類いのことを、していたのかも知れませんよ」
「ことば巧みに、相手を信用させて、高い商品を売りつける、というやつですね……」
「問題は、一体、何を話していたか、です」
そこへ、ひとりの私服が入って来たが、彼は、上田の姿を認めると、傍らに来て一礼し、一通の封筒を渡して、戻って行った。
「何ですか？　それは」
「県警捜査課長に頼んでおいた、情報なんですよ。琴野田奥次郎が、世界AID研究会に提出した論文の内容なんです。特に、彼に人工授精手術をうけたひとの名前が知りたかったんです。ほら、ごらんなさい」

蛭田部長刑事は、紙面をのぞき込んで、息を飲んだ。

（被験者）	（手術種類）	（出生児）	（現在年齢）
蛎沢　洋子	AID	長男　明	8才
琴野田真弓	AID	長女久美子	8才
漆原　房江	AID	長男　俊夫	7才

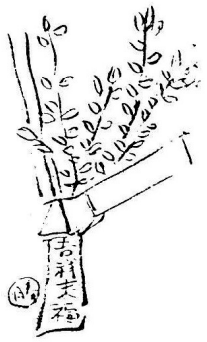
「あっ、これは、驚きましたな。蛎沢洋子は、人工授精で、明を生んでるんですね」
「あれっ、琴野田真弓は、なぜ、人工授精で久美子を生んでいるのでしょう？　真一郎・真弓夫妻は、次女ひとみを通常分娩しているのに……」
「どうも、警部補。この奇妙な人工授精手術の謎が、今度の事件を解く鍵になっているかも知れませんね！」
「よしっ、チョウさん。ふたりで手分けで、徹底的に洗ってみよう」
上田に、小奴から、電話が掛かってきた。先日の「深層心理研究所」へ紹介してもらった礼に、女将が、「すし忠」で一席設けたいという。
彼が、約束の時間に、「すし忠」の奥座敷に顔を出すと、もう、小奴が来ていて、酒肴の支度がしてあった。
「あら、啓くん。この間は、ありがとう。女将さんとこの子、すっかり、江口先生になついちゃったわ。お女将さんからも、よろしくって……」
「あ、そうか。あそこは、申し込んでから、二か月は待たされるって聞いたものだから、江口に、何とかならないかって頼んだら、個人的に引き受けてくれたんだ。だから、江口の休みの日に、やってくれているんだ」
「ほんとうに、ありがたかったわ。これも、啓くんのおかげだわ。さ、おひとつ、どうぞ……」
小奴は、あだっぽい仕草で銚子を取り上げた。
「ところで、啓くん。きみ、この間、浮気しなかった？　相手は、しとやかそうな、日本美人……」
「浮気？　そんなこと、してないよ」
「ホテル・ニューマエバシの八階で、ミュージックを聞きながら、でれーっとしちゃって……」
「あっ、京子は、あのことをいっているのか！」
「そうよ……。蛇の道はへびっていうでしょう。とにかく、小奴ねえさんっていう者がありながら、浮気するなんて許せないわ……」
「おい、おい」
「ホホホホ……。ねえ、啓くん。きみ、『水の都前橋の三美人』って、知ってる？」
「え？　知らないなあ」
「蛭田幸子と蛎沢洋子と小奴のことよ。きみは、いま、その評判の三人の美女を手玉に取っているのよ！」
「冗、冗談じゃないよ。手玉に取るなんて……」

「ホホホホ、まあ、照れちゃって……。
でも、三美人は、ほんとうなのよ。もっとも、名づけ親は琴野田のパパだけど・・・」
「あれ？　琴野田のパパって？」
「琴野田医院の院長先生よ。つい、この間、公園で死んじゃった……。あら、前に話さなかったかしら？」
「あ、いや、そのひとが、京子の旦那か？」
上田は、思わず、身を乗り出した。
「そうよ。あのね。パパは、外では、華やかに騒がれてたようだけど、家の中では、独りぼっちだったのよ。長男夫婦というのが、冷たかったらしいの。だから、パパは、同じ屋根の下に住んでいながら、ろくに口もきかなかったんだって……。
だから、あたしなんかに、寝物語で、人工授精の話までしたのよ……」
「なんだって？」
「そんなに驚かないでよ！　寝物語っていったって、あのとおりの体でしょう。だから、もう何年も、いやらしい関係はなかったのよ。ただ、一緒に寝て……。
あら、ごめん、この方が、いやらしかったかしら！」
「そんなことは、どうでもいいんだ。それより、人工授精について、どんなこと、いったんだ」
「たいしたことじゃないわよ。人工授精って、小宝に恵まれないひとに、こどもを授けてやる仕事なんですってね……。それでも、男親の精子が使える人工授精の方は、まだ、いいんだけど、パパの研究の方は、その精子提供者を、一々、どこからか、見つけて来なければならなかったから、大変だったのね……。
おまけに、その精子の提供者が、あとになって、『わたしの子供に会いたい』なんていって来たり、人工授精児の方でも、成人してから、『ほんとうの父親を教えて……』なんて泣きついて来たことが、何度もあったらしいのよ……」
小奴は、上田の盃に、酒を満たしながらいった。
「じゃあ、教えるのか？」
「とんでもない！　絶対に教えないの。いえ、教えてはいけないのよ……。第一、そのひとたちだって、人工授精前に、誓約書を入れているんだから……。
蛎沢洋子さんだけは、ＡＩＤじゃなかったらしいけれど……」
「えっ、いま、なんていった？」
上田は、持っている箸を、慌ただしく置くと
「明は、ＡＩＤ人工授精児じゃなかったのか？
「ええ、奥様の洋子さんに輸卵管障害があったので、体外受精を決意したのね。パパも、例外として、浩さんの精子を使った手術をしたの……」

（未完）

有院家の人々（八）

大和禎人



第十五章　ベラの兄弟姉妹

ロバート、イキ夫妻の間に二男四女がもうけられたことはさきに触れたとおりだが、いま、それらの子女について生年よりもむしろ没年を、それも簡明な元号をもって写すことで、それぞれの生きた時代を鮮明にしておきたい。なぜならば有院家の児孫がロバートこそはその死後になるが、長生きをしたイキとともに子ら六人のうち四人までが、あの太平洋戦争という厳しい現実と無関係ではなかったことを明らかにしたいためである。

長女　ソフィア・アルベラ（昭和32年6月12日没）
次女　メリー（昭和5年4月5日没）
長男　ロバート（パブ）（昭和46年10月9日没）
三女　メリオン（昭和48年5月12日没）
次男　リチャード（昭和3年月日不詳没）
四女　アグネス（昭和30年12月25日没）

ロバート夫妻は結婚一年後、ウォルシー・ホールの長崎駐在員の任にあった当時、初子として女児をもうけながら、生後まもなく夭死して十二年も子宝に恵まれなかった事情があり、ベラの誕生を迎えたとき夫妻ともに狂喜した事情が甦える。そして相次ぐ子女の誕生はロバート・ウォーカー・アルウィンがハワイ公使としてもっとも壮気に満ちた時代に当っている。

ベラを遠くアメリカ留学に旅立たせた後、母としてのイキ女は子育てに忙しい毎日を送っていた。

（パパもママも沢山の子供の中にても殊におまへは長女故たのみまいらせおり、この事よく覚えて親の申す事おきき下さるべく候、毎日毎晩、パパとママは二人しておまへの事を話しおり候、かたときもおまへの事忘れず候、毎晩おまへの

為に神に祈りおり陰膳は絶やさず候）

いま一度写して、イキが家事のあい間に数日をかけ、後に口語文に変わるのだが、その頃はまだ候文、例の変体仮名、しかも巻き紙に毛筆で認めた一節を思い出しておきたい。ベラによって大切に保存された三十余通のうちの一通だ。陰膳なぞと、ベラには母子の情をもって通じたとしても、父親のロバートにはとうてい理解の困難に思われるフシの内容である。

ベラは丈夫で手数のかからない子どもであったのに、二人の弟と三人の妹たちは絶えずまわりかわり病気をしていた。ほとんどの伝染病が一人によって持ち込まれると、結局、五人ともが次々、ぞろぞろと罹ってしまうのであった。

ジフテリア、おたふく風邪、水疱瘡、トラコーマ、中耳炎、気管支炎、赤痢、大腸カタル、と仲良く罹る始末であり、とくにはしかに罹った時なぞ五つのベットがみな一杯になってしまった。

さらに学校のことでも次々問題が起こり、そのたびごと、ロバートが気短かに癇癪を爆発させるため、イキ女の苦労は並大抵ではなかった。

おまけにロバートは仕事上、交際範囲が広く日本人、外国人を問わず、さまざまな人たちとの社交にも、万遍なく相伴をし、しかも手落ちなくサービスをせねばならないのであった。

また、綱町の本邸だけでなく、多摩川や伊香保の別荘の管理までとなると、イキは内に外に、片時も身も心も休まる時がなかった。

ロバートは子どもたちの健康上、湿気の多い日本の夏を避けるために、はじめ沼津の静浦に簡素な海の家を借りたりしていたが、やがて親しくしていた井上馨の紹介があった伊香保を一見するにおよんで、大変気に入り、すぐに武智キク名義で買い取ったのである。そして単に家族のためばかりでなく、ハワイ公使館の別館として指定しているのである。ハワイ王国から訪日する賓客にも憩いの場所としてかれはここを提供していることも忘れてはならないだろう。ロバートのひろく開放的な社交性の一面として伺えることだ。

だが一方では、そのため大勢の使用人が抱えられており、それらの使用人たちの中にはなにかとイザコザが絶えなかった。それらの処理もイキは当たらねはならず、人間関係だけに厄介を免れないことが多かった。

（この世はえんまの釜の下に候）

たとえようも面白い、イキのベラに書き送った手紙の一節がある。これを書いたかの女は自らを茶化して、一種、達観に近い心境を覗かせている。

長女のベラは頭がよく、年齢のわりに直感も鋭く、判断力や分別があったので、幼時から母イキにとってなにかにとなく頼りになる良い相談相手であった。

かの女は家にいる間、良く弟妹たちの世話をしてくれた。弟たちの物の取り合いや、喧嘩の仲裁など母よりも上手であった。腕白な弟たちの上に不思議な支配力をもち、弟妹のおさえ役をしていた。とくに父ロバートにとっては目に入れても痛くないほどの掌中の珠であった。

英字新聞ばかりか、物語や詩の本を取り寄せてはベラに読ませ、それらについて目を輝かしながら交わされた父と子の英語での対話、二人で肩を組まんばかりロバートの母国の歌を唱和するなど、それらがどんな雰囲気のものであったかはすでに触れたことであるが、イキにとっては立ち入ることのできない別趣の親密さであり、疎外の垣を感じさせるものであった。アメリカ人としての父、日本人の母、その狭間にベラはあくまで賢く、両親双方の愛を深くうけて成長していた。

そうしたベラを留学に見送ってからのアルウイン家は家庭の中にポッカリと空虚が生まれ、生活のバランスまでが失われたのであった。

次女のメリーは生まれつき虚弱で、神経質であった。やはり教育はアメリカでうけ、高校を了えたけれども、大学へは進まず日本に帰国した。ずっと両親のもとで過ごしていたが、かの女の神経衰弱症は年ごとにひどく、極端な「鬱」に陥入って両親を心配させ、嘆かせるようになっていた。

ひと頃はそれでも小康の時期があり、ロバートはかの女をバリに伴って、ピアノの勉強をさせることで転機をはかろうとした。そんな努力が一応実を結ぶかたちで、のちにはアメリカで二度ほどリサイタルを催したりしたほどで、愁眉をひらいたこともあるにはあったが、結局のところ「鬱」を取り除く効果は得られずに、またも帰国している。

このメリーのために夫妻はあらんかぎりの手当を尽くしながら、一向に回復の見込みはなく家庭内の暗さは増すばかりであった。メリーがヒステリックな発作を起こすたびに、ロバートとイキの心はズタズタに引き裂かれた。

「母さま、メリーのことがとても心配、でもわたしにはあの人の気持はとてもよくわかるように思うの、でもしかたがないわね」

「どういうことなの、母さんにはわからない、なぜ、あなたのように強くなれないのかしらね」

「強いとか、弱いとかではないの、でもわたしの口からは言えない、母さんだって言えないこと、お父さまはもっと、もっとお辛いと思うの」

イキはベラが二度目の留学希望を言い出した時、ベラの心の底になにが抱かれているかを、いちはやく察知していた。知ったとしてもそれは口には出せないことなのであった。イキは大変せつない思いで、はじめの留学の

折とは違った別離の涙を流したのだった。イキはこの時ベラの鹿島立ちを見送らなかったが、横浜の埠頭には一人の青年が人影にかくれひそかに見送っていた。それは一九〇六年（明治三十九年）十一月五日のことだが、ベラはこの時二十四歳、恋路に自ら終止符をうち、しかも屹立した精神のもとに志を立て、アメリカへ再留学したのであった。いらい七十五歳の終焉にいたるまで独身を守り通したのである。混血の悲しみを胸底に深く秘め、抜け出そうと人生航路を取舵いっぱい、必死になって漕ぎ出したものだった。それにひきかえ、メリーの狂おしく「鬱」に沈む一生はあまりにも無惨なものであった。

「ママとパパはなぜわたしを生んでくれたの、わたしは生れてこなければよかった」

と絶叫しつつ、父ロバートの死の五年後、四十五歳の苦悩に満ちた生涯を閉じた。

長男ロバート・ジュニアはプリンストン大学を卒業し帰国した後、渡部病院院長渡部鼎博士の長女英子と結婚した。英子は学習院を卒業していた。相思相愛の仲の結婚であったが、この夫人は若くして亡くなったので、後添えとして牧野伸顕伯爵の姪、日高常子と結婚して、二人の男子の父となった。

牧野は大久保利通の次男として生れ、牧野家を継ぎ、アメリカ留学ののち外務省入りをし、伊藤博文に知られて、福井、茨城の県知事を勤め、やがてはイタリア、オーストラリアなどの公使を歴任し、その後しばしば入閣しては文部、農商務、外務などの各大臣、さらには枢密顧問官、ベルサイユ講和会議全権などを閲歴した名家、戦後の総理大臣吉田茂の岳父にあたる人だ。

アルウイン家二世婚姻の往時は宮内大臣であり、後、内大臣となり昭和期初頭にいたるのである。ロバートとは外交官としての面識も考えられ、かれが社交の場に息子を伴う間に縁の結ばれるキッカケが生れたものであったようだ。ロバート二世との結婚は常子も再婚であった。常子の先夫は伊藤博文の息子伊藤真一で、彼との間には一男一女をもうけながらロバートに恋をし、先夫と離婚してロバートのもとに走ったという、当時としてはなかなかの女傑であった。父のロバートとしてはこれらのいきさつについてはかなり心労があったに相違ない。

三女のメリオンはプリンマー大学を卒業し、さらにハーバードの女子大学ラドクリフに進み、生物学の博士号をとり、四十歳の時、生物学者として著名なオスタハウト博士と結婚した。アメリカに永住する道を選んだのは彼女一人であった。

末っ子のアグネスはバッサー女子大学卒業後、数年アメリカに滞在して日本に帰り、三十も半ば過ぎて十歳年

下の平尾敏也と結婚した。かれは当時成功していた化粧品会社レートクリームの社長の甥で、プレイボーイだった。夫婦の間には子どもはなく、夫はやがてかの女のもとを去った。アグネスは夫と他の女性との間に出来た嬰児を引き取り、養女とし育てあげている。

第十六章　次男リチャードとその裔

平成三年六月二十八日付の朝日新聞夕刊の掲載の現代「人物誌」にこんな記事が載った。

東洋医学療法士　アーウィン・雪子さん

建国二百年記念にわいた一九七六年の米国で日本人の血をもつ女性が脚光を浴びた。建国の祖ベンジャミン・フランクリンの直系七代目に当たり、職業は東洋医学療法士。三年がかりでまとめた著書「指圧　SHIATZU」がベストセラーとなり、全米に指圧ブームが広がった。

「指圧は私の小さな二つの手でできるささやかな日米親善よ」

いま淡々と話すが、戦争を挟み、日米混血の宿命を背負った人生は波乱に満ちていた。

米国から実業家として来日、ハワイ王国全権公使も務めた祖父と父がともに日本女性と結婚。兵庫県で生まれた雪子さんは立教女学院から東京女子大へ進んだが、戦時中は茶色がかった髪を黒く染め、名字を「有院」で通した。

戦後病弱な母の治療に通ってきた元陸軍中将の指圧師に「あなたの手には、霊感がある」といわれ、指圧の手ほどきを受けた。興味を募らせ、浪越徳治郎氏のもとで本格的に習った。

インディアナ大学留学のため、父方の祖国米国の土を踏んだのは、五三年。その後米国人との結婚と離婚、そしてニューヨークで失業という逆境の中で、突然指圧によって新しい運命が開かれる。バレエ団のオーナーで大富豪の女性の腰痛を治したのが、きっかけだった。「あなたは天性の仕事を持っているじゃないの、とバレエ団専属に雇ってくれたんです」

三年間欧米の公演に付き添ったあと、コーネル大学医学部のユージン・コーエン教授らに認められて独立した。患者には、有名なアーチストやヨーロッパの王侯貴族も多いが、

「心の病、肉体の病の前には、国籍も人種も有名無名も関係ないのよ。大金持ちでも心の貧

しい人は幸福じゃない。私も、長い間苦しんだ自分のアイデンティティが、ようやく見えてきました」

（文・堀江瑠璃子）

というものだ。

このアーウィン・雪子こそはロバート・ウォーカー・アルウィンの裔、次男リチャードの遺児なのであった。父のリチャードはかの女の幼時にある事情で自死を選んですでに亡く、母の市子は兄ロバート・ジュニアの先妻、つまり、あの渡部病院長の渡部鼎博士の長女英子を姉とする三女であったが、夫の死後はさまざま悶着の末、離籍して義絶状態にあった。雪子は四歳の時、兄武雄とともに、祖母イキのもとに暮すことになり、伯母ベラの愛育をうけたのだ。かの女が生みの母を知ったのは十八歳にもなってからであった。

したがって、「人物誌」中の病弱の母とあるのは実母の市子を指すものであるとすれば、雪子の生い立ちの数奇、幾重にも重なる波乱曲折は生易しいものではない。

次男リチャードはブリジストン大学に入学、在学中、兄のロバート二世とともにコロニアル・メンバーとなることに成功し、卒業後は一年間世界中を放浪し、その後さらに、ハーバード大学法律学科をも卒業、弁護士の資格をとった後、スタンダード石油会社の極東支配人として日本に帰国した。そして、一九二〇年（大正九年）、三十歳の時、二十歳だった市子と結婚したのだった。

リチャードにはアメリカ在留の間に、フィラデルフィアの旧家の令嬢で、相思相愛の女性がいた。その女性はかれとの結婚により、遠い日本に住むことを拒んだのであった。市子との結婚以前のそうしたいきさつは知らないではすむことでなかった。市子が二児を捨てアルウィンの家を去った理由には、そうした事情も無関係ではなかったはずである。

市子の幸福そうに二児とともに写っている貴重な一枚の写真に見るかぎり、かの女は美しい母である。二歳だった雪子は五歳の兄武雄とともにたがいの頬を寄せ合っている。

だが、この幸福は脆く崩れ去る時がやがてくる……。

大正十二年九月一日、関東一円を突如として襲った大震火災がリチャードのそれからの人生に陰を投げる因をもたらしたのである。

その日、市子は当時一歳になる長男武雄を連れて東京のアルウィンの家を訪れていて、幸い麹町綱町の家では事なく無事であった。

やがて八十歳になろうかという老齢になっていたロバートは初孫の武雄を溺愛していて、なにかと口実をかまえては母子を呼び寄せていたのだ。

ところが、横浜のスタンダード石油会社の事務室にいたリチャードの方が一時消息を断ち、心配をさせたのである。

会社のあった四階建てのビルジングが崩れ倒れて、リチャードはその下敷きになるというハプニングに見舞われ、生き埋めになったのであった。真っ暗闇に閉じ込められ、意識を回復し、一時は死を覚悟したのだったが、激しい何度目かの余震の揺れ返しに、奇跡的にも目の前に隙間ができ、外の光りが差し込んできたのである。

かれは無事に脱出することができた。地上は火災の炎が這う火の海になって、地獄のようであった。火の中を必死の思いでかいくぐり、ようやく海辺まで逃げのびることができた。かれは海に飛び込んで、沖合に停泊していた船に泳ぎついて九死に一生を得たのである。

横浜は海浜の市街地であることが、かれの生命を救ったのである。海に逃れたことがよかった。同じ焦熱地獄を逃れようとして祖父ロバートの体験した「豚屋火事」では末広町の火もとから外国人居留地を含める関内の三分の二を焼き、埋立中の堀に飛び込んで四百数十の犠牲を出すという出来事があったことが思い出される。

この関東大震災では浅草の瓢箪池や隅田川に水死した惨状が語り種になったことだ。

震源地は相模湾北西部、マグネチュード七・九、関東平野南部は震度六、全国のほとんどが有感するという地震であった。関内地区をはじめとする横浜市の中心部は江戸時代後期以来の埋立地にあり、取り囲む地域の多くは台地の造成地であったから、地盤の軟弱による激震の第一次災害を大きくし、前日からの台風の影響によって、未明から早朝まで荒れ模様という厄日のことで、西南の風が強く、市内二八九ヶ所から火の手があがり、火災による二次災害の追い撃ちにより大きな被害をもたらしたのである。

機能が麻痺した関内・横浜港

官公庁・会社・銀行などがたち並ぶ関内地区の被害は惨状をきわめた。特に山下町では居留地の面影を残した洋館は一斉に倒壊し、一瞬の中に廃墟と化した。建物の中にいた人、通行人は、ほとんど逃げる間もなく、ガレキの下敷きになって圧死したのである。

大桟橋では、エンプレス・オブ・オーストラリア号がまさに出帆するところで、錨を上げかけたとき激震におそわれた。大桟橋は陸とつながる根元の部分が水没して海上に孤立した。見送りの人々は海に振り落されたが、多くは停泊中の船によって救出された。

港湾施設も致命的な打撃をうけた。岩壁のほとんどが崩れ落ち、港を取り巻く防波堤は海中に沈下して突端の灯台も水没して見えなくなるほどであった。税関をはじめとする港内設備も

火災で大きな被害をうけた。このため横浜港の機能は麻痺し、船舶の発着は不能になった。

という記録をあらためて知ることができる。

横浜の被害は全焼六二、六〇八、全壊九、八〇〇、半壊一〇、六三二。死者二一、三八四、行方不明一、九五一、重傷者三、一二〇という記録を残している。東京市の被災48%に比べて横浜はなんと95%強にもおよんだのであった。

リチャードの生存が一時絶望視されたのは無理からぬことであった。ともあれ奇跡に恵まれたかれだったが、その後、この時うけた頭部の打撲によるものか、時々頭痛を訴えるようになり、年ごとにそれがひどくなり、生涯にわたり悩まされるようになった。

アルウィン・ユキが生れたのは一九二五年（大正十四年）であった。祖父ロバートはこの年の一月、八十一歳の生涯を閉じている。ユキの生誕はその三ヶ月後の四月である。父リチャードはその一年前にスタンダード石油会社から、日本蓄音機会社へ転じている。二倍の月給で引き抜かれ、しかも副社長の地位についていた。一家は神戸に居を移していたので、ユキの誕生地は須磨明石ということになる。

リチャードの心の隅に長く住みついていた迷いがあった。それは、

（このまま日本に定住すべきか、あるいはアメリカへ永住をもとめるべきか）

という岐路に立っての選択の問題であった。

フィラデルフィアに残し愛人に対し、多分の未練を拭い切れず、一方にはかれもまた混血という宿命を負う一人として、勉学に過ごしたもう一つの母国への憧憬を捨て切れなかったからである。

だが、リチャードはいまは欠けることのない環境にあった。とかく無口で、内向的な、複雑な心理の持ち主のリチャードだったが、日本での婚姻で十歳年下の市子を得てからは大いに変化が訪れたようすで、市子が無邪気で明るく、しかも他に自慢するほどの美人であったし、派手で遊び好きのたちで、家事などかえりみない傾向でも、かれは小言一つ言わず、むしろ暗い家庭に明るさを与えられ満足していたのである。親譲りの貴族趣味もあって、着飾って出歩くことの多い市子を許し、かえってそれを好みさえしたのだ。家事は召し使いに任せておけばよいのである。

かれは深く市子を愛し、ようやく日本での暮しについての迷いを忘れるようになった。スタンダード石油会社の時代は周囲がみなかれと同様にアメリカの名門大学を卒業したエリートばかりであったから、たいへん居心地のよい雰囲気であったが、国際的な会社の性格上、いつどこの国へ転勤させられるか知れない不安があった。

日蓄からの誘いに応じる転職をあえてしたのは、転勤という不測の事態を避け、妻子を悲しませまいとする配慮によるのであった。

日蓄はアメリカのコロンビアやビクターとの提携があるとはいえ、日本人の経営する日本人の会社であった。アメリカで教育をうけたリチャードとしては勝手違いの雰囲気になかなか馴染めず、こんどは別の面での苦労が絶えなかった。

かくて、四年ほど経過するうちに、たまたま日蓄従業員の大きなストライキが起こった。昭和初頭、わが国の金融恐慌に吹き荒んだ嵐はこの会社にとっても無関係ではなかったのである。

リチャードは父から譲られていた私財の大方を投げうって、ストライキを解決しようと懸命な努力をした。その上で、新しく有能な幹部職員を雇い入れ、会社組織の一新を計り、ようやく新しいエネルギーのもとで活性化の兆しを見るに至った時、リチャードの能力の目覚ましさを恐れ、自分の地位に心配を抱いた社長は画策して、かれを追い出しにかかった。子飼い先任の幹部職員たちの不満も、こぞってかれに向けられ、追放は社長の意図どおりに成功したのである。企業体の冷酷なご都合主義であった。

リチャードの失意はもちろん言うまでもない。累積していた仕事上の心労も大きく、あまりにも重い運命を前に、持病の頭痛も加わり、重度の神経衰弱に陥いってしまった。

社長の冷酷な嗜虐行為はそれだけでは、なおあきたらず、こともあろうに後任副社長の歓迎会にあわせてリチャードの送別会を二人の同席する計画で行ないたい、という案内がかれのもとにもたらされた。

その晩餐会の行なわれる夜のことだ。

「わたしも後から行くから」

と言って、リチャードは市子に二人の子どもを連れて親しい友人のところへ行っているようにと命じ、かれはいつになく、その日に限って門口まで出て、三人を乗せた自動車が見えなくなるまで見送ったのであった。

ほどなく、邸内に銃声が起こり、リチャードはまだ三十八歳の若い命を自ら絶ったのである。皮肉にも、銃は父のロバートが愛用し、狩猟に使われたあのスナイダーの二連発銃であった。かれは銃口を米噛みにあて、引き金は足指で引いていた。異常な心理に追い詰められたあげくとはいえ、若い妻と幼い二児を残した覚悟の自殺だった。

たとえ、いかなる理由があっても「自殺」は不祥の出来事であった。著名な米国人、勲一等を贈られたロバート・ウォーカー・アルウィンの息子というだけでも、これは絶好の新聞記事になりかねない、衝動的ないきさつなのであった。

この時のことである、母イキは一家のみなが驚くほど気丈を示し、しかも縦横に奔走して未然に新聞記事になることを防いだのである。もてる政治力を大いに発揮して、とうとうそれに成功したのだ。

地下に眠るロバートの名誉を守るために、さらに現実の問題としては、将来のある孫たちのためであった。

「わたしにもしものことがあったなら、ママ、二人の子どものことをお願いします」

イキはリチャードがなにを考えてか、そうした言葉を言い残すために、わざわざ訪ねてきた日のことを思い出さずにはいられない。悔やみ切れない思いである。

しばらく会わぬ間に、やつれ果てた息子のようすに、

「無理をしてはいけませんよ、あなたはいま一番大事な時ですから、気弱になってはいけません、心丈夫になさいな、どうなさったの？」

と、諭しながら言ったことだったが、

「いいえ、なんでもないのです、ママは心配しなくてもいい、これはボクの問題だから…、いいのですよ、ママ」

やはり、変なようすに間違いなかったのだ。それから何日も経ないで不祥事は起こったのだった。

イキは涙にくれるいとまさえなく、未然に処置すべきことに敢然として取組んだのだ。イキが迎えたこの悲劇は、もはやかの女の七十六歳の時であった。そして二人の遺児、兄武雄は六歳、ユキコはまだ三歳であった。

いまだ若い市子、また幼い遺児の将来についてアルウィン、渡部の両家はなんども話し合いを行なったが、ついに折合いがつかず、気まずさを残して、もの別れになった。ありがちのことだが、両家の縁は永遠に解けることのない、不幸な断絶の時を迎えたのだった。

アルウィン家側は市子は二人の子どもを育てるべきだとし、そのための経済援助は惜しまない旨を申し出たのに対し、渡部家側は二十八歳という若さの市子を再縁させたい、再婚後も子どもたちの養育費はアルウィン家のほうで支払うべきだと主張して、たがいに譲らなかったのである。だが、親子はだれかの世話をうけなければ生活ができなかった。市子は意を決し夫の死後一年経って、二人の子どもをアルウィン家の姑イキに託し家を去り、今後、子どもたちに会わないことを約束させられた。

アルウィン家は市子の弱さ、愛情のなさ、無責任さを責め、渡部家のほうではアルウィン家の無理解、金銭的な吝嗇として非難したのである。市子は離籍し母としての権利を放棄したのである。経済的責任はリチャードの母としてイキが負い、リチャードの姉ベラが教育の責任を負うことになった。

リチャードの家系の悲運これに止まらず、やがて太平洋戦争で日本軍の一兵士としてユキコはたった一人の兄武雄を失うのである。〈未完〉（四・一二・三〇）

本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。

（小説）

近藤富蔵の生涯（十八）

第二章　浮沈の近藤家三代

一、鶏声ヶ窪の茶人

金子正義

（三）

其の頃、幕藩体制は元祿の最盛を過ぎ財政も逼迫していたが、農村では二毛作や商品作物の栽培が始まり、都市の手工業も発達して商業が盛んとなり、全国的に経済が発展し、江戸は開府以来の大繁昌であった。

家康以来城下町の形成と繁栄の為に町人を保護し、町人社会の自治と自由を有る程度許したからでもあった。

『江戸人別調査』に依れば、元祿八年江戸の人口は町方三十五万余、武家四十万、寺社方五万となっている。

封建の世の枠の内乍ら学術文化は発達し、芸能文化も爛熟して江戸では遊芸や盛り場文化が競い合っていた。

江戸大坂に限らず各藩も城下町を中心に生活が向上し、農山漁村の仕事は勿論近隣との交流、生活や遊びごとにも文字、数計算が必要となり、村々の子供も親や古老に読み書きそろばんの初歩を習い始め、更に識字計算、諸国名所案内より往来物等の文書を学びに手習い師匠や寺小屋に通うようになり、寛政年間には江戸では寺小屋だけでも八百を超え、全国では四千三百余りとなった。

更に人の知識欲は限り無く、読み書きそろばんの知識技能では飽き足らず、俳諧川柳和歌狂歌より気象天文から本草学に至るまで本格に取り組み始め、更に和漢の学、天文地理数学医学蘭学と、当時の最高学問を学ぶ者が、武士町人を問わず一般庶民にまで拡がっていった。

古代より学問芸能は王朝貴族や武家、神官僧侶等の独占であったが、江戸町人文化の向上に依って学ぶ者は武士より農工商一般庶民にも及んで、其の望みに答える私塾は全国で千三百余、江戸市中で八百余に達した。

全国三百諸侯の殆んどが儒者を召抱え、藩校は二百八十余であった。此れは五代将軍綱吉の学問好きや、六代将軍家宣の侍講新井白石の幕政主導後、諸藩が競って藩校を建て、朱子、陽明にこだわらず名ある儒者や其の弟子を藩儒として召抱えたからでもあった。

此の傾向は九代家重・十代家治の代には最も盛んで、新たに藩校を開く藩が続出した、試みに記録を見ると、家重の代には、寛延二年（一七四九）、尾張藩の明倫堂。宝暦三年（一七五三）、鳥取藩尚徳館。同五年には熊本藩時習館。同八年小倉藩思水斉。松江藩斉明館。同十年高知藩教授館。と六枚を数える。

家治の代に入って明和二年（一七六五）、津山藩学問所。安永二年（一七七三）、富山藩広徳館。安永五年米沢藩興譲館再興。豊後竹田藩は学制を改めて輔任堂を修道館とす。安永六年佐伯藩四教堂。安永七年高鍋藩明倫堂。安永八年平戸藩維新館。安永九年高松藩講道館。天明元年（一七八一）、佐賀藩弘道館。天明二年広島藩修道館。天明四年福岡藩は東西に藩校を設けて東校修猷館西校甘棠館。天明五年徳山藩鳴鳳館（後興譲館）と十二校を設けた。

創設された藩校には多くの学者教育者が必要となり、藩によっては藩医が其の儘藩校教官を兼ねたが、全国諸藩の需要を満すには至らなかった。

一方、都市の繁栄と町人生活の向上に依り富裕商人が台頭し、町人の学問が必要となり、西国方面には町人学者が多く出るようになった。

代表は石田梅岩である。丹波国桑田郡東懸村の農家の二男坊勘平が、京都の呉服商黒柳家に丁稚奉公に出て働き乍ら寸暇を惜んで諸書を勉学し、商人道に立つ実践の倫理を体系づけて石門心学と称し、京都に明倫舎を開いて多くの門弟を育てた。

其の中から同じ京都の商人出身の手島堵庵が一層心学の教化普及に努め、京、大坂等各地に学舎を建てて庶民を教導して盛んとなった。

梅岩の女性の門弟慈音尼蒹葭は江戸に下って商家の子女に石門心学を普及し、手島堵庵の弟子で京都西陣の機織家の出身中沢道二が安永八年（一七七九）、堵庵の代講として江戸へ下り、日本橋塩町に参前舎を開設し、商家に働く者や近郊の農村の若者達を教えて名を広めた。

此れを知った老中松平定信は中沢道二を呼んで、石川島の人足寄場に収容されている無宿者の慰撫立ち直りの教導に当たらせて効を収めている。

大坂では京都の石門心学に対して、学問としての町人道を深めようとして、大坂の豪商鴻池を始め五人の大商人が出資して漢学塾懐徳堂を開いて商人出身の漢学者が講師となり、四書五経を教授し、算術・医術から碁将棋の商用上の便法まで教え、大坂のみか関西商家の必修の学として広まり、中井竹山・富永仲基等の傑出した学者が輩出した、特に竹山は天明八年老中就任早々の松平定信が幕政改革の経世策を諮問した時、経世論『草茅危言』を書いて呈上している。

斯のように学術は儒学のみか、国学・心学・本草学・数学・天文地理学・医学蘭学に至る迄、諸学が盛んにな

り、数学などは当時の世界の水準を抜いていた。

儒学に於ては幕府の御用学朱子学が林家が専らにし、朱子の理気論、格物致知の論旨を一層精緻にしたが、煩瑣な経書の解釈に偏しているとの反論が出て、陽明学、古学、或いは折衷派、兵学までもが自派学祖の論を説き其の学風を競っていた。正に百家争鳴の有様だった。

近藤右膳守知自身も幕臣であり乍ら、余りに思弁的な朱子宗学は好きになれなかった。守知は林家儒学の始祖林羅山が朱子の理気論に偏して排仏を唱え、曾て禅門に身を寄せ乍ら、室町以来の禅儒一致の聖道より禅を除くなどの論には憤りを覚えた、更に茶の湯の器物を激しく排撃した『肩衡論』を読んで益々朱子学嫌いとなった。

守知は斯のように学者斯道に思いを巡らせ、我が子重蔵をいずれの師に託そうかと案じていたのだった。

（四）

其の頃、白山下に塾を開く山本北山（名信有、字大喜）が居た。未だ三十前の若さであるが、古注学折衷派井上金峨の門下の中心で、既に一派を成し書も多く、朱子宗学よりも古代中国の周代の古学を重視し、特に孝経を中心として子弟を教えていた。宝暦二年（一七五二）、生れであるから、元文四年（一七三九）、生れの近藤守知の方が十三歳も年長であった。

意気統合するものがあって前からの交わりがあったが我が子に良き師をと思い巡らせ乍ら、余りにも近い北山であったので気付かず灯台もと暗し、と其の迂闊を嗤い乍ら重蔵を連れて北山の奚疑塾を訪れた。

安永七年、重蔵も七歳であったが始めての北山の前で少しも臆せず大学を講じた、北山は其の弁説の余りの明弁さに重蔵の天真の聞きしに勝るを知って、良き弟子を得たと心中躍動し己れの持つ全ての知識を重蔵に伝えようと意気込んだ。

入門した重蔵も師の期待に答えて海綿が水を吸うように知識を吸収していった。

北山自身は周代の経論から古代中国の金石文迄溯って、その探求の方法論の開拓に進み、考古学の分野迄探っていた。従って其の成果として後に古学折衷派の古注学の分野を開拓し『作文率・程朱異同古今究源・文藻行源・学派考・』等の著述を残した。惜しくも文化九年（一八一二）、六十一歳で没した。

重蔵が入門した頃は三十前の若さで諸侯の招きで江戸詰の家臣に経書を講じていた。特に秋田藩には経世の学を講じていたので白山下の奚疑塾にも侍達が聴講に来た。

だが塾に学ぶ者は武士百姓町人の身分を問わなかった北山の思想もあるが、その時代の私塾の風潮でもあった。江戸の街の質屋の伜や大工屋根屋の子供から寺の小僧、津軽藩出入の御用商人の子など、重蔵と同じ年頃の子弟

が、白山下の北山塾と呼んで集っていた。

重蔵と前後して入門した仲の良い塾生の中には、後にそれぞれ名を成す学者、経世家となった者が多い、その中でも後に秀れた経世学者となって『九経談』等を出す大田元貞（錦城）が居て、重蔵より八歳年長であったが既に光彩を発して師の代講を果す程だった。

封建の世の枠の中乍ら私塾に学ぶ者には士農工商の別なく伸び〳〵と学び自由に論じ合う奚疑塾であった。それは北山塾のみならず、江戸、京大坂の私塾、寺小屋の学風だった。

亦、私塾で学ぶ志ある若者達は、或る程度師の学を身につけると更に良き師を求めて此れと思う塾を尋ねて聴講したり、中には世を拗ねた風流隠士の草庵の柴扉を敲いて巡る者もいた。

重蔵を良き師に託した守知は一層茶道・禅学に精を出し、漢詩文を通して中国の文物を好む文人仲間と交わりを深め、共に煎茶道を愉しみ乍ら談じ合い、翠中軒と号して其の道で知られるようになった。

老若男女貴賤を問わず教えを請う者にはその能力に応じて非番の日に楽しみ乍ら教えていた。そうした一人に『遊歴雑記』を書いて後世迄名を残した十方庵敬順の若き頃の姿もあった。敬順は其の書の初編六十六に、

『天明元辛丑年三月鶴見一漁がすゝめによりて、近藤知新庵が茶堂に入門し、陸鴻漸が業を学びしかど聊こゝろに応ぜぬ事ありて、翌年壬寅の二月小嶋卜斉翁が忍ぶが岡の茶堂に改流してより、文化九壬申年にいたりて…』とあるが、宝歴十二年生れの十方庵敬順は未だ出家しない寺侍の津田敬順で十九歳であった。守知は翠中軒と号しても少々跋行し乍らも四十二歳の働き盛りで継嗣重蔵は奚疑塾で神童振りを発揮していたが未だ十歳で守知は隠居せず先鉾騎郎御先手与力の役目を憚って茶室は持っていなかった。

敬順は近藤知新庵が茶堂に入門し、と書いているが、敬順が『遊暦雑記』を書いたのが文化十一年で、其の頃は知新庵茶室は在ったが近藤知新庵又新は文化九年に没している。

敬順が入門した天明元年では翠中軒守知として茶道は炉で湯を沸して抹茶を点てる佗茶でなく、屋敷の一室を茶道修業に当てた煎茶道であった。敬順は遊暦雑記に『近藤知新庵が茶堂に入門し、陸鴻漸が業を学びしかど』と書いてあるように佗茶の道を求めていたのだった。

だが守知は津田敬順が最後に学び来て辞去するとき、『庭の五輪塔の如く不動でない天地間に遍在する五大の変化を探して参ります』

と残した言葉を深く考えて、敬順は雲水修業に出るものと思っていた。

陸鴻漸は中国唐代の文人陸羽桑苧翁で茶経三巻を書いて後世茶神と云われるが、日本へは五山僧の宣揚に依って紹介されたが余り世に喧伝されなかった。

日本では栄西の伝えた医薬用の茶を東山文化の伝統の上に、紹鷗・利休等が抹茶を点てて呑む佗茶の道として大成した。

だが陸羽の煎茶は石川丈山等の文人墨客仲間が、漢籍等の学問の談合の間に煎茶を淹れて怡しみ合う座敷茶となった。

後こうした煎茶を好む文人柴山天照が佗茶を批判して、茶の湯が禅僧社会と諸大名や上流武家、豪商等の遊び事に堕したとして、文雅清遊の煎茶道を普及し、上田秋成頼山陽等の京坂の文人墨客に多くの愛好者が出るに至った。近藤翠中軒守知もこのような文人仲間の一人であった。

後に茶は医師などを通して商人や町方の一般庶民に迄煎茶飲用の習慣となったが、煎茶道も文人仲間より広く普及して京の医師小川可進や大坂の商家の田中鶴翁等が体系づけて家元制を執るようになった。

十方庵敬順は天保三年七十二歳で没する迄、茶名宗賢後宗知として茶道・香道を怡しんでいたが、晩年には若い頃に翠中軒守知の煎茶道を嫌ったことなど忘れ、佗茶道、煎茶道の別なく抹茶・煎茶を共に工夫して賞味し、江戸内外の名所遊覧の地を巡り、興が湧けば歌など敷いて田野の農夫や通り行く人を呼んで野点を楽しんでいた。

守知も亦、近藤家へ入婿前に父福間題右衛門が、藪内流竹心紹智に学んでいたので其の手解きを受け、更に後妻美濃が備前福山藩医の藤田隆本の娘で裏千家の佗茶を心得ていたので、守知が茶座敷で煎茶道を教えていても、庭は茶庭造りとして、表より技折戸迄は二連打の飛石とし、中門より四目垣内の内露地へ入る乗越石より亭主石、蹲分石・物見石等の配置や、誰ヶ袖形の蹲踞手水鉢の前の配石は裏千家の形として、門弟には座敷茶を教えても妻の美濃とは佗茶手点を愉しんでいた。

ところが、天明六年九月将軍家治の没後家斉の代となり、松平定信が老中首座となると、文武を厳しく奨励し度々人材登用を宣し、下級幕臣の生活を配慮する古借金棄損、新借金利下げの棄損令を発したのは良いが、度々の倹約令と生活の細々に至るまでの質素節約の掟には聊か辟易し、文人仲間との交遊も身分過ぎた贅沢と憚かわれ、茶道教授の用具や茶菓の食用にも気兼する折から、寛政二庚戌年（一七九〇）五月の異学の禁止令となった。

守知自身は異学の徒に属す訳では無いが、文人仲間の多くは風流隠士の雑学の徒である。其れに守知の継嗣重蔵守重の学ぶ山本北山の学は実証主義の古注学である。

異学の徒とされた知友や儒者のように論陣を張って林家朱子学と論争することは幕臣の守知には出来ないが、身を退ぞくことは出来ようと気付いた。

元々身体障害の身になっても先鉾騎郎の御先手与力と

して御譜代席に留まり得ているのは十代家治将軍の慈悲によるもの、家治公没後に尚も職に留まることは却って不義不忠と云うものと意を決して病気を理由に致仕し、継嗣重蔵守重に家督を譲った。重蔵十九歳守知五十一歳であった。

（五）

自由の身になった守知は茶座敷の煎茶道と風雅幽邃の佗茶の道を益々深めていった。

寛政五年七月老中松平定信が失脚するや、誰憚ることなく長年胸中に温め続けた、煎茶道も佗茶も共に怡しむ独自の茶室造りに取りかかって翌寛政六年四月完成した。

因しくも重蔵守重も、松平定信が有能なる幕臣御家人より人材を登用せんとして始めた学問御吟味の試験に二十三歳の若さで合格し、学問出精の者の褒詞を受けた春だった。

近藤右膳守知が、茶人翠中軒として茶座敷の煎茶道と、佗茶道とを併せて怡しむ独自の茶室を造るに範としたのは、承応二年（一六五三）千元伯宗旦の建てた「又隠（ゆういん）」であった。

宗旦の茶室「又隠」は宗旦が正保三年（一六四六）一旦隠居して造った隠居屋敷を仙叟に譲って再び隠居する際「われは七十六歳にして又隠今日あんと成る」として造った茶室と伝えられている。

守知は煎茶道の書院と居室を改造して四間に三間の小座敷に二帖と、一帖台目に向板、床、水屋を含めて一切を二帖の空間に圧縮した茶室を造り、煎茶道も囲爐を開いての佗茶も共に怡しむ新しい茶室とした。

号も知新庵又新（ゆうしん）とした。宗旦の又隠に肖り新しく茶道専修を志す心意気であった。

守知の残した『静黙亭開爐の記』には、

「……居室の一遇一間四方を補習して方尺の囲爐を開いた一帖半の茶室で、前漢の李広が容膝の起居を愛し、茶祖の佗を極める処也、維摩尊者の方丈になぞらへし四帖半に対して一帖半にて知足知分旨趣なり、屋棟に静黙の二字の額を上げて面壁不説の意を表し、万言も一黙に不如の意をしめす我党茶道の伝ふる処なり」とある。

守知の静黙亭知新庵は現存しないが、「又新」の名の茶室が京都仙洞御所庭園の入口近くにある「又新亭」である。元近衛家の邸内に建っていた茶室であったが、維新後の明治十七年近衛家が東京へ移転の際残されたもので、此の茶室も「又隠」を範としたものである。

亦、昭和二十九年裏千家敷地内に千家十四世淡々斉還暦の賀に建てた茶室が、六帖の茶室と併せて立札の茶室を設けて「又新」と名付けられた。

立札の席は明治になって裏千家十一世玄々斉宗室や堀内宗完が、新時代に合せようと茶室内に立札の席を設け

たが、終戦直後の昭和二十九年に建てた「又新」は六帖の茶座と併せて、広さ約十帖の立札の茶室を設けたもので、瓦敷の土間席、古材を活用して草庵調と民芸調を複合工夫し、現代の生活に適応するよう卓上椅子席とし、点茶卓及び客用卓と椅子を配置して、六帖の茶座敷と併せた新しい佗茶道の一つとしたのであった。

数百年の伝統の上に現代の生活の変化や海外への普及と交流をも慮って、時代の発展に応じようとする姿勢が、寛政期の知新庵又新の名を再現しているので妙である。

続く

夫道岡道三戸岡道
評判の企業小説
修羅の銀行（上）
凄腕人事部長（下）
降格を命ず
社長の椅子
支店長の妻たち
銀行役員を解任された男が、人生を賭けて銀行へ復讐を挑む。
人事刷新を図る人事部長と社員の人事権をめぐる人間ドラマ！
合併の波に翻弄される企業戦士。銀行を舞台に描くデビュー作。
社長復帰を狙う実力会長と銀行出身社長の明日なき対立を描く。
妻たちを巻き込んだ派閥争い。〝出世〟に取り憑かれた人間像。
定価各1300円
定価各1200円
定価1200円
定価1200円
定価1300円
定価1200円
栄光出版社
〒140 東京都品川区東品川1－37－5
電話03(3471)1235 FAX03(3471)1237
郵便振替 東京7－62350（定価は税込）

社告（内規）

☆ 同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。

雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、別に月報「まんじだより」をお届けし合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ、交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　東京二一九〇八一五

加入者名　作家群研編集部

編集子のメモ

◆本誌の印刷について十年余お世話になった加藤清耕社の加藤延久氏が急逝された。この号の入稿後のことで大慌てだった。人間露の命とはいえ、あまりにもはかなく悔やみの言葉に窮し、呆然の思いである。ビジネスを超えてのお付き合いで、発送まで手伝ってもらった誠実の人柄。野村胡堂さんの難解な原稿の清書など、頼まれてたという父君の後を襲い神田っ子の心意気に生きた人だった。

◆この号は清打ちまでを従前のとおり藤井タイプの藤井俊孝氏の熟練の手に委ね、あとの工程を同人青木昭成の縁故により㈱三鈴印刷に依頼し、社長佐野氏ならびに担当荒井氏の好意により成った。記して謝意を表したい。

◆三戸岡道夫の手がける作品にはどうやら三つのジャンルがある。いまのところ企業小説が表看板になりつつあるが、「江戸妖草伝」の系列もあなどり難く、こんどのようなエスプリの利いた作品も書ける才筆に驚く。

◆この号は常連五人が目次に顔を並べるに止まった。季刊なのだから、二ヶ月休養、次の一ヶ月を執筆に充てる。決して無理なペース配分ではない。一号見送れば実質六ヶ月もご無沙汰の勘定になる。なんとかならないものか。（お）

「まんじ」第四十七号

平成五年二月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　三鈴印刷株式会社
東京都文京区小日向四―四―十二
☎〇三（三九四一）一一八一

目　次

手　紙　……三戸岡道夫　1
詩「記念品」ほか六編　……青木昭成　10
【連　載】
前橋公園殺人事件（三）……佐々木一郎　14
近藤富蔵の生涯（十九）……金子正義　25
有院家の人々（九）……大和禎人　35
編集子のメモ　……46

表紙・岸田幸雄　　カット・小久保勝義

手　紙

三戸岡道夫

かすみは手紙を書き終えると、四つにたたんで封筒に入れた。

上書きの住所につづけて、

東海隆一様

と書くと、切手を貼った。

東海隆一というのは、かすみの母の勤めている会社の社長である。社長の名前と住所は、電話器の横にある、母の電話帳に書いてあることを、かすみは知っていた。そこから間違いのないように、一字、一字、写しとったのである。

小学校三年生の少女が、会社の社長という人物に直接手紙を書くなどということは、稀有なことであろう。もちろん、当のかすみにとっても、はじめてのことであった。

かすみは出来上った封書を机の上において、しばらく眺めていた。手紙を書き終るまでは無我夢中だったが、書き終って、こうして眺めていると、とうとうやってしまったという興奮と、本当にこの手紙を出してもいいのかという矛盾した気持が、交錯するのだった。

しかし、切手が貼られた封書は、もう一つの独立した生き物だった。郵便ポストの中へ投げ入れられて、社長の自宅への飛翔を、机の上で待機している一羽の鳥のようにかすみには思えた。

（お母さんに見つからないうちに、早くポストへ入れてしまおう）

壁の時計は、夕方の五時をちょっと廻ったばかりである。母が帰ってくるのは、もっとおそい。毎日、夜の八時か、九時である。

（あわてなくたって、時間はたっぷりあるわ）

かすみはピョンと椅子から下りると、机の前から離れた。そして、

「ちょっとポストまで行ってきまーす」

と、誰もいない家の中へ向って、わざと淋しさをまぎらわすように大きな声で言うと、封書を片手に外に出た。封筒をひらひらさせながら、ポストまで歩いた。ポストは、家から表通りに出て、すこし歩いたパン屋の横にある。

赤いポストへ手をのばす。封筒がかすみの指先から離れて、ポストの中へ落ちていったとき、

（これで本当に、社長さんの家へ行ってしまうのだ）

という実感で、かすみは軽い目まいのようなものを感じた。

一日おいて、次の日。

ユニオン食品株式会社の社長である東海隆一が家に帰ると、妻の頼子が、

「かわいい彼女から、ラブレターが来ているわよ」

と言った。食卓の上の、夕刊や手紙、ダイレクトメールなどの山積みの中に、幼い字で、東海隆一様と書かれた封書が混っていた。裏を返してみると、瀬川かすみとある。知らない名前であった。

「なんだ、子供の手紙じゃないか」

「だから、かわいい彼女と言ったでしょう」

隆一はちょっと奇妙な気持になって、まっ先にその手紙から封を切った。便箋が一枚入っていた。

わたしのお母さんはユニオン食品につとめています。おかあさんの帰りが毎日おそいので、わたしはさびしくてたまりません。どうか、お母さんが早く家へ帰るようにしてください。

おねがいします。

瀬川かすみ

東海隆一様

「ふーむ」

隆一は読み終ると、しばらく片手に手紙を持ったままの姿勢でいた。急に会社の中の社員たちの勤務状態が、隆一の頭を走馬燈のように走った。

「なんの手紙でしたの」

隆一はだまって手紙を、頼子へ渡した。

「かわいそうね、この女の子、毎日、毎日、夜おそくまでお母さんの帰りを待っているのね」

「うむ」

「よほど思いあまって手紙を書いたにちがいないわ」

「これだから、子供を持った女性は困るんだな。なんだ、かんだと、家庭のことを職場へ持ち込んでくる。使いにくいんだな。でも、遊びに来ているんだか、働きに来ているのかわからん若いギャルや、頼りにならない若い男なんかよりも、しっかりしたおばさんの方が役に立つからな。まあ、仕方がないか」

「どこの部署で働いている人なんです？」

「そんなことは、わからないよ。会社へ行って調べてみなければ」

「女性なのに、うんと残業させているんじゃありませんか」

「いや、そんなこともないとは思うがな。でも、たとえ会社を定時に帰ったとしても、通勤に一時間かかれば、家に着くのは六時すぎだ。ちょっと残業したり、途中で買物でもしていれば、すぐ七時、八時になってしまうだろう。小学校の女の子に、母親の帰りが待ちきれないのは、よくわかるな」

「会社で保育所でも造ってあげれば、お母さんたち、助かるのじゃありませんか」

「保育所だって…、馬鹿を言っちゃいけないよ。会社は慈善事業をやっているんじゃないんだよ。お母さんたちは助かっても、会社が助からんよ」

翌日。

東海隆一は会社へ出社すると、すぐ人事部長を呼び、

「こんなものが昨日来ておった」

と、件の手紙を見せた。

「ご自宅の方にでございますか」

「そうだ」

なにか、とんでもない投書でもあったのかと、人事部長の顔は一瞬、警戒心で緊張したが、それがたどたどしい子供の手紙だとわかると、ほっと表情をゆるめて、

「それにしても嫌ですね。こんな手紙をよこすなんて…。本当に子供だけの知恵ですかねえ」

「と、言うと…」

「母親が裏で糸を引いている、『やらせ』じゃないかと思いましてね」

「そんな嫌な女性なのか」

「いえ、別に本人を確認しているわけではありませんが……」

人事部長のところへは、いろんなトラブルが、いろんな形で舞いこんでくる。少女の手紙の裏をそんな眼で眺めるのも、人事部長というポストの職業上の悲しい習性なのかもしれなかった。

「この瀬川って女性は、どこの所属かな」

「子供の名前だけではよくわかりませんが、人事ファイルで調べれば、すぐわかります」

人事部長はいったん社長室から退室すると、一時間ほどして、再び社員台帳を片手に、社長室に姿を現わした。

「この女性です」

名前は瀬川寛子といって、三十五才。離婚している。小学校三年生の女児が一人あり、名前はかすみ。問題の手紙をよこした少女である。社員台帳の写真の瀬川寛子は、まじめそうな、普通の主婦といった顔である。

「社歴は？」

「はい、すでに三年になります。離婚してから、わが社に中途採用で入ってきました」
「勤務ぶりは、どうなのかな」
「はい、担当部署の責任者を呼んで聞きましたところ、よく仕事が出来、今の部署にはなくてはならない人間のようです。配送の記録係という特殊なポストなので、仕事が若干不規則な点もあり、ある程度の残業は、やむをえないと言っておりました」
「すると、さっきの子供を使った『やらせ』という線は、消えるな」
「あれは、わたしの早とちりでした」
だが、東海社長の方は、毎日、母の帰りを待ちわびている、いたいけな少女の訴えに、なにか応えてやらなければならないという思いに、しきりにかられていた。だが、それと同時に、もう一方の心で、
(たかが小学生の手紙ぐらいに、いちいち社長が対応するわけにもいかないではないか)
という、思いもするのである。まあ、当面は現場の責任者に任すほかはないだろうと、
「処置は君の方に任すから、よろしくやっておいてくれ」
「かしこまりました」
なにか、とんでもない指示がとび出してくるのではと怖れていた人事部長は、ほっと安堵の胸を撫ぜおろした。

(研究はしますが、実行はしませんよ)
という意志表示であった。

瀬川寛子の処置について、社長からは、
(君に任すから、よろしくやってくれ)
と言われたが、結局、人事部長は何の処置もしなかった。(よろしく)というのは、どの程度のことを指すのかわからないのだが、とにかく(任す)と言われたのだから、自分の判断に任せばよいのだと思った。彼女に今回のことを話したとしても、何の解決にもならないことを、人事部長はよく知っていたからである。
まず、手紙のことを伝えれば、必ず寛子は家へ帰って、
(なぜ、そんな手紙を出したの。お蔭でお母さんは、会社で恥をかいたわよ。三年生にもなって、お留守番ぐらいちゃんと出来ないの)
と、かすみを叱りつけるにきまっている。かえって、子供の心を傷つけるだけだろう。
瀬川寛子の仕事の方も、子供から手紙が来たぐらいで、特別扱いをすることも、実際のところ出来ない相談である。どうしてもということになれば、パートタイマーにでも切り替えるよりほかないだろうが、そんなことは会社が一方的にやるべきことではなくて、本人からの申し出があって、はじめて出来ることである。
せっかく社長にまで手紙を書いた少女にはかわいそうではあるか、静観するのが一番いい方法なのである。また、それしか方法がない。
残る問題は、保育所である。
(保育所か…。)
と、人事部長はため息をついた。保育所なんてことを、社長はどこで考えついたのであろうか。人事部長の胸の中へ、
(余分な仕事が一つふえたわい)
と、平穏な人事行政の中へ、波乱の一石を投じた小まっしゃくれた少女への、にがにがしい思いが、急速に拡まっていった。
(でも、考えていても、仕方がない。しばらく下の方で検討させておいて、様子を見ることにしようか)
老獪な人事部長は、静観したり、また様子を見たりすることも、重要な仕事の処理方法だということをよく知っていた。
(社長が研究しろ、と言っているのだから、研究だけしておいて、催促を受けたら、『はい、ご指示の通り研究しております』と言えるだけの態勢を、とりあえず作っておけばよいのだ)
人事部長は少女の手紙を、そのまま破ってしまおうかと思ったが、ふと気が変って、書類箱の一番底の方へすべりこませた。いつ、また、気まぐれな社長が、
(あの手紙を持ってこい)

「でも、考えてみると、若干の問題がないこともないな」
「はっ…!?」
人事部長はドキリとした。
「保育所のことぐらい一度研究してみたらどうかな」
「えっ、保育所ですか?」
「そうだ」
東海社長は昨日、妻の頼子に対しては、
(保育所を作れば、お母さんは助かるが、会社は助からん)
と、にべもなく答えたけれども、実はそのことが心の隅にずっと引っかかっていたのであった。
「保育所を会社の中に作るのですか?」
やはり社長はとんでもないことを言い出したと、人事部長は苦渋の表情を隠さなかった。
その人事部長の困惑した顔を見ていると、東海社長はすこし気の毒になって、
「いや、なにもすぐ保育所を作れと言っているのではない。研究だよ。勉強だ。こうしたことは今後いろいろと問題になってくるからな、この機会に少し研究してみたらどうかということだ」
「わかりました。よく研究いたしましょう」
人事部長は、研究というところにアクセントを置いて、そう言った。それは

などと言いかねない。その時のための用心である。
人事部長は課長の糸井を呼んだ。
「一つ、研究してほしいことがあるんだが」
「はい、何でしょうか」
「社長がね、保育所のことを研究してみろと言うんだよ」
「保育所をですか、はあ…」
あまり予想外の用件であったので、糸井課長は人事部長の真意がちょっと摑みかねて、
「社長は本気なんでしょうか」
「よくは、わからないね」
「話が馬鹿に急ですね。何かあったのでしょうか」
「それも、わからない」
人事部長は少女からの手紙のことを、課長の方へは喋らなかった。下手な尾ひれがついて噂が拡がると、人事部長のコントロールがやりにくくなる。しばらくは、社長と人事部長二人だけの秘密事項にしておいた方が、事が処しやすいと判断したのである。
「とにかく、社長が研究しろと言うのだ。先見性のある社長のことだから、先をいろいろ考えているのじゃないのかな。だから、すぐやれというのではない。研究して、レポートにでも纏めてくれれば、それでいいんだよ」
糸井課長は人事部の中から五人ばかりメンバーを選定すると、直ちに研究チームを発足させた。
戸野係長がリーダーになり、あとの四人は人事部の若手のスタッフである。糸井課長がリーダーにならなかったのは、課長が最初からメンバーに入ると、全体が課長の意見に引きずられる危険があったからである。上の意向がはっきりしない時点では、自分は入らない方が安全だと判断したわけである。
やがて、第一回目の打合会が開かれたが、賛成論、反対論、意見はまちまちで、簡単には結論が出なかった。が、大勢からいうと、反対論の方が強かったといえようか。戸野係長を含めた三人が反対論者で、他の二人が賛成論者であった。
反対論者が主張の拠り所とするのは、保育所は個人の問題だということで、
「誰にだって、いろんな問題があるよ。子供だけではなく、寝たきり老人や、病人を抱えている人もいるだろうし、また、離婚して、男手で子供を育てている人もいる。独身者だってさ、失恋しちゃっている人とか、結婚したくても出来ない奴とか、同棲している人とか、いっぱい問題を抱えているよ。それでも、なんとかそれを解決しながら、会社へ来ているんだ。そんなもの、全部会社へ持ちこまれたら、会社はどうなるんだ。みんな個人の問題じゃないか。会社は仕事をするところだよ。すこし、甘ったれだと思うな」
「それはそうだけれど、子供だけは特別と考えるべきじゃないのかな。まだ一人立ちできない、大人が保護してやらなきゃならない人間だ。個人的事情だといえば、たしかにそうだが、子供だけはやはり特別だと思うがなあ」
「それなら、寝たきり老人だって、同じじゃないか。子供に保育所を作るのなら、寝たきり老人ホームも会社の中へ作らなきゃならない。そんなこと、ナンセンスだよ」
「子供と老人とは違うと思うな」
「同じだよ」
「違うよ」
「それに、保育所作るといったって、どこへ作るのさ。もしも、会社の建物の中へでも作ってみろよ、朝から晩まで、ギャーギャー、バタバタ、子供が廊下や階段を走りまわって、会社の中がおかしくなる」
「そうだ、われわれのロッカー室や、食堂さえ、満足にないっていうのに、保育所なんて作る余裕があったら、働いているわれわれの、ロッカーや食堂を作ってほしいね」
「作る場所がなければ、別に場所を借りればいいじゃない。」
「えーっ、別に場所を借りるんだって？　君、それを本気で言っているのかい。高い保証金を積んで、高い家賃を払って、そこで子供を遊ばせる、そんな非効率なことが、今のご時世に許されると思っているのかい。わが社はいま、節約、節約で、コピー用紙一枚、ボールペン一本、トイレの電灯消しだってうるさいんだ。現実性がないよなあ」
すると、一番若い丸田という社員が、
「今までの意見はどれも、もっともな意見ですが、ちょっと見方が近視眼的ではないかと思います。収益至上主義を追及してきたバブル経済がはじけ、いま企業は社会的責任というものが求められています。そういう観点から、大きく企業のあり方を考える必要があるのではないかと思います」
「社会的責任というと、ボランティア活動とか、メセナなどの文化活動だろう。それなら、いま、企画部の方で、映画会社とタイアップして映画を作ったり、チャリティ・コンサートをやるとか、いろいろ計画しているよ」
「それも結構だと思います。しかし、わたしが思うのに、本当の企業の社会的責任とは……」
「おい、おい、あまり難しいことを言わないでくれよ」
「……映画を作ったり、コンサートを開いたりすることではなくて、企業自身が社会性のある企業経営をしていくことではないかと思います」
「へーっ、哲学的だね」
「ですから、社内に保育所を作って、お母さんたちが心配なく働ける会社、小さな子供たちが安心していられ

る会社、そういう会社になることの方が、映画を作ったり、コンサートを開いたりすることよりも、社会的責任を果すことになると思いますね」

「うーん、大きな考え方としては、たしかにそうかもしれないがね。でも、君のは理想論だよ」

「企業にだって理想が必要じゃありませんか。これはわが社だけの問題ではありません。たとえば、自動車メーカーはただ自動車を作るだけで、毎年大勢の子供が車にひかれて死んでいても、知らん顔ですね。これなど自動車メーカーの、社会的責任の放棄だと思います。バイクを作る会社だって、暴走族で住民が困っていようと、われ関せずです。どうやったら音の出ないバイクを作れるのか、それがバイク会社の社会的責任じゃありませんか。食品会社だって、映画会社と提携して映画を作るよりも、人体に有害な添加物をいかに入れない食品を作るか、それを研究する、それが社会的責任ですよ。そうした、企業が果さなければならない行動を放棄しての映画作りなんて、誤魔化しですね」

「でも、企業はまず、儲けなくちゃならないよ。赤字決算にならないようにと、毎日、毎日、血眼になって働いているわれわれにとっては、とてもそんな大局的な立場に立った社会的責任などを、考える余裕はないね」

とにかく結論など、直ちに出せる雰囲気ではなかった。なにせ、戸野係長は結婚していても子供はなく、あとの四人は独身である。家庭も子供もない連中が集まって、わいわい、保育所のことを議論しているのだから、働く母親や子供の立場に立った発言など、一言も出ようはずがない。すべて一般論、観念論で、どうしようもない感じだった。しかし、議論している本人たちは、そんなことに少しも気づかず、みんな真剣そのものなのであった。

リーダーの戸野も困ってしまって、

「とにかく、この問題は大きな問題で、一朝一夕に結論は出ないと思う。今日はとりあえず、問題提起という段階にとどめて、一応これで閉会にしたいと思います。なお、今後は毎月一回程度、定期的にミーティングを開いて、議論を煮つめていきたいと思います」

こうして、とにかく第一回の打合会が開かれたという実績だけが、リーダーの戸野から人事課長へ、課長から人事部長へ、そして人事部長から東海社長へ報告され、報告を受けた東海社長は、深々とした椅子に埋まるように座りながら、

「ふむ、ふむ」

と、満足そうにうなづいていた。

かすみは毎日、学校から帰ると、まっ先に郵便受けを見にいった。社長さんからの返事が来ているかもしれない、という期待感で胸がいっぱいだ。

（もし、返事がくるとしたら、どんな返事がくるだろう）

そう、かすみは時々空想した。すると、心が明るくなった。もし、やさしい社長さんならば、

（これからはお母さんが早く家へ帰れるようにしましたから、もう、かすみちゃんは淋しくはありませんよ）

というような手紙がくるかもしれない。だが、

（社長さんっていうのは偉い人だから、かすみのところへなど、返事なんてこないかもしれないな）

とも心配した。でも、たとえ返事は来なくても、お母さんはいつかきっと家へ早く帰ってくるようになるにちがいないと、かすみは期待していた。そうなった時、お母さんはきっと、

（かすみちゃんのおかげで、お母さん、早く帰れるようになったわ。ありがとう）

と、ほめてくれるにちがいない。

しかし、いつまでたっても、社長さんからの返事はこなかったし、お母さんの帰りも早くならなかった。

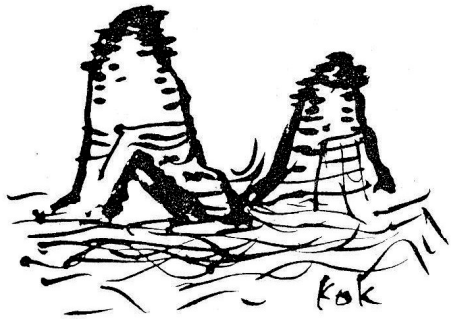
（どうしたのだろう）

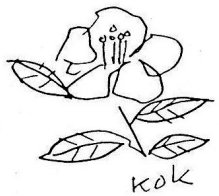
日がたつにつれて、かすみの期待は少しずつ色あせ、なにか悲しいような気持になっていった。

それでもかすみは、毎日、毎日、学校から帰ると、郵便受けを見にいくことをやめなかった。そして、郵便受けの底を手でさぐりながら、

（早く来い、返事よ、来ーい）

と、歌うように叫ぶのだった。





「記念品」ほか六編

青木昭成

記念品

いまさら面映ゆくもあるのだが
思えば　二人で三十五年間
きみはいつも五歳の年下で
とうとう還暦の日を迎えたね
でも百歳まで　まだ四十年がある
つまり　ぼくにも三十五年がある
記念品は革の
マルチ・リュックにしたよ
息子たちを呼ぶのは何時にしようか

こおろぎ

けれど　わたしは背中いっぱい
気がるに翅の暗色をふるわせて
鳴いてみたいのです
この繊弱が失われないうちに

人々はふくみ嗤いするかもしれません
けれど今　町のアスファルトの下には
もう　どんな小さな旋律も
波動するすき間も見あたりません

いっとき　沈黙が人々の部屋をよぎるとき
わたしは化身して
竜胆の蕾のような灯かりの外がわで
たとえ倒れて　発見されたとしても
満足なのです

柿

あおい空の
向こう側について語る　おまえの
肌のいろを手にしていると
わたしは
無邪気な昔にかえってしまう

造物主のへらの痕が
おまえには
今も　つむりに残っていて
わたしの掌は
近いけれど遠い月日をのせている

噂

暮らしむきについて噂するとき
人と　人々のまるい肩のあたりが
わずかに倦怠の色にそまる

あの陸橋の空につきる街道を
あなたはまっしぐらに駆け　すると
あなたの動静を確かめるよりも迅く
つむじが捲きのこり

やがて噂のかげに誰も居ないことに
ふと気づくと　人々は放心し
きまって凪いだ街に散ってゆく

手がみ

ながい手がみを
書きつづる　夜ごと
明かりが封をする
あわてて闇が
てなれたスタンプを
捺してしまう

それで　みんなおしまい
わたしはポストへ投げこまない
恋びとが絵はがきに
のぞみを託すようには
隣人が気がるに
えしゃくを返すようには
ただこの無量に耐えて

その手がみをやぶる
文字をゆびに
言葉を爪にきしませ
その手がみを
ひき裂く　夜ごと
言い訳はしないゆえ

悲鳴

それは薄暮の街から沸きあがる
いきなりわたしの襟首をつかむ
そんな不作法な音響だよ　サイレンは

かわいた波動はたちまち拡散し
そこだけが破れている空の
ほそい月影がわたしの眉間を狙う

この予感は剝がれかけたポスター
その危惧は路上のはいせつ物
わたしの躰が均衡をうしなう理由はないのに

ただ　真空の闇が交差点のうえにある
その辺りを威圧しながら救急車が
ウインカーを座標のように点滅しはじめる

ながい坂道をのぼりつめて去ってゆく
そんなにも死にいそぐ者がどこかにいて
どこか思惟ののそとへ逃れようと言うのか

「生きることは正義」と呟きながら
わたしの躰のうちがわで悲鳴もなく
また一つ形のくずれ落ちるものがある

消費

一枚目のカードはみょうに明るく
二枚目のカードはややいかめしく
三枚目のカードは酷くかまびすしい
と胸のポケットを押さえながら
わたしは何か　支払いの約束をしたろうか

わたしは「欲しい」と思う
するとカードがもう選んでくれている
ジャン・パトーのジャケットを
わたしは「まずい」と思う
けれどカードがもう探しあてている

ドルトンとかマイセンとか
しかし実は　わたしが確約したろうか

その時わたしは傾いて船上にいる
ずっと紺碧に染まりきれないで
その時わたしは華やいて機上にいる
もはやおのれの体重をも感じられないで
旅はすでに　旅のあいだじゅう
わたしに支払いを督促していた

そうだ　今日を昨日から切り離そう
それにしてもどうして　この悔恨なのか
そうだ　今日を明日と隔ててみよう
それにしてもなぜ　この未知の焦りなのか
つぎつぎに胸のポケットから溢れ出て

指の間から音もなく洩れるカードたちよ
消えようとするお前たちを呼び止めて
その一瞬になぜ凝縮してしまうのか
わたしの消費よ　再び戻ることのない時よ
相手をからかう猫の眼のように移り気な
いつわりのカタルシスよ

社告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、別に月報「まんじだより」をお届けし合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ、交流を行なっております。

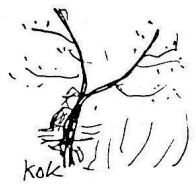
＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　東京二一九〇八一五

加入者名　作家群研編集部

前橋公園殺人事件（三）

佐々木一郎



七

群馬県庁は、元の前橋城（旧名厩橋城）本丸内にある。天正十八年、徳川家康は、江戸城に入ると、厩橋城主に、譜代の臣平岩親吉を封じた。そののち、酒井氏が約百五十年間この地を支配し、寛延三年以降は、松平氏の所領となって幕末を迎えた。前橋市が群馬県の県庁所在地となってからは、――昭和初年に新庁舎が完成するまでは――この旧松平氏館が庁舎に使用されていた。明治維新の城取り壊わしで、前橋城の原型はほとんど消失したが、この本丸跡と呼ばれる藩主松平氏館を取り囲む四角い石垣だけが、そのまま当時の面影を残している。

なかでも、西北方の石垣には、市街地に面していない裏側のせいか、比較的昔の面影が残されており、その上には、樹齢数百年の赤松の並木が続いている。

上田警部補と蛭田部長刑事は、その斜面の芝生の上に腰を下ろして、ひとときの、秋日和を楽しんでいた。正面には、榛名連山がくっきりと姿を見せ、すぐ前方の利根の川原からは、せせらぎの音が聞こえてくる。

「警部補。そろそろこの事件も締めくくらなくちゃなりませんなあ」

蛭田が、ポツンと言った。

やや面長な柔和な顔だが、目だけはキラッと光っている。彼は、かって県警勤務のころ、足を撃たれて犯人を取り逃がした失策を恥じて、その後何回も訪れた昇進の機会をすべて断り、退職間際の現在も、部長刑事の職に甘んじている頑固一徹な名物刑事である。

「ハハハハ。本部長にも言われましたよ。早く、まとまった捜査結果を出せってね」

「琴野田奥次郎の死亡事件と、蛎沢浩殺人事件がつながったとなると、結局は、われわれふたりが専従捜査の中心にならざるをえませんからな」

「どうかね。部長刑事さん。このあたりで、ふたりだけで、今までの出来事をまとめてみますか」

上田警部補が、言った。上田は三十二才。来春にも警部昇進が約束されているエリート警察官である。がっちりした体格にも似ず、甘いマスクをもっている。

「そうですな……。そうすると、

まず、今年の三月中旬、午前六時ごろ、前橋公園『さちの池』の『平和の女神像』の前で、ひとりの老人が倒れているのが発見された。これが始まりですな……。

老人の名前は、琴野田奥次郎（六十五才）。公園近くの琴野田産婦人科医院院長で、死因は、心筋梗塞の発作による普通の病死と診断された。つまり、事件とはみなされませんでした」

「そうだった。それを、チョウさんが、そこに残された足跡に疑問をもって、捜査の必要があると言い出したわけだ。しかし、僕も、あのときは、驚きましたよ。鑑定した結果、実際に、何者かが、琴野田と対峙して立ち去ったことがわかったんだからねえ」

「いや、署長のお陰ですよ。わたしの考えを取り上げてくれたんですから……。それと、足跡にかけては全国一、二といわれる県警の鑑識さんのお陰かなあ」

蛭田の提案に注目した前橋署長は、かつて県警刑事部長時代の部下だった現捜査課長にも声をかけたので、県警捜査課からも、蛭田部長刑事と親しい上田警部補を出してきた。もちろん、琴野田奥次郎の死は病死と診断されていたので、「捜査本部」を設けることはできず、上田と蛭田は、とりあえず、非公式に、この事件の専従を命じられた。

その結果、琴野田奥次郎の前にたたずんだ人物は、蛎沢種苗株式会社社長蛎沢黎吉女婿浩と判明し、また、その帰途、東照宮社横の坂ですれ違った宇都木晃の記憶を催眠面接で引き出したところ、浩は、（琴野田奥次郎に対して）「あの、悪魔め」とか「恐ろしい男だ」と毒づいていたことがわかった。

「そして、九月なかばには、その蛎沢浩が殺害されるという事件が起こりました。今度は、前橋署内に捜査本部が設けられ、署長が本部長に就任し、われわれも、晴れて、正式な専従捜査員に加えられた」

「そうでしたね。考えてみると、この六か月間では、随分、いろいろな人に助けてもらいましたよ」

言いながら、上田は、思わず頬をゆるめた。幼なじみの小奴、蛎沢社長秘書の幸子、心理学者の江口たちは、心から捜査に協力してくれた。

「捜査本部が発足して本格的に捜査が進むと、意外にも、琴野田奥次郎の影が大きく浮かび上がりました。いや、琴野田というよりも、彼の『ＡＩＤ』（非配偶者間人工授精）研究が、このふたつの事件の遠因になっていることに気がついたわけです。

しかも、驚いたことに、極秘理に入手した彼の研究論

文には、被験者名簿に、重要関係者としてマークしていた蛎沢洋子、琴野田真弓の名が含まれていました。
ここで初めて、われわれは、この事件の正しい方向に足を踏み出すことができた……。
まあ、ざっと、こんなところでしょうかね？」
「うん、そんなところでしょう。
さてそこで、次に、われわれは何をなすべきか、となるんだが……」
上田は、しばらく、瞑目していたが
「チョウさん。大体この四つかな。
一つは、前橋公園で、蛎沢浩は、琴野田奥次郎に何をしたのか、または、なにを話したのか。
二つ目は、蛎沢洋子の人工授精手術は、〈ＡＩＨ〉（配偶者間人工授精）だったのか、それとも、〈ＡＩＤ〉だったのか。彼は、論文には〈ＡＩＤ〉と書きながら、夫妻には〈ＡＩＨ〉と告げている。
三つ目は、琴野田は、なぜ、真弓に〈ＡＩＤ〉手術を施したのか。真弓は、正常分娩する能力があるのにです。
四つ目は、蛎沢浩は、なぜ殺されなければならなかったか。そして、犯人はだれなのか。
いずれにせよ、浩殺害の犯人は、この関係者の中にいると、僕は思っている」
蛭田部長刑事は、一々、うなづいた。しかし、その視線は、利根川の河川敷の堤の上に咲き乱れている菊の群れに、ついつい注がれがちになる。
「ところで、チョウさん。琴野田家というのは、先祖代々の医者だそうじゃないですか？」
突然、話題を変えられて、蛭田は、うろたえたが、
「はあ、先祖代々というほどでもありませんが、奥次郎の祖父の元庵というひとが、前橋藩御殿医の門弟でしてね。ご一新後、開業したんですな。これが、初代です。二代目、つまり、彼のおやじなんかは、名医というか、良医というのか、たいそう評判のいい医者だったそうですよ」
「奥次郎は、頭が良かったらしいね」
「いや、むしろ良すぎたんじゃありませんか？　なにしろ、Ｋ医大をトップで卒業して、すぐ研究室に残り、助手、講師、助教授、そしてイギリス留学と、トントン拍子の出世ですからね……。このイギリス留学が、この男の、人工授精研究を深めていくことになったみたいですな」
「それに、母校のＫ大医学部は、全国でも有名な人工授精研究で知られた学部とくればね……」
「父親の後を継ぐため、途中で大学をやめて、産婦人科医院を経営するかたわら、彼は、母校と提携して人工授精の研究を続けた。そして、いつの間にか、他人の精子を使う〈ＡＩＤ〉研究にのめりこんでいった」
「息子の真一郎の尊大な態度をどう思いますか？」

「ああ、あれは、一種の田舎医者のスタイルなんですな。それに、父親が偉すぎて、小さいころから、口答えひとつできない環境で育ったから、逆に、ああなったとも考えられますしね……。ただ、何かにカッとなると、前後の見境がなくなる癇癪もちなのは確かです。例の、遊園地で蛎沢浩に噛みついた件なんか、まさに、その現れですよ」
何のためらいもなく語る蛭田の顔をじっと眺めていた上田は、少し首をかしげると、
「うーん。それだけでしょうかねえ？　いいですか。チョウさん。あのシーンは、真弓は、ひとりだけで、浩と会っていたわけではありませんよ。ふたりの子供を両手にぶら下げて、立ち話をしていたに過ぎないんですよ。それも、白昼、大勢のひとの目のある遊園地で……。
それを、激高して罵詈雑言を浴びせるなんてのは、どうも僕には、ただの癇癪とは思えないんですがねえ」
「……なるほど。そういえば、そうですな」
「あ、そうだ！　真一郎の長女久美子は、人工授精児でしたね。つまり、彼の実の子ではなかった」
「ハハハハ。警部補。だから、真一郎は、久美子は浩の子じゃないかと疑って、嫉妬して暴れたと言いたいんでしょう？　だめだめ。その推理はだめですよ。第一、奥次郎は、例えわが子真一郎であっても、ドナー（精子提供者）の秘密なんか漏らすものですか！」

八

いつの間にか、からっ風の季節になっていた。冬季、大陸から吹く季節風が、日本海岸や上信国境には雪を降らせ、内陸部には猛烈に乾いた冷たい風を送り込んでくる。この風が、からっ風である。なかでも、前橋市周辺の風は、「赤城颪」と呼ばれて、特に、厳しいことで知られている。
捜査会議の司会者、「広瀬川殺人事件捜査本部」副主任横谷警部補は、いつものように、捜査が最終段階に差しかかってきた際の緊張感の中で、窓外の、今にも折れそうなほどたわんでいる木々の枝を横目に見ながら、会議を進めていった。
「……蛎沢浩・洋子夫妻は、夫人の輸卵管障害が原因で、子宝に恵まれなかった。そこで、琴野田医師に依頼して、人工授精の手術を受けた。もちろん、精子提供者は、夫の浩。いわゆる、〈ＡＩＨ〉手術だ。
そして、生まれたのが明だが、一家の努力で、この秘密は、親戚知人にもまったく漏れることなく、平和な生活が続いていた。
ところが、われわれは、今回の事件を契機として、大変なことに気がついた。
それは、琴野田奥次郎が、『世界ＡＩＤ研究協会』に提出した論文に、蛎沢夫妻のケースを、何と、〈ＡＩＤ

∨として記載していたことだ。もし、それが事実とすれば、琴野田は、他人の精子を使用した∧ＡＩＤ∨手術を施しておきながら、浩の精子を使ったと、夫妻を欺いていたことになる。今日は、このあたりから、やろう」

上田警部補が、勢いよく立ち上がった。

「僕は、蛎沢夫妻の人工授精手術は、間違いなく、∧ＡＩＨ∨ではなくて、∧ＡＩＤ∨だったと思います。つまり、琴野田は、『世界ＡＩＤ研究協会』に提出する論文の実験例を補充するために、夫妻を犠牲にしたのです」

「上田さん。蛎沢浩夫妻は、そのことに気がついているの？」

宝生警部がたずねた。今回の捜査員の中には紅二点が加わっている。この宝生警部と早野刑事である。

「はい、父親の名はわからないとしても、浩ではないと感じていたと思います。例えば、明の顔付きが、浩に全然似ていないとか……」

「あら、親に似ていない子はいくらでもいるでしょう。それこそ、先祖代々の血が混じるのだから」

宝生警部が言った。髪の毛に少し白いものが交じり始めたが、背のすらっとした理知的な顔付きの女性である。

「はあ、それはそうですが……。しかし、あの憎み方は普通じゃありませんよ。浩が東照宮横の坂で、『あの悪魔め』と罵ったり、黎吉氏が、『あの悪魔のような性格』などと言ったことをみても、あの一家は、琴野田の言ったことを信じてはいないと思いますね」

「血液型は、どうなんですの？」

今度は、早野刑事がたずねた。彼女は、まだ若い。大学では「分子生理学」を専攻してきたという。

「うん、その点だがね。明の血液型は、母親の洋子と同じＡ型だ。だから、残念ながら、父親が違うという決め手にはならない。また、あの抜け目のない奥次郎のことだから、多分、浩と同じ血液型のドナーを採用した可能性があるな……」

「おい、上田君。それじゃあ、証拠はないってことになるじゃないか。そうなると、ほんとうに、∧ＡＩＨ∨だったかも知れんし、蛎沢一家の恨みも、とんだ筋違いだったってことになりかねないぜ！」

髭の奈良島警部補が言った。彼は、柔道五段、剣道六段の前橋署きっての猛者だが、体に似合わず、いつも論理的で、慎重な考え方をする。上田とは、警察学校の同期生である。

「自分も、同意見であります。琴野田が蛎沢夫妻をだましたと決めつけるのは、早計だと思います」

田部井刑事の声だった。相変わらず元気一杯だ。

「チョウさん」

上田は、思わず、隣の蛭田部長刑事の顔を見た。

蛭田は、大きくうなづくと、おもむろに立ち上がった。

「奈良島さん。今、上田警部補が申し上げたのは、結

論ではないんです。琴野田の提出した論文の信憑性を論じるために、仮説を提供しただけなんですよ。ですから、これをたたき台にして、いろいろとご意見をいただきたいんですよ」

「うん、そりゃあ、まあね。しかし、それを論ずるには、あまりにも証拠が少ないと思わないか」

「……」

このとき、中央で腕を組んで黙って話を聞いていた吉岡捜査主任が口を開いた。

「上田君。わたしも、奈良島君の説に賛成だ。君は、小奴が生前の琴野田から『蛎沢洋子には∧ＡＩＨ∨手術を施した』と聞いたと言ったね？」

「はい」

「そして、極秘に入手した論文では、蛎沢洋子には∧ＡＩＤ∨手術が行われたことを知った。しかし、どちらも、君自身の目で確認していない点では同じだ。つまりフィフティフィフティだ」

「いえ、僕は、この二つの価値には、天地ほどの差があると思いますが……」

「君。問題は、証拠だよ。琴野田が死んでしまった今になっては、証拠だけがものを言うんだ」

吉岡警部は、県警から派遣されて、この捜査主任に就任している。県警捜査課では、上田の上司である。

このとき、吉永刑事が、大きな声で言った。

「主任。琴野田医院に家宅捜査はできないのですか？」

「えっ？　うーん。それができればねえ……」

「だめですか？」

「だめだね。この程度の状況証拠じゃ、裁判所は、家宅捜査令状を発行してくれないんだ。第一、彼が、証拠になるようなカルテやメモを保存しているかどうかも疑問だしね」

「真一郎が、持っているんじゃありませんか？」

これには、上田が、手を振った。

「とんでもない。あの仲の悪い親子の間で、奥次郎が、大切な資料を真一郎に預けるわけがない。それに、そのことについては、僕とチョウさんで散々真一郎を問いただしたし、奈良島警部補も尋問したし……」

「あら、あたしも、早野刑事と出掛けましたよ」

宝生警部が言った。

「そうでした。これだけ責めてみても、まったく、言質が取れなかったのだから、僕は、多分、真一郎は何も知らないのだと思うな。第一、彼は、人工授精手術にはまったく興味を示していないしね」

「だって、真弓夫人のことだってあるでしょう？」

吉永刑事は、なかなか引き下がらない。

「もちろん、彼も、その記録がほしくて、奥次郎の書斎を何度も探しているんだよ」

「蛎沢家の方も難航しているんですよ……」

鳴海刑事が、元気のない声を出した。
「名家だけに、家の恥を晒したくないっていう気持ちなんだろうなあ」
その方面を受け持っているヴェテランの亘部長刑事がしみじみと言った。
「じゃあ、思い切って、しょっぴいてきて、泥をはかせたらいいじゃないですか！」
「おいおい、田部井君。乱暴なことを言うなよ。君は、このところ、マル暴の仕事が続いて気が荒くなっているようだが、この事件では、それができないんだ」
吉岡主任が、びっくりしたように、言った。
「じゃ、任意でご同行願って、ていねいにお聞きするのでは？」
「それが、だめなのよ。田部井刑事」
宝生警部が、ため息まじりで言った。
「何回出掛けて行って尋問しても、絶対に口を割らないの。あれ以上やれば、まさ子夫人なんか、間違いなく、自殺してしまうわね」
「……」
ちょっと一座が静まり返ったとき、上田が
「主任。十日ほどの猶予をくれませんか。その間に、蛭田部長刑事とふたりで、証拠を集めてみます」
何か、心に決したような言い方をした。このとき、強い風が吹き付けたと見えて、窓がガタガタと鳴った。

小休止になって、コーヒーが配られ、室内がようやく和やかな雰囲気が漂い出した。
「話が少し横道にそれてもいい？　横谷警部補」
宝生警部が発言を求めた。
「はい、どんなことでしょう？」
「この論文によると、琴野田は、実の息子の嫁の真弓にまで〈ＡＩＤ〉を強制しているのね。これは、なぜなの？」
「さあ、確認はしてありませんが、さっきから出ているように、論文に載せる実践例の数が足りなかったからじゃありませんか。切羽詰まって自分の身内で埋めたんじゃありませんか？」
「横谷警部補。そのお言葉には、納得できませんわ」
突然、早野刑事が、抗議した。彼女の顔は紅潮していて、目は、横谷をにらんでいる。
「蛎沢洋子の場合は、夫浩の精子を使うということで安心して手術を受けたのだと思います。例え、それが、琴野田奥次郎の悪質な罠であったとしても……。
それに引き換え、真弓の方は、初めから〈ＡＩＤ〉とわかっていながら、手術を受けさせられたのですわ。しかも、健全な精子を所有している夫真一郎がそばにいながら……。

警部補は、さっき、『身内だから』とおっしゃいましたが、これは、明らかに、夫真一郎の怒りの方ばかりを重視して、妻の苦しみの方を軽く見た、まさに女性蔑視の発言ですわ！」
彼女は、義父の犠牲になって、見も知らぬ男の子供を産まなければならなかった哀れな真弓の立場に同情して、心の底から憤っているようだった。
意外な反撃に驚いた横谷は、
「いや、早野君。それは、誤解だよ……。真一郎の怒りを強く取り上げたのは、彼が、前橋公園で浩に乱暴を働いたことと、何よりも、浩殺害事件の真犯人の疑いが強いからなんだよ」
横谷が、もう大分薄くなった頭を振るようにして、なだめている様子がおかしかったのか、場内にクスリという笑いが起きた。
「横谷さん。真弓夫婦のことも釈然としないけれど、もうひとつ、琴野田奥次郎のやり方も気に入らないねえ」
ヴェテランの神保部長刑事が、言い出した。彼は、刑事コロンボのように、いつもよれよれのコートを着て、コツコツと歩き回って捜査にあたるタイプの、中年の刑事である。
「え、どんなことが？」
「いくら、琴野田が狂信的な研究者だからって、たかが論文をまとめるぐらいのことで、洋子をだましてＡＩＤの手術をしたり、正常な体の真弓に施術をしたりするものかねえ。どうも、あたしは、そのところが気にくわない。何か裏があるような気がしてならないんだよ」
「……」
「何か、奴には、研究目的以外のねらいがあるんじゃないのかい？」
「それは何だい？」
「さあ、そいつは、あたしにも、わからない。長年のカンさ」
「ふーむ」
横谷がうなったのは、この神保のカンの鋭さが、署内でも群を抜いているからだった。彼は、また、神保の予言どおりに、思いがけない場面が展開する光景が脳裏をチラッと過って、ちょっと、体が竦んだ。
大時計が三時を指したのに気づき、あわてて、話題を転換しようとしたとき、それを制して、本部長が立ち上がった。
「つぎの議題に移る前に、ひとこと言っておく。特に、上田君。君は、琴野田奥次郎の犯罪行為を、主観的だとか、フィフティフィフティだとか言われて、大分しょげているようだが、要するに、証拠の不備を指摘されているんだよ……。なあに、内心では、儂をはじめ全員が、君の説に賛成しているんだ。しかし、証拠がない限り、もろ手を挙げて賛成することはできないってことを

言っているんだ。
君は、さっき、十日間で証拠を集めると宣言したが、期間なんかは延びてもいいんだ。それよりも、必ず、証拠を暴いて、この、目に見えない、巨大で邪悪な犯罪行為を叩き潰してもらいたい。
あ、それから、老婆心までに言っておくが、今日の様子では、もう少し体外授精の知識があった方がよいと思う。極秘の仕事だから、監察医の飯島先生のところへでも聞きに行ってみるのもいいのじゃないか。
以上だ。さあ、横谷警部補。進行してくれたまえ」

九

数日後、上田、蛭田の姿が、上毛医科大学のキャンパスに、現れた。ふたりは、県警監察医飯島幸三郎教授を訪ねてきたのだった。
飯島は、研究室に残っている学生たちを外に出して、ふたりを、応接間の方へ、請じ入れた。
「どうしたね？　お歴々が揃って……」
あいかわらず、気さくな調子でたずねた。彼は、大学院を東京とニューヨークで過ごした以外は、群馬生まれの群馬育ち、上州っ子である。そのためか、捜査員たちに、ひどく、受けがいい。
「じつは、人工授精のことをお聞きしに来たんです」
「えっ、人工授精だって？　おいおい、チョウさん。
「なるほど、そういうわけか……。よし、わかった。どうせ、極秘に調査しなければならないので、ぼくに白羽の矢を立てたのだろうが、そのかわり、サワリだけで勘弁してもらうよ」
前置きをしてから、飯島は、一九七八年七月、イギリスで、世界初の試験管ベビーのルイーズちゃんが誕生した経緯を語った。
「きみたちも、新聞で読んだんじゃないの？　チョウさんなんか……」
「ええ、読んだ記憶があります」
「日本の場合は、一部の者だけが騒いで、一般は無関心だったけど、世界では、各界で、大反響を巻き起こした。子宝に恵まれないひとに、福音を与えたことは事実だけれど、その反面、安全性、倫理性ということで、反対する意見が、続出したんだ」
「ルイーズちゃんの場合は、どうだったんですか？」
独身の上田が、関心を示した。
「母親が、輸卵管障害で、回復の見込みがなかったんだ。そこで、母親から卵子を、父親から精子を取り出して、授精させたんだ。もう少し具体的にいうと、母親の下腹部を切開して卵子を取り出し、弱アルカリ性の培養液に浸し、四十八時間で受精可能になったのを確かめてから、オナニーによって採取した父親の精子を二、三時間培養液につけて、ある割合でシャーレ中の卵子に注ぐ

ぼくは、法医学が専門なんだよ。お産のことなら、産婦人科だ」
「この間、先生に、司法解剖してもらった変死体なんですがね。どうも、これが……」
「まさか、人工授精児だなんてのじゃあるまいね？」
「それが、その親なんです」
「うーん。あっ、彼は、たしか、『蛎沢種苗』の娘婿の浩君だったな。そうだったのか……。おしうとめさんは、元ミス・前橋のまさ子さんだ」
「よくご存じですね？」
「きみ、ぼくらの年代で、まさ子さんを知らない者はいないよ。とにかく、美しいひとだった……。だから、一度に、七人も八人もの男性からプロポーズを受けたんだ。そして、最後に勝ち残ったのが、秀才の誉れの高い青年医師と、眉目秀麗な青年実業家だった」
「失礼ですが、先生も、立候補されたんですか？」
今度は、上田警部補がたずねた。大分、興味をそそられたらしい。
「いやいや、ぼくなんか、外野席さ……。そして、まさ子さんは、めでたく、蛎沢種苗株式会社副社長黎吉氏のもとに輿入れした」
「先生。その黎吉氏の婿養子浩氏の殺害犯人捜しには、どうしても、人工授精の知識が必要なんです」
ふたたび、蛭田部長刑事が、かきくどいた。
んだ。そして、二日後、受精卵を、母親の子宮内に戻したんだ。そして、予定日には、帝王切開で、出産したということだ」
「一回で、成功したのですか？」
「いやいや、そうではなかったらしい。少なくとも数回は、母親のミズリー夫人は、苦しみにたえたようだ。そのうえ、この成功までには、四百回も実験を繰り返したというのだから、恐ろしいくらいの犠牲があったわけだ。それから、この場合の、奇形児の発生率だが、ぼくのような門外漢にはよくわからないけれど、正常分娩と比較すると、いくぶん、高くなっているらしいね」
「こわいようですね」
上田も蛭田も、こわばった顔で聞いている。
「しかし、実際に、人工授精が騒がれ出したのは、ＡＩＤ〉が実施されてからなんだよ。
この実施が発表されると、喧々囂々たる議論が巻き起こったんだ。夫が、無精子症なのに、どうしても子宝が欲しいということになれば、他人の精子を使用するきり方法がないんだが、そのためには、よほどしっかりと夫婦間の了解が成立していないと、のちのち、大きな災いを残す恐れがあるからね」
「しかし、どんな対策を講じても、女房が、知らない男のこどもを産むんですからね。穏やかじゃありませんよ……」

蛭田が抗議するようにつぶやくと、上田も
「万一、承諾のうえの出産にしても、平穏なのは、赤ん坊のときだけですよ。すぐ、顔が似てないとか、血液型が違うとか、そのうちには、財産をわけるのが惜しくなってきたりして……」
「いやね。ローマ法王も反対したそうだよ。配偶者間で生むのでなければ、不道徳だって……」
飯島は、上田の真剣な顔に、ほほ笑みながら言った。
「そりゃそうでしょう。宗教家からみれば、これは、明らかに、姦通ですよ」
「人工授精児の側からみても、ずいぶん、迷惑な話だと思いますね。成人してから、自分の父親は、いまの父親ではなくて、ほんとうは、だれだかわからないひとなんだ、なんて聞かされれば……。家庭の崩壊が目に見えるようですよ」
上田が、まずそうに、コーヒーをすすりながら言った。
「有吉佐和子の小説『不信のとき』の道子の例をあげるまでもなく、たくさんの不幸な出来事が起きているようだよ。特に、夫婦間のいざこざが多い。
例えば、こどもの顔が、だれかの顔に似ているからって、夫が、妻とその男との不倫を疑ったり、夫が、あまり娘をかわいがるので、妻が、嫉妬して、ノイローゼになってしまったとか……」
「ああ、夫と子供の間には、血のつながりがありませんからね。男と女の関係になるわけですな」
上田が、大きく、うなづいた。
「いや、きみたち、もっと、恐ろしい話もあるんだ。これは、噂話として流れているだけだから、そのつもりで、聞いてくれたまえ……」
ある国で、チンパンジーが、ヒトの精子を人工授精で受胎した。これを知った所長は、世間の目を恐れて、射殺した、という話なんだ……」
「ええっ、いくらなんでも、ヒトとチンパンジーじゃあ……」
「それが、理論的には、可能なんだそうだよ」
「そ、そんな馬鹿な……」
「もしそうなら、チンパンジーの姿をさせられた人間が誕生することになるんですか？」
「うわーっ、気色が悪い。まるで、悪魔だ」
上田は、ほんとうに、顔色を変えていた。
帰り際、蛭田部長刑事が、飯島教授にたずねた。
「ところで、先生。さっきの話の中で、蛎沢まさ子さんにプロポーズしたという秀才青年医師は、だれなんですか？」
「琴野田奥次郎氏だよ」
「……」

（未完）

（小説）

近藤富蔵の生涯（十九）

第二章　浮沈の近藤家三代

二、鶏声ヶ窪より若鷲巣立つ

金子正義

（一）

七歳で白山下の奚疑塾に入門した重蔵は見る見る天分を伸ばして、十歳の頃には年少組の先達となり、元服した十三歳以後には山本北山門下屈指の若手儒者として、師の代講をする程となり、諸候の藩邸に招かれて其の子弟に講義する程になった。
勿論、元服する迄には武士の表芸十八番を一通り修めるのが先鉾騎郎の家を継ぐ者の嗜である。特に弓馬鎗剣はそれぞれ師につき、剣は柳生流柔術は起倒流を修め、兵学は平山行蔵に甲州古伝を学んだ、砲術に就いては名手であった父守知が早くから元服前でも教えていたが、膂力を確かめた後に、内藤新宿裏通り表番衆町の角場にある荻野流の射撃場に重蔵を連れて行き、守知とは昵懇の番役に意を通し、其の後は日を定めて重蔵一人で射撃修練に通った。
幼にして神童、少年になって武芸も天才と言われたが、重蔵自身の努力精進も並大抵では無く、日に二、三時間の睡眠しか摂らず、二、三日徹夜を通しても平気であった。
勿も此の時期は江戸文化が爛熟する文化文政期も近いので、志ある重蔵の友人仲間は年齢の多少の差があっても我武者羅に文武諸芸に励む変り者ばかりであった。
共に切磋琢磨して後に名を残した奚疑塾の友人の中でも、特に重蔵が兄事した太田錦城（名元貞・字公幹）は八歳年上で、重蔵が入門した頃には既に師北山の考証学的方法を身につけて古注学に励んでいた。後に『九経談』や『古文考経私記』などを書いて世に知られ、寛政異学の禁に発憤して『偽学弁』を書いて反論し名を高めたが、文政八年六十一歳で没した。
亦、重蔵より四歳年下で弘前藩御用達の津軽屋三右衛門の店で見習奉公をしていた賢次郎がいた。勤勉誠実、頭の良さを認められて養子となり、家業の傍ら奚疑塾に

通い、後年狩谷棭斎として古注学の方法を古典の抽解や律令の研究に注ぎ、我が国最初の辞書である承平五年（九三九）の万葉仮名の『倭名類聚鈔』を注解して『倭名類聚鈔箋注』二十巻を著わし、更に商人学者らしく日頃商用に使う算盤、秤衡より度量衡全体の研究に入り、其の発注から変化を考証して、日本中国印度よりオランダ、更に古代ローマに迄及ぶ『本朝度量権衡攷』六巻を書いた。

後に近藤重蔵が書物奉行のとき多くの著述をしたが、其の一つ『金銀図録』は狩谷棭斎の考証方法を摂り入れたものであった。

多くの重蔵の学友を挙げれば限り無いが、神田の質屋の小倅弥三郎も漢詩人市野迷庵となり、屋根屋の職人も北静廬と名のる考証学者であり、駿河国庵原の名主の五男東平も、詩文書道に秀れた山梨稲川となった。

広い学友の中でも重蔵の終生莫逆の友は、『慊堂日暦』を世に残した松崎慊堂である。奚疑塾には重蔵より遅れて入った一歳年少の寺の小僧辰蔵であった。

辰蔵は肥後の貧しい百姓の子で、幼くして寺の小僧に出されていたが十六歳で出奔して江戸に走り、途中沼津で行き倒れているのを浅草称念寺の玄門和尚に救われて称念寺の小僧となった。玄門和尚に才能を認められて山本北山の下に通わされたが、後に湯島の林家の私塾に入り、初め林錦峯信敬に教えを受けたが、惜しくも師は二十六歳で没したので、其の養子熊蔵に学んで佐藤一斎と共に林門の双璧となった。寛政異学の禁後、慊堂は幕府公認の昌平黌より離れ築地に私塾を開き、更に遠州掛川藩に招かれて藩校で教えていたが退隠して渋谷村羽沢に石経山房を開いて子弟を教え乍ら古注学を深め、金石文の研究を一層深めて後漢、唐代の古版十三経を飜刻した。

『石経山房』の名もこれに因んだものであり、後に近藤重蔵が目黒に抱屋敷を設け、庭に人工富士を築いた鎗ヶ崎とは目黒台の東と西の位置にあった。重蔵とは良く行き来して歓談した。

重蔵の長子富蔵が抱屋敷地境の争いより地主一家殺害の罪で家名断絶、富蔵は八丈流島重蔵は近江へ流謫中に没した。慊堂は其の遺児を世話し三男熊蔵を門下生としていたが、後に羽倉簡堂に預けて近藤家を再興させた。

斯かる後年名を残す者達が希望に燃えた天明年間は、江戸幕府参百年の中で最も多難の時代であった。

浅間山大噴火に続く全国飢餓米価高騰に依る打ち壊しや全国的百姓一揆、天明六年の江戸大火に続き、翌七年には、御所も焼け落つ京都の大火と災害続きであった。

海の外よりは列島の北辺に魯西亜国の南下、太平洋沿岸には異国船の出没頻りとなって鎖国の戸を敲き始めた。

幕藩体制を揺り動かす産業構造の変化に対応して、幕府財政の危機を下総手賀沼の干拓開墾や蝦夷地の開拓と

交易に活路を見出そうとした老中田沼意次は、将軍家治の病気中突然老中首座を罷免され家治の没後忽ち政権は松平定信に移った。

其の様な天災飢餓打ち壊し騒動の続く世にも、貧しく飢えた百姓や明日の米を買う銭も無い町人の子等の中には、学を好み志を立てる者も多かった。親もまた封建の世に学問こそ身を立てる道と、子供の為に八方手を尽して僅かの金を借り寺子屋より私塾まで入門さようとした。

私塾の多くは士農工商身分を問わず自由に入熟を許したが、米二升か金一朱の入門束脩を僅か半ばの米一升程は納めても、手習熟ですら手習教本の名頭尽し、村尽し国尽しから往来物、千文字や万葉集と十数冊に及ぶ小冊子の代を払うことは困難となり、兄弟子に借りたり塾備えの貸本を写して学んでいたが長く続かず次第に姿を見せなくなるのであった。

奚疑塾でも貧しい庶民の子が多かったので入退熟も著しかった。

重蔵は武士の子は例え足軽小者の軽輩の子でも早くから文武の修業が出来るが、貧しい庶民の子弟は早くから野良仕事や子守・丁稚奉公と働き尽めで塾通いどころで無い、学を好み志ある者には無償で入門させる塾を興すべきだと想いを致し天明八年同志を誘って義塾を開いた。

既に十七歳の堂々たる偉丈夫となり指導力も抜群の重蔵の熱意に感動し、資力ある者は金を、余暇能力ある者は塾造りや講義を、読み終えた教本ある者は持ち寄り、鶏声ヶ窪の空屋敷を利用して「白山義学塾」を開いた。

「白山郷修斎会約」と云う堂々たる学塾の基本を定め、「人学ばざれば人たらず、読み書き算用無ければ生きるあたわず。学問は世の為人の為に学ぶもの、流派学説に囚われず枝葉末節に走らず、志を寄せる者切磋して三代の隆を興す先達たるべし」と宣した。

志を寄せる者は奚疑塾の学友ばかりでなく、他の学派の者も其の主旨に賛同して加わった。佐藤一斎もその一人であった。

佐藤一斎は岩村藩の江戸家老の息子担で、後の林述斎が未だ岩村藩主の庶子松平熊蔵と言った頃から共に陽明学を学んでいた。従って松平熊蔵も佐藤担も朱子・陽明、古学折衷を問わず広い志を持っていた。松平熊蔵は後林家の養子となり大学頭林錦峯信敬の死後林家を継承し林述斎として天保十二年七十四歳に没する迄長く大学頭を務め、林家朱子学の再興に努め乍ら、寛政異学の禁以来の諸学派との論争対立を和らげ、幕末に至る激動の時代に活躍する多くの人材を育てた。

佐藤一斎は多忙なる師を補佐して文化二年三十四歳で林家の塾長となり、述斎が没してから昌平黌の儒官となった。幕府官学の儒官となっても学問は世の為人の為に学ぶもの、流学派説に囚われず枝葉末節に走らず、志を寄せる者切磋して三代の隆を興す先達たるべし、との白

山義学塾の宣言を忘すれず、安政六年八十八歳で没する迄に多くの人材を育て『古本大学旁釈補』等を著わした。特に箴言集『言志録』は後世有為の青年の必読の書となった。

白山義学塾は天明八年より寛政三年迄の僅か三年で解散したが、通った者述べ千人と重蔵等は豪語していた。

教える仲間はそれぞれ得意とする学科を手分けして、幼児の手習塾の読み書き算用の初歩より、千文字、万葉に達する若者を教え、上級向けは書道、四書五経、歴史綱鑑、算術より天文、武術、軍学にも及んだ。

時には当代第一級の学者を招いて教えを仰いだ。其の時は学主の重蔵も仲間と共に塾生と一緒に講義を受けた。

高名な天文地理学者本多利明も特に四十三歳、盲人国学者塙保己一四十一歳で門下の屋代弘賢の介添えで姿を見せた、屋代弘賢は二十九歳既に名の通った和学者の能書家であった。

其の外各学派の若手学者が白山義学塾の意図を伝え聞いて見学に来て、進んで講義していったりした。

（二）

斯うした純粋な学徒達とは別に、天明七年四月家斎の将軍宣下に従って老中となった松平定信は、幕政改革の興望を担って七月には老中首座となり、将軍侍従として活躍し始めていた。

松平定信は吉宗の孫で、父田安宗武は国学者であり、万葉調の歌人であった。定信も朱子学を修めて英明であった。白河藩主となると藩政を改革して天明年間の大飢餓のとき仙台藩四十万津軽藩三十万の餓死者を出したが、自領白河藩では一人の餓死者も出さなかった。

此の名君が賄賂政治の悪名高い田沼政治の全てを覆さんと三十歳の若き意欲に燃えて立ったのである。

老中首座になるや田沼意次の重商主義を覆して、復古的重農主義へ転換し、庶政享保の時に復すと宣言した。

享保の時代に復すと言うことは、祖父吉宗の政治に帰ることで、八代将軍吉宗の政治が「諸事権現様の定めの通りに直す」と享保改革を行なった如く復古主義の幕政改革を意図したのであった。

松平定信の幕政改革の構想の第一は本百姓体制を回復して農本主義を確立すること。此の為に米価を安定し、貨幣制度を改善する。

第二に都市秩序の回復、風俗の矯正である。此の為に始す幕臣の綱紀粛正、特に幕臣子弟の教育の中心である林家の学風を振興する。

当面の焦眉の急は米価高騰に窮した江戸、大坂を始めとする全国各地の打ち壊し騒動を鎮めることであった。

定信は米価奔騰に依って利を貪る奸商を罰し、江戸市中に窮民救済の米・銭賑救所を設けて飢え彷徨う者を救い民心を安定させた。

次に、幕府政庁各藩に三年間の厳しい節倹令を出し、幕府政庁の冗費を省けと、範を示して家斎の将軍宣下の招請を廃し、幕臣間の私事贈遺を禁止し衣食のこと迄も細かく定めた。

更に幕府内の綱紀粛正、文武振興の為に有為なる人材を得ようと、江戸府内の寺子屋より私塾の師たる者及び文学・軍学・天文学・武芸に優れた者の姓名・流名・年齢・居所等を委しく調査することを命じた。

特に湯島聖堂に於て人材登用の為に儒生に学問吟味を行なうと希望者を募ったが、旨趣が徹せず応募する者は少なく僅か十四名であった。

そこで儒生以外にも聖堂での講義を聴講させようと、天明七年九月十八日「学問の奨励、朱学の振興を期して身分に拘らず有志に聖堂での講義聴講をなすべし」と広く触れた。

佐藤一斎、近藤重蔵、松崎慊堂等もこれに応じて通った。

其の講義学習は参学者が問題を出し合って自由に思う処を述べて論ずる会読と称する学習で画期的なものであった。

続いて九月廿一日家斎は、御三家初め松平定信以下の老中、万石以上の在府大名を城中大広間に集めて、武家諸法度を頒布し、林大学頭信敬をして各條目を読聞させた。

武家諸法度は、家康が元和元年大坂城を炎上させて豊臣家を滅亡した直後の七月七日、伏見城で諸大名に通告した武家の基本法度で、爾来歴代将軍が代替の始めに其の大綱に即して追加補足してきたものである。

十一代家斎の武家諸法度も先代家治の條目内容と変るものでなく、文武忠孝に励む可しから始まる礼法上の細細した定め、諸大名の参勤交替、新規城郭構営禁止等々の禁令法度で、身分により衣服着用の定めに至る迄の細目の日頃の励行を命ずるものであったが、定信は武家諸法度は、その条文を諳じるより厳正な実践による士風を振興することが大事として、天明七年十月晦日、武家諸法度が単なる名目条文でない事を示さんとして、有司家僕の非行をも法度違反とする糺断令、人材登用令、倹約令を下し、幕閣を通してそれぞれの政庁に達した。

要約すれば「近頃権威ある者の家人と称し喧嘩、押買し代金を払わぬ者ありと聞く、其様のこと分明なれば、武士は捕え置き、家僕町人は奉行所へ召し捕えるべし」

倹約令には「諸庁支配の頭は、配下隊士の教育をし文武の芸を励ますことは当然ながら費用多からざる様心を用うべし、諸司転遷の願状などを奉つるに費用多きよしなり、かかることなからんよう組頭はじめ、これにあづかる輩、よくよく心を用いて指導すべし」と政庁内賄賂や賄賂人事の禁止を命じ、

人材登用に就いても各政庁の長に「隷下の人々芸能あ

るか群に抽んでたる者埋れざるよう心を用いて推挙すべし官長の推薦により人傑の出るは、官長の忠勤の一として心を入れるべし」

更に老中直々にも学術の振興と諸政を改革する意見を広く世に問わんとして翌天明八年早々、地方の儒学者やお目見得以下の旗本、御家人、陪臣より商人等からも施政に就いて多くの上申書を集めた。其の中より幕府小普請組の植崎九八郎の『上書』や大坂の儒学者中井竹山の『草茅危言』柴野栗山の『栗山上書』、下駄屋甚兵衛の『書上げ』等を採り上げた。

中井竹山は大坂懐徳堂の院長で西日本儒学界の重鎮であった。天明八年松平定信が大坂巡視の時に竹山を招いて経書の講義をさせ、経世の論を問うたことに対して、寛政元年冬『草茅危言』十巻を献じたもので国家の諸制度より遊女、劇場、米仲仕、捨子に至る迄の経世上の問題を論じたものであった。

柴野栗山の『栗山上書』を読んだ定信は、栗山の並々ならぬ朱子学の学殖の深さを聞いていたので、幕府儒者に加え、後には聖堂制度の改革に当たらせた。

定信は家齋の信任を一層固め愈々改革の根底に乗り出して、綱紀粛正と人材登用を一層推進せんとして、勘定方三十人、普請方二十人の不正役人を罷免し、今後の人選の事は食祿の多少に拘らず、文武芸術平日の行状迄も吟味し相応の器量ある者を相撰び面接して候補者を定め謁見の上決める。尚今日有用の芸技に非ざるも書き出し置くべしと触れた。此れが後の儒生の学力吟味となった。

更に宿願の田沼政治の貨幣制度を改めて二朱銀を停止し、丁銀を鋳造し、人参座を始め鉄座、真鍮座などを解散させ、京都の奸商近江屋の家財を没収し難民に分配するなど着々と改革を進めた。

斯くして改革の根本である農村の本百姓体制の再興に取りかかった。

先ず、都市の華美多彩の商品の氾濫が物価を引き上げ奢侈遊惰な風俗となって農村生活に悪影響を及ぼすとして、都市の軽俳淫靡な風俗を矯正して、勤倹醇篤の風に戻し都市秩序を維持せんと、寛政元年三月十五日奢侈禁止令を出した。それ迄にも度々出していたが、一層厳しいもので高価な菓子類より始まり、火事装束、婦人の衣服、調度、節句道具、烟管に至る迄金銀を細工に使う等の驕奢なものを厳禁した。

此の時代は商業手工業の発展に依って江戸、大坂等の都市文化は繁栄し、諸学芸の技術は多様な発展を遂げていた、それが物価高騰、奢侈遊惰の根源であるとして権力によって統制したのであった。

江戸、大坂等の芸能・文化人で度重なる倹約令、風俗矯正令に不満を抱き反対する者もいたが忽ち罰せられた。

既に天明八年には戯作者石部琴好が『世直し大明神』の黄表紙本で田沼意知の暗殺事件を扱ったのにも拘らず

幕政の秘事を書いたものとして、手鎖の上江戸払となった。

寛政二年には絵画、読物、刊行本の禁止令となって、一枚絵、好色本等の出版取締令を出し、高名な山東京伝までも手鎖五十日の罰、出版した書肆蔦屋重三郎は財産半分を没収される等の厳しさであった。

斯うした改革途上で寛政二年の悪名高き『寛政異学の禁』となった。

(三)

松平定信は、幕臣の綱紀粛正、風俗の矯正は学問教育の中心である林家の昌平坂学問所の学術振興にあると考えての上で、林家一門塾生への通達となったのである。

林羅山以来、幕府の文教の中心となってきた林家朱子学は、宝暦八年(一七五八)林榴岡信充の没後は、家を継ぐ者次々と早死し林鳳谷信言の後には孫の信徴が家を継ぎ大学頭となったが、幕府の文事のことは儒臣成島忠八郎和鼎を始めとする幕府儒臣七家の寄合に助けられ、漸く大学頭の名を保っていた。

処が天明六年正月湯島よりの出火で聖堂焼失し、その災害処理中信徴も病没した。

天明七年四月家齋の将軍宣下、松平定信の老中就任等で林家が司る公事、文典多忙の時に、富田家より養子となって林家を継いで大学頭となった林錦峯信敬は未だ二十歳の若さであった。

大学頭の役職は文教のことを第一とし、林家私塾及び昌平坂学問所で大名旗本の子弟の儒学の教育、儒学者の養成があり、次に幕府法度、外交文書の起草、公家衆との典故儀礼のことにも及び、更に重要なる聖堂の祭酒があった。その上天明六年焼失後復興拡充の大事業が加わっていた。

松平定信は、他家より林家養子となり、直ぐ大学頭となった信敬が激務に心身を労し、先代、先々代の如く早死すること無きよう、更に林家朱子学の振興を願って、林家一門及びその儒生を激励せんとして、寛政二年(一七九〇)六月大学頭林錦峯信敬を召して論達したもので、後に悪名高き『寛政異学の禁』として論議を呼んだが、松平定信としては、学問を朱子学一本で統制しようなど毛頭思っていなかったのである。

論達は

「朱子学之儀　慶長以来御代々御信用之事にて　既に其方家右学風維持之事被仰付置儀に候得者　無油断正常相励み　門人共取立て可申儀候　然所近き頃世上種々新規之説を為し　異学派行風俗を破候類有之　全く正学衰徴の故に候哉　甚不相済事にて　其方門人共の内にも右体学純正ならざるもの折節は有の儀に相聞之如何に候此度聖堂御取締厳重に被仰付　柴野彦助　岡田清助儀も右御用被仰付候得ば　態々此旨申談　急度門人共異学

相禁之　不限自門他門申合　正学講究致し　人材取立候様　相心得可申候』

とあるように林家教学の振興と門人の異学禁止、他門の異学禁止申し合せを命じているものである。

文中の柴野彦助（栗山）岡田清助（寒泉）を聖堂取締役に加えたとのことは、林家の衰退を案じて柴野は天明八年、岡田は寛政元年に、人材登用の実施の中で儒臣に加えたものであった。

此の林家一門の申し合せが朱子学以外の諸学派に伝わり、異学とは何にかの反論が出ると、柴野栗山が『論学弊』を書いて異学を分類してその弊を説き、異学として四派をあげた。

第一に伊藤仁斉に始まる古義学次に其の流れの古注学折衷派、第三に荻生徂徠に始まる復古学、第四享保以後の詩文家、小説家等の風流隠士の文人、と詳細に論じて昌平坂学問所の講師、門弟とは質を異にする学問と断じた。

異学の徒とされた諸学派は此れを知って猛然と反対論を繰り拡げた、中でも異学派の五鬼大家と称される亀田鵬斉、太田錦城、皆川淇園、及び山本北山等の反朱子学派は堂々と論陣を構えて抗議した。

松平定信が林家の学術の振興や若き大学頭錦峯信敬を案じて論達したことが、却って論議を呼んで錦峯は病んで寛政四年三月二日に僅か二十六歳で没した。其の年九月には聖堂の増築完了し幕府官学として昌平黌と称されるのであったが、それを待たずに逝ったのである。

松平定信は、昌平坂学問所の振興と共に幕臣の綱紀粛正風俗の矯正を一層徹底せんと、不行跡旗本を追放した。特に旗本御家人には厳しく身分を弁え奢侈華美の風に流れないよう、質素節約して身を慎み文武に励むべしとの訓令を発した。

町方庶民にも再三に亙る倹約令を出して呆れ返られて「世の中に蚊ほどうるさきものはなし、文武ぶんぶと夜も寝られず」と狂歌がよまれる程であった。

然し松平定信は飽くこと無く次々と禁令を発して寛政三年正月には銭湯の男女混浴禁止令を始めとして私娼の排除、女髪結いの禁止等庶民の風俗習慣に至る迄細かく戒め定めた。

近藤重蔵の父近藤右膳守知が、異学の禁令が出たことを、却って自由の天地に遊ぶ好機として病気を理由に家督を重蔵に譲って、己れの好む茶道に残生を托すに至ったのは幸いであった。

（四）

重蔵は寛政二年七月廿二日父の跡目番代仰せつけられ、御先手頭松浦長門守組与力見習となり、更に翌年四月江戸中見廻り役となった。

その内祝の夜、守知は重蔵と久し振りに語り合った。

「重蔵、其処許も知っての通り、先手与力と言っても、元々先鉾騎郎として戦場にありては将軍旗下の前衛となり、平時は城内警護、将軍お成りの時は供廻りの警護を果し、大番組、小姓組、新番組に属していて、町奉行付の町与力とは全く違うのじゃ」

南・北両奉行所に属す与力は八丁堀与力と言って配下の同心は違法者の捕縛に当るが、与力はその吟味を為すが、

其処許が奉行所に属さずに市中見廻りとなるのは、恐らく若年寄支配下の評定所の目安読下役に属して、老中直属の隠密ではないが、目安箱投書とか、市中風説とかで法度を犯す不届者ありと知った時、その違反の摘発吟味をする役目であろう。

近頃のように法度、掟、禁令が多いと不届者も多くなる訳じゃ、法を犯す者は士農工商を問わず、僧侶、神官、医師、盲人に至る迄分限が無い。

盗賊、賭博、傷害等の者を捕えて町方庶民なれば奉行所へ、武士は捕え置きて諸大名の家臣ならば主家へ、旗本ご家人は評定所へ、僧侶神官等は寺社奉行所へ回送する訳じゃ、其の区分、判定をするのが其処許、重蔵の仕事であろう」

重蔵は父守知に言われる迄も無く心得ているが、役目遂行の為に書見の暇も無く、白山義学塾とも縁が薄れるのを案じて浮かぬ顔でいると、守知もそれを察して、

「重蔵、其処許はよく学問に励んできたが、世には万巻の書を読み学友と論議を尽しても得られぬ様々のことがある。市中見廻りの役で未知の世界を知るのは大事なことじゃ、特に近頃は士分であり乍ら不行跡の者が多くなったからのう。

武士たる者には賭博行為は禁止されているにも拘らず天明年間には旗本、諸家の臣が、彼是勿もらしい名称を立てて屋敷内や町奴などの賭博場に出入する者が多くなっていたので、当代になって松平定信殿は、天明八年正月早々厳しく戒めの令を出されたが一向に不行跡の者後を絶たず寛政元年五月に賭奕不行跡で旗本数家が処罰されたのも耳新しいことじゃが、当年に入っても恥ずべきことがあった。

前々より旗本坪内清之助、小普請柴田勘左衛門、同じく重田金四郎は屋敷内で代る変る賭博を会帳していた。

然かも柴田勘左衛門は病気の為の小普請入りなので屋敷内に引篭って病気療養に努めているべきを、当年正月王子稲荷へ参詣して急病なりと称して社地に止宿して三日も居続け、仲間を呼び寄せて賭博に興じ、小普請島村十五郎等も加わった。

余りのことに神官より寺社奉行に知らせがあったが、所管異なること事として内々に済ました。処が島村十五郎の弟長四郎が此のことを知り、柴田勘左衛門方へ強談に及んで勘左衛門に手疵を負わせ、自訴に及んで一切の

事露見し、評定所判決に依って累わる者はそれぞれ遠島や江戸追放となった。同じ武士の端くれとしても残念なことじゃ。

武家の不行跡は町奉行所の探索も立ち入れず、当然目付の仕事であるが、斯のように目が届かずの有様なのじゃ、どうじゃ重蔵、其処許は幼少の頃は自由奔放の乱暴者であったので少々の無法狼藉などは驚くまい、学問も秀れているが武芸の方も達者と見て、不届者の探索、裁定に相応しいと見込まれたのであろう。存分に活躍せよ。だが、近頃の老中松平定信殿の倹約令、贅沢禁止令は庶民には厳し過ぎて評判が悪いのう。

吉原の遊女以外は茶屋、岡場所、湯屋等の隠売は勿論、蓙を抱えた夜鷹の果てまで一切禁止され、今年の正月より江戸市中の湯場の男女の込湯（混浴）まで停廃の令を出されたのは市中町人庶民の僅かの愉しみも断たれて残念じゃ。

重蔵は未だ若いから色里のことは知るまいが、吉原は勿論茶屋、岡場所等は禁令の裏をかく巧みな手立があるものじゃ、此等の違反摘発も一苦労じゃが、まあ心して役を果されよ」

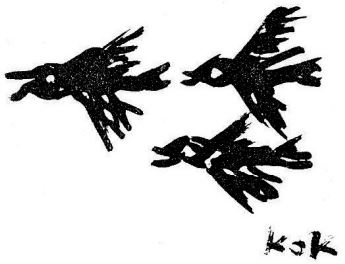
祝い酒の故もあっていつもの守知とは違っての長談義であった。重蔵は父の話に興味を注がれ世の中の裏と表の姿を有りの侭に見窮めようと意欲を湧き起すのであった。

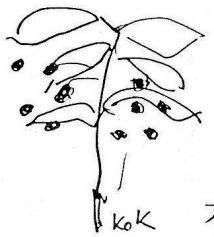
続く

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切）
春季号……二月一日　十二月三十一日
夏季号……五月一日　三月三十一日
秋季号……八月一日　六月三十日
冬季号……十一月一日　九月三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。





有院家の人々（九）

第十七章　有院武雄の殉国

この遺言状を雪ちゃんが読む時、僕は戦死しています。これから先、日米混血という十字架を僕無しで、一生一人で背負わなければならない雪ちゃんのことを思うと、僕は断腸の思いです。僕は雪ちゃんには面と向かってはとても面はゆくて言えなかったけれど、一生雪ちゃんの味方になってあげるつもりでした。なぜかと言えば、孤児でアメリカ人の血の入った雪ちゃんが将来結婚するということはとてもむずかしいと思ったからです。でも僕の魂はこれから先一生雪ちゃんのそばについていて守ってあげます。おばぁ様が僕に残して下さった財産は全部雪ちゃんのものです。雪ちゃんの分と合わせれば雪ちゃんは一生、大金持ちでいばって暮らせますよ。日本帝国のため、天皇陛下のため、命を捧げた兄を誇りに思って生きていって下さい。立派な伝統に輝く有院家の名を辱しめないよう、清く正しく胸を張って生きて行くことをお願いします。

大和禎人

日本帝国軍人
有院武雄

有院雪子殿

兄が伝えようとしているどの言葉よりまして、雪子の目を貫いたものは（日米混血、十字架）という文字と、（日本帝国軍人）と、
とくにある、六文字であった。
（この六文字のために、愛する兄武雄は死に追いやら

れたのだ、それにしても、兄の本心はどこにあるのだろう、日本帝国のため、天皇陛下のため、なぜ、なぜに肩肘をこのように張る必要があったのだろう、兄は本気でそう思って死んでいったのだろうか、兄さん、悲しい、わたしはとても悲しい）

これは雪子の心底から湧上る叫びであった。いくら叫んだとしても、もはやかの女の前にふたたびその兄はもう還らない、悲しみとともに激しい憤りに駆られた。

武雄が満州派遣部隊へ加えられ、大陸へ渡ったことは一度だけ便りがあって承知していた。以後の消息は絶たれたまま戦争は終結し、安否のほどが気遣われるまま戦後二年を経て、武雄の死は伝えられたのである。

一片の公報は冷たく武雄が戦後五ヶ月を経過した昭和二十一年一月二十七日、野戦病院で病死という事実をもたらしたのだった。終戦処理の混乱の中とはいえ、あまりにも遅きに失する伝達だった。敗戦国の一兵士の運命が不明のままに終らなかったことが、むしろ不思議かも知れないのだ。遺書はその時になってはじめて開かれたのだった。

たった一人、血を分けた兄の安否を気遣い、待ち侘びたあげく鉄槌を下されたような知らせだった。体中の水分が一遍に乾いてしまうのではないかと思われるほど、雪子は泣けるだけ泣いたのだった。

公報は伊豆長岡に疎開したままの伯母ベラのもとにもたらされた。祖母イキの養家というゆかりの武智の別荘がそこにあって、かの女は身を寄せていたのである。長年の理想と熱い祈りと努力によって建てられ、経営されてきた西荻窪の幼稚園と保母養成所の校舎は住宅部分を除く強制買上げで、軍需産業の岩崎通信社に接収されていた。雪子の方は東京女子大にまだ在学中で陸軍造兵廠の勤労動員に従っており、空襲の苛烈をきわめる中、西荻窪の家との間を往復した時期がある。三月十日の空襲は保土ヶ谷付近に近づいた夜行列車の中で遭遇し、東京までを地獄の惨状の中を、必死になって歩き通した悪夢の一夜を経験しているのだ。公報はそうした事情から長岡に回送されてきたのだ。

「雪ちゃん、聖書にはこんな言葉があります、

（たとえわれ死のかげの谷を歩むとも、わざわいを恐れじ。なんじ我と共にいませばなり）

決して気落ちしないことよ」

「ええ、でも伯母さま、雪子は悲しみの涙は拭きません、神さまはお叱りにならないでしょう」

雪子は精一杯、そんな言い方で応えた。

「ええ、あなたは気丈ですから、きっとこれから先もどうか強くお生きなさい、神さまはきっとあなたの頭に宿って見守って下さることでしょう」

不本意な学園閉鎖で悲嘆の奈落に落ちたベラだったのだが、戦後のこの時期はやくも再建の意志を雪子に告げ

ていた。東京空襲の惨状を見ている雪子にはとうていそれは不可能としか思えないことだった。戦争終結とともに訪れた虚脱、とくに不当な敵視の眼差しを耐え抜いた戦争中の、つねに息をひそめ、暗然とした気持ちに支配されがちだった。あの自分たちの置かれた立場を思わずにはいられない。兄の死を伝える公報はいまさら追い討ちをかけるような衝撃であった。しかし、いまこそはこの伯母の逆境にめげぬ不屈に学ばねばならない。

「伯母さま、ありがとう、雪子はヘコタレたりはしません、きっと天上のお兄さまが嘆かれないように生きていきます。ご安心なさって」

「ええ、ぜひ、そうあってほしいの。でも、心配ですから、千葉へはわたしも一緒に行きます。雪子が可哀想で、とても一人ではやれません。武雄さんのためにも、ぜひそうしたいの」

ベラ伯母は遺骨受取りのため、終戦残務処理の当局から指示のあった場所へ伴うと言い出した。この頃、六十二歳のかの女が十歳は老けて見え、足許も危ない状態にありながら、あえての申し出であった。

武雄の応招、入隊はすでに敗色濃厚な十九年、近衛麻布三連隊へであった。近衛兵は「天皇さまの親兵」、選ばれた壮丁という観念は二・二六事件を待つまでもなくすでに失われていたが、

「ぼくは近衛兵になるのだ」

かれが召集令状を受けて、勇躍する姿を見て雪子は複雑な気持ちをもって見送った日が思い出される。

死因は破傷風と書かれていた。痙攣を起こし、反り返り汗を流し、呼吸筋を侵されることがあれば窒息死にいたる恐ろしい病原菌に蝕まれた兄、血清注射など考えられない状況下にあって、不本意にも傷病兵となった兄がたった一人ベッドに身を横たえ、介護するものもなく放置されていた。あまつさえ痩せ細った身を置く病棟はすでに占領軍の手中にあったと考えられる。雪子はそう考えると身震いするほど怒りが込み上げたのだった。

遺骨として手渡された白布に覆われた中身の空しさはそれをあらためるまでもない、また、そういう気持ちにもなれない。雪子はそっと用意の風呂敷包みにして、戦後のボロボロに破れ傷んだ総武線の車中を揺られて西荻窪へ戻ってきた。人目を忍んだ兄武雄の帰還であった。

祖父ロバート・ウォーカー・アルウィンがこよなく慈しみ、麹町網町の自邸に何かとことよせては母市子に命じ連れて来させ、愛撫した初孫武雄の二十五歳という短い生涯であった。日本人の母をもったかれはその祖父も日本人の祖母イキとの国際結婚であったのだから、二重の混血という宿命を負っていた。純粋な日本人でなく、またアメリカ人でもない、そうしたことを雪子の方は重い苦悩として戦争中を生きてきたが、果たして兄の武雄の場合はどうであったのだろうか、（日本帝国軍人）と

遺書に記した、あるいはそう書かせたものはなんであったろうか。

西荻窪の教会で慰霊祭が行われた。数少ない参列者であったが、同じ戦場からの生還者で親友だった寿円君という人が弔辞を読んでくれ、号泣された。

伯母と二人の手で武雄の残していった遺髪と爪、そして遺書が青山墓地の父リチャードの墓石の下に埋められた。

母と別れアーウィンの祖母のもとに引き取られた時、兄武雄は七歳、妹雪子は四歳であった。そして祖母イキは七十七歳であり、二人の養育を熱心に扶けた伯母ベラの方はエネルギッシュな四十六歳であった。兄妹に深い影響を与えたこの二人の明治女性はそれぞれに個性の強いすぐれた人物であった。

生き別れた母のことは兄も妹もタブーとして成長を余儀なくされた。

「わたしのパパはどうしていないの?」

「天国へ召されたのですよ」

成長するにつれて(どうして)、(なんのご病気で)という問いになって、答えるほうが行き詰まった。父が死んだのは自殺であることは(さぁ……)という相手の戸惑いからいつしか敏感に知るようになった。

「ママはどうしていないの?」

これも当然で、しかも幼いものにとって哀しい疑問であった。

「あなたのママのパパとママが、お寂しいと言ってご自分の家のほうへお呼びになったのですよ」

こどもに対して嘘をつくことは絶対にしなかったベラ伯母さんはやわらかにそんな表現で真実を話し聞かせたのだった。

(どうして、ママはもうここへは来ないの?)

だが、こどもたちは不可解なもの感じながら、それ以上は問い質すことを止めたのだった。

兄と妹はそれぞれに屈折を心に抱きながら、そのことで話し合ったことはない。まして自分たちの混血であることへの懊悩にはたがいに触れることを避けてきた。肉親の情とはそういうものだったのだ。

ところで、そうした二人にやがて母と再会する日が訪れたのである。

それは雪子が東京女子大の二年生になってからのある日のことであった。

「あなた、有院雪子さんですね」

とかの女とは同じ年頃に見える二人連れの女性に声をかけられたのである。どうやら雪子の帰路を待ち構えていたようすであった。

「突然でご免なさいね、わたしたち、あなたの従姉妹

ですの、山崎道子と峯子と言います、実はあなたのママが是非あなたと武雄さんに会いたがっていますの、お会いになってくださいませんか?」

「……」

驚きのあまり、言葉に窮し雪子は絶句した。

(山崎姓で、従姉妹だなんて、どういうこと?)

名乗られて覚えのないことであった。

「突然ですから、ご無理ないわ、山崎の家はお宅からほんの近いところにございますの、このメモの住所をご覧になってね、ママはお知らせを頂けたら、わたしたちの家でお待ちすることになっておりますの、いいお返事くださいよろしくね」

二人の女性は良家の子女らしく、もの腰、言葉づかいに気品があった。

「驚かせてしまったようですね……、でも、お許し下さいね、失礼しました」

それだけを言うと立ち去ったのだ。残された紙片には電話番号も書き添えられていた。

もちろん、まだ戦争中のことだから、二人ともモンペ姿という身なりだったが、それがお洒落着に見紛うたおやかな後ろ姿を、雪子は呆然として見送っていた。

(ベラ伯母さまにはこのことは言えない、いぇ、言ってはならない、そっと兄だけに相談しよう)

雪子はそう思った。

その頃の武雄は法政大学を卒業し、祖父ロバートが設立した台湾製糖の社員になっていた。当時の社長はロバートの後をうけ武智家の養子直道が就任していた。

その武雄は雪子から一部始終を聞くと、会ったものかどうかという、かの女の躊躇に対し、

「うん、会うよ」

と、こともなげに、しごくあっさりした答えを返したのだった。考えようによっては兄妹にとってこれほどの人生の大事をそんな簡単に決めて良いのだろうかと、武雄の態度は雪子には恨めしく不満であった。

雪子はかの女の生れる前からアーウィンの家に仕えてきたのぶやに相談した。

「なにをおっしゃるのですか、ママさまにお会いなさいまし」

「でもねぇ、ベラ伯母さまに悪くないかしら」

「迷うことありません、それはもうお祖母さまや、ベラさまのご恩を忘れることはできません、もちろんですとも、でも、これは別問題です、お嬢さまをお生みになったのはなんと申してもママさまです、小さいお二人を手放されたのはよくよくのご事情があってのことでございます、親子ですもの、いつかはお会いになるのが自然でございますよ」

のぶやはそう言うと、雪子の手をとり、

「ようございました、お嬢さま、そうなさいまし、お

兄さまだって、いつ兵隊のお召しがあるか知れないのですから、……」

激化をたどる戦況はもはや銃後も戦場と異ならない様相をしだいに濃くしていた。サイパン島の陥落で不沈の空軍基地を確保したアメリカ軍は日本本土の空襲にむけて虎視眈々とした準備を進めているはずであった。

いま実の母からもとめてきた逢瀬の機会は、暗く明日を知れぬこの際、無事のうちにという願いから出たものかも知れない。兄妹にとっても同様の危機感に生きていることに変わりはないのだ。のぶやの説得に雪子はようやく従う決意をした。

連絡がとれて、その日が来た。

「ボクだってあまり覚えがないさ、でも雪子よりましかな、とにかく十年以上会っていないんだからなぁ」

武雄なりの淡白さだろうか、あまり切実な感傷を示さないまま訪れようとしている。いっそう幼い日に別れをもった雪子のほうは眠れないほど、再会への期待と恐れを抱いて重い足を運んできた。

山崎の家は洋風の瀟洒な構えであった。多分、母の実家渡部の姻戚であったろう。未知のまま従姉妹と名乗られ、雪子を驚かせた姉妹とその母親、そして武雄たち二人にとって再会の当のママが玄関に出迎えてくれた。

「武ちゃん、雪ちゃん、ママよ」

濃い口紅を塗ったその女性は、そう言うとなぜであろうか、声をあげて笑ったのだ。それから通された応接間のほうでは道子、峯子、そして、やはりその母親を交えた談笑がくりひろげられ、そこでも、ママの市子はべつだんの感情を武雄や雪子に向けなかったばかりか、話題によっては自身もお喋りに夢中になったりした。

武雄は若い娘たちに囲まれ、すこぶるご気嫌が良い。雪子一人が甚だしく失望を味わったのである。

(なんという無神経なのだろう)

そして、

(会わなければ良かった)

という後悔が胸の中を横切った。

しめっぽい再会の場面を望んだわけでは決してなく、そしてまた、母が子にむかって謝罪することを期待するつもりもあったわけではないのだが、なにか一言の欠けたもの足りなさがあり、どうしょうもなく立ちはだかる空白を前に、あらためて絶望したのであった。

母の市子はアルウィンの家を去ってから、思うような再縁に恵まれず独り身で、その母にあたる渡部の未亡人と二人淋しく暮らしていた。銀座裏にコーヒー店を営み、結構豊かな暮しをしているようだった。

武雄はその後もしばしば山崎家を訪れるようになり、美しい姉妹と接することで、それまでにない明るさを目に見えて示すようになった。姉妹のほかに信彦という三

男とは同年ということもあり、親友になった。

武雄は山崎の家で自分には満たされることのなかった家族団欒の雰囲気を満喫し、自足を覚えたようである。

やがて、山崎の家では相次いで男子が招集され信彦にそれが及んだ。武雄は混血という宿命を超え、この頃から心境に軍国思想の強調を加え、ミリタリズムの風潮に押し流され、多くの学友の応召を見送るうち、日本国籍をもつわが身も遅れまいという気持ちに傾いていったようである。ついの日、わが身みずから運命の応召にあたり、進んで、(日本帝国軍人)として肩を怒らせ、潔く死の淵に立つ心裡に堕ちたのであろう。男子として生まれた武雄の悲劇であった。悲しいことだが、雪子にはそう思うほかないのであった。

第十八章　苦難の有院雪子

「今日、ただいま学窓を巣立っていく貴女がたにむかって、私はお世辞にもお目出とうとは言うことができません。たいへん残念なことであります。それどころか、十分な勉強も出来ず、まことにお気の毒な青春を送った皆さんが可哀相でなりません。日本の将来はこれから先いよいよ多事多難でありましょう。占領はいつまで続くものか分かりません。そうした状態の中を、これから世の中へ出て行かれる皆さんを思うとき、私は実に暗澹とする思いなのであります……」

キリスト者としての立場をいささかも崩さなかった学長、石原謙神学博士は涙さえ浮かべられ、諄々とした口調で異例とも思える式辞を述べられた。

雪子が選んで入学した東京女子大の卒業式は戦争終結を見た年の九月末のことであった。(戦争は反対であった)とか(日本の戦争はあやまりであった)などと言いはじめていた日本人の急に増えた中に、そうしたことには一切触れず、また月並みに(希望を持て)とも言わずに、卒業していく学徒の行く末を思って涙した石原学長の温情と、その真のキリスト者らしい真実味に雪子は深く心をうたれたことだった。

雪子の専攻は国文科であった。アメリカ人である自分を否定して日本人になりたいという気持ちからだった。混血という劣等感に悩まされていたかの女はことさら当時、競走率の高い国文科を選んで合格したのである。

入学早々、国文科I主任教授、この人は宮中御歌所寄人とかで、それらしき端正な、しかし陰険な顔を冷然とした面持で、雪子の戸籍謄本を横目にしつつ、

「あなたはなぜ国文科を志望したのですか、国文に入った以上は、科の変更は途中では認められませんよ、いいのですね」

なんという意地悪な言いかたであったろう。雪子の心をいっぺんに凍らせる出来事だった。この日から講座の始まろうという際に、呼び出された研究室でのことだ。

風呂敷包を抱えて教室に現われ、おもむろに教壇に立ち、包みを解いて用意してきた講義用ノートをひろげ、参考の書物を卓上に置く、こうしたポーズが教授と呼ばれる人々の間に多く見られ、なぜ風呂敷包なのか不思議に思った。大学と呼ばれる格式に属する教員一部に見られるこの種の日本的な気取りは滑稽でさえあった。戦争下、とくに羽振りがよく、競走率の高い国文科Ⅰ主任教授などはさしずめまさにそのタイプに相当していた。

雪子のうけたショックと失望は大きかったが、それを救ってくれ、慰めてくれたのは臼井吉見教授であった。口角泡を飛ばすような情熱的な講義で、芭蕉の「奥の細道」を講ぜられたのだった。大方は眠気をもよおし、上の空で聞く退屈な講義の多い中で、この教授の講義ばかりは一語も聞き漏らすまいとして、雪子はいつも熱心に聞き入ったのだった。

臼井吉見教授はやがて文芸評論家、ジャーナリスト、作家として幅広い活躍をする人だ。応召をはさみその郷里松本中学の同級生だった古田晃を助け、筑摩書房の編集者としての多く全集編纂を手がけ、また雑誌『展望』を創刊して、戦後文学の新人登用に貢献し、太宰治、大岡昌平などを世に出した。自らも小説を書き、大河小説「安曇野」五部作を残した人である。

臼井教授の説く古典を通じて、雪子は未知の日本を知り、ほっとした憩いを見出すのだった。国中が鬼畜米英撃滅で沸き立つ世間をよそに、時流に逆らい情熱を燃やす教授を見ることで、学問専一の人にのみ与えられた心の自由とゆとりを発見したのであった。しかし、教授は間もなく招集されて学園を去っていった。

「有院」という姓は雪子が立教女学院にまだ在学中から使用していた。もちろんアーウィンを漢字に書き換えたものだ。兄の武雄の場合も同じであった。自分の中にあるアメリカの存在を抹殺し、時流に生きようとするためであった。

「ほう、珍しい名前ですな、出身は何県なの？」

と、珍しい名字に戸惑う教授に出会うと、その何気ない一言に怯え、身の縮む思いであったが、答えようもなく黙っている雪子に向こうから助け船を出してくれ、

「九州のほうじゃないかな、こういう姓を聞いたことがあるよ、そうだ、それだ、ねぇキミ」

と、独断、断定好きのこの教授は勝手な解釈をして救われたのである。笑えない始末であった。

以来、聞かれた場合には教えられた「九州出身」を名乗ることにした。

まもなく女子学園とはいえ勤労動員を免れず、戦力増強のため、赤羽にあった陸軍造兵廠に働かねばならない

時期を迎えた。もう勉強どころではなかった。

（天を仰いで大きくなりなさい）

（どんな環境にあっても玉におなりなさい）

経営する学園「玉成」の命名はこの言葉に由来するのだが、雪子に厳しく教えた伯母ベラは自分自身にもきわめて厳しい人であった。ともに暮らしてみて、つくづくその偉さを知った。だが、一方では潤沢な生活の中に育った伯母は天衣無縫な純粋さを保ち、経済観念などはゼロで、金銭管理は大の苦手とする人でもあった。

伊豆長岡の武智所有の山荘は門内に五軒もの家屋があり、その一つに伯母は疎開した。落ちついた茅葺屋根の家であった。そこへ越すについては学園を手放さざるを得なかった失意の伯母を扶け、雪子が大変な思いをしたことはすでに触れたとおりであったが、落ち着くともなく三日後に特高の刑事が訪ねてきた。

「どういう、お疑いでございましょう？　スパイかなにかの行為があるとおっしゃるのでしたら、それはもうとんでもないことでございます。わたくしの父ロバートは勲一等をいただき、お国のために生涯をかけて尽くした功労のある人でございました。恐れ多いことですが、明治天皇さまとは親しく夫妻ともどもお近づきをいただいた家柄でございます。井上侯爵さまや、伊藤公爵さまともきわめて深くご交際をいただいてきたアーウィンの家族のものがなぜスパイ容疑をうけねばならないのでございましょう。口惜しいことでございます。よくよくお調べください。それでもなお、お疑いでしたら、またお訪ねくださいまし」

刑事は気を呑まれたように、後退りして深々と辞儀をしてから、

「よくわかりました、どうかご安心の上、当所にお暮しください」

うって変わった慇懃な態度で告げると帰っていった。すでに伯父バブの家にも憲兵が現われ、

「西洋人の家だから土足でいいだろう」

とばかり土足のまま踏み入り家宅捜索が行われたということを聞いていた。

伯母ベラのこの場合の毅然とした態度に雪子はびっくりした。同時にもっとも弱い立場におかれながら、権力に屈せず、堂々と相対した伯母を誇らしく思った。真の勇気を教えられたのだった。

村人の白眼視をうけながら、配給の行列に並び、重い荷物を抱えてトボトボ歩いていた伯母の姿は痛々しいものであったが、一言も愚痴をこぼさなかった。辛いとか苦しいという言葉はついぞ聞いたことがなかった。

大学卒業後、雪子は英会話学院からの帰途、ＹＭＣＡの外塀に「アメリカ人支配人、秘書を求む」とある貼紙

見て応募してみた。幸い採用になったが、ろくに英語を話せなかった雪子は一週間で馘になった。同じ神田の英会話学院に通っていたのはスピーチに慣れる必要を感じてのことであったくらいだから、この就職の失敗は当然だった。アメリカ人の血をひく人間が英語を話せなくて馘になったのだから、恥ずかしい限りだった。

（日本人になりきれず、アメリカ人にもなれない）

宙に浮いた存在である自分が情けなかった。

祖母イキが残してくれ、

（一生なにもしなくても、お釣りが出ます）

と言われていた蓄えも竹の子生活とインフレ、新円切り替えの追い撃ちにあい、底が見えていた。なんとか働く必要があったのだ。国破れれば、個人もまた貧しくなることを雪子は痛切に知ったのであった。

雪子を馘にした支配人はしかしほかの仕事を紹介してくれた。いかにも合理主義に生きる国の人の計らいであった。新しい仕事は進駐軍婦人軍属宿舎のデスク・クラークといった仕事で、出入りする軍属のチェックをし、外出の際鍵を預かったり、電話のメッセージを伝えたり、タイプを打ったりの雑用であった。隔日勤務の十二時間労働は過酷であったが、無我夢中になって働いた。雪子の発音が分らなくて相手の癇癪玉を破裂させることもあったが、数ヶ月するうちに英会話にも馴れ、やっと落つき周囲を見廻せる余裕をもてるようになった。

「古い男靴を履き、粗末な手作りの服を来て必死な顔をして、私の前に現れたあなたを追い返す勇気はとてもなかった」

とテキサス出身の支配人は後日述懐したし、副支配人だった女性は、

「あなたが混血であることを知り、自分も二世として偏見に苦しんだ経験から、身につまされた、どんなことをしても、あなたを助けようと思った」

と語っている。待遇は日本人従業員と同じ円払いで微々たるものであった。ドルで月給をとるためには軍属試験をパスしなければならなかった。雪子の英語力ではとうてい手の届かない望みであった。

敗戦国民としての屈辱から逃れるにはアメリカ人になるよりほかなかった。しかし、二重国籍で日本に残った自分にはアメリカ国籍はないものとあきらめていた。

「ユキちゃん、こんなに貧乏で、狭い日本にいるのなんか、たまんないよ、ボクは泳いでもアメリカへ行くよ、横浜の総領事館へ一緒に行ってくれないか、ボクたちの国籍がどうなっているか、調べてみよう」

バフ伯父のところの従兄弟のジョニーが訪ねてきてそう言った。伯父バブは通称で雪子の亡き父の兄ロバート二世である。一歳年下のジョニーは弟チャリーとともにその母を結核で失ってから一時期引取られ、ともに暮した仲であった。

「あなたの国籍はまだそのままありますよ」

総領事館では雪子たち二人は別室に分けられ、事情聴取があって、長い時間を待たされた。かの女を扱ったのは二世の女性係官だった。

「非常に珍しいケースですね。でも、ほんとによかったわね。ベリハピーですよ。おめでとう」

と、しっかり握手の手をさしのべてくれ、日本の選挙に投票をしていない証明、日本の軍隊に入隊しなかったという証明を区役所で交付をうけ、再度来るように、手続きの済み次第、アメリカ国籍の証明書が発行されるであろうと説明された。

ロビーに出るとジョニーが同様の結果に顔中いっぱいの喜びを表わして待ちうけていた。

「ユキちゃん、バンザイだよ、ボクたちこれでアメリカ人になれるんだ。大手を振って外人専用車にだって乗ることができる」

「……」

雪子は笑みを返しながら、少しばかり答えようように窮した。かれの単純な喜びように対し、にわかには同調し得ない。心に屈折するなにかがあった。

日本流に（バンザイ）とジョニーは言った。そして、（外人専用車に乗れる）とも言った。（泳いででもアメリカへ行く）という気持は雪子にとっても、いまは痛切な思いであることではかれとあまり変わりがない。

窓ガラスは破れ、座席は刃物で裂かれ、剝ぎ取られたままの、日本人のすし詰め満員電車の一方に、連結された「外人専用車」のある一時期があった。占領軍関係その他の外国人に限る乗車の特権が存在していたのだ。同様に占領軍にかかわる建物すべてが当時はオフリミットだった。差別をされ戦後をあえぎ生きる日本人の列の中から離れ、快哉を叫んで良いのであろうか。国文科に学んだ雪子は芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という作品を知っていた。あのカンダタのように蜘蛛の糸に縋って一人助かろうとし、多くの友人たちを裏切って良いものか、躊躇が胸の中でせめぎあうのだった。

ほど経てアメリカ人国籍証を無事にうけ、外人登録を済ませて外人用特別食料配給券をもらった。バター、チーズ、砂糖、小麦粉、パンなど当時の日本人の手に入らないものが、安価で手に入るようになり、やはり相当うしろめたい気がした。雪子は配給の半分を伯母に廻すことにした。その心根が嬉しくベラは涙をこぼした。

雪子は間もなく米国国務省特需課のクラークの職に応募し採用された。年俸三千六百ドルであった。この当時のドルは三百六十円の時だから、日本の大学卒の年俸八万円ほどに比して換算百二十九万六千円は大変な高額だった。国務省特需課は進駐軍とは別格で大使館と同格の官庁であった。雪子は縋った蜘蛛の糸に助けられた。

〈未完〉（五・三・二九）

本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。

編集室日誌

◆力耕、われを欺かず、ついに五十号に達するは目睫、いよいよ励みあるのみ。目指す彼岸は悲願に通じる。

◆三戸岡道夫の本誌連載作品「男たちの藩」が企画出版にのって、既刊の企業小説六冊に続いて刊行された。平成の林不忘いよいよの登場である。拍手、拍手。

◆続いては柴田富佐子の書き下ろし「酒屋そだち」が刊行される。わが「作家群」の『まんじ』のバンザイをいまこそ唱えたい。

◆本号はまたまた常連で紙幅を埋めた。執筆なき同人それぞれに止むを得ざる事情あってのこと、寛容を願っておこう。

◆本号よりワープロによる製版に切り替えられた。紙面の多少とも様子が違うのはそのためである。

◆ワープロによる清打ちは従前のタイプに数倍するスピードに驚く。本号の原稿の分量では入稿後一週間で初校という早さだ。GWを控える本号の発行はお蔭で定期を確保できた。

（お）

「まんじ」　第四十八号

平成五年五月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎　〇三（三二六一）一六一〇

目　次

詩「都会の海」ほか二編 …… 青木昭成 1
天守台（六十五枚） …… 三戸岡道夫 5
【連　載】
アルウィン家の人々（第十回） …… 大和禎人 28
近藤富蔵の生涯（第二十回） …… 金子正義 38
編集子のメモ …… 48
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

都会の海　ほか二編

青木昭成

都会の海

都会の海の底のほうには　駅がある
駅にはいつも赤い矢印が
「お手洗いは
　階段の上にあります」
ときまり悪げに吊るしてある
だから朝夕　上へ上へのぼる魚の群と
下へ下へくだる魚の群と　擦れちがい
もうながいこと挨拶の習慣をなくして
横をむいたり斜にかまえたり

港へむかう道路では　いく筋もの
こんぶの幹と幹がクロスして
わかめの枝と枝がふれあいゆれあう
「落下物あり
　運転にちゅうい」
標識はながれ　ひかりの板はゆがむ
干潮線のうえでは（砂蟹）たちの一団が
むしんに洞穴を掘りすすめている
やがて公園のベンチに潮がみちるころ
きまって　横へ横へ図体をゆずりあい
しゃくどう色の鋏をもちあげて
小さいな弁当箱をひらく　それはなぜ

大潮の日は　ほんだわらや流砂や岩礁や
海の臭いが空いちめんにたなびく日
靄が生きものの肌から肌へ纏わりつく日
会館まえの岩だなに　ときならぬ陽だまり
若い（あいなめ）たちがヘルメットを揃えて
知らず知らず躰を婚姻色にそめている
おたがい意味ありげに尾鰭をふりあう
あの植え込みの立看板に
「空き缶の

ポイ捨ては止めにしよう」
としつれいな警句が

都会の海には見えない壁がある
仰げば　とがってひかる鋭角になる
屈めば　しめってひらたい鈍角になる
それに回っても回っても消えない渦
ただ（くらげ）たちは軽飛行機の姿で
鳩のように舞いおり舞いあがり遊びあるく
「ボール投げ厳禁　飛び出すな」
とゆく先々に「牡蠣」の殻が貼ってある
潮の気まぐれに逆らわない「いそぎんちゃく」と
骨格のうえに骨格をかさねて「珊瑚礁」の
建物が共生している

「吸いすぎに注意しましょう」
どの空箱にもていねいな印刷がしてある
神経質な「くろだい」たちよ　バス停で
あわてて煙草の火をもみ消すな
横柄な「かさご」たちよ　劇場の薄明かりで
いやみな椅子にすわって空パイプを
銜えてみせる気ざはよせ
事務所の廊下でふりむきざま追いつめたように
肺癌の話をはじめることはない　「さより」たちよ
とは言いながら　都会の海で早起きすれば
目にする「ひじき」の静かなおしゃべり
夜更しすれば「テトラポット」の寡黙

それから　もっぱら右目だけで
ものを見る質に生まれついた（かれい）たち
乳母車をおして昼の歩道で退屈している
「子だくさんの利口者だよ」
と口をそろえて言う（いわし）たちの群青
小潮の日にもゆれる交差点のシグナルの腕
（しまだい）たちの若い無頼をさえぎる点滅
これも　とりとめない都会の海のしらべ
そして　もっぱら左目だけで
ものを避けてとおる質の（ひらめ）たちが
ダンプを駆ってへどろを巻きあげてゆく

それは都会の海のさだかでない掟
（ほおぼお）たちがとがった頬と
玉虫いろの翼をひろげて威嚇している
それは都会の海にふとながれる虚ろ
（うみへび）たちが洞穴から生ぐさい息を
向かいがわのネオンに吹きかけている
「この先
　通り抜けできません」

ちいさな路地におおきな波浪ができて
おおきな波浪がちいさな路地を潰した
都会の海の底は巨大な　でこぼこ

大磯にて

友人は「期待しないで」と案内してくれた
にもかかわらず私は期待しながら
コンクリートの舗道を歩いていた
「心なき身にもあわれはしらげり」か
西行がそう詠んだのは沢のほとりのはずだ
それが虚構でないにしても　これは少々ちがう
この石碑の「旧跡　鴫立沢」の筆太なこと
「それをあげつらう理屈もないよ」と彼
そうか「鴫立つ沢の秋の夕暮れ」ではないのだ
ふるい伝承があたらしい伝承にとり囲まれて
石橋の袂のかすかな「鴫立つ沢」の水の音
それはそれで何かのキー・ワードかもしれぬ

坂田山は「濃いみどりいろだ」と
私は褒めたつもりで言った　そのとおりに
ほそい沢が木立の段丘をかけおりてくる
鉄道と元宿場と旧街道をいっぺんによぎる
西行に私淑していたはずの　かの芭蕉も
「この相模路を往き来したのかな」と私
けれど返事はなくて「鴫立庵」がそこに
「俳諧道場」の扁額を正面にかかげて待っていた
句会に歌会にお茶会に　人々で賑わうであろう
だから「ほら生活排水の異臭が」などと
沢をふり返えりながら呟く男は
ユーモアもアレゴリーも解さない奴なのさ

残像

それは百舌の姿をした私の　記憶であった
きまった梢の高さに　いつも隠れ住んで
身を投げおとすように翔びたつことに
そのころ　私は自由であった

それから境界の峠は　どんどん切り崩された
アスファルトの坂道は勾配をうしない
町はいっせいに看板を高く掲げていった
それは水成岩の　地層のほそい縞であった

気がとおくなるほど太古のしるしなのに
メッシュの壁に押さえこまれ　綻びて久しい

キャンデー売りは自転車に跨がってやってくる
だがあの小旗がまさか　また揺れるはずはない
私がむかし鞄にいれて抱いていた　それは童画だ

樺色のコンバインが　短い影をひっぱっている
ゆっくり這いながら私の畑をたがやしている
幾重にもかさなった気分が　だんだん平坦になる

それは転調のおわった私の　日記であった

天守台

三戸岡道夫

（一）

群青の美しい松並木が、東から西へつづく東海道の一角に、松並町はあった。

東海地方の豊かな光が、太平洋に面した町全体を、いつも芳醇に包んでいた。夕靄がしらじらと松並木に立ちこめ、やがて流れるように町並の屋根を濡らしはじめる頃になると、廣重が描いた錦絵の面影が、靄のなかに影絵のように浮かび上がってくるのだった。

歴史をたどれば、松並町は城下町として発展した。かって偉容を誇った松並城は、今は現存していないが、その小高い城跡は、あたかも松並町に浮かんだ軍艦のように、町の中央にそびえていて、城跡の一番高みに登れば、松並町を一望に見下すことができた。

城跡にはおびただしい桜樹が茂っていた。春になると桜は城跡を花の祭壇のように飾りあげ、花が散ると、すばやく新緑に衣更えして燃え上った。

古い石垣に沿って坂道があり、堀の名残りの池が青黒い水をたたえて、桜並木を吹きすぎる風の音を、静かに聞いていた。この松並城跡は町の公園に指定されていて、春の名物の桜祭りには、桃色の雪洞が桜樹の間に立ち並び、近郊からの花見客で賑わった。

しかし、大東亜戦争が始って以来の戦局のあわただしさは、町の住民からも、そうした花祭りの行楽を次第に奪って、現在では桜花だけがいたずらに華やかに咲いて、はかなく散っていくばかりであった。

町を貫流する松並川は、ちょうど松並城跡をぐるっと半廻りほどS字型に取巻いて、ゆったり蛇行していた。水は澄んで、川底の小石が光り、豊かな水量は両岸の水草の緑をたっぷりと潤していた。

昭和十九年の四月。

松並町の朝は静かに明けた。ぐっすり眠っている町は青い朝靄に色濃く包まれて動かず、鳥も飛ばず、松並城の天守台だけが盛り上った背中を、町の中央に見せていた。だが、東の山の端はほの白く明るみはじめていて、あと一時間もすれば、その山頂から、ぱっと太陽が顔をのぞかせるに違いない。

窓にオレンジ色の光を灯した一番列車が、勢よく松並駅を出て、東を目ざして一直線に走っていった。が、突然、

ピーッ、ピーッ、ピーッ、

列車はけたたましい警笛を発して、急停車した。列車は、なにかどろどろしたものを二、三十メートル引きずり、車体をぎくしゃくそっくり返らせて、ぴたりと停った。乗客がいっせいに、窓から首を出した。

ピーッ
ピーッ
ピーッ

列車はふたたび警笛を鳴らし、あわただしい空気を、眠りから覚めきらぬ町の上にまき散らして消えた。不気味な警笛のひびきは、町民を目ざめさせ、いつもより早めに松並町を朝にしてしまった。

懐中電灯を片手にした松並駅の駅員が数名、線路の砂利を踏んで列車の方へ走っていった。列車は、黒々と、のさばるように巨体を地上に横たえ、汽関車の煙突は、

はっ、はっ、はっと、真白な蒸気を、まるで動物の呼吸のようにまき散らしていた。列車からも車掌が線路に飛び下りて、なにかわめいて走っていった。

「轢いたんですか」

駅員が息をはずませて聞くと、

「しょうがねえなあ、朝っぱらから飛びこみやがって」

車掌はぶつぶつ小言を言った。

駅員が懐中電灯で車体の下を照らすと、鮮血がいちめんに散り、その横に、襤褸の固まりのようなものが、くちゃくちゃと丸まっているのが見えた。切断された腕の一本が、すこし離れたところに転っていた。

駅員が血まみれの固りを動かそうとすると、車掌が、

「動かしちゃいけない。すぐ、警察へ電話してくれ」

と叫んだ。

「おい、まだ子供じゃないか」

「学生だよ。中学生かな」

車掌がぶっきら棒に答えた。

「自殺かな?」

「と思うけど、靄がひどくて、よくわからなかった。不意にレールの上へ出てきたんだ。停める暇なんかなかったよ」

列車は死体を三十メートルも引きずっていた。

駅員の一人が駅に駆け戻り、警察署へ電話を入れた。

松並中学校の四年生である日比野正英は、この朝の警笛を蒲団の中で聞いていた。聞いたというよりも、警笛の音で目をさましたと言った方がいい。まだ、外はうす暗かった。彼は不安になって電灯をつけ、そしてまた、蒲団の中へもぐり込んだ。警笛はひっきりなしに続き、それは怪鳥の鳴声のような不気味さだった。

隣室で寝ていた母親の素乃は、そろそろ起きて、朝食の仕度に取り掛らねばと、思っていたところだった。彼女は障子越しに正英にむかって、

「何だろうねえ、あの警笛、気味が悪いねえ。また、誰かが轢かれたのかしら」

それを機会に素乃は起き上った。

正英は蒲団の中で、母が井戸水を汲む音や、薪を割る音を聞いていたが、早朝のこの事件は、やがて正英の家へも波及してきた。

家の前を人の足音がきぜわしく通りすぎ、誰かが駅の方へ走っていった。隣家の主婦が来て、素乃と勝手場の入口で立ち話をしているのが聞えた。その、ぼそぼそとした話し声の途中に、素乃の、

「まあ、かわいそうに」

という言葉がはさまった。正英は不安にかられて、話しの声の方に耳をそば立てた。すると、素乃がばたばたと足音をさせてやってきて、

「正ちゃん、正ちゃん、大変、沼崎君だよ」

「えっ、沼崎が轢かれたの?」

正英は蒲団の中から、はね起きた。沼崎武夫は、正英の一番の親友だった。

「朝の一番列車へ飛び込んで、自殺したんだって…」

「えっ、自殺?!」

正英の頭は混乱し、思わず悲鳴のような声をあげた。

沼崎武夫が自殺と聞いたとき、正英の頭には、昨日の松並中学校での出来事が一瞬ひらめいた。あの衝撃が、沼崎を自殺に追いやったのにちがいない。

（金剛寺教官が沼崎をなぐり殺したのだ）

昨日の放課後である。沼崎武夫は、松並中学校の配属将校である金剛寺教官から、死ぬほどひどい私刑を受けたのであった。その私刑で血だらけになり、意識を失った沼崎を、正英は友達といっしょに彼の家まで、引きずるようにして運んでいったのである。その親友の血なまぐさい身体の重さが、一夜明けても、まだ正英の腕の中に残っていた。

正英は異常な興奮で、身体が小刻みにふるえた。

父親の鉄五郎も蒲団から首を持ち上げ、

「沼崎君が自殺したんだって? ひどいことを、されたもんだ」

正英はその父の顔をきっと見つめて、

「あんなになぐられちゃあ、誰だって自殺したくなるよ。顔がまっ青にはれ上って、血だらけで、最後は気を

失ったんだもの、畜生め！」

昨夜、素乃は正英の帰りが遅いのを心配して、何回も家の外まで様子を見に出た。正英が帰ってきたのは、八時をもう廻っていた。正英は蒼ざめた顔で、異常に興奮していた。

（金剛寺教官の私刑を受けて、気を失った沼崎を、家まで送り届けてきたんだ）

と聞いた時、素乃は、そんな恐ろしい中学校から、すぐ息子を退学させてしまいたい、と思ったくらいだった。だが、沼崎武夫がそのために鉄道自殺をするなんて、その時は夢にも考えることは出来なかった。だが、自殺は現実に起きたのである。

「かわいそうにねえ。親ごさんも、せっかくこれまで大きくしたのに。沼崎君は一人息子だったねえ」

「妹がいるよ」

「でも、妹がいてもねえ」

素乃は、ふっと、子供の自殺を止めることが出来なかった沼崎武夫の両親の心情に思い至って、我が事のように涙があふれた。

正英は朝食もとらずに家をとび出すと、息せき切って、線路へと走った。線路に駆け上ると、すこし東の方に、それらしい人が群れているのが見えた。正英はその方へ走った。

すでに列車の姿はなく、駅員と警官が二、三人で、手帳にメモしたり、事故現場の見取図を描いたり、巻尺で血痕の距離を測ったりしていた。見物人が遠くからそれを取巻くようにして、変に親しみのない眼つきで眺めていた。

正英はその人垣を押し分けて、前へ出た。

沼崎武夫の轢死体は、蓆をかぶって横たわっていた。その蓆の端から、紺色のシャツのようなものが見えた。だが、それに近づくことは許されなかった。血痕はすでに地中にその大半を吸い取られ、半乾きの色で散らばっていた。

人垣の中には松並中学校の生徒も、二、三人、混っていた。正英は彼等と目を合わせただけで、黙っていた。

東の空からは、太陽が昇りはじめていた。山際の雲が白絹のように光ったかと思うと、まばゆい光線が一直線にのびてきて、レールに鋭く反射した。そのレールが銀色に光るのを眺めながら、正英は、

（死んでしまった、死んでしまった）

と、つぶやいた。すると、にわかに、人間の死の重みというものが、正英の上に雪崩のように落ちかかってきた。

（陽がすっかり昇ってしまわないうちに、屍が片付けられないとかわいそうだな）

正英はぼんやりそんなことを考えていた。

正英は家へ帰ろうとした。すると、首をうなだれ、肩を落し、愕然と幽霊のように立っている、一人の男の姿が目にとまった。それは沼崎武夫の父親だった。正英は声をかけたものかどうかと、ちょっと迷っていると、

「ああ、日比野君だねえ」

向うの方から声がかかった。

「死んでしまった、死んでしまった、武夫はあの通り死んでしまった。あのように襤褸のようになってしまった」

二人はもう一度、レールの横の屍に眼を走らせた。

（二）

自殺した沼崎武夫は、世間のどこにでもいる普通の中学生だった。背がひょろりと高く、ちょっと子供っぽい顔で、顔にはいつも人のよさそうな微笑を浮かべていた。そんなおっとりした表情が、正英は好きだった。

だが、性格に優柔不断なところがあり、身体は大きくても動作は活発でなかったので、教練の時間などには時々へまをやることがあった。たとえば、金剛寺教官がもっとも神経を尖らしている敬礼とか、軍人勅諭の暗誦とか、洋服のボタンが取れたらすぐつけるとか、そうしたことに余り神経を働かせなかったので、時々、金剛寺教官の不興を買うことがあった。

それに加えて、父親が会社を経営していて、家庭が裕福なところから、沼崎は中学生にしては余裕のある小遣銭を持っていた。彼はそれで参考書を買うよりも、映画を見たり、餅菓子屋で大福餅を頬ばる方が好きだった。正英もよく沼崎といっしょに餅菓子屋ののれんをくぐった。そんなところを学校側や上級生に見つかれば、ひどい目にあうのだが、二人は平気で、草餅の緑色の柔らかさに秘密のよろこびを分け合った。

だが、沼崎武夫は決して不良中学生というわけではなく、自分の欲望を抑えるのを甘やかされて育ったので、時局の動きというものに無頓着だったのにすぎなかったのである。だが、戦時の学校教育にとって好ましくない、そうした場面を沼崎は発見されて、一、二度、担任の教師から注意されたこともあった。

正英と沼崎とは、松並中学校入学以来の親友だった。二人は入学したその日に、もう親しくなった。その日、正英は中学校からの帰りに、一人で天守台へ登った。松並城跡の丘は、中学校の、道路をへだてたすぐ東側に、そそり立っている。中学校の裏門を出ると、城跡の桜がまぶしいように咲き乱れ、その下陰に、天守への高みへの坂道が伸びていた。

正英はこれまでにも何回となく、天守台へ登ったことはある。だから、別に珍しいわけではなかったが、中学校に入学した正英は、中学校のすぐ横の天守台に、これまでにない親近感を抱いたからであった。

天守台の頂に登ると、正英は、その真下に拡がる中学

校の校舎や、プール、クローバのいちめんに茂った緑のグランドなどを、なにか珍らしいものでも眺めるように見下した。

その時、もう一人の中学生が、同じようにあれこれ中学校の校舎を眺めているのが、正英の眼にとまった。カーキ色の学生服の匂ひはま新しく、ゲートルの巻き方もぎこちないところから見て、正英と同じく今度入った新入生だとすぐわかった。それが沼崎武夫であった。

「中学校を見ているのかい」

正英がそう声をかけると、その声に沼崎は顔をあげて、

「うん。君と僕は同じクラスだね」

と答えた。入学したばかりなので、正英はまだクラス全員の顔が頭に入っていなかったが、沼崎の方はもう正英の顔を覚えていた。

「君の家、どこ?」

正英が聞いた。

「松並町」

「じゃ、僕と同じだね」

松並中学校へは、松並町の学生だけでなく、近郊の町村からも大勢の学生が通学してきていた。だから、二人が同じ松並町出身だということは、いっそう二人に親近感を抱かせた。

松並町には小学校が、東と西と、二つある。正英は東小学校、沼崎は西小学校だったので、同じ町に住んでいながら、これまで二人は顔を合わせることがなかったのだった。

こんなきっかけから二人は仲よしになり、爾来二人の友情は、四年生になる今日まで、変わることはなかったのである。

沼崎武夫が突然、松並中学校の職員会議に大きな問題を投げかけたのは、彼が松並女学校の女生徒に手紙を出したという、いわゆる恋文事件が持ち上ったからであった。中学生にとって、そうしたことは最も厳禁さるべきことと考えられていた時代だっただけに、予想以上の反響を松並中学校の中に捲き起こした。

以前に一度、正英はその女学生のことを、沼崎から聞いたことがあった。

「菅野村から通学していてさ、いつも僕の家の前を自転車で通るんだよ」

沼崎多少はにかんでそう言った。

「彼女の方は、君のこと、知っているのかい?」

「それは、知らない」

「じゃ、仕方がないじゃないか」

「でも、もしかしたら知っているかもしれない。だって、いつも彼女が家の前を通るとき、僕が窓から見ているから、気がついているはずだよ。だから、ちょっとは自信があるんだけれど」

それを聞いた時、正英も、清純なセーラー服の女学生

が自転車に乗って、白い襟をひらひらさせながら走る姿を幻のように思い浮かべ、瞬間、甘やかな異性への憧れを感じた。

その女学生に出した沼崎の手紙が、学校に見つかったのである。当然、松並中学校の教師達はこの事件を、自堕落な中学生の不良行為としか見なかった。特に配属将校の金剛寺教官の眼には、そう映った。恋文事件は本人一人の不始末に止まる問題ではなく、松並中学校全体の名誉の問題であり、ひいてはその統率者たる金剛寺教官の顔に泥を塗るものだったからである。金剛寺教官は激怒し、次の職員会議の日まで、処罰の決定を待っていることが出来なかった。

その日の午後、金剛寺教官は、授業中の沼崎を、教室から呼び出した。教室を出ていく沼崎の後姿に生徒たちは一瞬不吉なものを感じ、数学の授業は一時中断された。

金剛寺教官は、人の居ない職員室の片隅に沼崎を立たせると、いきなりビンタを二つ三つくれ、震えている沼崎の顔にあらゆる痛罵を浴びせた。沼崎は背だけは金剛寺教官より高くても、まるで豆腐のように頼りなかった。

そこへ四年一組担任の若松教師があわてて入ってくると、

「どうもお手数をかけます」

と、金剛寺教官の方へは卑屈に笑いかけながら、沼崎の方へは険悪な眼を向けて、

「それが女学生に手紙を書く顔かい」

と、金剛寺教官への義理立てから、沼崎の顔をぴしっと一つ、ひっぱたいた。金剛寺教官はそれを心地よさそうに眺めながら、

「四年一組には、ろくな生徒は居ませんなあ」

「本当に、わたしもとんだ組を受取ってしまったもので……」

放課後になると、

(今日の夕方、沼崎は、教官から半殺しの私刑を受けるらしい)

という噂が、どこからともなく校内に流れた。心配になった正英は、親しい友達と一緒に、遅くまで教室に残っていた。

生徒たちがすっかり帰り、職員室も空になってしまうと、沼崎は職員室から、校舎の一番奥にある、うす暗い地歴教材準備室へ移された。正英たちは廊下の隅で、その後姿を見つめていた。もう沼崎を残して帰ることはできなかった。切ないような胸さわぎがした。

(誰かに知らせなくては…)

だが、誰に知らせたらいいのかわからなかった。沼崎の姿が廊下の端から消えてしまうと、若松教師があわただしくスリッパの音をさせて、その後を追った。

沼崎が地歴教材準備室へ入ると、もう金剛寺教官は腰掛けて待っていた。その室は陰気で、細長い部屋だった。

右側に並んだ硝子戸棚の中には、古代の土器、埴輪、刀剣、貝殻などが、埃を浴びて並んでいた。手垢で汚れた掛地図や地球儀、粘土細工の地図模型などの間を縫って、沼崎は奥へ進んだ。

若松教師は金剛寺教官と並んで立った。

「ささまの心を入れ替えてやる」

金剛寺教官が怒鳴った。

「歯を喰いしばっていろ」

と、若松教師も眼を光らせ、

「ささまーっ」

と低くうめくと、二匹の獰猛な狼は、か弱い中学生にとびかかった。

なんの防備もせずに立っている沼崎の顔を、二人はまるで拳斗の選手のように、真正面から目茶目茶になぐったり、突いたりした。金剛寺教官の鉄拳が顔の真中にめり込んで、沼崎は床の上にひっくり返った。だが、すぐ起こされた。鉄拳が矢つぎ早やにくり出されると、鼻がぐしゃっと音を立て、鼻からぱっと鮮血が噴いて、金剛寺教官の手を染め、沼崎の洋服の胸もとに滴り落ちた。

沼崎はうめき声をあげた。顔は痛さを通り越して、火のように熱かった。眼や唇のまわりが紫色になり、顔全体がはれ上ってきた。沼崎は五十までパンチを数えたが、それ以後は数えることが出来なかった。

沼崎はよろよろと、床の上に崩れそうになった。すると若松教師がそれを支え、金剛寺教官が思いきりスリッパでなぐった。耳がガーンと鳴り、沼崎は音を立てて床に倒れた。だが、すぐ、若松教師が沼崎をたたき起した。沼崎が立上る間髪を入れずに、再びスリッパが鳴った。沼崎は機関銃の弾のような鉄拳の下に、顔をさらしているだけだった。

夕日が窓に斜めの光を投げかけていた。

沼崎の傷口や、鼻や唇から流れ出た血が、赤茶けた光を受けて痛々しく光り、床に散った血の大部分はすでに乾いて、暗赤色にくすんで見えた。沼崎はすでに叫び声をあげる力もなく、がっくりと首を垂れて、意識を失った。

「思い知ったか、このど阿呆め」

金剛寺教官の足が、沼崎の横腹を蹴った。

「教官、大丈夫でしょうか」

若松教師はすこし心配になった。

「なーに、水でも掛けておけ」

金剛寺教官は荒々しい足音を立てて、職員室へ戻っていった。

それからどの位時間が経ったであろうか。沼崎はまっ暗な地歴教材準備室の中で、のろのろと起き上った。顔の骨が、のみで叩かれるように痛んだ。廊下へ這い出ると、そこへ正英たちが四人走ってきた。

沼崎を抱き上げたとき、正英たちは、沼崎が死んでいるのかと思ったほどだった。彼等は水道の蛇口をひねって、沼崎の顔の血を洗った。水の冷たさで、沼崎はかすかなうめき声をあげた。軟体動物のようにくにゃっとなった沼崎を、正英たち四人は抱きかかえるようにして、家まで運んだ。

沼崎家では、あまり帰りの遅いのを心配した母親が、様子を見に玄関から出ようとしたところだった。母親は、運び込まれてきた息子を見た時、声を立てることも出来ぬほど驚いた。やっと奥へ向かって、

「あなた、武夫が……」

と、それだけ叫ぶと、息子を抱いたまま、玄関先に倒れ込んでしまった。父親が出てきた。父親も事情を明敏に察知すると、息子を引きずるようにして座敷へ運びこみ、寝かせた。そして、

「武夫、武夫！」

と、叫びながら、

「早く氷を持ってきなさい」

と、怒鳴るように母親へ言いつけた。

沼崎の手当てが一応終ると、父親はやっと玄関に待たせてある正英たちのことに気がついた。家の奥から出てくると、正英たちの前に何べんも頭を下げて、

「ありがとうございました。本当によく連れてきてくれました。感謝いたします。武夫のいい友達になってくれていて、本当にありがとう」

と、玄関の板の間に、まるで蜘蛛のように這いつくばって、何回もお礼を言った。

「お陰で一応落着いたようです。上って、様子を見ていってやってください」

正英たちが靴を脱ぎ、沼崎の寝ている座敷へ入っていくと、その時、ばたばたと足音がして、おかっぱ頭の少女が走ってきた。黄色のハーフコートを着た少女は、正英たち四人の中学生を見ると、その眼を激しい憎悪に燃え上らせたが、彼等が兄の親友だと知ると、その両眼をみるみるシクラメンの花弁のように、涙で潤ませた。そして、寝ている沼崎に取りすがって、

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

と激しく泣いた。沼崎の妹は小学校の六年生で、少女といっても、まだその肩の辺りは骨ばって、男の子のように見えた。

沼崎家を出てから、正英は友達と別れ、夜道を一人で家へ帰りながら、さっき見た少女の横顔を思い出していた。まっ黒な大きい二つの瞳が、正英の心に強い印象で残っていた。

正英たちが帰ってしまうと、沼崎夫妻は息子の側に付きっきりで、まんじりともせずに夜を過ごした。夜中に何回も沼崎は蒲団の上に起き上って、

「死にたい、死にたい」

と口走った。

「馬鹿なことを言うんじゃない。寝なさい、寝なさい、寝ればすっかりよくなるから」

「僕、戦争へ行きたいなあ。満州へ行きたい。こんなことをしているより、南方の戦争へ行って死んでしまった方がずっといい」

沼崎はなにかに憑かれたような声で、そう訴えた。

明け方近く、沼崎はすやすやと寝息をたてはじめた。両親はやっと安心して、しばしのまどろみに入った。どのくらい時間たったであろうか。はっと気づいた時、沼崎の姿は蒲団の中には見えなかった。

不吉な予感が部屋の中に渦巻く。

その時、鋭い警笛が駅の方から聞えてきたのである。父親はその音に、はっとなって、線路へ向って走っていった。恐れていたように、警笛の餌食となったのは、わが子であった。

（三）

松並中学校の配属将校である、陸軍少尉金剛寺雄一は、その朝変に寝苦しかった。

むし暑くて、うとうとすると変な夢を見て、べっとり寝汗をかいた。夢の中で、

ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、

と凄まじい音がした。何かが激しい勢いで回転していて、その中心へ彼の身体が吸い込まれていく。

（何の音だろう）

考えているうちに、みるみる大きな輪が現われ、もの凄いスピードで、彼をめがけて突進してきた。悲鳴をあげて逃げようとした。だが、足が動かない。何十輌と連結した車輌が、倒れた金剛寺教官の上を走り抜けていった。金剛寺教官は、自分の身体の上を走っていく車輌の回転をはっきり見ながら、悲鳴をあげたー。

そこで金剛寺教官は目をさました。

窓から入る光線が、寝ている金剛寺教官の顔を直射して、びっしょり汗をかいていた。昨夜、寝がけにひっかけたウィスキーの力でぐっすり寝込み、明け方の警笛でも眠りをさまされなかった。だが、さめ際に見た夢を思い出して、ちょっと不気嫌な顔になった。

金剛寺教官は寝台から飛びおりると、大きく背伸びをし、両手を四、五回、左右に振った。その姿が壁の鏡に映っているのを見ると、近づいて、ポーズを取ってみた。

横向きのポーズ、

腰に手を当てて、ちょっと上半身をひねった姿、

厳粛な敬礼の姿、

いずれにも、青年らしい若々しさと、逞ましさが溢れている。

（うん、若い女を魅きつけるのに十分な魅力だ）

鏡の中の自分の姿の、しなやかさと優雅さに満足した。

金剛寺教官は気どり屋であったのだ。

鏡に顔を突き出し、髭ののびた顎を右手で撫ぜると、

（顔を当らないといかんな）

そうつぶやいて、洗面所の方へ行った。

その時、アパートの家主の妻が、二階の階段を上ってきた。

「教官さま、お客さまですよ」

廊下から下を覗くと、階段の下に、若松教師が立っていた。妙にそわそわしている。

若松教師は部屋へ入ってきても何も言わず、眼玉をまん丸にして、ただ金剛寺教官を見つめているきりだった。

「まあコーヒーでも飲んでください。もう、民間ではあまり飲めないものですよ」

若松教師は濃いコーヒーを一口飲むと、

「あの、教官殿はまだご存じないので？」

さぐるような眼つきをした。

「なんだ」

「本当に知らないのですか」

「知らん」

「大変なことになりました」

若松教師は救いを求めるような眼つきをした。

「なんだ、早く言え」

「自殺です。自殺ですよ。沼崎武夫が自殺したんですよ。今朝早く、鉄道へ飛込み自殺を……」

「自殺?!　馬鹿、なぜそれを早く言わん」

若松教師はかいつまんで、事の経過を話した。金剛寺教官はそれを聞きながら、膝小僧がぴくんと躍り上るのを感じた。だが、彼はそんなことではびくともしないぞとばかりに、胸を張り、足を大股に開いて、威厳を保っていた。若松教師が話し終ると、

「だが、それと、この俺と、どんな関係があるんだ。一体どんな関係が」

顔を怒りで震わせながら、虚勢を張った。

（沼崎が自殺したのは、俺のせいじゃない、奴が軟弱だったからだ）

彼は不気嫌に頬をふくらませ、まるで何ものかに摑みかからんばかりの顔になっていた。

（どいつも、こいつも、ろくな生徒はおらん）

金剛寺教官は掃き捨てるように言った。理屈ばかり言ってちっとも行動しない学生、英語は満点だが射撃訓練ときたら、てんで零点の学生、勉強ばかりしているので、運動場を二周も駆け足すればくたばってしまう生徒、そんな奴はこの世の無用の長物だ、穀潰しだ。そんな中学生など、さっさと束になって死んでしまえ、と言いたかった。

ところが若松教師ときたら、自殺というだけで、もうおろおろしていた。金剛寺教官とは反対に、身をちぢこませ、昨日、地歴教材準備室で沼崎に見せた暴力の激情は、もう、どこかに吹き飛んでしまっていた。彼は世間

「いいえ、殺したのです。息子を返してください。わたしの眼の前で、息子を生き返らせてください。あなたはそれで教育者なのですか。あなたのような人間がいる中学校へは、世の親たちは、一日たりとも子供を預けておくことなどできませんよ。ああ、恐ろしいことです。十六才にもならない子供が、世をはかなんで鉄道自殺をするなんて」

だが、金剛寺教官は少しもたじろがないで、口早やに喋る男の、憑かれたような眼を見ていた。冷えたコーヒーを一口飲んだだけで、わざと黙っていた。こうした場合、下手にこちらが喋ると、相手はその言葉でますます興奮し、事態が悪化するだけだということを、処世術にたけた金剛寺教官は知っていた。

（喋りたい奴には、勝手に喋らせておけ）

彼は黙って、腰掛けたままで煙草を吸い、男の気が静まるのを待った。

やがて金剛寺教官が三本目の煙草を吸い終ったころになると、その効果が現われてきた。男は十五分近くも喋りつづけたが、そのうち喋ることが、もうなくなってしまった。すると、眼の前の青年が、実は、松並中学校の配属将校の地位を占めている人間であることが、男の心の中で次第にはっきりしてきたのである。この部屋へ入ってくるまでは、金剛寺教官を呪い、首を締め上げてやろうと思いつめていたのに、そんなことは絶対してはならないのだ。年令は若くても、金剛寺教官は、陸軍少尉というれっきとした地位を、国家から与えられている軍人なのである。

男がそういう精神状態に到達したのを見抜くと、金剛寺教官はやおら腰をあげて、

「松並中学校の全生徒の命は、すべて、この金剛寺が、上御一人（天皇陛下のこと）からお預りしております。お解りですな」

と、ちょうど閲兵分列式で、全校生徒に敬礼を返す時のような、重々しく威厳に充ちた態度でそう言った。だが、すぐ次には、声を落して、しんみりと、

「だが、あなたのご子息は本当にお気の毒なことをいたしました。ご同情にたえません」

と、まるで少年航空兵を南海の空中戦で戦死させた指令官が、泣き崩れる母親を慰めるような調子で言った。すると、これで萬事が終りだった。男の興奮は、すでにはかない花火のように消えてしまっていた。

男はもう帰るよりほかに仕方がなかった。男は出口の方へ、のろのろと退却した。それを見ながら金剛寺教官は、

（これでいいんだ）

と、にやりと笑った。

男がアパートから姿を消してしまうと、金剛寺教官はベットの上にひっくり返って、あらためて煙草を深々と吸った。それがたまらなく、うまかった。彼は両足を窓際の方へ投げ出すように伸しながら、

（でも、ちょっと厄介なことになったな）

と、煙草の煙をいらだたしげに、天井に向って吐きかけた。昨日のことについては、実は金剛寺教官も、

（ちょっと、やり過ぎたかな）

とは思っていたところだった。だが、まさか、自殺するなどとは思っていなかった。

（つまらんことを、してくれたものだ）

だが、今となっては、もうどうしようもない。金剛寺教官に必要なことは、この自殺事件の噂を、校内に拡げないことだった。

（至急、生徒たちの口を塞ぐのだ。それには四年一組のピストンを使うのが一番効果的だ）

と、自然に考えはそこへ行った。彼はすぐ階下へ下りると、電話で、

（急用が出来たから、すぐ来い）

と、ピストンを呼びつけた。

まもなくピストンは、忠実な犬のようにやってきた。彼の本名は富田浩太郎というのだが、松並中学校の中で最も抜きん出ているその腕力の、喧嘩の時にくり出すパンチの凄さが、まるでピストンのようだというところから、ピストンという渾名がついたのである。いわば、松並中学校のボスであった。

ピストンは聞かなくても、呼ばれた用件の内容をすでに察知していた。彼は部屋に入ってくると、鞄を抛り出し、壁の鏡の前に立って、上衣を脱いだ。ピストンは精悍な身体つきをしていた。彼には、戦時中の国防色の味気ない学生服などよりも、皮ジャンバーでも着た方がずっと似合いそうだった。彼は中学生らしくない、臙脂色のセーターを、上衣の下に着ていた。

ピストンは肩を丸め、腕を前に曲げて、ボクシングの姿勢をとった。すばやく両手を交互に前へ突き出し、両足で軽々と床を蹴りながら、弾力性のある身体が魅力的に動くのを、鏡に映した。

「ワン、ツー、ワン、ツー……」

と掛声をかけながら、

「ちえっ、本物のボクシングをやりてえなあ」

とつぶやいた。ボクシングの真似に疲れると、金剛寺教官の顔を見てにやりと笑い、

「沼崎のことですね」

「そうだ。早く口止めをするんだ。生徒たちが騒ぐとうるさいからな」

「言われなくたって、わかっていますよ。そのつもりでいますから」

ピストンは、松並中学校の生徒たちをすべて、自分の手で服従させる自信を持っていた。

「ねえ、一服くださいよ」

ピストンは、金剛寺教官の吸っている煙草をねだった。すでに大人の身体つきをしているピストンは、うまそうに煙草を吸いながら、

「ねえ、教官、そんなに凄く沼崎をやったんですか」

と聞いた。金剛寺教官はちょっと厭な顔をしたが、

「なに、ほんのちょっと、鼻血が出ただけだ。まったく大袈裟な野郎だよ、自殺をするなんて」

「昨夜、日比野たちが沼崎を家まで運んだんだってね。だから、あいつ、きっと喋りますよ」

「日比野が？」

「そうです。あいつは沼崎と仲がいいから……」

金剛寺教官の頭に、きまじめすぎる日比野正英の、こ憎らしい顔が浮かんだ。

「じゃあ、早く行って、うまくやれ」

ピストンは煙草の火を消し、

「へい」

と返事をすると、戦闘帽子をあみだにかぶり、鞄を尻の上で、ばたん、ばたんとさせながら、階段を駆け下りていった。

（四）

ピストンは恐ろしい勢いで、松並中学校へ走っていった。拡がる伝染病を一刻も早く食い止めなくてはならないと、まるで、戦場へ向って突進して行くような気持だった。松並川の堤の青草を踏みしだき、下級生が敬礼をしても、答礼もしなかった。

中学校の授業はまだ始まっておらず、生徒たちは勝手に騒いでいた。だが、今朝の話題は、なんと言っても沼崎の自殺に集中していた。

四年一組の教室では、正英を中心に生徒たちが集っていた。正英は、昨日から今朝にかけて、自分の聞いたこと、体験したことを、一つ残らずつぶさに話していた。

「教官とキューピー（若松教師の渾名）が、こう構えてさ」

と、ボクシングの選手のように両手を構えて、

「眼鏡をはずせ…、と怒鳴ると、顔の真正面にパンチをめり込ませたんだ。沼崎は、何糞っと、その数を数えたが、五十までは覚えているが、その後はぶっ倒れて、判らなくなってしまったって、彼の親父が言っていたよ」

「えーっ、五十もかい」

学生たちは、金剛寺教官と若松教師の残忍さに、背筋を凍らせた。

「顔がはれて、眼が見えなくなったって、言うじゃないか」

「身体が青あざで、いっぱいになったんだってね」

「そう言えば、キューピーのやつ、今朝まだ学校へ来ていないぜ。沼崎の家へあやまりに行っているのかなあ」

「馬鹿言え、あやまりになんて、行くものか。知らん顔さ。先公（せんこう）がなぐるなんて、当り前だもの。なぐられて、死ぬ方が馬鹿なんだよ。ほら、四年二組の浅川ねえ、いつか、南瓜の野郎（数学の教師の渾名）に、黒板用の太いコンパスでぶんなぐられて、頭がほじれたっていうぜ」

そうした学校の中へ、ピストンは嵐のように駆け込んでいった。あちこちで集って喋っている学生たちを見ると、ちえっ、と舌打ちをしたが、

（今からでも遅くない。まだ、噂は校内に拡まり切ってはいない）

昇降口で靴をそそくさと脱ぐと、けたたましい勢いで教室へ向った。その姿を下級生たちは、教室の窓から首を出して眺めて、

（何か起るぞ）

と身震いをした。ピストンは、

（まず、俺の子分たちを集めないといかんな。）

と胸の中で作戦計画を練り、四年一組の教室へ駆け込むと、

「おい、青井、渥美、加賀山、亀山、ちょっと来い」

ざわめいていた生徒たちは、いっせいに振り向いた。

ピストンは子分たちを廊下の隅へ呼び出すと、

「おい、沼崎の自殺のこと、喋るな」

釘をさした。

「なぜ？」

青井が眼をぱちぱちさせながら聞き返すと、

「そんなことも判らねえのか、この、とんちき」
青井の顔をひっぱたいた。
「噂を止めさせるんだ。親分からのお達しだ」
彼等の間では、金剛寺教官は親分という言い方で通っていた。子分たちにそう趣旨を徹底させると、ピストンは子分たちを従えて、再び四年一組へ入っていった。
教室の中では、まだ生徒たちがさっきと同じように、教壇の横に黒山のように集って、喋っていた。ピストンはその一人一人の襟首を背後からわし摑みにして、人垣を崩した。そして、その中央に立っている正英の肩を、ぐいっと押すと、
「ちょっと、顔を貸しな」
と、凄んだ。だが、正英の方も気が立っていた。
「言うことがあるのなら、ここで聞くよ。ここで言ってくれ」
とたんにピストンの鉄拳が、正英の顔に飛んだ。人垣がさっと崩れる。正英は仕方なくピストンに促されて、廊下に出た。廊下の隅まで来ると、ぐるっとピストンの子分たちが正英を取巻いた。ピストンが再び、
「おい、ふざけるな」
と、正英の顔に二つばかりパンチを食わせた。不意をくらって、正英は廊下に倒れたが、すぐに起き上った。
「変な話をするのは、やめた方がいいぜ」
「本当にあったことを話すのが、なぜ悪いんだい」
「おめえの身のために、ならねえからよ」
そう言ってピストンは、また、二つ、三つ、正英をなぐった。すると、子分たちも、左右から、頭や背中をなぐる。
正英もピストンに武者ぶりついていったが、それは簡単に押し返された。誰かが背後から、正英の足を拂った。正英が廊下の中央に投げ出されるように倒れると、数人の足が正英を散々に踏みにじった。
廊下に面した各教室の窓からは、上級生、下級生たちが、いっせいに首を出して、廊下の惨劇を眺めていた。
正英は痛む顔を押さえながら、教室へ戻った。すると、それまで群をなしていた生徒たちはあわてて自分の席へ戻り、こうして四年一組の鎮圧は終ったのである。
ピストンたちは次の教室へ移動していった。そして、その教室を鎮圧し終ると、次の教室へと、次第に下級生の教室へと足を伸していった。
こうして、金剛寺教官が登校するまでに、ピストンは指示通り学校内を鎮圧してしまった。沼崎の自殺を話すことはタブーとなり、喋った者は密告されて、放課後、ピストンたちの血祭りにあげられるのだった。金剛寺教官からすれば、ピストンの手段は、まさに殊勲甲というべきであった。

(五)

ピストンが中学校へ駆け出した後、金剛寺教官は手早く髭を剃り、朝食をとった。
羅紗の軍服を身につけ、剣を吊り、革の長靴をぴたりと両脚にはくと、緊張した生気が身体の隅々にまで行き渡ってきた。これから、八百人の中学生を自分の意のままに動かす一日が始まるのだと思うと、心が躍った。香水をふりかけた帽子をかぶり、その姿を鏡に映して、鏡の中の自分の姿に満足すると、アパートを出た。
松並川の橋の上まで来ると、対岸の中学校の建物に、きらきら朝日の光が跳ねていた。
堤の桜並木を二列縦隊に並んで登校してくる生徒たちが、金剛寺教官を見つけて、
「教官殿に対し敬礼、頭あ、右イッ！」
生徒たちの健康な顔が、いっせいに金剛寺教官の方を向いた。
橋の袂で近所の主婦が三人ばかりで、立ち話をしていた。だが、金剛寺教官の姿を見るなり、はたと話をやめてしまった。白い視線が彼の方に向けられている。それは、明らかに、今朝の中学生の自殺を話している眼だった。
(くだらねえ女どもの井戸端会議など、糞を食らえだ)
金剛寺教官は荒々しく橋を渡ると、砂利を蹴って校門を潜った。
まだ、授業は始っていない。どの教室の窓にも学生の顔でぎっしりで、喋ったり、騒いだり、口笛を吹いたり、また、宿題を忘れた生徒が友人のノートから書き写したりしていた。
金剛寺教官はその教室の方へ、耳をそばだてた。だが、彼等はもう沼崎の自殺のことなど、喋ってはいなかった。そんな事件などは、もうなかったかのように、いつもの無駄話にふけっていた。
(ピストンのやつ、うまくやったわい)
金剛寺教官は満足げに、鼻をぴくっと動かしながら、校長室へ入っていった。まず、学校長と意見を合わせておく必要があったからである。
校長室では、黒々と髭を生やした、小柄な、永峯校長が、デスクの前で新聞を拡げて、
(わが海鷲、南海で航空決戦を)
とか、また、
(ニューギニヤ米軍地爆撃、勝利の道は不動)
(勇戦鬼神も哭く、敵を恐怖の坩堝へ、戦略線微動だにせず)
などといった、華麗な表題のニュースを読みながら、軽い勝利の興奮に酔っていた。
深々と絨毯が敷かれた校長室の窓には、厚地のカーテンが垂れ、壁は四十年の伝統を誇る調度品で飾られていたので、その中の永峯校長の姿は、小柄でも、一種の威厳を持っていた。

永峯校長は東京高等師範学校を卒業した後、文理科大学の聴講生となって哲学を専攻した。その時纏めた、彼の戦争哲学ともいうべき（精神性の優位）という論文は、かつて中央の雑誌にも掲載されたことがあり、永峯校長は教育思想界において、かなり有力な地位を占めている人間であった。だから、毎朝、

（一発必中の我が体当り戦法、よく敵艦を征す）

などといったニュースを読むと、そこに自分の哲学の具体的な展開を見るような気がして、感激するのだった。

だが、今朝、四年一組の沼崎武夫の鉄道自殺を知った時の永峯校長は、

（教官のやつめ、少しやり過ぎたな）

と、軽率だった金剛寺教官の行動を、不快に思った。

金剛寺教官の軽率さは、その若さのせいだと思った。

永峯校長は戦争哲学の観念論においては峻烈だったが、生徒たちに対しては比較的寛容だった。彼は沼崎武夫という生徒を、恋文事件が起きるまでは知らなかった。週一回、永峯校長が受持っている『修身』の授業の時間だけでは、この平凡な生徒は、彼の印象に残っていなかった。彼が沼崎という生徒をはっきり見たのは、昨日、職員室で干物のように突立っていた時だった。背丈だけは雨期の筍みたいにひょろ長いが、頬は薔薇色のこの生徒を、それほど憎いとは思っていなかった。むしろ、職員室での無抵抗、無防備の姿に、いじらしささえ感じていたくらいだった。

だから、永峯校長は、恋文事件をそれほど重大な問題だとは、考えていなかった。ただ、永峯校長が恐れていたのは、この事件がきっかけで、彼が学校内へ築いてきた、軍国主義教育の徹底が崩れることだった。永峯校長が考えていた沼崎武夫への処罰は、せいぜい一週間程度の自宅謹慎だった。それが彼の知らない間に、死刑になっていたわけである。

金剛寺教官は校長室へ入ると、永峯校長の前の椅子にぴたりと座った。そして、

「実は沼崎武夫のことですが…」

と、永峯校長が口を開く前に、桟先を制して、そう話を切り出した。

永峯校長は、金剛寺教官のやり方を、少したしなめねばならぬと思っていた。しかし、金剛寺教官の巧みな話を聞いているうちに、二人の考え方は次第に共通なものになっていった。学校長、配属将校と、職種は違っても、二人はどちらも戦時体制下の中学校の統師者という、共通の立場に立っていたからである。だから、

（下手に問題をこじらせて、問題を大きくしてはならない）

という合意が、やがて出来上った。

「とすると、警察の方へも手を打たなくてはならないな」

「ええ、それは大丈夫です。警察は我々の味方です。これからすぐ手を打ちましょう」

金剛寺教官はそう答えると、その場で電話器を取って、松並警察署長を呼び出した。自殺事件の隠密処理を依頼すると、警察署長は、

「わかりました。ご心配のないように対処いたしましょう」

と、すばやい返事を返した。

「警察の次は、新聞社だな」

「そちらも大丈夫です。任しておいてください」

金剛寺教官は自信たっぷりに、そう言った。彼は、東海新聞の松並支部の新聞記者を、つねづね自家薬籠中のものにしているのだった。校長室から電話すると、東海新聞の方へもすぐ意は通じ、こうして、沼崎武夫の自殺事件は、闇から闇へと葬むられたのである。

外部への手を手際よく打ってしまうと、金剛寺教官は、ピストンが果した成果を確かめるように、教室の方へ歩いていった。歩きながら、両方の耳を狼のようにぴんと立て、教室の反応を伺った。

しかし、もう生徒たちは沼崎の自殺のことなど、話している者はいなかった。ピストンの暴力が、すっかり口を塞いでしまっていたからである。金剛寺教官は満足げに、ゆっくりと各教室の中を覗いて歩いた。

だが、二階の階段をのぼり、四年一組の教室へ近づいた時、不意に金剛寺教官の気持は逆撫ぜされた。そこでは、まだ、日比野正英を中心にした三、四人の学生が、ひそひそ何かを喋っていたからである。そして、その中の一人が、廊下の金剛寺教官の姿を見つけて、あわてて口を封じたのが、金剛寺教官の眼にはっきりと見えたのである。

金剛寺教官は、よほど正英たちを廊下に引きずり出して、ひっぱたいてやろうかと、腹が立った。しかし、一旦ピストンが苦労して鎮圧したものを、ここでひっくり返してしまっては得策ではないと、ぐっと我慢した。

（畜生、覚えていろ！）

金剛寺教官はわざとスリッパの音を荒々しくたてて、四年一組の教室の前を通りすぎた。

（反抗するなら、してみろ。お前の運命は俺の手に握られているのだ）

残る問題は、金剛寺教官の仲間たち、すなわち教職員であった。しかし、彼等も、すべて日和見主義で、腰抜けばかりだったので、金剛寺教官が心配するほどのことはなかった。自分と関係のない事件のために、自分を犠牲にして、自殺した学生の弁護などする筈がなかった。彼等は永峯校長に頭が上らないのと同様に、若い金剛寺教官にも頭が上らないのだった。金剛寺教官はびくびく

する必要はなかった。大きな手を振って、職員室の中を歩けばよかった。ちょうど、目高ばかりの水槽の中を、一匹の鯉が泳ぐように、金剛寺教官は鰭をぴくっと震わせながら、机の間を悠々と廻遊した。

金剛寺教官は、若松教師の机の方へ歩いていった。だが、そこは空席だった。若松教師は、金剛寺教官のアパートから逃げ帰ったまま、恐れをなして、学校へ出てこないのだった。

（臆病者めが！）

金剛寺教官は腹の中で、苦笑した。

だが、不死身のジーグフリードにも一つの弱点があったように、職員室の中に、まったく金剛寺教官の敵がいない訳ではなかった。それは、英語を担当する辻村教師であった。そして、同時に辻村教師は、正英が松波中学で尊敬する唯一の教師であった。

辻村教師は六尺に近い背丈に、豊かな肉付きで、辻村教師と並ぶと、若い金剛寺教官などは華奢に見えた。剣道が三段で、柔道が二段の腕前で、普段はおだやかであるが、一旦怒り出したら、眠れる獅子が起き上ったように、誰の首をも締め上げかねなかった。

最初の頃、金剛寺教官は、辻村教師を馬鹿にしていた。金剛寺教官から見れば、辻村教師は愚鈍で、獨活の大木にすぎなかったからである。

だが、小癪なのは、その愚鈍さが、金剛寺教官の権力に服従しようとしないことであった。その不服従は、決して傲慢とか、横柄とかいうものではなくて、その鈍感さからくるものといってよかった。それが二人を相容れない関係にしていた。だが、いざとなれば、こんな唐変木を一撃の下に倒すことぐらい容易だと、金剛寺教官は思っていた。

しかし、物事はそう簡単でないことを、金剛寺教官はやがて知った。それは、忘年会の席上のことだった。酔った金剛寺教官が、辻村教師をなぐりつけたことがあった。宴の席が乱れるにつれて、女の話に花が咲き、話が、金剛寺教官の情婦である砂川サキエのことに及んだからであった。サキエは小料理屋の女中で、煽情的な唇と肢体を持っており、もう二年近くも金剛寺教官と関係を持っていた。そのサキエのことを辻村教師が、

「彼女は女学校の頃から、相当なやり手でしたよ」

と批判めいた口調で言ったのである。自分の情婦がとやかく言われたことが、金剛寺教官を逆上させた。彼はいきなり辻村教師をなぐりつけ、顔に傷を負わせた。翌日、辻村教師が顔に絆創膏を貼ってやって来た時、教師たちの眼はいっせいに辻村教師に同情を寄せ、生徒たちの眼にも同じ同情が宿っていた。これは、金剛寺教官の予期しないことだった。愚鈍な辻村教師の中の誠実さが、多くの支持者を得ていたのである。その時から、金剛寺教官は辻村教師を警戒するようになっていた。

その日の午後の職員会議が始まると、金剛寺教官がひそかに恐れていたように、辻村教師は沼崎の自殺事件の責任を、執拗に金剛寺教官へ追及してきた。しかし、金剛寺教官は胸を張って、傲然とそれに対抗した。いくら辻村教師がわめいたところで、金剛寺教官と永峯校長の意思が通じ合っている以上、この職員会議の結果が金剛寺教官の勝利に終るであろうことは、確信が持てた。辻村教師だけが一人でわめいて、それで終りだった。

（ざまを見ろ）

職員会議が終ると、金剛寺教官は用事にかこつけて、すばやく学校を脱け出した。辻村教師に摑まるのを、避けたのである。それは利恰なやり方だった。その粘液的な性格からして、辻村教師が職員会議の後でも、ねちねちと個人的に攻撃をかけてくることは、眼に見えていたからであった。

（六）

一日おいて、沼崎武夫の葬式はひっそりと行なわれた。学校から四年一組を代表して、形式的に二名の生徒が葬式に参列した。

代表の二人から正英が除外されたのは、明らかに金剛寺教官の指図によるものとしか、考えられなかった。若松教師が代表の生徒をつれて出発すると、正英は午後の授業を無断で休んで、葬式に参列した。彼は上衣の下に鞄を隠して、学校の裏門から、そっと学校を脱け出した。

葬儀場に着くと、若松教師に見つからないように、正英は人垣の後に立っていた。祭壇に飾られた、大きく引伸した沼崎の写真は、そこからでもよく見えた。

自殺した中学生の葬式には、普通の葬式とは違った、翳が落ちていた。それは、まだ若くして突然命を断った若者の、人生への恨みと、悲哀の色だった。その青い翳が、正英の胸をひんやりと染めた。

まだ、あどけない顔の、十六才の中学生を殺したのは、いったい誰なのか。沼崎は、どんなにもっと、生きたかっただろう。祭壇の写真の笑顔の下で、沼崎は今でも、

（もっと生きていたかったよう）

と、訴えているように、正英には思われた。

葬式が終わり、棺が霊柩車に積みこまれると、人々の列は乱れた。

正英は沼崎の両親の方へ歩いていったが、二人とも息子を失った悲しみから、まだ立ち直ってはおらず、正英のくやみにも、

「ああ、よく来てくれましたねえ」

と、頭を下げただけで、虚ろな表情で、おどおどしているように見えた。

やがて、霊柩車が軽い砂ぼこりを上げて、走り去ってしまうと、正英は、

（ああ、これで沼崎はこの世から消えてしまったのだ）

と軍歌をけたたましく吹奏しはじめたので、歌声もそれに合わせて一段と高まり、町の大通りに響き渡った。行列は春の洪水のように道路いっぱいに溢れて、町角から町角へと進んでいった。

軍楽隊の華やかなメロディに触発されて、住民は家の中から飛び出して、出征兵士を見送った。

やがて行列は、松並川の堤にさしかかった。茂った草の上を、さまざまな靴や下駄が踏んで通った。春の花を摘んでいた子供たちが、

「兵隊さん」

「兵隊さん」

と駆け寄った。

正英は橋の袂で、そんな行列を眺めていた。正英の眼に映った出征兵士は、四十歳ぐらいの年令に見えた。その後を、家族や子供たちが歩いている。

一人の中学生を載せた霊柩車が、今しがたこの町を離れていった。つづいて一人の男が、この町から戦場へ征っていく。こうして戦争は、この小さな城下町からも、一人、一人と、人間を奪っていくのだった。

行列が行き過ぎてしまうと、正英は松並城跡へ、ゆっくり登っていった。

天守台の草原へ出ると、松並町の町並みが一望のもとに展望された。しばらくすると、

「萬歳！」

と思い、沼崎の死が、はじめて強く正英の胸を締めつけた。

沼崎の葬式が終ると、正英は町の大通りを抜けて、松並城跡の方へ歩いていった。すると、東の方角から、

「萬歳！」

「萬歳！」

と叫び声が聞えてきた。見ると、今日もまた松並町から、出征兵士が征っていくのだった。小学校の校庭で壮行会が行なわれると、

「萬歳！」

「萬歳！」

と、嵐のような声が湧き起こり、赤襷をかけた出征兵士を先頭に、手に手に日の丸の旗を持った群衆が、校門から駅へ向かって流れ出てきたのである。力の強そうな青年が二人、幟をかついでいた。愛国婦人会の主婦たちは、揃いの白いエプロンに襷をかけ、小旗を振って軍歌を歌っていた。受持の教師に引率された小学生たちは、ひばりのような声を張り上げ、日の丸の旗で友達の頭を叩きあったり、列を乱したりして、旗は破れて棒ばかりになっているものもあった。その後方に、隣組の男女がつづいていた。

行列が町の中央まで進んできた時、在郷軍人の軍楽隊が、

ドンチャン、ドンチャン、

「萬歳！」

という遠い歓声が、駅の方から聞えてきた。やがて、鋭い汽笛の音が流れて、出征兵士を乗せた列車が発車すると、再び軍楽隊の演奏や萬歳の声が、遠い海鳴りのように町へ流れた。だが、それもしばらくすると、空の彼方へ吸いこまれてしまって、町はもとの静けさに戻った。

正英は天守台で一人ぽつんと、その海鳴りが消えていくのを、聞いていた。

この天守台は、正英が松並中学校へ入学した日、はじめて沼崎に逢った場所だった。そう思うと、にわかに親友を失った悲しさが正英を嵐のように襲ってきて、

「沼崎、沼崎！」

と地平線の彼方にむかって叫んだ。

（つづく）

社告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、別に月報「まんじだより」をお届けし合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ、交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　東京二一九〇八一五

加入者名　作家群研編集部

有院家の人々（十）

大和禎人

第十九章　R・W・アルウィン氏叙勲のこと

大正十四年一月五日、八十一歳を一期として、ロバート・ウォーカー・アルウィンは永眠している。すでに触れたとおり、妻イキのほうはそれからなおも長生きをして、昭和十五年八月十七日、九十歳で亡くなるのだ。夫と妻の死は十五年を隔てている。こうした場合、俗に夫婦仲の疎遠を言いがちであるが、二人の場合はどう解釈すべきであろうか。

だが、いま青山霊園外人墓地第一号に見るその墳墓は一種比翼の体裁のもので、刻字の納まり具合から言っても、あらかじめ合祀を想定した建碑であったように思われ、ほっとさせられる。墓石の刻字はIN LOVING MEMORY Of として夫妻二名ともの氏名、生年月日、没年月日がきわめて配置良く刻まれている。したがってイキ女の生前の建碑に際し、自らの没年未詳のまま、その名を並べ刻ませるはずはあるまい、あらかじめ並べ得る余白を残しての建碑であったろう。日本流に朱を入れ、生ける信女の戒名をあらかじめ刻む作法とは異なるかたちであるが、結果としては比翼連理の東洋的思想に根ざす配慮に外ならないものだ。碑を建てた人は当然イキ女その人であるはずだから、比翼塚にしたいという発想は残されたものから出たものであったに違いない。日本婦人としては当然かも知れないのだが、まことに麗しく、また、きわめて自然のものとして目に写る。

さて、この章ではR・W・アルウィン氏の日本における功績の評価について、少しく触れておきたい。外務省の文書記録を尋ね写しておこう。

米国人（元布哇人）勲一等ロベルト、ウォルカー、アルウィン叙勲ノ儀別紙ノ通上奏致候間至急御取計相成度此段申進候

大正十四年一月五日、すなわち死の即日付をもって時の外務大臣幣原喜重郎発信、内閣総理大臣加藤高明あての稟議書が記録に残されている。

同時に、これに付した上奏案は興味深く、R・W・アルウィン氏の功績を要約するものとして、ぜひ写しておかねばならないだろう。

米国人（元布哇国人）
勲一等（瑞）ロベルト・ウォルカー・アルウィン

右者夙ニ慶応元年二月本邦ニ渡来シ、平素我国民ヲ敬慕シ、常ニ我要路ノ官憲又ハ知名ノ知遇ヲ得、一生ヲ邦人ノ為捧グルヲ念トシ我国ヲ墳墓ノ地と定メ、鋭意尽力シタルコト不尠、殊ニ本邦人ノ布哇渡航ニ関シ、豫テ相互ノ了解斡旋ニ努力シ、明治十四年七月本邦駐在布哇国総領事ニ任ゼラレ、明治十五年十二月九日付ヲ以テ勲四等旭日小綬章ヲ叙賜セラレ、明治十七年九月在本邦同国特派全権理事官ヲ兼ネ、明治十八年一月同国代理公使兼総領事トナリ、彼我交際事務ニ尽力シ、我移民事業ノ主旨ヲ体シ、両当局者ノ間ニ立チテ斡旋スル所多大、同年四月二十三日付ヲ以テ勲三等旭日中綬章ヲ賜リ、其前後十回ニ亙リ邦人ノ団体布哇渡航ノ為常ニ太平洋ヲ往来シ、尚我布哇在留民ニ対シ最恵国ノ特権付与ニ関シ奔走尽力ヲナシ寄与貢献スル所頗ル多ク、明治十九年九月在本邦同国便利公使ニ昇任シ、次テ随意布哇渡航条約締結ニ尽力スル所不尠、同年十月四日付ヲ以テ勲二等旭日重光章ニ陞叙セラレ、平素館務ト共ニ専ラ移民ノ為劇増セル諸般ノ事務ニ関シ克ク円満処理シ、特ニ我在留民又ハ渡航者ノ利益増進ニ寄与スル所多大、明治二十五年三月二十三日付ヲ以テ勲一等ニ叙セラレ、瑞宝章ヲ賜リ益々両国民ノ親交増進ニ努力シ、明治三十一年九月解任トナルヤ、我国ニ止リ其高キ職見ト本邦ニ於ケル多年ノ経験トニ依リ、我要路ノ官民ト種々有益ナル劃策進言ヲナシ、我文化ノ促進ニ寄与シ明治三十三年台湾製糖株式会社創立発起人トナリ、兼テ同地開発ノ為奔走尽力スル所多ク、次テ会社ノ相談役ニ推サレ、益々内外人ノ信望ヲ厚クシ同島ノ殖産興業ノ促進ニ貢献スル所多大、大正五年職ヲ辞シ大ニ知名ノ人士ト交遊シ我文化発展ニ尽力スル等、同人ハ本邦渡来以来五十年ノ

久敷キニ亙リ、其信条トスル本邦及本邦人ノ為ニ尽力スルヲ快トナシ、或ハ移民発展或ハ文化開発或ハ産業ノ促進ノ為、一身ヲ挺シ終始一貫誠意悃心我国ノ為ニ効セル功績顕著ニ有之候間此際右功労ヲ御表彰被遊頭書ノ通叙勲被仰出候様仕度、此段謹テ奏ス

大正十四年一月五日

外務大臣男爵幣原喜重郎

ここに見る、

（その信条とする本邦および本邦人のため尽力するを快となし……云々）

というくだりはとくに故人の人となりを言い得て、はなはだ妙とすべきものに思われる。かれは日本人そのものに化して、なにら、もとめることなく、ひたすら己の使命に生き、努力を惜しまなかったものであった。

「貴君がもし日本人ならばすでに爵位を授かっていただろう、それも侯爵ぐらいに…、わしゃ、そう思うとるがのう……、残念じゃよ」

政界人中もっとも親しかった九歳も兄貴分の井上馨が年下の友人に対等の気持ちで囁いたことがある。その井上は外務大臣の頃は伯爵であったが、その後、明治四十年には侯爵に昇っていた。つまり、ロバートを同格に評価し、敬してこの言を吐いたものであったろう。

「……」

その時のロバートは黙ってただ微笑を返すにとどまった。井上のかれに寄せるなみなみならぬ好意はいまに始まったことではない。また、これまでにどれくらいかれの力を借りたか、計り知れないものがある。

だが、いまかれ井上のそういう言葉はロバートの欲する言葉ではなかった。言いようのない寂しさが、なぜか込み上げていたのだ。

日本に長く住み、日本の国を愛し、日本の社会に深く溶け入り、異数の成功を収め得たことはたしかである。そして、そのいささかの功績が認められ、この国の栄典制度のうえで数々栄誉を与えられてきた。

しかし、国籍を二つの国にもつかれ……、もちろんそれは永住の地と定めている日本、一方には父祖の国である米国なのだが、かれにとってこのように二つの祖国をもつことは言い知れぬ苦痛の種でもあった。

日本人妻イキを娶ったことに後悔はないが、そのことから生れてきた子女は混血という宿命の十字架を負った。かれらは真正の日本人でもなければまた米国人でもない、当然ながら招かれたそうした運命の狭間に子女を陥れたものは誰だったか、自ら身をその裁きの庭に置くとき、苦しみは大きいのである。たえず後ろ髪をひかれるような後ろめたさを悩み続けている。純一な気持を貫いた結婚であった。信念にもとることのない選択であった。幾多の困難を乗り越え、強い愛に結ばれながら、しかし、それが国際結婚という特殊のために、生れてきた子女が忌まわしいも混血という汚名を着せられ、謂われなく屈辱に生きねばならぬ。どうもがいてみても、抜け出すことはでいない苦悩である、叫び出したくとも、声さえ憚られる。

しかも、老来この苦悩はかれの孤愁として、しだいに覆いがたく、重くのしかかってくる傾向を強めていた。

「イキさん、ワタシ、あなと結婚して幸せだった、と神に感謝している、だが……、今日は思い切ってなにもかも言ってしまいます、いいのですか」

「なにを急に、びっくりします、オオ、恐わや」

会話の少ない夫婦であるばかりでなく、すべて日本流儀をかたくなに守って譲らないイキ、日本語を苦手にしこの国の生活についに溶け込めないでいるロバートであったが、それでいて夫婦間の意志は結構通じてきた。とりたててどちらからも不満らしものは少なくとも表面には現わさないで過ごしてきた。ことさら異人種どうし結ばれた夫婦だからというのではなく、その点ではありふれて世間にざらにある夫婦関係に異ならないのだが、今日ばかりは少々様子が違っていた。

（オオ、恐わや）

とイキのいつものオドケでは済まされない真剣な顔がせまっていた。

「スミマセン、ワタシ悩んでいます、ワタシの一生、これで良かったのか、と」

「大袈裟ですね、一生だなぞと」

よくしたもので、片言の日本語を交えるロバートの会話をイキは不思議に理解することが出来た。ロバートのほうでも下町育ちのイキが時折もてあそぶ諧謔や道化の言葉をそれなりに、消化するまでになっていた。

すべての公職を辞してからのロバートが極度に無口になり、神への信仰を急に深め、カトリック教会へ熱心に通いはじめている。

なにごとかを神に願い、救いを得ようとする、それは明らかに一面では老いを物語るものに相違ないのだが、それを当然の姿として見るには二人の結婚が特殊であるだけに、イキとしても単に思い過しとばかり言えない、底深く得体知れぬ不安をつのらせていたのである。

「メリーのことですか？」

ロバートはかすかにうなずきを返しながら、口をそれ以上は濁した。

それはイキが心を痛め、ほとほと困りぬいている問題でもあった。それと言わなくとも共通する心事であるはずだった。

「いや、それだけではない……、リチャードのこともある、そしてもっと大切なことも…」

ロバートのほうから語りかけながら、重く口篭りがちにようやく聞くことのできた言葉は、すべてイキにとっては察したとおりなのであった。「欝」を病み、しだいに重度の傾向にあるメリー。関東大震災の折、横浜で瓦礫の下敷きになり、奇跡的に助かりながら頭部打撲の後遺症に悩むリチャード。ただでさえなにかそれらは凶の籤として、夫妻の気持ちの上の重りとなっているものだった。さらにかれの生涯をかけた日米親交、心血を注いだ日本人移民事業が音を立てて崩れ去るのを見ては頭を抱え込むばかりであった。

アメリカ西海岸に起こった激しい排日運動は、アメリカ社会から日本人移民をボイコットし、その子弟は白人の学校の入学を拒否され、日本人嫌悪の偏見は頂点に達していた。この原因そもそもは中国大陸における両国の利権の衝突にあった。日露戦争まではなにかにつけ日本の肩をもっていたアメリカが手のひらを返しはじめていたのだ。あらゆる日本への牽制手段がとられはじめていた。もとより、その根底には白人種の優越感と、侮蔑の感情が根強くあったことを否めないのである。

「北欧人種が他の人種とその血が混ざるとき、その質は劣化を免れ得ないであろう」

これはアメリカ大統領二十二代、再選して二十四代の民主党のクリーブランドの露骨な言辞として知られている。救い難い偏見と言うべきだろう。こうなると、絶望的でさえある。しかもこの大統領の任期はわが明治三十年を満了としており、同三十一年ハワイを併合する前夜にあたる。ことさら日本を指してその国粋主義、さらには軍国主義傾向に対する「黄禍論」はハワイ移民排斥の始まり、本土西海岸カリフォルニアにも飛び火し、席巻しはじめていたのだ。明治二十七年以来官業から民営契約移民に変わっていた、それすら三十三年以降は廃止されたのだ。かつての移民のツァー（皇帝）の失意は思うべきであろう。

（地位や名誉はいらない、わたしの望むものは温かくわたしを、それこそ身ぐるみ安んじて懐に抱いてくれる国なのだ、わたしにはそうした真の祖国がない）

心の空虚を宗教にもとめて救いを得ようとし、家族の愛にもとめ、混血の子女の将来を憂慮しつつ、やがて数奇だった生涯をかれは閉じたのである。

遺言により、かれの遺骸は両親の眠るフィラデルフィアに帰らず、妻と子らの住む日本に埋葬された。

葬儀に際し、日本の皇室からは弊帛とともに儀杖兵が派遣され、勲一等旭日大授章を贈られた。

第二十章　アルウィン学園の創設

大正五年二月、東京市麹町区土手三番町十六番地に定めて、一つの学園が誕生した。当時の東京府知事井上友一郎認可による「私立玉成保姆養成所」である。

ソフィア・アラベラ・アルウィン、つまり愛称ベラ女年来の夢であった保育専門学校と付設幼稚園の開設がここに実現した。

大正三年十一月はじめ、ベラは一ヶ年にわたるヨーロッパ留学の旅から帰った。折しもヨーロッパは大戦勃発して風雲ただらぬものがあったが、日本は戦争の気配さえなく、かの女をほっとさせ、旅の疲れを癒す間もなく両親に学園創設の相談をしたのである。

かつて伊香保の別邸を開放して幼児教育の糸口をひらきながら、〈日曜学校事件〉としてキリスト教排斥の現実に直面することがあり、いたく挫折を味わうという経験もあったが、志を捨てていなかったのである。

保姆養成所の生徒数十五名、それに幼稚園児十名が発足時の生徒数であった。

借り受けた民家の借家証が残っていて、それによれば家賃は一ヶ月二十四円、水道呑料五十銭とある。家主は独身の外国人女性に単独では貸す勇気がなかったと見えて、霊南坂教会の牧師小崎弘道を保証人とし、借受人の連名に岩村安子という名が見えるものだ。この女性は小崎牧師の令嬢で同教会岩村清四郎牧師の夫人であり、霊南坂幼稚園の責任者として、幼児新教育研究サロンの常連でもあった。この人は終生ベラのよき理解者として手をさしのべてくれるのである。

この時の家賃は大正八年には三十五円、大正九年には五十五円に、倍以上に高騰している。第一次世界大戦という時代背景による騰貴として、時代の流れを物語るものであろう。ただし水道呑料のみは据え置かれたというから面白い。この家は市ヶ谷駅から約二分のところにあり、ベラは麹町の自邸から歩いて、約二十分もあれば行かれる距離にあった。

学園名を「玉成」と名づけたのはかねてフレーベルの「Gift」の最初に取り上げられた「球」について各民族の呼び名を研究したことがあり、日本には一つの思想としての球、珠、玉の考え方のあることに気づいたのであった。フレーベルの完全なる形態、宇宙の基礎形態として完全なるものという数学的立場とは異なる思想に到達したのだった。

玉は美しいもの、大切なもの、尊いものを表わして、「磨かずば玉もこがねも」という比喩歌もあり、ベラは東洋的な思想としての磨いて磨いて完全な玉となるという考え方に共鳴したのだった。

宇宙の完全なる基礎形態「球」と日本語の「玉」の一

致を発見したベラは喜んで、学園に学ぶものすべてが人格形成の上で「玉と成る」理想を願い、校名に託し決定したのだった。

さて、ベラ女が学園のために三顧の礼をつくし迎えた教授陣を写しておかねばならないだろう。

o心理学　文博松本亦太郎（東京帝大教授）o児童心理学　文博田中寛一（東京高師教授）o教育学及び教育史　文博楢崎浅太郎（東京高師教授）o博物学（動物・植物）　平島権蔵（東京女高師助教授）o保育衛生学　医博宇都野　研（宇都野病院長）o談話学　久留島武彦（早蕨幼稚園長）o絵画及び美術史　赤津隆助（青山師範教諭）o彫塑及び陶芸　板谷波山、吉田三郎（帝国美術院会員）o木工　菊地　倹（木工技術家）o音楽－ピアノ及び声楽　原　みち子・渡辺トリ（上野音楽学校教授）o数学　上野いし（女子学院教諭）o体育　メリー・エイチ・マクロイ（米国オーバリン大学卒）o生花　鈴木健太郎（清芳流家元）

錚々たる顔触れである。ベラ女の脳裏に描かれた理想がどんなものであったか、また保母養成にあたってどんな課程が組まれたものかをうかがい知ることができる。

童話の語り部ともいうべき、口演童話で知られる久留島武彦の名があり、童話を通しての幼児教育を重視し、話術の巧みを学ばせることに着眼をおいた卓見は注目に値するものだろう。久留島はその師である巌谷小波ともにこの往時、童話界の大きな柱と目された人だ。

ベラ自身もまた自ら創作童話を心がけ何編かの作品をノート一冊に書きとめたものを残している。日本語の口述によるものらしく、どれも短いもので自然観察的のものや、空想的なもの、まったくの創造など、いろいろである。また、かの女は世界各国の口碑、民話、神話の比較を盛んにしたようで、創作童話も広く読んで心覚えを書きとめている。

たとえば、日本の五大お伽噺について、侵略、覇権、仇討ちなどの残酷さに満ちていると指摘し、桃太郎、カチカチ山、猿蟹合戦などは児童にはふさわしくない、また「竹取り物語」「堤中納言物語」などの種本はアラビアンナイトやインドの口碑がシルクロードを通って支那から、朝鮮半島を経て渡ってきたものであろう……、など論文などを書くための覚えと思われる断片も残されている。

ところで、前記のような教師陣の招聘にあたってはきわめて慎重が期され、直接その講義を聞きに出かけ、人となりをたしかめた上で礼を厚くし迎えたのであった。しかも特筆すべきはその交渉にあたって、母のイキが必ず伴っていたということだ。ベラの結婚を強く望んでいたこの母は娘のたかい決意を知ると、その事業実現のためともに東奔西走し惜しみない助力を与えたのである。アルウィン家の社会的に知名の立場を背景とし、交渉の

有利を導くことに尽力してくれたのだった。

「わたしは日本国籍もないし、もはや、仕事も一線を退いた身だ、表面にはもう立たないほうがよい、この仕事はキミが自ら願い、志を立ててのことだから、自分の力でおやりなさい、しかし、金銭的な援助はできるだけしてあげよう」

父ロバートは娘の相談にそう言って許しを与え、母イキは、

「かくれて目立たないところで、できるだけのお手伝いはしてあげますよ、けれども、あてにしてはいけません」

と、それぞれがそんな言葉を与えていたのだが、いざ仕事に着手してみると、やはり父母がそれまでアルウィン家のため築いてきた信用の力は大きかったのだ。このことは学園設立にあたっての顧問として名を連ねる人々を一見すれば明らかである。

o東京帝国大学医学部教授　医博土肥慶三 o貴族院議員　法博高田早苗 o貴族院議員　田所美作 o東京女子師範名誉教授　中川謙二郎 o東京女高師教授　倉橋惣三 o東京帝国大学教授　文博松本亦太郎 o宮内大臣子爵牧野伸顕 o奈良女高師校長　椙山栄次 o東京女子大学長　安井哲子

いささか権威主義ともとれるが、学園内容をスタートから周到なものとし、最善を願ってのことであった。顧問に名を連ねて宮内大臣、子爵牧野伸顕なぞと見えるのはロバート二世の二度目の妻常子が牧野の姪にあたったといようような姻戚関係によるのであった。

ベラが学園設立にあたって、第一に考え、そして実行したことは立派な校舎ではなかった。新式の設備でもなかった。大勢の園児や生徒の募集では勿論なかった。

事実、当初しばらくの経営は質素なもので、生徒や園児の数もさきに掲げた十五名を越えぬ範囲におさえ、教育効果にひたすら理想をもとめる姿勢を堅持したのだった。

幼稚園経営初期の卒業生の回想に次のようなものがある。

自分たちはベラさんが外国人であるなどという印象は一度もうけなかった。アルウィンちゃんと呼んで自分たちの仲間で、ただ面白いお話をたくさんしてくれて、いろいろ愉快な遊び方を考え出して遊んでくれる人と思っていた。

大部分の幼児たちは日本の中流以上に属する家にそだっていたので、家から幼稚園へ行くと幼稚園は狭くて一寸も立派ではなかった。けれども、ママたちも、パパたちもみな、アルウィンちゃんを崇拝して、わざわざ狭い、そまつな園に、雨の日も風の日も一生懸命に自分たちを通わせた。

園児に（ベラちゃん）と呼ばれて慕われ、また父母の厚い信頼を得たのはひとえにベラ女の幼児教育に献身する真摯な姿勢に負うものであるはずであった。

フレーベル創案の恩物による教育の展開は学園の大きな特色であった、「恩物」とはドイツ語 Gabe という語の意訳であって、神から賜わった物というほどの意味である。いまでこそ珍しくないが、幼稚園教育に使われる遊具である。ベラはいちはやくこれを取り入れたのだった。

またドクター・モンテッソリーの医学的教育法をも採用され園児一人一人の綿密なカルテに従い個々の能力、長所の発展に努め、生々としてすべての園児が目を輝かすような経営を着々と進めたのであった。

東洋史の学者であり、学士院賞をうけ、文化功労者でもある東大教授山本達郎氏はアラベラ・アルウィンの薫陶をうけた幼稚園第二回卒業生であるが、学園五十周年の祝賀のおり次のような感想を述べている。

私の知る限りにおいて、だれが教育者として偉大であるか問われれば、私は躊躇なくアーウィン先生であると答えます。先生は幼児を導くための学識と方法を兼ね備えた天才的な教育者でいらっしゃいました。

私は小学校、中学校、大学のほかのどの先生からもうけなかった大きな影響をアーウィン先生からうけていることを随分のちになって気づいたのです。

アーウィン先生の教育をうけておりますと美しいものが見えるのです。これは大変なことでして、社会的な問題でも人間的な関係でも、欠点だとか悪いところをいくら見ても人間は進歩しない。良いところさえ見ていればいいのです。政治でも経済でも、同じだと思うんです。私どもの学問の場合も同じでして、偽物か本物かを見分ける訓練として良いものばかり見ていれば、悪いものはひとりでに分かるのです。偽物をいくら沢山見ても本物は分からない。考え方から言えばそういうことなのです。

山本さんは日本銀行総裁、蔵相山本達雄氏の家を嗣いだ孫にあたる人で、家がアルウィン先生の隣にあり、通園をいつも先生とともにし、道々つねに先生にねだってはお話をしてもらったという人である。

また、海軍大将、外相の豊田貞次郎氏の令嬢で嫁して山本姓の山本満喜子さんこうしたエピソードを物語っている。

三番町の幼稚園の名物はアーウィン先生の高弁当だった。アーウィンさんは幼稚園に近い麹

町にあるとても大きな洋館にご家族と一緒に住んでおられ、たしかお昼にはお宅からお弁当が届いたように思います。それが三段くらいある高さの有名な弁当箱なのです。私たちは「アーウィンさんの高弁当」と手をたたいてはやしました。そしてせっかくのご馳走を気前よく分けて下さるので、私たちは食前のお祈りのため目をつぶって、おかっぱや短く切った頭を殊勝に下げながらも、今日のアーウィンさんのおかずは何かと胸をわくわくさせたものでございます。

私たちにとってアーウィンさんは先生と申し上げるより、時にはお母様、また時にはお友達のような方でございました。

ベラ女史は園児を指して、

「神代のお子たち」

と呼んだ。純真なものへの心からの敬いの気持から出たものであった。

しかし、一方では保母養成所の生徒たちに対しては厳格そのものの教育を施した。

外国人のベラ女史がなぜか和服を好んで、生徒の和服姿は昭和十四、五年ごろまで続いた。卒業式ともなると黒紋付に袴、これは終戦まで一貫した。頭髪はキリリと結い上げていなければならない。パーマや香水はお法度である。そして、小さな手帳を必ず身に着けるのをきまりとし、紐をつけて首からぶら下げていなければならないのであった。若い生徒は嫌がったが、勉強熱心なものには、なくてはならない便利なものになった。奇抜なベラのアイディアで伝統になった。上履きは木綿の黒、底は二重三重の綿布といったもので、専門店に指定して作らせていた。

立ち居振る舞い、清掃の仕方までとくに厳格で、戸の開け閉め、人前での身のかわしかた、頭を軽く下げての会釈の仕方は幾度でもやり直しをしなければならない。女学校を出たての生徒には容易ではなかった。

「さあ、ずんずんとお早くどうぞ」

口癖の言葉で一日に何度言われるかわからない。言われるほどまごまごする。子どもの動きは早く、片時もじっとはしていない、素早い対応を必要とするのだ。のろい動作や荒っぽい態度もいけない、敏捷で淑やかに、しかも手落ちない動作をもとめ叱正したのだ。良い教育は良い教師にのみよって行なわれるという理念にもとづく確固とした方針によるものであった。

大正十二年九月一日の関東大震災に際し、学園校舎の大破に遭い、翌々年、父ロバートの死去、さらに弟リチャード、妹メリーの死が相次いだ。ベラはこれらの試練に耐えねばならなかった。

〈未完〉（五・六・二九）

本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。

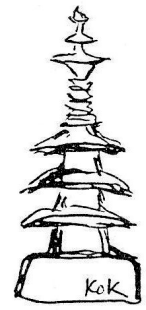
（小説）

近藤富蔵の生涯（二〇）

第二章　浮沈の近藤家三代

二、鶏声ヶ窪より若鷲巣立つ

金子正義



（五）

近藤重蔵守重として家督を継いで始めの一年間の御先手与力番代のうちは兎も角として、江戸中見廻り役となり、若年寄支配下の評定所目安読下役となっては、白山義学塾の学主として関わってはいられなくなった。

義学塾を共に興した学友も夫れ夫れ道を拓いて次々と去り、塾生達も他に転じて義学塾は自然閉鎖となった。恰度其の頃、本郷森川町の阿部屋敷近くに開かれた叢桂社の流れを汲む泉　豊洲の家塾に移る者が多かった。

叢桂社は享保年間に尾張の中西淡淵が開いた折衷派の私塾で、其の学風は「其講経不拘漢宋　而別新古　従人所求　或用漢唐傳疏、或用宋明註解」と伝えられる如く特定の学派学説に偏せず徳行を先とし、学問を学として研究せずその応用を重んじた。

其の門下の細井平洲が師の説を発展させ人倫の道より経政実践の理論にも及ぼした。江戸に出て神明町に嚶鳴館を開塾し、其の学風が藩政士道に益すものと世に知られ、渋谷の西条藩邸や桜田の上杉藩邸に招かれて書を講じた、特に上杉家世子治憲の訓育にあたり、治憲の家督継承後の明和八年米沢に赴いて藩士を指導し、藩政興隆の基をなした。後に尾張藩主徳川宗睦の侍講となった。

泉　豊洲はその細井平洲の女婿であった。元々豊洲は近藤重蔵の父、内膳守知と同輩の御先手与力の泉智高の長子として宝暦八年三月に生まれ泉斧太郎として家を継いで与力番代となったが、生来学を好んで弟に家督を譲って八町堀牛草橋の晴雪楼にあった叢桂社の南宮大湫の家塾に入ったが、師の大湫の喪に遭って同派の細井平洲に従って学んだ、近藤重蔵より十三歳の年長であった。

其の説くところは士農工商夫れ夫れの実用に資して世に害を為さず、為政者の喜ぶ学風なので寛政異学の禁令で却って入門する者が多くなった。

この泉　豊洲や穏健な私塾寺子屋は別として、柴野栗

山に依って異学の徒とされた主だった儒学者の門徒は忽ち他へ転じ、門弟三千人と稱していた亀田鵬斎の門下も三十人に激減したと云う。

従って異学とされた諸学派と朱子学派との学芸論争は一層激しくなった。松平定信は林家の朱子学の振興を慮って、その門弟達が朱子学以外を学ぶことを禁じた自分の意図する処が、諸学派との論争を引き起し、世上さまざまの噂となって混乱し始めたので、寛政四年八月昌平坂学問所を、敷地一万一千六百坪に拡げた増築工事の完成後昌平黌と稱し、林大学頭及び儒員の講義は、誰人でも希望する者には拝聴させ入門をも許すとした。

偶々大学頭林錦峯信敬はそれに先立って死去したので翌五年六月家督を継いだ林述斎を大学頭に任じて紛争を治めさせようとした。

林述斎は林家へ養子に入る前の松平熊蔵の頃より朱子学、陽明学を包括的に学究していたので、大学頭となっても表面は朱子学を建前としたが偏狭な態度をとらず、他学派との折り合いも良くなり、同じ立場である陽朱陰陸の佐藤一斎と力を併せて林家朱子学の振興、昌平黌の充実と他学派との論争の沈静に努め、朱子学陽明学も漸く纏まり諸学と偏狭な対立抗争も次第に納まった。

（六）

近藤重蔵も市中見廻り役となって日々新たな見聞に接し一年もたつと下役の加藤文五郎等の同心の扱いにも馴れ、多くの事件を経験して二度程は法度違反や暴利を貪る悪徳商人を摘発して手柄を立てて褒賞銀子を授けられたり、役扶持十人扶持の増加を得たりしたが、父守知が言ったように、いくら幕府が禁令布告を重ねたり、文武奨励士風矯正を令しても罪を犯す者は絶えず、様々の事件の調査・裁定に係わる重蔵は、聖賢君子の学問では計り知れない人の世の複雑怪奇に戸惑い、限り無い人間の欲望と罪の深さに駭き憤りすら覚えるのであった。

重蔵は幼い頃から父守知の足の不自由を見ているので、身体障害の人を痛ましく思っていた。特に杖を頼りの盲人の姿を見ると我が目を瞑って闇の暮しの恐ろしさを推測し、市中見廻りとなって盲人の多いのに気付き不思議に思った。盲人は農山漁村では暮しが立たず、江戸に出て散散苦労して按摩揉み療治や、針治療等を習い糊口を凌いでいるが、中には才能に恵まれて琴音曲等を家業とし、更に一芸の師匠となっている者もいる。処が、幕府の盲人保護令で金貸しも許されているのを良いことにして、老いた病人を抱えた寡婦や、子沢山の困窮者に高利で金を貸し着け、その取り立てを酷にして大川に身を投げる者まで出したり、返済に窮した妻女や娘を隠れ売女に手引したり、利金の代わりに娘を犯し果ては妾の一人にして、数人の妾女に取り囲まれて贅沢三昧に暮らす座

頭までいた。売女紹介、高利悪貸行為は町方扱いの町奉行所管であり、盲人取締りは寺社奉行の支配下であるが、悲しみに沈む被害者に同情しての投書が度々目安箱に出ると、評定所目安読取方として一応探索することになる。

近藤重蔵も何度か取調たが邪悪極道の高利貸とは違って、盲目の不幸の身を僅かに溜めた小金と妾女の柔膚で慰めている憎たらしい老盲に過ぎず、高利の大半は組頭への上納に消えてゆくことが多く唖然とした。

盲人社会は将軍に侍す検校を頂点として、別当、勾当座頭と十六階七十二刻の段階があり、夫れ夫れ上納献金に依って検校まで登りつめる特別社会で、路地裏の老盲の高利貸付など取りる足らぬ罪科であった。

近藤重蔵が評定所与力として探索報告を寺社奉行に寄せても梨の礫であった。

重蔵は盲人の高利貸付売春斡旋などより同じ幕臣、旗本、御家人の違法行為の多いのが不快だった。

幕府が士道振興の為に借金返済に苦しむ旗本御家人救済の棄損令を度々出すのを良いことに、市中の商家、料理屋等で無銭飲食を常とし、余りのことに断り逆らうと刀を振って乱暴狼藉に及んで罪を犯す者が絶えず、捕えられて評定所吟味に問われると、酒の悪酔も醒め、神妙に頭を垂れている始末であった。

身分秩序、門地門閥に閉鎖されて欝積した心情より不行跡を犯す者の心中が重蔵には痛ましく思えた。

幕府の重臣や代官などの不正と比べれば下級武士の不行跡無銭飲食など高が知れた痴者の空威張りのようなものだと思った。

天明三年の浅間大山焼（噴火）に依る流出泥土に依って河川氾濫、橋梁の流出、堤防道路の破壊等の被害の修復は、夫れ夫れ領有の諸侯で復元することになっているが、関東諸河川、甲州地方等で采邑の地が自力では未だ修復し得ず、公私、寺社領の地でも被害の大なる所は未だ人馬の往還に支障があった。

災害後十年も経て工事が進捗しないのは工事請負業者と采邑諸侯の不正の事ありとの捨文や目安箱投書も度々あって、重蔵等の探索方与力が密かに吟味調査に現地に行って探索すると、勘定吟味役佐久間甚八茂之、勘定組頭今村五右衛門長央、同じく小笠原三九郎長幸などと、其の組下の者等の収賄不正。及び代官武島左膳脩茂などの不行跡を突きとめたが、事は根深い贈賄汚職に関わることで、勘定奉行、寺社奉行にも係わりがあって、目付若年寄の裁定に委ねることになった。

然し、評定所の判決は殺人傷害を伴なわない贈収賄は重臣には單なる儀礼的なことと看過され、精々御役目ご免、重くとも閉門、穏居程度であった。

重蔵は斯る不正を糺さず民百姓の些細な罪科を一々検げることの不快さに嫌気を差して其の頃より酒色の味を覚え始めたのだった。

だが、封建身分制度の矛盾を憤り、己れの役職の及ばざるを嘆じて義憤に駆られたり、世に拗ねたりしてはいられなかった。若く知識欲の旺盛な重蔵には次々と新たな問題が待っていた。

（七）

寛政四年正月早々、肥前国島原の温泉山の普賢岳が鳴動し始め、忽ち泥土吹出し、湯煙立ち上らせて二月三月と次第に火山活動激しくなり、噴火の火泥土流出して此方の山膚の芝木を焼き岩石を崩れ流し、彼方に新山を噴出して火焔を天に吹き上げると云う大変事となった。

其の急報が船飛脚を以って次々と江戸表に届いて幕府要路の諸太夫を愕かせた。

幕府は天明三年の浅間大山焼大災害後、夥しい天領の埋没田畑の掘起しや、道路修復、河川浚渫等に膨大な失費をして関東諸河川の修復を漸く終えたが、関東は勿論信越甲州の寺社の土地、諸侯の領土は未だ工事費の自腹の為に修復の事業は進まず、被害地住民の疲弊は癒されていない時に天災の追い撃ちであった。

四月に入るや島原普賢岳の噴火流出の火山泥土は、砕屑流となって島原湾の海に押し流れ、洋上は津波となって肥前島原は勿論のこと、肥後熊本の地まで家屋の流出男女の死亡甚しきと急報された。

近藤重蔵は天明三年の浅間山大噴火の時は十二歳であった。江戸白山の鶏声ヶ窪の屋敷にいたが其の大変事は今だに生々しく蘇える。

其の年の春の頃より西北の夕空に稲光が走ったり、雷鳴が聞えたりして江戸市中町内露路辺で浅間の山焼が騒がれ始めると、日毎に雷鳴が激しくなり北風に運ばれて降灰や砂塵が降り、時には球栗程の岩塊が降った。

雷鳴は噴火の山鳴りと共に益々強くなり浅間の方角に畑立ち篭って空一面を覆うようになった。

七月六日夕刻より地鳴り震動激しく戸障子もガタガタ音を立てて震えた。翌七日夜が明けても終日天は冥く夜半より綿毛のような灰が降り積って、母美濃が立てた七夕の飾りの笹竹にも降り積って庭一面が雪のように白かった。噴火が鎮静してから重蔵は奚疑塾の学友と降灰の残る小石川の神田上水や、浅草の辺り迄歩き廻って出水の跡の硫黄の臭いが漂う泥土に、無惨な人馬の屍を見て大噴火の凄まじさに震え上った。其うした記憶が未だ生生しいので、肥前島原普賢岳の大噴火の災害を余所事とは思えなかった。

五月の末になって重蔵は、組頭より肥前国島原の藩主松平主殿頭忠怒が普賢岳の噴火以来、溶岩流で城壁も崩れ、領土の田畑は埋没し大津波で多くの家屋や一万四千余の領民も海に沈んだ大被害に心を痛め、重病となっていたが、五月十四日五十六歳で没したと聞いた。

鶏声ヶ窪の屋敷に戻って父守知に話すと、

「故主殿頭忠怒殿は、儂より二歳上じゃが八十之亟と言った頃の部屋住みの頃からの交友であった。兄君忠刻殿の嗣子となって大和に行った後は会えなくなったが、更に安永三年に島原へ国替になったのじゃった。」

と暗然として自然災害の大きな拡がりを嘆いた。

其の後普賢岳の火山活動は何度も爆発を繰り返し乍ら大規模の火砕屑の流出は衰えて、慢性的な噴煙となっていった。

江戸の街の噂も何時か消えたが重蔵には、普賢岳の噴火泥土に推し埋った家諸共に死んだ多くの人々や、津波に呑み込まれた多くの者の災害を憂慮して病死した大名のいたことを何時迄も忘れなかった。

其の年六月廿日、将軍家齊は東叡山に詣で有徳院殿（吉宗）靈廟に御参をなした。

近藤重蔵は御先手与力として山内の警護に当っていたが、組頭より午後は詰め所へ戻るように伝えられた。いつもはご参の帰りは大番組与力に警護は引き継がれ、非当与力は役を離れるのであるが、何事かと和田倉外辰の口の評定所詰め所に戻ると、評定所詰めの与力一同が何事か目付中川勘三郎忠英よりのお達しがあると、集められていた。

半刻程して表われた中川忠英が、

「先刻、天文方より急な依頼通報があった。六月十八日亥の刻（午後十時）頃品川沖の夜空に怪光を発して飛び来った異称なる物体があって、江戸上空を西南より東北方に飛び去った。

怪しき物体は笠形の態にてその開いた真下より黄色の怪光を発し、宛ら梵鐘を衝くが如きの重々しき鳴音を響かせて飛び去り星空に消えた。幸い夜も二更のこと故、気付く者も少なく騒動に至らなかったが、近頃近海に出没する異国船の類が何やらエレキテルによって江戸上空の探索をやらかしているやも知れずと案ぜられる次第じゃ、

其処で其の方共は町方の火事盗賊用心の巡回とは別に隠密裡に怪非光異物飛来の真偽、市中の噂や流言等に注意して暫くは紅燈の巷の巡回を止め護持院ヶ原等の御火除地を見廻ようにせよ。

尚、此の笠形怪光物体は浅草橋の司天台の天文方役人が直接見た訳でなく、市中自身番よりの通報に依って町方役人が知らせたもので、其の後司天台で天体測量の星眼鏡で毎晩見ても何の異変も無いそうじゃ」

と伝えられたが、評定所詰めの与力の誰もが天文、星学などの知識技能には暗く、重蔵とても全く雲を摑むような莫然たる探索なので、配下の同心加藤文五郎には秘密を打ち明けて、其の後幾晩か二人で当所なく夜空を見上げて彷徨い歩いた。他の同僚達は莫迦らしくなって止めて仕舞った。重蔵も程なく中止したが、天下を治める

将軍のいる江戸の夜空に怪光を発する得体の知れぬ物体の飛来に不気味な危機感を覚え、理解不可能な事への懼れを抱いたのであった。

而、安永八年に獄死したと云う希代の変人学者平賀源内は長崎へ遊学しエレキテルを始め奇抜な機物を発明してオランダ人すら驚く程の知識技術を持っていたと聞いた。存命ならば不可思議な笠形怪光物体の謎を解くであろうと、重蔵は己れの学んだ儒学が実証主義の古注学であって、天文、数理学や物象については全くの門外漢であった、と恥ずかしく思い何時の日にか長崎に遊学して異国の学を修めんと新たなる学問への意欲を湧き起した。

幸い近くに天文、地理学、数学の第一級学者本多利明が家塾を開いているのを思い起した。

本多利明は、重蔵が佐藤一斎や奚疑塾の学友で興した白山義学塾を義挙として護国寺前の家塾から講義に来て呉れた恩師でもあった。

本多利明は白山義学塾は貧しい職人の子や農家の子弟が多いので、星の伝承物語や星座の名を教える程度で、重蔵達には蝦夷地開拓論や魯西亞国交易論を論講していた。重蔵は其の方面でも啓蒙されることが多く、遙かに遠い極北の地の魯西亞人が豊かな天然資源や食料衣類を求めて年ごとに南下し、カムチャッカより千島に迄入り来った事や、虐げられている千島や蝦夷地のアイヌの事にも関心を深めていたが、今は不気味な笠形怪光物体の謎を解くことであった。

処が、幕府の中枢部では一時は素破！異変と色めいたが、実物を見た者も不確実であり、其の後は出現の様子も無かったので、怪光を発して飛び去った笠形物体など夏の夜の夢か幻であろうと忘れ去られ、其れよりも寛政三年初頭より蝦夷地や千島の国後・択捉・得撫の巡見に密かに派遣されていた最上徳内が年末に江戸に帰って、蝦夷地アイヌの生活や、松前藩の山丹人との密交易や、魯西亞国赤蝦夷の入殖の動静を報告したが、最上徳内が齎した赤人情報を重視した幕府は更に寛政四年閏二月十日徳内を蝦夷地より樺太の見分探索に派遣したのである。

老中松平定信は蝦夷地警備を重大視してその対策を幕閣に諮り北辺への関心が急に高まったのである。

近藤重蔵が評定所で洩れ聞いた処では、寛政元年の国後島のアイヌ反乱が松前藩が場所制請負人を利用してアイヌを酷使していたことに起因したもので、乱後幕府は松前藩に「蝦夷地改正令」を出させ、アイヌ救済撫育と魯西亞南下の警備を命じたが、最上徳内の見分報告では松前藩と場所請負商人とは慣れ合って、アイヌとの物産交易を等価交換をせず似然として暴利を貪っているばかりか、西蝦夷及び樺太島のアイヌを通して赤蝦夷（魯西亞人）や山丹人（沿海州人）との抜荷交易（密貿易）をしている様子であると云う。

更に重要なことは、最上徳内がアイヌの案内で国後島

より択捉島、得撫島を視察して陸に上げられた異国船や住居跡を発見し、魯西亞国赤蝦夷の植民団が数年間入り込んでいたことを確認した、更に徳内は探索隊を編成して松前より二艘の船で西蝦夷より宗谷に至り更に樺太島をも見分して来たと云う。

幕府の鎖国政策に依って長い間海外の事情に疎くなっていた幕閣以下重臣達の驚きは一方ならず、北辺に関する危機感が急速に高まった。

近藤重蔵は先頃の天空の怪光物体から天文、地理、物象学の無知を恥じ本多利明に教えを糞い度いと思い乍ら果せない裡に、今度は北辺の重大危機を知り、蝦夷地より千島樺太の事情や北方異国人への関心を昂進させた。

最上徳内は本多利明の弟子であり、先の田沼意次の天明年間の蝦夷地千島の見分隊派遣の時に本多利明は深く関わり合っていたと聞いているので、今度こそは是非共本多利明より教えを受けようと、小石川の音羽塾に行き弟子の礼を以って教えを仰いだ。

本多利明は、白山義学塾に何度も講義に行き、重蔵とは年の差を超えて心を通じ合っていたが、今は重蔵が評定所の与力となっているので蝦夷地・千島の問題について論ずることは政道批判にも及ぶ虞れもあると憚ることもあったが、足繁く通う重蔵の熱意に応えて胸襟を開いて語り始めた。

「拙者は寛保三年（一七四三）越後蒲原郡の農家に生を享けたが、幼少の頃より好学の念強く寺子屋の古老に学問の手引を受け、十八歳の秋江戸に出て今井兼庭に算学、千葉歳胤に天文・暦学を学び更に師を求めて諸学を博く学び、漢訳洋書を通して西欧の数学・天文測量・地理学に入って、明和三年二十四歳で此処に音羽塾を開いて、天文暦学・地学・航海術等も教え、更に焔硝製造学より産業経世の論にも及んだ、盛んに北夷の開拓を論じたので世間より北夷斎先生の名を頂いた程じゃ。

経世の論は早くから江戸・大阪等の市井の窮民や全国の貧農を見ているので、経世の義憤を感じ其の救済には殖産興業によって窮乏日本全体を豊かにする他に無く、狭い本土の新田開発より北方蝦夷地の開拓こそ大事と、各所で北夷開拓論を説き、幕府や水戸藩主徳川治保侯や会津藩主松平定信侯に拙著『蝦夷拾遺』を供えて度々県日していた。

偶々志を同じくする老中田沼意次殿も幕府の財政難の打開に印旛沼・手賀沼の干拓と併せて蝦夷地開拓と、長崎出島の外国貿易と同じく北方交易を試みようと、その調査を密かに勘定奉行松本秀持に命じた。

蝦夷地産物は場所負請商が松前藩に代ってアイヌから安く買い上げ、北前船で本土に運び大阪・江戸、で高価に売捌き、松前藩と場所負請商ばかり富み豊かになり、アイヌを原始生活の侭に留めているのじゃ、更にアイヌ

と北方異民との物々交換を利用して、山丹人より珍しい錦織物等を交易している有様じゃ、田沼意次殿は其処へ目をつけ直接北方交易を開かんとしたのじゃ、其の下調べは秘密にされる為に、身分の軽い普請役を蝦夷地巡検使として、蝦夷地見分隊を編成した。

此れを知った拙者は蝦夷地見分隊に随行して現地を見聞しようと、兼てより昵懇の見分隊の青島俊蔵政教を通じて願い出たが仲々許されず、身分を足軽として漸く許されたが、出発前に病気となり已む無く弟子の最上徳内を代行させたのじゃ」

と蝦夷地見分隊の経緯を話して呉れた。

編成は普請役山口鉄五郎高品以下五名、下役五名に測量資材、食料物資等を扱う傭員数名、最上徳内は竿取としての雇いで主として測量資材の担送をしたが見分中その専門技能と見識を発揮し大いに活躍した。

見分隊は三班に編成され、第一班は蝦夷地西海岸を北上して宗谷に至り、樺太に渡って異国との交通経路、地理状況、産物交易の調査をする。第二班は蝦夷地東海岸より千島の国後島へ渡り、更に択捉島、得撫島にも渡海し、地理、産物、交易状況を調査する。第三班は国後島を見分隊の連絡拠点とし、千島、蝦夷地との連絡に当たり、併せて付近の産物、金銀山の調査をする。

此れ等の輸送に千石より八百石積み二艘を用い、隊員食料・資材・医薬品・交易物品を積み、船頭以下乗組員を含めて総てを三千両で苫屋久兵衛に請負わせ、天明五年二月江戸を出発した。三月松前に入港したが北の海の状況を日和待ちの間に、松前藩より道案内、通詞、医師護衛の兵を得て四月二十九日松前を出発、第二班は蝦夷地東海岸伝いに釧路・厚岸・霧多布を経て根室に達した。途中の険難未踏の突破行で根室に着いたのは七月中旬、隊員の殆どは半病人となり更に山なす波浪を冒して千島渡海は困難であったが、下役の大石逸平と最上徳内は、アイヌの舟に分乗して国後島南端オトシルベに渡り着き、更に島の西岸を辿って北端アトイヤに達した。此処は択捉島へのアイヌの渡り口であったが既に八月半ば過ぎ山なす怒涛にアイヌは渡海を無理と阻むので已む無く帰途についた。松前へ帰着すると根室に残った隊員は先に引き揚げて来ていた、二名は報告に帰府し越冬となった。

第一班は蝦夷地西岸を見分し宗谷に至り、此処を根拠地として樺太南端の白主に上陸し東西両岸を探検したが冬期に入り宗谷に戻って越冬中庵原弥六郎宣方が凍死し他の多くは凍傷となって翌年松前へ引き返した。

天明五年の第一次見分の成果を山口鉄五郎、佐藤玄六郎が報告に帰府し、天明六年第二見分として大石逸平は再び樺太に渡って白主より西岸は多蘭泊、東岸は加多留辺り迄探検した。

最上徳内は天明六年見分隊が松前で越冬して、帰府した山口鉄五郎が第二次見分の命を受けて来るのを待って

編集室子のメモ

◆原稿締め切りに合わせて、作品を書き上げることは仲間の雑誌とはいえ鉄則でなければならない。これが守れないようなら、作家の資質を疑われても仕方がないであろうし、同人雑誌ではたちまち亡びにつながる。

◆発表誌をもち、締め切りがなければ作品が生れないのもまた事実だ。本誌は次号をもって五十号に達するが、十余年、微小の作家集団としていささか積み上げ来ったものはあだおろそかに思えない努力、また努力の結晶である。現われずとはいえ秀作は少なくはないと自負する。

◆合本五冊に製本したものを座右に置きひそかに微笑み、かそけくも自足を覚える。

◆「男たちの藩」をもって時代小説への一歩を踏み出した三戸岡道夫は次いで二の矢を満月のごとくつがえ、はっしと放つ日が初秋に予定されている。（お）

「まんじ」　第四十九号

平成五年八月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

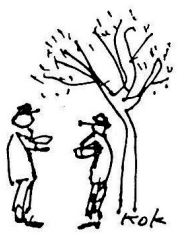
郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎　〇三（三二六一）一六一〇

目　次

病葉の青春譜 …… 井上二三男　1
詩　鎮魂賦　二題ほか …… 青木昭成　12
芭蕉のこと …… 青木昭成　14
Gone are the days …… 山根三枝子　22
天守台（その二） …… 三戸岡道夫　40
【連載】
近藤富蔵の生涯（第二十一回） …… 金子正義　59
有院家の人々（第十一回）完 …… 大和禎人　69
第五十号記念特集 …… 79
牛歩ここに五十号 …… 大和禎人
記念号に寄せて
「まんじ」五十号を讃える …… 青木昭成
五十号回想 …… 井上二三男
同人ご一同様（書信） …… 金子正義
「まんじ」の思い出 …… 佐々木一郎
経理面から見た「まんじ」五十号 …… 三戸岡道夫
柴田富佐子
・これまでの印刷経費白書・参加同人異動の記録
・表紙絵のうつりかわり　・水虎洞くんのカットについて
・作者別掲載全作品一覧
掲載作品総目次（第四十一号〜第五十号） …… 109
編集子のメモ …… 110

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



病葉の青春譜

井上二三男

絶え間のない、自分の瞬間の連続の中に綴られたものごとは、殆どは忘れ去られて行くのだが、ある瞬間だけが鮮やかに銘記されているのはどうしてなのだろうか。

そうした記憶の中のことがらを、ときどき思い起すことがある。その思い出が回を重ね、月日を重ねるに従って、ふと、これは本当にあったことなのかという疑いを持つと、しかと事実であったという自信がなくなってしまうように思われる記憶がある。あるいは、夢を見たことを思い起し、反芻しているうちに、いつしか事実であったように思えてきたものがあるかも知れない。

それとは逆に日記類の記録をみるとそこに残されたことがらは全く自分の経験から遊離し、異なる客体の記述であるように思われることがある。

古い記憶は、明確な焦点を有する部分がありながら、周辺は朦朧となってしまっている。

須田の灰色の青春の記憶もすでに覚束ない。

（一）

先の大戦の末期、昭和二十年三月、右大腿骨を病んで一年半の病院生活から退院したばかりの須田の身を案じた両親は、一家を東京の戦火から避けるため、赤城山の中腹の県立の牧場に疎開した。

まろやかな曲線を持つ赤城山は、南にゆったりと裾を広げ、裾野の遙か彼方に前橋の街の家々の屋根が望まれた。眼を西に転ずると霞の中に榛名の山波が浮かび、牧歌の風光は、戦火の瓦礫を逃れてきた疎開者には全く別世界であった。

しかし、一カ月経ち、二カ月経ち、三カ月も経つと、風薫る陽光の中にありながら、心は乾いてくるのであった。労働をすることができない病者には、徒然の克服が

課されていた。労働は人生の救いではないかと思われた。

「退屈でしょう。」と慰める人はいても、「苦しいでしょう」という人はいない。須田は、乾いた心を潤すことを、読書に求めていた。そこには対話があった。空想があった。自由な世界があった。しかし、疎開生活で書物もなく、本屋もなかった。活字であれば何でもよかった。

たまたま、これも、牧場に疎開していた若者で、かなりの蔵書を持っている青年がいたので、須田は、自分からその青年の家を訪ね、その蔵書を借りて貪り読んだ。

「馬鈴薯の花咲く頃と
なりにけり
君もこの花を好きたまふらむ」

啄木がこの歌に偲んだ「君」を母とするという彼は、須田と同年輩ながら、言葉も行動も大人びていて、須田は強烈なコンプレックスを感じた。まだ戦いは熾烈で、国民は敗戦などまったく思いもよらない時期に、ピストルを示して

「須田さん、日本は敗けますよ。このピストルが役に立ちますよ。」

と、嘯くのであった。

須田は彼から遠ざかった。

八月五日、夜、関東の空に侵入したB29の編隊は、赤城山の上空でUターンし、石臼を回すような音を響かせながら牧場の上空を通過し、前橋の市街を襲った。

「牧場の家畜舎は飛行機の格納庫と間違われて爆撃の目標になるぞ」

という声に、須田は、飼猫を懐に入れ、人家を離れた馬場の周囲を囲む桜の樹の下に潜んだ。前橋の上空に炸裂した火の玉は、次ぎの瞬間、地表に火柱となって踊った。

十日後、防空壕を掘る手を休めて、ラジオのマグネチックスピーカーのビリビリする音で終戦を告げる重々しい玉音放送を聞いた。日本は敗けた、と茫然とした。

須田の精神的飢餓は、いよいよ激しくなった。

その年の暮、須田は、単身東京に戻り、学校に復した。空襲の焼失を免れた父の知人の家の三畳に間借生活を送ることになった。

疎開以後、父の仕事は思わしくなく、家計上は、一日も早い須田の就職が期待されていた。須田は、四年修了で何処ぞの大学の夜間の予科に入学したいと考えて、それを絶対の条件として自分に課した。停電になれば、英語の暗唱に利用し、朝は早く登校し、始業まで窓辺に机を引きだして筆記に励んだ。校内の進学のための補習授業に四年生でただ一人、五年生の中に参加した。

一年余の後、四年の学年末の頃、右の胸に呼吸の度に

異常を覚えるようになった。終業式もそこそこに赤城に帰省した夜、呼吸が困難になるほどの胸痛を覚え、そのまま、療養生活に入り、東京へ帰ることはできなくなった。

大気、安静、栄養だけが療養の頼りであった時代だったが、大気澄む山の懐で空気の新鮮さは絶好であったし、栄養の面でも街では手に入らない鶏卵と牛乳は、牧場が生産する新鮮なものが割り当てながら手に入った。

街の病院へは最初に診察を受けに行っただけであった。戦時中は軍の病院になっていた古い建物の暗い廊下と黒ずんだ重い板戸の冷たさは、未だに記憶に刻まれている。時には、母に頼んで街の薬局で買い求めたヴィタミンBの注射を自分で自分の上腕に射った。

須田は、再度の退学届けを提出した。

学校畑の耕作が中心の地元の青年学校に籍を置いて、殆ど登校せずに卒業した。当時の在校生の顔は誰一人知らない。

やがて、気になっていた微熱もいつしか忘れることが多くなった。

疎開者や少年飛行兵帰りの二、三の友人もできた。牧場に近い開拓村に入植した東京からの疎開の若者は、須田と同じように周囲に馴染めず、孤独をかこっていた。誰ともなく、自然に須田の家を拠点にして、夜遅くまで語り合うようになった。電力の極端な不足から電球のフィラメントは、線香の火程の光を出すのがやっとであった。印刷物はランプを点さなくては読めなかった。灯芯の焔から出る煙で顔が黒く燻ったものであった。深夜、家を出て山の畑の細道を辿ると、晩春の夜気はまだ寒く、まだ背の低い玉蜀黍の葉は月光に照らされて青白く波打ち、南へ傾斜して広がる赤城山の裾の彼方下界に街の灯が幽かである。その中を疎開の若者が当てもなく歩き廻った。

山の土地には、疎開者には馴染めない何かがあった。

そうして、昭和二十三年四月から牧場に事務員として勤めを始めた。須田が住む公舎は、大正時代に建てられた古い事務所を転用したもので、かつて、机が並べられていた部分は土間であった。その公舎を出れば現在の二階建て洋風の事務所である。事務所の前庭には、昭和九年の行幸を記念する碑が建てられていた。事務所と公舎は同じ敷地の表と裏で、須田は、学生服に下駄履き、腰に手拭いというスタイルで通した。

牧場というと長閑かな響きではあるものの、中に入れば様々な問題があるのであった。昭和二十二年地方制度が改革され、事務処理にも新たな対応が迫られていた。制度改変時でもあり、事務量も多くなっていた。家畜を飼育する牧場であるから牧夫、耕夫、技師たちの殆どは

牧場内に居住していて、その家庭への新聞配布、米の配給、物資の配給、光熱費の徴収などから選挙事務まで一つの部落共同体として役場の事務の延長もあって、事務係長ほか二人の事務員では、かなりの手不足なのであった。

牧場内には綿羊、種牛、種馬、乳牛、鶏、種豚等の畜舎が散在していたが、電話は事務所にしかなく、各畜舎の技師たちへ電話が掛かってくると電話を待たせ、須田は自転車で畜舎へ走り、技師に自転車を渡して自分は徒歩で事務所へ帰るのである。閑かといえば閑かであるが事務処理にとってはかなり障害になった。会計の締切りの日には徹夜になることが多かった。仕事に忙殺され、ここでは労働が心の余裕を奪って行った。それというのも、この勤務は、疎開の果てのもので、自ら望むものでなかったところから打ち込むことがなかったものであったろう。

ただ一点、須田が心を籠めた仕事がある。遠くの牧草地に羊の群れを放牧している牧夫や牧草畑に出動している耕夫達へ時を報せる鐘を打つ作業である。須田は、鐘の音を耳にするすべての人の心に響け、心に沁みよと願って鐘を打った。それが、須田の唯一の祈りの時であった。

その年六月、太宰治の入水事件があった。

工業学校の文芸部の機関誌に投稿していた須田は、文芸部顧問であった大庭先生から「私の友人が君の文章が太宰に似ているといっていたよ」と聞かされ、また、先生から太宰の著書を頂いたことなどから、太宰の幾つかの作品を読んでいた。

新聞に眼を通しながら、母がぽつりといった。

「やはり、二人別々にならないように帯か紐かで一緒に結わえていたんだろうね」

須田は、はっきりとそれを否定した。

「そんなことはしなかったろう」

と。現世を否定して死に行く太宰が、人間的な現世への未練がましい行為はしないであろうと感じたのであった。しかし、報道されたところによれば、二人の身体は紐で結わえられていたということであった。太宰の真意は知る由もないが、現世の未練を死後に引摺る行為は須田に衝撃を与えた。

須田は、現世の未練を抱えてなら人は容易に死ぬるものなのであろうかと思った。

たまに寄せられる東京の友人たちからの便りでは、殆どの友人は大学に進学した旨を伝えてきた。須田は、一人とり残されるような焦燥感に駆られ、その年の九月、H大の専門部法律科の編入試験に挑んだ。朝、暁に起きて、事務所の二階に籠もり、受験に備えた。

受験の当日は、疎開者仲間の一人で少年飛行兵帰りの関根が、早朝、右大腿部の疾病のため自転車に乗れない須田を自転車の荷台に乗せて前橋駅まで送ってくれた。

前橋までは山の裾の長い坂道で、勾配がきつく、山へ向かっては自転車に乗ることはできず、皆、自転車を押し上げるのである。下りは自転車のスピードがついて、砂塵をもうもうと巻き上げ、砂利を飛ばし、急にブレーキを掛ければ自転車は横転する。スピードを落とすのが大変な道中なのであった。現に、自転車のスピードを落とし切れず、電柱に激突して死亡した事故も発生している。

後に、関根が

「あの時は、須田君を落として怪我でもさせて、試験に間に合わないようなことになったら大変だと緊張したよ」

と語ったのを聞き、狭い荷台にしがみついて、でこぼこ道に腰が病めることだけを気にしていた自分を恥ずかしく思った。自分を支えてくれる友人がいることをありがたく思ったものである。

そうして、赤城の中腹の牧場に勤めながら、東京の大学への通学が始まった。

地方公務員法が施行される以前のことで、家畜を飼育するという牧場の勤務の特殊性から、土・日曜日を勤め、他日に代休をとる方便があったのである。

一回の上京に、できれば二日の授業に出席したいので、上京の都度、かつての恩師の大庭先生の下宿や友人の家に泊めてもらうのであった。

友人の家も戦災復興住宅で部屋は三間、両親と友人と年頃の娘さんが三人、そこへ須田が転がり込んだのである。食糧事情も悪く、須田が、僅かの米、醤油をカバンに詰めて行ったとしてもそんなものが何になろう。息子の友人というだけでよくぞ泊めて世話をして頂けた、ありがたいことであったと思う。

登校の日は、赤城の中腹から前橋駅まで、早朝、約十二キロを歩いて下り、前橋から上野まで貨車の中に新聞紙を敷いて寿司詰めになって運ばれた。貨車の入口には、人がおちないように材木が打ち付けてあった。

大学では、教授の話をノートに取りながら、席の周囲の者から他の科目のノートを借りてそれを写した。

秋も深い頃、しめやかな雨の夜のこと。須田は、上京して初めて友人の家に泊めてもらっていた。濡れた街路に街の灯が映って幻想的な夜景の中から、品のよい茶のワンピースに蟬の羽のように薄い黄色のコートを着た美しい人が現われた。友人の姉の大きな瞳と明快な歯切れのよい言葉は新鮮な都会の衝撃であった。須田は胸をときめかせた。

帰りの汽車は、上野発午後五時十五分である。
前橋到着は九時近い時刻になっていた。その時刻にまだ店を開いていた八百屋の店先で林檎を一つ求め、それを齧りながら十二キロの夜道を山へ向かうのである。
当時、いつかは東京へ戻りたいと考えていた須田の心は既に東京へ飛んでいて、事務所の同僚の苦労を考える余裕はなかった。須田の学年末試験と県立の牧場の年度末は時期が重なり、一週間の連続の休暇の申し出に「須田君は、ここの勤めが本来なので、学校は、その余暇に行っているのだから、今の仕事を仕上げてからにしてくれ」
という事務係長の言葉に反発さえ覚えたものであった。今にして思えば、須田が東京から帰った翌日、同僚は疲労に浅黒い顔をしていたのであった。
若さ故の利己、自己中心であったことを須田は、後年自分が職場の管理に係る地位になって思い至るのであった。

（二）

須田が折原尚子と知り合ったのは、この頃、昭和二十三年の秋であった。
それは、文学好きで孤独な若者に共通の場を得させようとする友人の羽田の仲介からであった。
羽田は、須田の家へ立ち寄る疎開者の一人である。開拓部落に入植した羽田は、開墾の鍬を振っていたが、望まれて、村の小学校の教諭になっていた。
折原尚子は、羽田の同僚である。
尚子と須田の交流は、羽田に託された尚子からの書簡に始まる。
羽田から渡された尚子の手紙の冒頭の「文学を愛しておられると伺いました。」ということばは、しっかりと記憶している。しかし、それに対してどのように返事を書いたのか、尚子との初対面は何処で、どのようであったのか、明確な記憶としては残っていないが、須田が小学校へ羽田を訪ねて尚子を紹介されたように思う。教員室に大きな木枠のトタン張りの火鉢があったのを記憶している。
尚子が勤める小学校は、須田の事務所から県道を三〜四十分歩いて下った所にある。
小学校には羽田がいたし、須田の家を根城にする疎開者同志がめいめい勝手なことを書いて、小学校でガリ版を借りて冊子にしたことがあった。ガリ版冊子の表紙にユリの絵を書いた高橋は、後年、日本美術院同人になったが、平成元年ガンのためまだ若くして亡くなっている。
また、須田は、自分も含めて、これからの若者に英語の知識は必要になると考え、正しい発音を身につけたいという願いから、土曜日の午後、小学校の教室を借り、

前橋から英国人の宣教師を招いてバイブルを英語で読む学習を計画したことがある。地元の高校生が十五人ほど集まったが、英語を学びたいという須田たちの希望が宣教師に通じず、教室内での宣教師の布教活動のような結果になり、校長から注意を受け、須田を中心とした自主的な学習に切替えた。
そのようなことがあって、小学校は須田にとって全く不案内の場所ではなかった。
尚子の声の抑揚は快く響き、会話は楽しかった。
尚子との会話は、須田のカラカラの精神に潤いを与えた。消えかかった胸の火が明るく点る思いがした。
二人の会話は、憧れに過ぎない文学の世界のことが主であったが、回を重ねるにつれてそれぞれの日常のことがらが話題になっていった。むしろ、そのようなことがお互いの生きる姿を伝えるものとして楽しい話題であった。尚子は、授業中の眼を見張るような子供たちの才能や資質、感動する行動などについて語った。須田にとっても興味ある、感動的なことが多かった。事務室で書類を処理し、電話を受けて伝え、時には来客に茶をいれる。そうした乾燥したことがらに比して、尚子の世界の何と生き生きと明るい伸びやかな世界であることか。須田は、羨望と胸が締め付けられるような共感を覚えた。
須田が小学校を訪ねる回数が多くなった。
その反面、これでよいのか、という自問の心が涌いてきた。それまでの須田は、女性に惹かれる青春の蠢きを意識すると、常に、自分ごときが女性と係わることは許されることではないとして、その心の動きを否定してきた。尚子とのことは全くの例外といえた。冷静に尚子とのことを考えると、これは望んでも叶うことではなく、在ってはならないこととして自分を見据え、自制のできる段階で火を消さねばならないと考えるようになった。
そうして、尚子の家を訪れてそれを自分の青春の記念碑とし、終末としようと決心した。
須田は、秋の夕刻、尚子の家を訪ねた。村長の家は黒く光り、重々しく、広かった。女性の友人を持ったことはなかったし、もちろん女性の家を訪ねたことなどない須田にしては、かなり勇気のいる行動であった。
尚子の部屋に請じ入れられた須田の胸には、尚子の部屋で時を共にする喜びの炎と、これを終わりとする悲愴の青白い炎がこもごも燃え盛った。
そこで、須田は、尚子の「斜陽の問題」という一文を見せられた。原稿用紙二十枚ほどの小評論であったが、須田は、その評論の装丁をさせて欲しいと申し入れた。秘かな記念に相応しいものに自分の手で装丁したいと考えたのである。その「あとがき」に須田は、こう書こうと思った。「太宰が山崎富栄と入水したとき、二人は身体を紐で結わえていた。太古の王者はピラミッドを作っ

た。死に行く者にとって現世はやはり未練を残すところなのであろうか。その思いが私にもあるのであろう、この書を装丁する所以である。」と。

時を忘れた須田が尚子の家を辞したのは、深夜であった。

しかし、尚子の家を訪ねた夜が終末の夜にはならなかった。前より増して須田は、尚子にのめり込んで行った。

この土地の交通機関は、その頃は、牧場の事務所前から前橋駅まで一日に数回のバスがあった。最終は、前橋駅発午後5時半であったと思う。そのバスに乗り遅れれば歩きである。従って、自転車に乗れるものは自転車を利用した。その自転車も帰りの道では乗ることはできず、大きな荷物になってしまうのであった。須田は、バスに乗り遅れて、十二キロの道をしばしば歩いた。道の両側は桑畑で、舞い立つ砂埃が桑の葉に積もっていた。

前橋への出張にはバスを利用した。朝、一番のバスで山を下るとき、連れ立って登校する子供と尚子の姿をバスの窓から見下ろすことがあった。赤と黒の横縞の半袖のセーターと黒のスカートで子供たちに囲まれた活動的な姿の尚子を須田は微笑ましく見ていた。

須田が事務を終えて、そのまま県道を下って行くと運が良ければ、県道を上って帰宅する尚子と合うことができた。尚子の家は、県道を途中で西へ入るので、二人が出会う可能性は、小学校から尚子が西へ折れるまでの一キロ程の区間である。敢えて公然たる行為ともいえないから、電話で打ち合わせる等ということはなかった。幸いな偶然を期待して須田は砂利の多い県道を下った。

偶然の発生は、確率が高かった。須田が一人で帰ったことは記憶にない。

二人は、そのまま県道を上り、牧場の馬場の西を流れる川に下り、川原の松林の石に腰を降ろす。

平素は水量は少ないが、夏と秋の出水のときは巨石を押し出し、塁々たる石の川原に巨石が散在している。小高い岸には上流から冬の強風を防ぐ松林が続き、亭々たる松は黒々と聳え立っている。秋遅く、枯れ立つ尾花は夜霧に暗黒に濡れ、松籟は、川瀬の音を吹き消して、波のように夜気を震わせた。肩を寄せあう二人は、ただ、一点の存在に過ぎなかった。

幸いな偶然が働かないまま小学校に来ると、須田は、小学校の校舎の裏手から二階の端の音楽室に入る。

夕陽は榛名山の背に落ちて、空は朱に染まっているが、校庭の松の木は薄暮に影を忍ばせている。ほの暗い音楽室で尚子は、ピアノに向かっている。その後姿は、鍵を叩くその激しい手の動きとは別に何か悲しさを振り切るための行に耐えているように須田には思えた。

須田は、無言のまま壁ぎわのベンチに腰を降ろし、静かに尚子を見守る。

暮色が窓から忍び込み、譜面を消して行く。譜を読み取れなくなる頃、尚子はピアノを閉じる。そして、立ち上がり、須田に静かな笑みを向ける。

尚子の悲しみの源は、某との婚約解消という。その理由は、お互いの精神世界の不一致というようなことの由。長い間、考え、悩んだ末の結論で、納得している筈なのに、淋しいという。須田は、須田の存在が或いは一因ではないのかと問う。尚子は、首を静かに横に振り

「いいえ、どうにもならないところにいっていたの、そこに須田さんが現れたのね」

と、淋しく笑った。

尚子は、「白い花の咲く頃」をよく口ずさんだ。

「白い花が　咲いてた
ふるさとの　遠い夢の日
さよならと　言ったら
黙ってうつむいてた　お下髪
悲しかった　あの時の
あの　白い花だよ」

いつかはいわねばならない「さよなら」を寄せる白い花は何処にあるのか。灰色の空気を突き通すような細い伸びやかな声は、須田の心をも突き刺した。

二人の逢瀬は、通常は終業後の二～三時間、県道を共に歩き、川原の右に腰を降ろしての語り合いである。尚子が村人に知られているところから、自ずから、夜の帳の中に安らぐ。昼日中とは違って、明らかに人目につくということはないであろうけれども、薄暮や夜道でも人とすれ違えば何処の誰とはすぐ知れる。須田は、疎開者という立場から行き交う人の眼は無視し得たが、尚子はそうはいかないのであろう。すれ違う土地の人に

「おばんです」

と声を掛けられれば、わるびれず

「こんばんは」

と答えた。それは、毅然として心を決しているかのようにみえた。

しかし、若い男女の夜行ともなれば怪しく思うのが人情であろう。「おばんです」の声に好奇の響きがなくはなかった。噂は本人たちの耳には入らないが、田舎では格好の話題になったのであろう。度重なる夜帰りの息子のことについては母の耳にも入ったものか、母のそれとない気遣いを感じたことがある。須田についても、小学校に英語の学習に出入りし、この土地には少ない大学生、しかも、県の牧場に勤めているというようなことから、その存在を知る人は多くなっているようであった。

はっきりと忠告してくれたのは友人の羽田である。
「どうなることかと心配しているよ。責任もあるしね」
しかし、その眼差しには笑みがあった。

須田の終業後の県道下りは、なお続いた。

尚子とのことに溺れながら、須田の心は葛藤した。結婚を考えるにはまだ若すぎるし、人間的にも社会的にも中途半端である。しかも、漫然と人を愛することは罪悪であるという考えが須田にはあった。それでいて、尚子を思うとき、この人によってわが子を得たいという願いが心を掠めることがあった。そうした心の動きは思いがけず、自分自身で驚きであった。しかし、この願いは決して賤しいものではない。これは自然な願いなのだと思った。自然な心の動きを無視し、押し殺すことは、余りにも自分が惨めではないのかとも思った。自然な心の動きは大事にしてやって良いのではないか、そうも思った。しかし、自己を知る限りでは、情熱に甘えてはならぬのであった。須田の言動は、ストイックで、青白く、冷徹を装っていた。尚子が日常のさまざまを暖かく掌にし、優しく語るのに、須田は宗教とか、生命とかを多く語った。

「須田さんきらい。お説教ばかりするのね」
という尚子の一言が記憶の中にある。

そして、尚子との終末の記憶に至る。
通常、二人が共にいられるのは、せいぜい二〜三時間の夜の時間である。それも、県道を共に歩き、川原で語り合う……尚子も須田も人に注目されているとなればなかなか一日の行動をともにできる機会はない。
高崎の尚子の友人宅へ同行した一日は、二人にとって数少ない一日の行動であった。
その家が高崎の何町にあったのか。前後のことは記憶にない。その所在が確としないところから、今となってみると、或いは夢の中の出来事であったのかとさえ思われる。しかし、記憶に留められている断片は、かなり明確な情景である。それは、夢の中の出来事に過ぎないのに、しばしば思い出すほどに真実味を帯びて、明確な記憶に転化したものなのであろうか。
高崎は一部が戦火を受けていて、今も眼をつぶればその廃墟のさまがありありと思い浮かぶ。訪ねた尚子の友人の家は焼け残った区域の端で、道を隔てて廃墟が迫っていた。古式床しい木造二階建てのその家は、玄関を入った畳の間に続く回廊にも畳表が敷かれ、ガラス越しに中庭が望まれ、樹の下の句碑が下草に覆われていた。右手の階段を中庭を見下ろしながら昇ると尚子の友人の部屋であった。友人は、尚子の師範学校の同級生であったように思われる。何のために須田が同道したのか。そう

したことも思い出すことができない。廃墟に近い場所の、床しく、落ち着いたその家の佇まいを須田は忘れない。高崎は村上鬼城がいた土地である。あの句碑は、ことによるとそうした縁が秘められていたのかもしれない。
夢かとも思うほど輪郭がぼんやりした一事を須田が深い感慨を以て思い起こすのは、この日を期として、尚子に向かってひた走る奔馬を強い手綱で引き締めることを決意したからである。漫然と人を愛することは人の運命に無責任に係わる罪悪であるという信念に徹しようと決意したのであった。

・・・・・・・・

須田の青春は、自己中心の病葉の青春であったが、それなりに燃焼したと思う。青白い炎が放つ輝度はそれなりに高かったのではなかったか。尚子との高崎行は、青白く燃えた青春の挽歌の譜である。
そして、今は、その譜面を冷静に読むことができる。尚子と会う縁があれば、高崎の友人訪問のことに触れて、確かな記念碑にしたいものと思うのである。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い
「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。
同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い
本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、別に月報「まんじだより」をお届けし合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ、交流を行なっております。
＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。
郵便振替口座　東京二一九〇八一五
加入者名　作家群編集部

鎮魂賦二題 ほか

青木昭成

真顔

ぼくはずっとひそかに納得していた
きみの笑顔はブロンソンにとても似ている
ひょっとしたら躰つきも話し方も
けれど物売りのアルバイトで肩を並べて歩いた夏
栗林公園の池の水で足のほてりを癒したよね
ぼくらの街はどうやら半世紀の扉をへだてて
うなずくほかない時間の向こうがわにある
だから古い割り符のような会話でも
おたがいのポケットから取りだして確かめなくては
そう焦るぼくに きみはどうして
どうして 真顔のままで黙っているのか

理屈

いたずらっぽく目でわらう
理屈をこねるときの君の顔は
だだっ子のむじゅんを知っていた

ゲートルに錘をさして
Oの家までふた駅をあるいて
ワインを呑みによるのも君の論理だ

瀬戸うちの小島めぐりは
和舟にかぎる そう言って
櫓をこぐまねをしたではないか

マルクスの時代には

航空機などなかったものね
だから いま面白いと言ったではないか

根っからの経理マンよ
きょうの勘定はきょうで〆ようよ
それにしても君の机の上には なんと
解きかけの古文書が整然と

そして君は突然「さよなら」
それはないよ Oやぼくの屁理屈にも
やっぱり横をむいて聞くのが君だ
まして 最愛の人の言葉をどうする

あれから三百年 月日が
人の絵姿を風化させた
もも引の尻のやぶれが気にかかる
すげ笠の緒の
やや顎にくいこむ傾きも

秋立つころ風はきらめく白
大学の窓に凭れかかり
わかい学者がつぶやく
「人間は分析的に色を見たがる」
そうなのか「i shi」も
「shi ro shi」も
iの母音の耳に透きとおる響きか
芭蕉はとおの昔に姿をかくしたのに
だから ここにも そこにも
寒色系のあおい空を背にして
人々がひかりに晒されている

秋立つ

芭蕉が眉をあげてつぶやく
「いしやまの いし」
那谷寺のくろ松のこずえが鳴って
「いしよりしろし あきのかぜ」
翁の声はかき消される

に調子がいい」であった。そして、それに「白し」の色彩感覚が「きわだっている」でもあった。そして、それは結局、「i shi」「i shi」「shi ro shi」と取り出して、納得したわけである。繰り返される「i」の母音がかもし出すイメージは、まったく透明な「白」であり「秋の風」である。

しかも、日本語としてのリズムは「いし やまの いし より しろし あきの かぜ」にまで分解できよう。それは日本人の私が、生まれながらに耳にしてきた和太鼓の音律でもあろう。私は安心して、これを聞くことができる。

芭蕉には、制作年代がおなじく元禄二年、と伝えられるつぎの句がある。

石山の石にたばしる霰かな（元禄二年・冬）

この石山は、まさしく近江の石山である。共に元禄二年の作とされる。だが、季は前者が秋で、後者が冬である。いづれも「石山の石」ではじまるが、むろん、単におもいつきの語呂あわせの発句ではない。二つの句の違いは自然な感覚で使われている「白し」と「たばしる」の語感の異相にある。

では、芭蕉は生涯を通じて、「白」をどういう性質の色彩としてとらえ、あつかっているだろうか。

寛文年間（一六六一～）から天和年間（一六八一～）にいたる発句を推定制作年代にしたがって挙げれば、

餅雪を白絲となす柳かな（寛文七年・冬）
白炭や彼の浦島が老の箱（延宝四年以前・冬）
藻にすだく白魚やとらば消えぬべし（同九年・春）
ゆふ顔の白く夜の後架に紙燭とりて（天和二年前・夏）
花にうき世我が酒白く飯黒し（同三年以前・春）

句意や主題がどうあるかを別にすれば、前三句はものの呼称の白、つまり名詞として使われ、後二句は形容詞の連用形として、使われている。

貞享年間（一六八四～）に入ると、その用法はしだいに変化し、たしかに白は主題ではあるが、それはもはや、たんなる名詞でも形容詞でもない。

白芥子や時雨の花の咲きつらん（貞享元年？・春）
曙や白魚白きこと一寸（同元年・冬）
海暮れて鴨の声ほのかに白し（　同　）
梅白し昨日や鶴を盗まれし（同二年・春）
白罌粟に羽もぐ蝶の形見かな（　同　）
月白き師走は子路が寝覚かな（　同・冬）

第一の句の、春の白芥子の花弁の白は、秋の暗いながら

雨への瞑想につらなり、第二の句の白魚の白は、一寸の寸法となることで、うそ寒い曙の風情をうきあがらせる。第三の句の白は、鴨の音声となって、白暮をこちらへひきよせる。しかし、第四の句以下の白はそれぞれ、林和靖の故事、弟子杜国への情念、孔子門下の子路の人となり、等々の予備知識をたくわえることなしに本当の句意を解するにいたることは、なかなかと言わざるをえない。

これはもちろん、傾向としてとらえた蕉句変遷のほんの部分である。だが、そのために選別したものでないわずか数句にも、第四の句以下のように、故事や来歴や詩歌を下敷きとした発句があったのは、どんな経緯また意図からだろうか。これも発句独立の歴史にかかわる問題として、蕉句評釈の延長線上で解明してみなければならない難問であるに違いない。

ただし、一つ言えるのは、芭蕉の時代には、現代の私たちが持ちあわさない、教養として身につけた文学が、広く深くあったのに相違ないということだ。すべての俳諧師がそれを我がものにしていたとはかぎらない。だが、芭蕉が取りだしてみせたある部分は、当時の人びとに当然の常識として、また、ある部分は芭蕉の権威として、納得されていたと考える。

なぜなら、江戸中期の芭蕉研究家である蓑笠庵梨一（一七一四～一七八三）が、その著書「奥細道菅菰抄」で「おくのほそ道」注釈のために、和・漢・仏にわたり駆使した引用書目が、百二十三部におよぶという事実は、それをただペダンチックと呼ぶには、あまりにも自然なありゆきとしか、考えられないからだ。現代にあって、芭蕉のすべてを咀嚼することが、いかに困難であるかを知らなければならない。と同時に、当時はそのかなりの部分が、しかるべき世人の教養としてあったのでは、との推理も生まれてくるのである。現代人との最もおおきな違いは、受けとる情報の質と量のちがい、また、なにごともビジュアルであることを優先し、文字で思考することを敬遠しがちな、ちかごろの風潮にあるだろう。

芭蕉の「白」は、この時期をすぎ、貞享三年（一六八六）から元禄二年（一六八九）にかけては、その句作のおおさにくらべて極端にすくない。

鮎の子の白魚送る別れかな（元禄二年？・春）
石山の石より白し秋の風（　同　・秋）

わずかにこの二つの句にかぎられる。

そういえば「白罌粟の」がそうであり、「鮎の子の」がそうであるように、芭蕉にとって「白」は、ある時は「別離の悲哀」の代名詞でもあるようだ。

芭蕉の晩年である元禄三年（一六九〇）から、終焉の元禄七年（一六九四）にいたる芭蕉の「白」の傾向は、どうやらふたたび元の姿に回帰していっているように、

みうけられる。

白髪抜く枕の下やきりぎりす（元禄三年・秋）
水仙や白き障子のとも映り（同四年・冬）
その匂い桃より白し水仙花（同　・冬）
白魚や黒き目をあく法の網（同五年・春）
白露をこぼさぬ萩のうねりかな（同六年・秋）
家は皆杖に白髪の墓参（同七年・夏）
白菊の目にたてて見る塵もなし（同・秋）

第一の句は、文字どおりそぼくな秋の境涯の句とみればよいのだろうが、第二の句・第三の句は本来の意味の発句、つまり挨拶の句としての性格をわきまえなくては、なかなか理解がゆかない。ことに第二の句では、茶室に招かれての、あかり障子、活花、掛物などの取りあわせや作法を思いえがく必要があり、「とも映り」の字句の解釈がさまざまにわかれる理由もそのあたりにある。第三の句の、臭覚の視覚的な表現は、「海暮れて」の聴覚の視覚的な表現とおなじように、現代にひき移しても、なお斬新な手法である。第四の句は、唯一、蜆子和尚の故事をふまえた書讃の句であるが、この白魚も、以降の白露や白髪や白菊もすべて、ものの性質をあらわす「白」を冠した名詞である。

だが、ここにいたっての芭蕉の心象は、往年の肩肘はった情趣からははるかにとおく、淡々と、しかし自在に、その場の雰囲気をくみとりうる境地に、到達していると言うほかないようである。

ところが伝えられる芭蕉の発句は、その境地とはかかわりのないことながら、その語彙、句形に不同のものの流布がおおいのに驚かされる。それは人口に膾炙されているものほど、と考えてよいだろう。芭蕉自身が、句形を落ちつかせるまで、たびたび推敲をかさねたと知られているものは、それは芭蕉の結論として、納得すべきものだろうが、その他のものはすべて出典の異同によるものである。当時の原始的な出板の事情も一因であろう。だが、それいじょうに芭蕉がくふうした句作の手法、ことばの用法が時代を抜きんでていて、人々を戸惑わせ、驚かせたと考えるのが、妥当ではなかろうか。

芭蕉は詩の実作者ではあったが、文字どおりの理論家ではなかった。思想という概念や、客観とよぶ観念など言葉として持つ必要のなかった時代である。だから、おおくの序跋、畫讃、書翰など、それに紀行文はのこしたが、著作としての俳論はついにのこさなかった。現存する「三冊子」、「去来抄」、「旅寝論」、「俳諧問答青根が峯」などの俳諧論・発句論集はすべて門人の手になるものである。しかも、それらは俳諧の実践の場での、芭蕉の発言を、弟子たちが忖度し書きとめたものにすぎない。だからそれらに、まったく完全な芭蕉の思想の再

現をもとめることには無理がある。

したがって現代の私たちが、芭蕉の目ざしたところを目ざし、求めたところを求めてみたいと望むならば、それはあくまでも芭蕉の作品に、正面から挑んでみるしか道がない。ところがいまや、それはますます容易ではない。三世紀をへだてて、いかなる先入観もなしに、芭蕉に対峙することが許されるであろうか。私はまったく自信が持てない。

明治以来の、もっとも著名な芭蕉研究・俳句研究者のひとりに子規がいるが、そこから一世紀、いやとくに、ここ四半世紀のあいだに、芭蕉が歴史上の偉大な俳人として、商標のように貼られてしまったレッテルはいくつあるだろう。それを制作したのは、現代に活躍する、当の俳人たちであり、国文学者であり、評論家とよばれる人々である。

それは「旅の詩人」、「漂泊の俳人」、「風狂の人」、「風雅の誠の人」、「余情の詩人」など、世人を惑わすのにはじゅうぶんな数である。そのいずれもが、当を得ないものというつもりはない。だが、そのいずれもが、芭蕉の理解を邪魔していることも否定できない。それは何故か。それらの言葉がすべて仮説の上に成り立っていることを、人々に忘れさせているからだ。仮説はあくまでも仮説であって真実ではない。仮説は人びとの恣意によって、気ままに変転する。まして、芭蕉の姿は、先入観という一本しかない刷毛をもちいて、描ききれるほどに矮小ではない、というのが理由だ。

そのへんの情況を、詩人嶋岡晨は、

「世界最小の詩型といわれる俳句を、最初に、高い文学的価値をもつものに到らしめ、独特の日本的美学（さび）そして倫理性（まこと）を、そこにたっぷりと熟成せしめたことに、芭蕉の∧不易∨のよみがえりがある、といえるだろう。」

と圧縮した言い方で述べている。

これはたしかに概論である。これとて、舌足らずであることを免れてはいない。こうした、しかるべき文章の、たった一節を摘出すること自体が不都合であることも明白である。ましてや、それらしい短いフレーズをもって、人物像を象徴しようというのは、プロパガンダを狙うのでなければ、無謀というしかない。

その芭蕉には、蕉門の十哲とよばれる代表的俳人をはじめ、後世にその名をのこす門人たちが、その数、三百人とも二千人とも（堀切　実著・芭蕉と門人）かぞえられている。だが、その多くの門人たちはおそらく、芭蕉という偉大な光源なしには、この世に照らしだされることも、叶わなかった連中にちがいない。

そして、その「偉大な」とは、形においてどこまでも深く、色においてあくまでも静かな、ひとりの実在の人物を、意味してくれるのでなければならない。

ところで、俳句は詠むとか歌うとか、というよりも「ひねる」が適切であると、初めて唱えたのは柳田国男であったろうか。それとも山本健吉であったろうか。その山本健吉が著書のなかで述べるところは、

「ひねりに俳句の持つ寓意（アレゴリイ）性、また滑稽（ユーモア）性が宿る」であり、「俳句の本質は象徴詩でなく寓意詩である」であった。

一方、小林秀雄は「表現について」のなかで

「表現するとは己れを圧し潰して中味を出す事だ、己れの脳漿を搾る事だ。芭蕉にはそう言う意味で一句として単なる思いつきによる作句はない」と断言している。

どうやら、作品をとうして芭蕉の本質に迫ろう、発句をとうして芭蕉の実像に至ろう、という試みは、芭蕉にあって他の俳人にないもの、他の俳人になくて、ひとり芭蕉にあるものは何か、を知ることのようである。

芭蕉にしかないもの、それは芭蕉の選びだした言葉であり、その詩であり、その句そのものである。

そこで私は、私なりに大胆な仮説を立ててみる。

「芭蕉、この翁の職業は俳諧師であった。その地位は俳諧の宗匠であった。その人格は脱世俗の隠者としてあった。その資質は詩人である。だから、翁のバックボーンは詩人の美学である。そして、そのモラルが翁の行為を決定した。」と。

いや、これは私の仮説ではない。私は、さまざまな「芭蕉論」から、これらを安易に引き出してみたに過ぎない。が、しかし、譬え借りものでも、やがてそれが私の仮説から、私の真実に変わることを期するためには、芭蕉のいかなる伝承にたよるよりも、芭蕉の作品そのもので、実証してみるしかないだろう。

それにしても、芭蕉が、みずからを「芭蕉」と号し、世人から「翁」と呼ばれだしたのは、三十八歳（天和元年）のころからと伝えられる。当時の、歴年令としてもいかにも若すぎる、何故だろう。私の仮説とそれはいったい、どのあたりで係わりを持っているのか。

また一方で、芭蕉の辞世の句は、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

である。この句の成立は、子考や其角の「芭蕉翁終焉記」に詳しいところであり、実にさまざまな解釈の生まれるところである。芭蕉五十一歳、たしかにおのれの病の危篤を、じゅうぶん承知したうえで成した最期の句である。おおくの門人に看とられながら、余人の窺い知れない哲学をもち、余人にすぐれた解脱の精神を秘めながら、しかもなお、枯野をかけめぐる悽愴な、芭蕉の想いとは、いったい如何なる思念であったと推察すればよいのか。

西行七十三歳、宗祇八十二歳、雪舟八十七歳、利休七十一歳、この歴史上の偉人たちの享年をここに並べるこ

とは、かならずしも当を得ないかもしれない。

しかし、芭蕉が、この先達たちの生きざまや生涯を遠望し、その長寿を、わが身に比肩しなかった、とは言いきれまい。また、西行や長明や兼好など後世にその名をのこす隠者たちが、ゆうゆう辿ったであろう道を、芭蕉もまた肯定的に歩こうとし、歩きつつあったことも真実であろう。

芭蕉が、その発句のなかにつねにポジティブに表現しているように見える詩美とは、つまり信仰にも似た、それら先達への憧憬を根幹として、芭蕉のなかで、ごく自然に生まれた人生観であったかもしれない。

だからこそ、旅に病んで、芭蕉の魂はなお、枯野をかけめぐりつづけた、と私は理解したいのである。

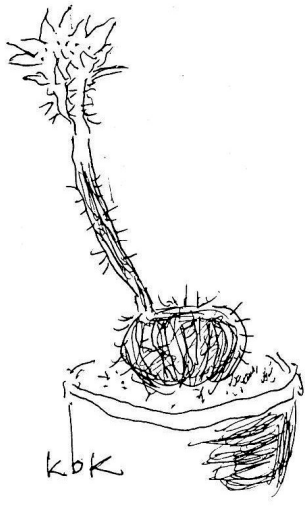
今、私のふるいノートの端には、つぎのような言葉がメモされている。

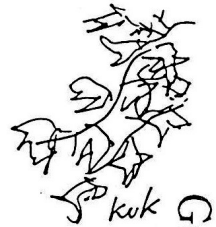
「絵の内には言葉でいえるようなもの、すでにわれわれの記憶の内に存しているものは、存在する必要がない。マチス」

忘れてしまったが、多分、いずれかの書物の、引用の引用だろう、出典はわからない。だが、あらためて一読、すぐれた画家も、すぐれた詩人も、まったく同じ焦点でものの本質を見とおし、同じ感度でものの肌触りを感じ取るものだと驚く。

芭蕉はかって、その発句のうえで「白し」の言葉をひねってみせたが、それから時と処を隔てて、マチスは果たして、何いろの絵の具をとりあげ、白いパレットに捻り出してみせてくれたと言えるのだろう。

〈未　完〉





Gone are the Days

山根三枝子

十二月二一日

金沢に住んでいる奥田さんからはがきがきて二五日頃に一寸上京する予定だから寮にも行ってみたいと書いてあったのでとても嬉しかった。

彼女は朝子が予科の時の三年生で姉の友人でもあった。厚めの縁なし眼鏡をかけて何物にも動じないと言ったような平静さをいつも持っているような顔付をしていた。銘仙の和服と袴姿で通学していた彼女の端正さと理知性、そして優しさが朝子に何かしらあこがれにも似た気持を起こさせていた人であった。

十二月二三日

きょうはいよいよ今年最後の授業で明日から冬休みにはいる。

鏡子さんは福岡の自宅に帰省する。先日来何度も学生時代最後のお休みを福岡の家に来て過ごすように誘われていた。迷っていたがやっと決めて出かけることにした。それで鏡子さんのチッキにする行李に私の着替えなどの荷物も少しいれて貰った。

二時間目のミス・ブレイスウェイトの会話の時間は皆それぞれが何んでも話したいことを用意して来て喋った。先生も学生もいたってくつろいだ時間であった。

午後一時からクリスマス礼拝があったがそのあとに上演する劇の準備があったので出席しなかった。楽屋とは名ばかりのような部屋をストーブで暖かくして高田さん高野さん達とおしゃべりしながら用意した。短かい劇だったがどうにか成功裡に済んだ。友人に「どうだったかしら?」ときくと舞台装置やコスチュームが奇麗でとても素敵だったわよということであった。ミス・タムソンが本物のスウェーデン衣裳を何所からか借りてきて下さったのだ。

帰省する寮生達の散り方は実に早いものだ。夜になるともう寮は小人数になってしまって森閑として淋しくなる。夕食前にお洗濯を済ませて井上さんや龍村さんの部屋のスチームの上まで借りて干すことにした。彼女達は大阪に帰ったのに未だスチームが止めてなかったので。

夜、中島先生がお汁粉を食べにいらっしゃいと云って下さったので出かけて行った。とてもとてもおいしかった。十時頃雨のザァザァ降る中を鏡子さんと一つの傘にちぢこまってはいって帰寮。とても寒かった。

福岡行きがだんだん気がすすまなくなってきた。私ってその時その時の気分次第で何かをしたくなったり、したくなくなったりするんだ。決めてしまったからといってそれに縛られて何かいやになったようなことをするようなことはないようだ。でも考えようによってはどうしたらよいか分からないことを最後の最後まで考えて実行に移すのだと言えるかも知れない。お正月をはさんでの二週間もの期間をはじめての他人の家で過ごすことが出来そうもないことがだんだんはっきり考えられはじめたからなのだ。

十二月二四日

朝、鏡子さんにやっぱり福岡行きはやめたわとはっきり言った。彼女はがっかりしたので何んだか気の毒になる位だった。

九時二分のバスに乗りおくれてしまい国分寺駅まで歩いて行った。駅で鏡子さんの荷物をほどいて私の品物を取り出した。駅員が「どうしたの　何故行くのやめたの?　喧嘩でもしたの」とからかうように私にきいた。私達は黙っていた。

あの頃の国分寺駅は三十坪そこそこ位の木造の建物であったようだ。中にはいると右手に切符を売る窓が二つ三つあり左手は荷物を（昔はチッキと言って行先迄の切符があればそこまで無料で荷物を送って貰えた）預けたり引取ったりする所でガラス戸が大きく開けられるようになっていた。待つ人の為のベンチも壁ぞいに造りつけられていた。駅舎の外側にもベンチがありバスを待つ間にはよく腰かけたものだ。あのベンチの冷たさやかたさのようなものまで朝子はおしりの辺りの感覚で覚えている。駅員も数人位。学生にとやかく話かける余裕というものもあったんだ。最近は立派な駅ビルが出来ていて、まるで大都会の中のように沢山の人達が通る。しかしたとえ女の子が涙を流していてもやさしく声をかける駅員などいないであろう。

きょうはヴァイオリンを持たずに蜂谷先生のを拝借してお稽古をした。二時頃銀座の三越で鏡子さんと待合わせてコロンバンでケーキとお茶を飲んだ。鏡子さんの買物につき合い私も少し買い物をした。有楽町駅まで一緒

に行って帰省する彼女と別れた。鏡子さんは私が福岡行きをやめたからか、それとも体の具合でも悪かったのかとても沈んで見えて又顔色も悪かったので気がかりだった。帰寮して夜は小林みち子さん、モンチャン達が私の室に来てとても淋しくなった寄宿の一室で食べたりのんだり喋ったりした。

きょう国分寺駅まで歩いた時はお天気がよくてとても気持よかった。少し寒すぎたが。

十二月二五日

明日は外出するので今日中に東寮にお引越しをする。(冬休み中、西寮が閉鎖するので仮りのお引越しをした)今年中に来た手紙の整理をした。

十二月二六日

国分寺駅行のバスは東村山から来るのだが満員のためきょうも止まって貰えずおいていかれた。

昭和十三年の暮頃のことだが、今まではいつも閑散とした感じだった国分寺界隈でもバスが満員になるようなことが起こりはじめていた。そしてこんなことはその先どんどんと又何所ででも起こりはじめていた。日支事変の一つの小さな影響。でも一般の人はそういう結びつけをして考えてはいなかったようだった。

仕方ないのでやはりバス待ちをしていた吉川幹事のお嬢さんと一緒に国分寺駅まで歩いて行った。何んだか予定がすっかりこわされたような気がした。

新宿に着いたらもう十一時。マロミに行ったらあまりにも満員なので駄目だと思いトタニに行った。一時近くまで待たされていよいよ生れてはじめての待望のパーマネント・ウェーブをかけはじめた。喜びいさんで期待して来たのに、かけ始めたらがっかり。頭が重くてしょうがない程何やかや付けられるし、髪毛は引きつったりして痛いし、重い紙ばさみのようなものではさんで電気を通すと所どころが熱くてやりきれない程。其の上時間のかゝることといったらない。散ざんな目に会った感じでもうコリゴリと思った。買物も出来ずにすぐに帰寮。入浴、食事を済ませてからパーラーで種痘をした。

十二月二七日

やっと休暇らしいのんびりした気分になったが物足らないような気もする。レクリエイションルームで蓄音機をかけて聞いた。

あの頃聴いたものの中で一番印象深かったものはヴァイオリンの「チゴイネルワイゼン」。上級生が「とっても きれいな曲よ」と教えてくれた曲であった。ベートウベンのピアノ協奏曲「エムペラー」とか第六・第九交

響曲等も。

お昼頃上京中の奥田さんから電話がかゝり二十八日に寮を訪ねて下さる由連絡があった。

十二月二八日

きょうは奥田さんが来るのだと思って何時もより早起きして部屋のお掃除をした。国分寺の商店街に出かけてココアと林ごを買ってきた。午前中ずっと心待ちにしていたが中なか来ない。午後一時すぎに階下の玄関の方から女中さんが大声で私の名前を呼ぶのでそれ来たとばかり跳び降りて行ってドアを開けた。すると奥田さんではなくてドンがひょっこり訪ねて来ていたのであった。一寸あてはずれの感がした。

パーラーの暖炉で火をたいてあたりつつ林ごをかじりココアを飲みながら久しぶりにお喋りをした。卒業後、彼は台北の自宅に戻って台湾総督府に勤務するように決めたと言った。

外に出て校舎の近辺で写真をうつして貰った。散歩しながら鈴木新田のバス停まで送ってあげ、丁度来たバスに乗って彼は帰り朝子は寮に戻った。

東寮の大林先生(舎監)の室の近くまで来た時「朝子さあーん」と呼ぶやさしい声がした。おやっと思って窓のところに駆け寄ってみるとちゃんと奥田さんが来ていた。彼女が卒業していなくなってから三年近くになるのに一度も会っていなかったのでとっても嬉しかった。

夕食後は上級生の川上下枝さんやモンチャン達も集まりみかんを食べてたまったお喋りをした。

休暇で帰省している二人部屋を舎監の許しを得て借り奥田さんを泊めてあげることにした。夜中の十二時位まで色々なお話が盡きなかった。

あの夜のことで忘れられないことがある。帰省して留守の部屋はスチームが通らないように止めてあった。だからあの部屋には数日間スチームが通っていないで冷え切っていた。朝子はそのことを考えないでもなかったがでも在室の部屋は日中は何度も通すが夜間は夜おそく一度通してあとは早朝に又通すまでは残熱であったようだ。どうせ夜中は通らないんだから同じことだと思ったのが大間違いであった。第一ふとんにはいった時は寝具が氷のように冷たくなっていた。でもぬくまるだろうと思ったが寒くてさむくてしょうがなかった。奥田さんも寒かったとみえて中なか寝つかれないようであった。

翌朝、起きた時彼女は、「ゆうべ寒かったわねえ」と言ったことが忘れられない。朝子も「全くだ」と心から思ったがどういう風に言ったらよいのか分からずうんとかなんとか曖昧な返事をしてあげただけであった。しかし寒い夜を過ごさせて気の毒なことをしたという気持は

長く心に残っていた。彼女はお医者と結婚した。子供達も成長して独立する頃になった時あまり頑健でなかった彼女はガンで亡くなった。あの寒かった夜のことはとうとうお詫び出来ないまゝであった。

十二月三十日

朝食後、奥田さんは帰る用意をした。私もお正月を横浜の叔母宅で過ごすので外泊の用意をした。昼食をとってすぐに二人で出かけた。銀座で買物をして木村屋でコーヒーを飲み、やはり横浜の親戚宅に行くという彼女と横浜駅まで一緒に行った。

叔母宅に着いたら六時近かった。女中を除いては全員外出していて留守だった。夕食が未だだと言ったらお寿司をとってくれたのでおこたの中で一人で食べた。女中のてやさんの喋ることを聞いているとこりゃ一寸面白い人間だなあと思われた。顔も面白い顔。

どんな風に面白かったのかな？　記してないので今は思い出せない。彼女とは其の後四十年以上たって再会するチャンスがあった。叔父続いて叔母の葬式の折に。

こたつの脇においてあった婦人雑誌をみていたら飯塚部隊長の娘が書いた「父」という作文があったので読んだが沢山の涙を流さずに読むことは出来なかった。

皆が帰宅するまで手紙を書いた。
八時過ぎにみんながドヤドヤと帰って来た。

十二月三十一日

朝のうちに郵便局に手紙を出しに行った。
午前中は硝子拭きをした。午後はブラブラ過ごしてしまった。夜はねどこに入ってからこの一年間のことを次つぎに思い出しているうちに眠ってしまった。

昭和十四年

一月三日

いとこ達と伊勢崎町に出かけ「アベ・マリヤ」を見た。

この家のいとこ達は女ばかり四人だ。母方の祖父の考えで「君が代」の歌からとって名前をつけたので長女が君子、次女は千代子、三女はいしので四女の時は困ってしまいたゞの和子とつけていた。

いとこの健一も来たのでこの家の四人の娘達共ども夜おそくまで起きて雑談した。健一は面白い人だ。何故なら絶対に人に弱味を見せない。どこまでも本当の自分を表わさないでふざけたことばかり言っては皆を笑わせたりからかってばかりいた。いとこの娘達が五人でかゝっていっても決して陥落はしなかった。

健一は慶大を出て名古屋の大東紡に勤める若いサラリーマン。美男子でフェミニスト。沢山の女性がチャームされるに違いない。

一月四日

朝早く未だ暗いうちに私といしのちゃんの寝ている部屋の襖をたたき健一はすき間からやさしく声をかけた。

「帰るからね。さようなら。もう会えないかも知れないけどずっとお元気でね」と言った。彼は名古屋に帰るところであった。私は半分ねぼけていたが「もう会えないかも知れない」という言葉が妙に悲しいようなひびきを伝えた。私は春になれば台北に帰ってしまうことだしこんなに面白い人と没交渉になってしまうことは残念に思えた。それだのに起きていって挨拶するでもなく布団の中で別れのつらさを抱きしめてじっと黙っているだけであった。いしのも眠っていたのか知らん顔してた。

あの頃健一は友人の妹と恋愛関係にあるということを聞いていた。朝子はそれが本当なのかどうかは計りかねていた。何故なら例によって皆でからかったりさぐり出そうとしてもひらりと逃れて否定したりしていたので。でも一寸がっかりしたことには大分たってから彼はそのさやかという友人の妹と結婚した。

彼は働き盛りの頃はパリッとした優雅な生活をおくっていたが子供には恵まれなかった。彼は幼い頃に母を亡くしお手伝いをしていた女中が継母となったということを朝子は母から聞いていた。そんな家庭の事情からか彼の心の裏側にあるうっすらと漂う暗いかげ、淋しさといったものを一見陽気なうわべをとおして朝子は感じとっていた。

親戚の中での結婚式とか葬式とか金婚式等の折に何回か会ったりするだけで彼との係わり合いはそんなにあったわけでなく忙しさのうちに月日は流れ去った。

健一もさやかもあまり健康ではなかったようだ。比較的老年になってからは彼等はよほどの折でなければ親戚の集まりにも出席しなくなった。

そんな健一は今はもう八十を越しているが或日のこと戸栗に訪ねて来たそうだ。戸栗家の君子も婿養子に死別し子供達も巣立ち大きな家に四十過ぎの独身息子と二人で住んでいる。以下君子が電話ごしに喋ってくれたこと。

「ほら、健ちゃんもうずっと誰にも会っていないでしょう。せっかく思い立って勇気をしぼって鎌倉から出てくるんだから他のいとこ達にも声を掛けましょうかと言ったのよ。そしたらね、絶対にそれは止めてくれと言うの。だから私たった一人で会ったのよ。だって誰にも会いたくないんだって――。健ちゃんはね、びっくりする程、痩せていて、昔はあんなに面長の美男子だったのにね、今では胡瓜のような長い感じの顔なの。玄関に入って来た時は息切れしていたわ。あんな状態ではいとこ

達に会いたくなかったのでしょうね。健ちゃんはこう言ったわ

『僕、長いこと此処には来たい来たいと思ってたんだよ。青春時代の楽しい思い出を作ってくれたこの場所にね。あゝ　ほんとにもうこれでよかった』と言ってたわ」

母を幼時に亡くした健一を何かとかばってくれた叔父、叔母も亡くなり、いとこの君子の夫も亡くなっている古い家。昔懐かしい木々の生繁っている庭、天井が高くて黒ずんでいる家。

家も新しく娘達が四人もいて華やかで賑やかで生き生きしていた昔の様子、そして彼自身も若かった頃の幸せな思い出に暫しひたったことが朝子にはとてもよく想像出来るのである。

一月五日

君ちゃん達と一緒に「テスト・パイロット」を見てから寮に帰った。

一月七日と九日

入学試験のお手伝

一月八日

帝劇で「ハリケーン」を見た。ドンに誘われて。映画がすんで銀座に出てみると物凄い木枯しが吹きまくっていた。その中を戦車隊が砂塵を浴びるように吹きつけられて行進していた。勇ましくてワクワクするような眺めでしばらく観ていた。

一月十一日

授業が始まる

一月十三日

矢代幸雄のイタリヤ美術についてのお話をきいた。幻燈の絵つきの説明があった。矢代氏はとても芸術家らしい人。

土地即ち風土と芸術には深い関係のあることを知る。彼はセント・キエラの肖像画を大へん美しいと言ったし「マドンナ」も美しいと言ったが彼程にはその美しさが理解出来なかった。ミケランヂェロの「ゴリアテに挑むダビデ」の像は美しいと思った。

一月十四日

福岡から鏡子さんのお姉さんが上京していて寮にも遊びにみえた。一緒にお寿司をごちそうになり散歩をした。夜はみんなでナポレオンをした。

一月十五日

戦地の兄に送る靴下を編みはじめた。昼食後は玉川上水横のどての草むらの中を散歩した。陽だまりはとても暖かかった。

一月十六日

靴下の片一方が出来上った

一月十九日

放課後、従軍看護婦さん達を囲んでの座談会があった。主に病院船の中と野戦病院での経験を話してくれた。一体何が彼女達をかような仕事に駆りたてたのであろうか？一番はじめは先ず生活のために看護婦になったのかも知れない。或いは徴用されたのかな。戦傷兵士に対するあんなに必死の愛なんてものはずっとあとになってひどい場面に直面した時に生れるのではなかろうか。彼女達の仕事は実に尊い。

一月になって学校も始まり毎日がどんどん過ぎていく。一日一日が有意義に過ごせるようにとあせり気味なくらいだ。学生時代最後の冬休みだったのに戸栗でくすぶって過ごしたことは残念だった。スキーにでも出かけられたらどんなによかったかと思われた。台湾に帰ったらスキーどころか雪だって見られないのだから。

・・・・・・・・・・

We look before and after
and pine for what is not
・・・・・・・・・・
pine for what is notが完全な幸福感をもたせてくれない。

人間っていつも心の何処かにぐちゃぐちゃした不平を持ちがちだ。些細な馬鹿気たことに怒ってみたり、嫉妬したり憂鬱になったり、気にしたり、ひがんだり……何んてしょうがない生き方をするんだろう。だからその反対のうぬぼれ　有頂天　さげすみ　ひとりよがり　なんてこともあるのだな。

二十一才の雑感

或日のこと不満足をもって満足としようと決心した。ブロークンハート。愛するところに悲しみが生じる。その悲しみをまぬがれるために愛することを捨てて無味乾燥の生活をするのもつまらないな。

久しぶりに雨が降る。ピシャピシャ、コトンコトンという音は私の心を静めてくれる。そしてセンチメンタルにもする。家に帰りたいな。今晩は面白くなくて淋しいんだ。

今日は何んて面白い日なんだろう。くすぐられるようだ。いたずらをしたんだ。私はなんて気まぐれな人間なんだろう。あのいたずらの中に本心がはいっているのかいないのか自分でもはっきり分からないなんて……。

人生とは何んと面白いんだろう

人生とは何んてつまらぬものなんだろう
何んて分からないものなんだろう
真面目に考えて浮かぼうとすればますます沈む。ポカンとしてじっとしていればどうやら居るべき所に浮いている。
お友達がたまらなく可愛い時がある。
お友達がたまらなく頼もしい時がある。
それだのに……たまらなく憎らしいこともある。
片一方の心では泣きながら、片一方の心では意気揚々として意地悪をする。
此のみちにもあきた。あのみちにも飽きた。何処かにかけ離れた感じのみちはないかな。
真暗闇の中を歩いているとキャッキャッと笑ってみたくなる。くらやみで白い歯をむき出して狂人のように笑う顔は私を慰めてくれるかも知れない。変な心理状態。
自殺を肯定し自殺は無抵抗でしかあり得ない自然の法則に対する人間が抵抗出来る所の唯一の復讐であり勝利であるのではないかと考えたこともある。
現世のこの享楽の中にあって又おそろしく進んだ文明の中にあって何故だか分からないが神を知らないこと、神に頼らないことが漠然とではあるが底知れずおそろしく思われることもある。――こんなこと二十才位で考えたのかと思うと驚く。誰に教えられたわけでもないんだから――。

二月五日
お母さんから久しぶりで手紙がきた。
午前中お兄さんに慰問袋を発送した。
夜は東寮のパーラーで English Speaking Party. College Life と Friendship について話し合った。

二月六日
文部省の役人が授業を視察に来るというのでどの時間も、もう来るか来るかと思っていたが遂に私達のクラスには来なかった。

二月八日
巌本先生のお嬢さん、メリーエステルさんが来校してメンデルスゾーンの協奏曲とベートーベンのロマンスを弾いて下さった。上手!!

二月十日
放課後、ミス・ブレイスウェイトのリズミックジムナスティックスのデモンストレーションがあった。遠く離れた日本に英国から来ている若い彼女。いつも変らぬ努力そして持続する熱意を感じとることが出来る。彼女に対する尊敬度が高まった。

クリスチャンと呼ばれる人達よ、YWCAの会員の人達よ、そんなに目立つように祈らないで下さい。すみっこでこっそり祈って下さい。さもなければ神様なしでも無心に幸福でいられる人を疑惑で苦しめるではありませんか。求道者があれば彼等はあなた方を探してきっと見付けます。たとえどんなすみっこにかくれていても。

一月二五日
新響演奏会にいく

一月二七日
寄宿舎の次期委員の選挙

一月二八日
プラネタリウムを見学にいく

一月三一日
寄宿舎の委員の事務引継ぎ。

二月四日
待望のスケーティングパーティー。何時ものおね坊さん頑張って早起き。貸し切りの伊勢丹リンクで八時半から九時半まで滑る。とっても面白かったし、大分上達したような気がした。帰途、蜂谷先生の所でレッスン。夜は中島先生のところでスキ焼会によばれた。

二月五日
お母さんから久しぶりで手紙がきた。
午前中お兄さんに慰問袋を発送した。
夜は東寮のパーラーで English Speaking Party. College Life と Friendship について話し合った。

二月六日
文部省の役人が授業を視察に来るというのでどの時間も、もう来るか来るかと思っていたが遂に私達のクラスには来なかった。

二月八日
巌本先生のお嬢さん、メリーエステルさんが来校してメンデルスゾーンの協奏曲とベートーベンのロマンスを弾いて下さった。上手!!

二月十日
放課後、ミス・ブレイスウェイトのリズミックジムナスティックスのデモンストレーションがあった。遠く離れた日本に英国から来ている若い彼女。いつも変らぬ努力そして持続する熱意を感じとることが出来る。彼女に対する尊敬度が高まった。

二月十一日
午前中は紀元節の式があった。そして市川房枝先生の講演もあった。
寮の昼食は式日らしく一寸御馳走があった。午後はヴァイオリンの練習に出かけ帰途支那まんを買って国分寺駅前の散髪屋で顔をそって貰ってから帰る。夜は片田先生（舎監）の室にお見舞に行き八時過までいた。
自室に帰って鏡子さんと食べた支那まんはおいしかった。消燈までおしゃべり。

二月十二日
部屋の掃除やお洗濯をする。
井上さんと二人で出かけて行って歌舞伎座で龍村さんと彼女のお母さんに会って歌舞伎を観た。
おいしいうなぎどんぶりを御馳走になりその晩はおそくて寮に帰ることは出来ないので龍っちゃんのお母さんが泊まっている新橋の第一ホテルに私達も泊めて下さった。洋式風呂にはいったりして気持よかった。夜中は電車や汽車などの音ですぐに寝付かれなかった。大都会の真中のしかも八階で寝る気持にはスリリングなものがあった。

夜は寮で予科生達との親睦会があった。

二月十三日

朝、入浴が済んだら井上さんが一時間目は休もうよと言った。でもやはり休むことはやめてサンドイッチを食べて七時半頃ホテルを出て寮には九時前に着いた。すぐ学校に行った。とても楽しい経験であった。

二月十四日

昨晩からやってるんだけど八頁書かねばならない英作文の宿題が間に合わない。一時間目をお休みして英作を書いた。

半世紀以上も持ちこたえているルースリーフペーパーに走り書きした日記。万年筆で書いた字のインクの色。ペーパーの端にあいたまん丸の四つの小さな穴。そしてその穴を通して綴じているひも。紙は大分、茶褐色気味になっているがすべて健在で昔のさまざまな出来事や思いを現在に至るまで持ち運んで来てくれた。

捨ててしまおうかと思ったこともあったが老年の執着心からか捨てることも惜しまれて書き直しのつもりで長ながと書いてしまった。

しかし二月十四日までそれから先は引きちぎれて失われたようでもあるし、或いは卒業間近の忙しさにまぎれ書かれないまゝであったのかも知れない。

三月の卒業式を迎える頃までには朝子は余程の変化でも起こらぬ限りドンとは結婚しないでおこうと心が決まっていた。

このあと最後の試験を済ませて多分例年通り三月二五日に卒業式をして第三十七回生達はそれぞれ全国的に亘っている郷里に帰って行った。昭和十四年の春のことである。当時は就職ということは大部分の人達はあまり真剣に考えていなかったように思われる。英語科の教師になった人達もいくらかいたようであったが十五年十六年となるうちに太平洋戦争も始まるという時代、敵国の言葉である英語は排撃され英語を学ぶ課目はどんどん無くされていった。したがって英語の先生の職は無くなっていったのである。大戦後つまり一九四五年以降は英語を使う職場が大変増えてきて、又、中等教育が義務化されたので英語教員が不足した。しかし朝子達の年代はその頃幼い子供の子育て最中でしかもあらゆる生活条件の最悪の時代、母親が外の仕事に出ることには無理があり不可能に近かった。

卒業式を済ませた朝子は寮での荷物を整理し帰郷するようにすべて取運んだが半月程は横浜の戸栗家を足場にして内地に止どまっていた。

静岡県には親戚が多くて父母が彼等のことを話したりしているのは聞いていたが朝子は一度も会ったことのない人達なのでつい訪れる機会をもたなかった。それで帰台する前に一通り回わってみようと思いたった。

父の実家は焼津からずっと奥に入った所に二百年以上続いている農家で割に近い所に分家とか新家の誰それとかいう人達が住んでいた。

母方の伯母や、そこの娘でお嫁にいった人達が三、四人位は静岡駅からすぐの所に住んでいた。伯母のところの家業は酒屋。伯母はもう可成り老いていて寝ついていたが朝子が行くと床に起き上って喜んでくれた。嫁が三人目のお産をして未だそんなに日が経っていない頃だった。家の中は大変のようだったと後日になり思いやることも出来たが其の時は何んの遠慮もなしに二晩か三晩泊った。末娘のすみちゃんが甲斐がいしく又愛想よく泊り客の朝子の面倒をみてくれた。風呂釜の火で顔の辺りをポーッと明るくして薪をたき、お湯をあつくしてくれる澄ちゃんを見ながらお風呂にはいったことが忘れられない。翌日は澄ちゃんがお嫁に行った姉達に声をかけて皆で久能山方面に遊びに出かけた。姉達はそれぞれ漆器問屋や材木問屋に嫁していて立寄った折に色いろお土産品を貰った。当時は裕福のようであった。

父の実家の近所に新家とかいうのがあってそのうちの一軒からはいかにも田舎の子らしい子供がぞろぞろと出て来た。父の実家はいとこの代になっていてそこの一人娘は丁度女学校に入学したばかりで頼まれるまゝに英語のリーダーのはじめの方を教えてあげたりした。いとこは出征中でいとこの嫁が遠い町まで自転車に乗ってお寿司を買いに行ってくれた。四月上旬でもとても寒い日であった。あつあつのお味噌汁などが一番の御馳走と思われるような日だったのにブルブルしながら冷たいまぐろのお寿司を食べた。好意はよく分かったが。この一人娘は後に獣医を養子に迎え今は市会議員のよき女房として大いに亭主の助け人となっている。お寿司を買って来てくれた人も可成りの年令になっているが今はすっかり近代的なお婆さんになり多くの孫やひ孫も出来て幸せにしている。

父の弟が市内の一寸はずれになる所の小さな借家に住んでいた。彼は大へん裕福な地主の家の養子になったが妻が病死したのち幼い二人の男の子を残して家をでた。其の後大分たってから再婚したと聞いていた。叔父とは少しお話をしたがその後妻にとって朝子は招かれざる客であったということは世情にうとい朝子にも感じられた。お昼御飯の時間になった時、朝子一人にだけ店屋もののどんぶりを食べさせ自分たち二人は隣室で小声で話しながら食事をしていた。居心地が悪いので今夜はこゝに泊れないなと思っておいとました。

其の後何十年かたち彼等は横須賀に住んでいて朝子の父の葬式には彼は出席してくれた。彼はほとんど親戚づき合いをしなかった。彼が亡くなった時朝子の弟だけが

葬式に行ってくれたが老年期は不幸せのようだったと弟が言っていた。後妻さんが年とっているのに働いて生計を助けていたということであった。早稲田の英文科を出て英語の先生などもしていた叔父、そして若い時は大地主の婿養子でしかも大変な美人を妻にしていた人であったのに人生とはいろいろだなと思う。

父の妹は市外の大原という所の地主の妻になっていて大変きちんとした家に住んでいた。そこの娘で朝子より少し若い清子はきちんと和服を着ていて一寸きれいではじめての朝子にも親しく感じよく接してくれた。彼女はてんかん持ちでお嫁にいかず割に早く亡くなった。あそこの叔父は大変上品な感じの人で叔母はよく出来た人との評判があった。一時は戦災で焼け出された親戚が沢山押寄せて世話になったりした。朝子の姉も一年近くも世話になっている。

横浜の叔母宅に戻り、回ってきた沢山の親戚の家の人達のことを話してあげたら面白そうに聞いてくれた。

横浜で叔母達に別れを告げ帰台の途についた。途中、神戸で龍村さんの家に泊めて貰って井上さんと三人で奈良見物に行った。ついでに女高師の寮に立寄って一年おくれて女高師に入学していたHさんに会うことが出来た。

女学校卒業以来御無沙汰しているがとても懐かしく親わしく思われるKさんに会いたくて訪れたのだが彼女は上海の日本高女の先生になっていてもう奈良にはいなかった。Kさんは若死にしたので女学校を出てのち夏休み中に一回位しか会わずに永の別れをしてしまった。

Hさんは女高師を出てから台北で第二高女の先生になった。戦時中空襲警報下のことである。御真影に若しものことがあったら申訳ないからと防空濠から出て奉安殿に天皇皇后の写真をとりに行き爆弾の破片を受けて即死している。その時吉中先生といって朝子の一高女時代の恩師が二高女の校長になっていた。彼はHさんと一緒に写真をとりに行きやはり命を奪われてしまった。大好きな先生だったのに。

あちこちに寄って植民地の台北では見られない色んな人生を見たという思いで台北に戻ったのは四月の二十日も過ぎていたように記憶している。

最近のことだがすっかり老女となってしまった朝子の姉と朝子は色んな昔話をしていた。そしてあの十四年の春に朝子が台北に戻って来た日のことを話していた。

「姉ちゃんはあたしが帰って来る時はよくキールン港に迎えに来てくれたわねえ」

「えゝそうだったわねえ、あの日も迎えに行って……二人で久しぶりに顔を合わせてね……」

姉妹として一家族のメンバーとして暮らしていた時代の純粋な親密感があった時代。

「波止場から駅の方に行き、汽車に乗ってピーッ、ポーッ、ガタンゴトンと汽車が動き出した時に姉ちゃんはこう言ったわよ

『あのね、とってもサッドニュースがあるの』って」

「あゝ、そう言ったかしらねえ」

「あの時のあの言葉は何年たっても忘れないでいるわ」

「あの時ね、朝ちゃんは『お兄さんのこと?』って私にきいたわ」

――朝子は兄が戦死でもしたのかと思った。――

「『いゝえ違うの、あのね、ドンが亡くなったのよ』って姉ちゃんは言ったわ。わたしの顔を見ながら」

「あゝ　そうだったかしらねえ」

「姉ちゃんはあたしより先にドンとお友達だったしねえ……」

ドンは朝子が台北に着く数日前にこの世を去っていた。内台航路の船中で風邪をこじらせて急性肺炎となり自宅にたどり着くように帰った時は玄関に腰を降ろしたきり動けない位具合が悪かったということを聞いた。おたずね者であった或るスパイに似ていたということから船中では何度も何度も寒い甲板の取調べ室に呼び出され、体調が悪いのではっきりした態度でなかったのは更に疑いを深められることになった。しまいには呼び出しに応じなかったりしたのが憲兵の心証を悪くしたとかいうことを随分のちになってから聞いた。

猶、彼の家族は全員内台航路の旅客船が魚雷にあたった時に亡くなってしまっている。

「私が帰って一日二日位してから母に言われて姉ちゃんと二人でバスに乗って大正町のドンの家にお花を持ってはじめて行ったの覚えてるでしょ」

「もうお葬式が済んで数日経った時だったけどね」

「あの時どういうわけかお留守だったのね」

「玄関の格子戸は鍵もかけずですぐに開いたし――。それだのに『ごめん下さい』って何度も声をかけたけど誰も出て来ないで」

「玄関のすぐ右脇の室に写真とお花が沢山飾ってあるのが見えたので二人であがってお花を供えたわね」

「生前の顔そっくりで今にも語りかけるか微笑みかけそうな大きな写真を見た時はぐっと胸にくるものがあったわ。一生懸命に泣き出さないようにしたわ、あの時は」

朝子は彼にあやまらなければならないことが沢山あると思った。良心の呵責を覚えることが多々あった。もっと優しくつき合ってあげればよかったのに……。でも今となっては誰に謝まればいゝんだろうか。ずるくも朝子は心の奥深い所に自分の罪深さを隠すようにしまい込んでしまった。

自宅に戻り母に言った。

「お留守だったの。誰も出て来なかったわ」
すると母は
「おかしいわね。女中か誰かが家に居そうなものだのにね。まだお葬式が済んだばかりだというのに……」
と言った。
朝子は夜になって皆寝て暗くなってからだけ涙を流す日が何日か続いた。それはあくまでも一人の友人に対する涙であり恋人に対する涙ではなかった。
大学官舎のはずれにあった自宅に帰る時バス停から数分歩くのであったが一個所だけ暗くて一寸こわいような所があった。両側は田圃だった。幽霊が出るとしたら一番出易そうな所であった。そこを通る時、朝子は何度か暗闇に向ってつぶやいた。
「ドンよ『命を賭して君を愛する』とお手紙に書いてくれたわね。幽霊の姿でいゝからどうか出て来て頂戴」
暗闇を見つめていたが幽霊は一度も出て来ないで風が空しく稲の葉をそよがせるだけであった。

話はまんじ三十号に書き始めた頃に戻る。つまり学生生活を終えてから五十年近くの長い年月が流れ去った昭和六十三年の初夏の頃のことである。
同期のクラス会に集まった二十人余の老女達は「いろりの里」で昼食を済ませた後に歩いて十数分の所にあるとんで私達の方に来た。彼等は意外に控え目な誠実そうな顔付と態度であった。そして墓前に供えた花輪を中心に並んでいる老女達の写真を撮ってくれた。
学生ホールに集まって二次会をはじめる前に少しの休憩時間がとってあった。朝子は大急ぎで小走りをして西寮の方に向かった。二、三人の人達も一緒だったような気もするが一人だったのかも知れない。きょうはどうしても西寮を訪ねて見てこなければ……という熱い思いだけに胸をはずませていたのである。
西寮の玄関のところに来たら一人の学生が自転車で出かけるところであった。買物でもするような何か世帯じみた用事のための外出らしく見えた。ショートパンツから出た太ももははち切れそうに健康的であった。最近、寮では食堂がなくなっている由で朝食など個人個人で各階にある小さなキッチンで用意したり、又昼食は学生食堂で食べたりしているそうだ。昔はベルで皆一斉に食堂に集まって席に着き舎監が全体を見回わしてから手許にある鈴(ベル)をチンと鳴らすと皆一斉に食べはじめたことを思い出した。しかし昔の食物は今のに比べたらずっと質素な内容であったと思う。
彼女に「おうちは地方ですか?」と尋ねたら「えゝ、岡山です」という返事であった。
玄関から中にはいり左の方に曲がって先ず食堂に行った。少しばかりの長テーブルが室の片側によせたり積み

母校を訪れた。
校門から校舎を眺めると、とのこ色のタイルの外壁と暗赤色の屋根瓦の色はずっと昔の時と少しも変っていない。その色合いの新鮮さは辺り一帯の空気の清浄さを示しているのかも知れない。たゞ左手にあるヒマラヤ杉だけは大木に育っていて校舎の屋根の高さをも抜かんばかりの勢であった。
正面玄関前で皆揃って記念撮影をした。スナップ写真もとった。
それから先ず校庭の東北の隅にある津田先生のお墓にお参りをした。テニスコートのネットフェンスを左に、右手は緑色濃い木立という砂利道をまっすぐに進んで行く。
休日だったのでコートでは学生達がテニスを楽しんでいた。その昔、朝子達もこゝでテニスをした。暗くなるまでやったこともあるし試合もした。離れたところの芝生では何処からかやって来ていた男子学生達が塾の学生とボール遊びをしていた。朝子は学生達の一人か二人に向って大声で呼びかけた。
「ちょっとおー　あのねえー　半世紀位前にねえーこゝを卒業した人達が今、クラス会でこゝに来てるのよおー　ちょっと来て　カメラのシャッターを押してくれませんかあー」
二人位の学生が一寸驚いたような顔と身ぶりですぐに上げられたりしていた。油っ気のすっかり切れた床板は塗りもはげ落ちて白っちゃけていた。その昔小使いの内田さんが油のついたモップでしょっちゅう廊下や食堂の床などを拭きこんでいたのに——。この室はもう食堂としての用途からは、はずされているようであった。すぐ隣にある洗濯場ものぞいて見た。左手にある鉄製のドア、そこから出て洗濯物を干したものだがドアなんてものが妙になつかしかった。
パーラーに行って見た。こゝでもやはり一番目につくのは床板だ。油っ気をすっかり失ってしまった板は荒れた肌のような感じでさゝくれ立っているようにさえ見えた。美しい洋間といった感じはなくて又あまり利用されてもいないようで若し使われるとしたら物置き場として使われるような感じであった。
個室ものぞかせて欲しく思い、二、三の室のドアをノックしたが返事がなく不在のようで望みは達せられなかった。
しかしこれだけ見ただけでも朝子の頭の中に残っていたもろもろのイメージは夢か幻のものでしかないことが分かった。
学生ホールに集まる時刻がすぎようとしているので大急ぎでしかし心残りを大いに感じつつ寮を出てホールの方に向かった。
朝子は学生時代のあの時のことを思い出した。寮の窓

から外を見ていた時に何かの集まりで来ていた初老の婦人が一人コツコツと靴音をたてながら下を歩いていた。

「あの人卒業生なんですってよ」と横にいた誰かが言った。朝子は卒業してあの年令になる迄の長かったであろう歳月のことを思い、ふうっとため息が出るような深い思いが心をよぎったことを何故かはっきり覚えている。時の流れは飛ぶように速かった。いつしか朝子達もあの時の老女の立場になっている。

学生ホールでは大テーブルをかこんだ椅子にかけ紅茶を飲みながら、先ず井上さんのお話が始まった。彼女は最近の数年間はこの母校で教鞭をとっていたので色いろと学内の状況を話してくれた。この学校は月謝が大へん安く、したがって教師の給料が低いということ、しかし皆不平なく教育の仕事に励んでいるそうだ。学生達の親には教職者が多いこと、従って学生は昔通り誠に質実であるということ等、又卒業生達の就職状況や社会での活躍状況なども話してくれた。

出席者全員が近況など順に一言づつ話した。

それから誰が言い出すともなく本館の三階にある小講堂に行ってみましょうということになった。その昔入学式も卒業式も講演会など、又毎朝の礼拝（出席は任意であった）もこの講堂で行われた。皆それぞれ昔の思い出を胸に前の方の椅子に腰掛けて色いろな歌を歌いはじめた。学生時代に歌った歌だ。賛美歌あり、フォークソングあり、日本語のうた、英語のうた、実にさまざまだ。二十人もいれば誰かが誰かの忘れた部分を補なってくれるので結構楽譜や歌詞を書いたものがなくても次から次にと思い出す歌を歌うことが出来た。皆、楽しくて仕様がない様子であった。

初夏の日暮れはおそい。それに三階であるせいか夕方なのに窓越しにはいって来る明るさは充分であった。窓外の木々の緑も昔の美しさと溶け合ったように感じられ、なつかしさを心の限り味わいつつ歌いに歌った。

ふと朝子が時計を見るともう六時に近くなっている。遠い我が家のことを考え、自宅に着く時間を考えると「あらっ、どうしよう」という困惑とあせりの気持が心をかすめる。でもとんで即刻に帰れるわけでもなしこうなったらもうジタバタしても仕様がない。亭主は多分ウイスキーでも飲んでいてくれるだろうことを願った。

名残おしいがもうお開らきということになり、校門の方へと帰途についた。丁度来たバスに乗る人、通りがかりのタクシーを止める人、さよならの挨拶が一しきり。

市川さんは昼食を食べた「いろりの里」に老眼鏡を忘れて来ていた。母校の方に来てからすぐ気がついて電話をかけて確かめ、あとで取りに寄る旨を伝えてあった。

藤沢さんと朝子は市川さんについて行ってあげることにして上水脇の道を「いろりの里」の方に戻って行った。学生時代に初夏の夕食後などに屈たくなく散歩した道を。

三人は二部合唱で歌いだした。昔歌った古いうた。

Gone are the days
When my heart was young and gay
Gone are my friends
From the cotten fields away
Gone from the earth
To a better land I know
I hear their gentle voices calling
"Old Black Joe"
・・・・・・・・・・・

日の長い初夏の季節であったが木立の蔭であるせいかさすがに夕暮時の薄やみもおりはじめ楽しい一日の終りは物淋しい。

先生方や知人、友人達で「この世からより良い所」に行ってしまわれた方がたも多い。生きている人としてこの作品のはじめの方に出て来ている人も二、三人は亡くなってしまわれた。

年取った黒人奴れいのジョーが共に綿畑で働いていた仲間達が次つぎにあの世に去った感慨を歌ったうた。でも彼等は苛酷な労働に明け暮れしたこの地上よりずっと良い国に行っている。そして其処からやさしくジョーに呼びかけている。それにジョーにだって若い日には精一杯の幸せな若さと楽しむことの出来るハートがあったんだ。

朝子は自分の青春時代を的確に短的に言うと When my heart was young and gay というのがぴったりしているように思われる。そしてそういった日々はもう過ぎ去っている。

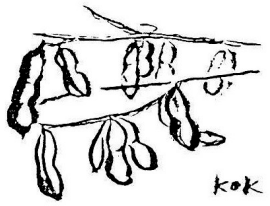
朝子のこのつたない日記風の作品を読んで楽しいとか面白いとか言ってくれた同窓の友人達が何人かいる。でもこの手記は純粋な楽しさだけを表現しているものではない。

Shelley（1792～1822）の「雲雀によせて」の詩にあるように

・・・・・・・・・・・
Our sincerest laughter
With some pain is fraught,
Our sweetest songs are those
That tell of saddest thought
・・・・・・・・・・・

なのである。

（完）



天守台（その二）

三戸岡道夫

（七）

開校以来五十年余の歴史を誇る松並中学校は、松並城跡のすぐ西側にあり、その校歌も、

空にそびゆる天守の森の
松の栄えに松並校は
……

と、天守台の麓に礎を据えた、長い歴史を誇っていた。

松並中学校のどの位置からでも、切り立った崖にそそり立つ天守台の高みを、見上げることができた。今から五十数年前に松並中学校が創設された時、城跡の西の一角が切り取られて、中学校の敷地の一部に充てられたために、そこだけが特に鋭い崖になっているのだった。

その松並城跡と松並中学校をゆるやかに包むようにして、松並川が流れていた。堤には緑の草が茂り、桜の並木が太い幹を連ねて、若葉を陽にきらめかせていた。葉桜の梢は、校庭の中学生たちに憩いの葉陰を与え、教室の窓から流れてくる変声期前後の中学生の勘高い声を、風音の中に溶かして、揺れていた。

クローバの葉がいちめんに茂ったグランドに立つと、北の方角に、遠く黒法師や大無間の山々が見え、更に、赤石山脈の山脈が、雪を戴いて白銀色に光っていた。しかし、今ではグランドという表現は適切ではなく、教練場とでもいった方がぴったりした。もう、スポーツに類する運動はほとんど行われておらず、その代わりに、教練や、銃剣術や、閲兵分列などが、毎日のように行われていた。

ゲートルを巻き、銃を持った中学生たちの荒々しい駆け足や、匍匐前進や、射撃訓練などが、日に何回となく、クローバの白い花を踏みにじった。彼等は、夏であろうが、冬であろうが、同じ国防色の学生服、戦斗帽子、ゲートルに身を固めて、重い銃をにない、行進をし、駆け足をし、地面を這い、射撃の訓練に精を出していた。

その運動場に面した兵器庫の前で、いま、百五十名の四年生の生徒たちが、教練の準備に大わらわであった。

中学生の手にはずしりと重い、古くて頑丈な兵器庫の扉は、開くたびに、ギーッ、ギーッと、音を立てた。兵器庫の内部には、冷たく光った銃や剣がぎっしりと並び、圧倒するような油の臭いを発散させていた。銃や剣を磨くための、油を吸ってどろどろになった襤褸片が、激戦場の死骸のように、床の方々に散らばっていた。

生徒たちは先を争って、銃架から銃を外すと、油布で銃身を磨き、剣を腰に吊るし、弾薬箱を通す帯革を、油でしっとりと湿らした。ある生徒はゲートルを巻き直し、相手の服装を点検しあい、捧げ銃の練習をし、また、銃を片手で持ち上げて、その腕力の強さを盛んに競いあっていた。

兵器庫の前は、そんな教練開始前のあわただしさで活気づいていたが、その時、運動場に面した拡声器から、ラヂオのニュースが流れてきた。

（我が軍は、敵大機動部隊を、カロリン群島に邀撃。敵グラマン三十四機撃墜、航空母艦一隻大破、戦艦一隻、巡洋艦二隻、駆逐艦一隻を撃沈す……）

電波に乗った大本営発表は落着いた声だったが、なんとなく悲痛なひびきを持っていた。生徒たちは、南海の日本軍の輝やかしい戦果や、激烈な空中戦を想像し、巨大な敵航空母艦が水しぶきと火柱を逆巻かせて、轟音とともに海底深く沈んでいく様を、瞼の裏に描いた。だが、彼等の心の一方の隅には、去年八月に起った、アッツ島の玉砕、それにつづくキスカ島の玉砕、マキン・タラワ島玉砕などの生ま生ましいニュースが、不安な影を落としていた。

日比野正英は手早くゲートルを巻いた。手首がくるりと足の周囲で廻わる度に、ゲートルは一枚ずつ鱗の模様をズボンの上に描き出し、またたくまに一枚の布片は、筒の形に彼の足を仕上げてしまった。

ゲートルを巻き終えると、正英は、兵器庫の中へ走って入った。剣吊りの革バンドを締め直し、爆薬箱を腹の上に密着させ、銃を銃架からむしり取るようにして肩にかつぐと、薄暗い兵器庫の中から、ふたたび太陽の光が乱舞する外へ跳り出た。

運動場をいちめんに覆ったクローバの茂みは、白く小さな、毛糸の房のような花をつけ、ゴブラン織の花模様のように拡っていた。運動場の西の端には、プラタナスの並木が新芽を燃え上らせ、その木陰に、コンクリートで固めた水道があった。水道は少し壊れかかっていたので、蛇口からたえず水が細くほとばしり、流れた水は運動場の方に尾を引いて、乾いた土の上に、細長い水跡を描いていた。

その頃の松並中学校では、英語の授業は敵国語であるということから、次第に影をひそめる代りに、軍事教練の授業が、殆んど毎日のように行われていた。

一日の授業の大半は、教練、閲兵分列、射撃、銃剣術などで、埋っていた。重い銃をかついで、金剛寺教官の気に入るように行進する、一寸の狂いもなく正確に敬礼をする、ただ目茶目茶に運動場や、龍眼寺の池の周囲を駆け廻る、金剛寺教官のスリッパでなぐられる、息切れを我慢して長距離駆け足をする、厳寒の松並川にとび込んで、下半身水びたしになって渡河訓練をする、それが戦時体制中の中学校の軍事教練であった。だから、駆け足が長時間続けられる者、射撃の上手な者、金剛寺教官の前では要領のいい者、教練教科書や軍人勅諭がよどみなく暗誦できる者が、通信簿に、『優』というゴム印が鮮やかに押された。教練教科書や軍人勅諭の暗誦は、絶対的な強制力を持っていた。盛夏であれ、厳寒であれ、たとえば、教練教科書の不動の姿勢について、

（不動ノ姿勢ハ教練基本ノ姿勢ナリ。故ニ内精神充実シ、外端正ナラザルベカラズ）

と、喉を枯らして繰り返えさせられた。まず、定義を正確に覚えるのが、完全な不動の姿勢の第一歩である。

ある朝のことであった。朝礼のすんだ後、金剛寺教官は一人の生徒を朝礼台の上に立たせた。それは四年一組の倉沢一夫であった。彼は軍人勅諭の全部を、学校の中で一番早く暗誦できるようになったので、全校生徒の前で、金剛寺教官からほめられたのである。

「倉沢一夫は毎日、登校下校の時間を、全部、軍人勅諭の暗誦に当てたのである。家から学校までは、歩いてちょうど三十分かかる。往復で一時間だ。普通なら無駄に費すその一時間で、毎日一ページずつ、確実に覚え、一ヵ月で全部暗誦してしまったのである。なんと見上げた心掛けではないか。全校生徒の模範というべきである」

（学校への往復の時間にだって……）

聞きながら正英は、心の中でそう叫んだ。

（倉沢のことだから、きっと食事の時間までも犠牲にして、覚えたのにちがいない）

倉沢一夫は壇上で、誇らしげに顔をまっ赤にしていた。

（全部覚えたからといって、なにも、わざわざ、教官のところへ報告にいかなくたっていいじゃないか）

この事件は、松並中学校の中へ大きな波紋を起した。全校生徒が軍人勅諭の暗誦へ追い込みをかけられたのである。誰もが、他人に遅れをとることは許されなかった。彼等はさっそく、その日の昼休みから、

（一つ、軍人は忠節を尽すを本文とすべし。凡そ軍人たるもの……）

と、つぶやいたり、わめいたり、どなったりして、暗誦を開始したのである。

（八）

始業のベルが鳴った。

生徒たちは駆け足で、運動場の中央に集合した。小隊長の、整列の号令が、各組ごとにかけられる。勘高い声で番号がかけられて、人員が点検され、百五十名の生徒たちは、四列縦隊の小隊を三つ、すばやく作り上げた。それは訓練された、すばやい動作であった。

洋服、戦斗帽子、ゲートルと、すべて国防色一色に塗りつぶされた生徒たちは、緊張した面持ちで、プラタナスの木陰から、金剛寺教官が現われるのを待っていた。

やがて金剛寺教官が、出席簿を片手に、大股にゆっくりと胸を張って、長い剣をわざとガチャガチャ音をさせながら、歩いてきた。

百五十名の生徒の前に立った金剛寺教官は、二十五歳、丸顔で、髭もたいして濃くない青年将校だったが、十六、七歳の生徒たちから見れば、すでに立派な大人に見えた。ましてや、配属将校という権力が、背後で光っている。若いからといって、生徒たちから侮られるようなことはなかった。金剛寺教官は、星が一つ光る少尉の襟章を誇らしげにキラリとさせながら、

（俺に睨まれたが最後、この学校では何も出来ないぞ）

と、意地悪い眼を凄ませた。生徒たちへは質実剛健を説き、軍人勅諭の暗誦を強要するくせに、自分は、羅紗の軍服をスマートに着こなし、香水の匂うハンカチをポケットに入れ、帽子にも粋な折り目を入れて、気取っていた。

「教官殿に対し、敬礼、頭ァ右！」

中隊長の号令が響くと、百五十名の生徒たちの顔は、機械仕掛のように、教官の顔へ集中した。

生徒たちの敬礼を受けながら、金剛寺教官は視線を右から左へと移していった。彼がひいきにしている生徒の顔、嫌いな生徒の顔、いびつな顔、整った顔、さまざまな顔が並んでいた。どの顔も、真面目くさって、鯱ほこ張って、人形のように目玉一つ動かさない。

と、金剛寺教官の視界へ、一人の生徒の顔がとびこんできた。それは日比野正英の顔だった。

（ちえっ、いつも、そんな真面目くさった顔をするのはよせ）

正英の顔は金剛寺教官の勘にさわり、不愉快なしこりを残した。だが、ピストンの顔が次に現われてくると、やっと金剛寺教官は安堵感のようなものを取り戻した。

敬礼が終り、人員点呼がすむと、服装検査が始まった。金剛寺教官は大股に威厳をつけながら、

（ふん）

と、生徒たちを小馬鹿にしたような笑いを鼻の先に浮かべながら、列の間を縫って歩いた。そして、

「おい」

「おい」
と、服装に欠陥がある生徒を、列の外につまみ出した。
金剛寺教官の歩みにつれて、その人数は増加し、やがて十数名の生徒が、教官から叱責を受けることになった。
金剛寺教官は正英の前までくると、じろっと、正英の身体に上から下まで視線を走らせた。正英の背筋に奇妙な戦慄が走った。が、彼は正面を見つめたまま、眼を動かさなかった。金剛寺教官は、正英の洋服のボタンを一つ一つ引っぱってみた。ゲートルの踏皮がしっかり着いているかを、靴の先でつついて確かめた。
やがて金剛寺教官は、列外に出された生徒たちを、獲物をいたぶるように、にんまりと眺めると、
「まず、一番右端の生徒の服装から点検する。どこが悪いか、わかる者?」
と質問を発した。
「はい」
「はい」
われ先にと、何人かの手が上った。
「おい、谷川」
指名された生徒が、
「はい、帽子の顎紐がゆるんでおります」
「よろしい。次は、前田、答えてみろ」
「はい、靴の紐が解けております」
「よろしい。次は、日比野、答えろ」
不意に名前を呼ばれて、正英はたじろいだ。正英は手を挙げていなかった。わかっていて、故意に手を上げなかったのではない。少しぼんやり思いにふけっていたので、注意力が足りなかったのである。
正英はあわてて、三番目の生徒の服装に、どこか欠点はないかと探した。だが、どうしても見つからなかった。いつ、教官の嘲罵の声が飛んでくるかもしれない。もう時間切れかと思った瞬間、上衣のポケットの蓋が中へもぐり込んでいるのが見つかった。
(はい)
と、返事の声が、喉まで出かかった。が、その時、正英の気持に変化が起きたのである。金剛寺教官の言う通りに返事をしたくないという気持が、にわかに正英の中に、むくむくと頭をもたげてきたのである。
「どうした、日比野」
そう言う金剛寺教官の目が、嘲笑していた。
「わかりません」
言ってしまって、正英ははっとした。だが、もう取り返しはつかない。
「わからない?」
「はい」
「眼をあけて、よく見ろ」
全生徒の視線が、いっせいに正英へ注がれた。金剛寺教官は、

(この馬鹿者を見ろ!)
といわんばかりの視線を、全生徒の方に送った。
「どうしても、わからんのだな、日比野」
「わかりません」
「日比野権兵衛には眼がないのか。盲か、眼なしか、日比野権兵衛」
金剛寺教官の眉がきりきりと上り、
「誰かわかる者はいないか」
「はーい」
間のびした声で手を上げたのは、ピストンであった。
「上衣のポケットの蓋が、中へもぐっています」
「よろしい。どうじゃ、日比野権兵衛」
「見えません」
「見えない筈がなかろうが。見えなければ、もっと前へ出て見ろ」
金剛寺教官は正英の足をけ飛ばした。
「見えたか」
「はい」
「見えなきゃ、もっと前へ出てもいいぞ」
「よく見えました」
「では直してやれ」
「はい」
正英は走っていって、ポケットの蓋を外にひっぱり出した。
「では、次の服装はどうか」
「はい、脚絆の紐が垂れています」
「よろしい、直してやれ」
正英は四番目の生徒の脚絆の紐を、かがんで直した。
「次は」
「はい、ズボンのボタンが外れています」
正英はズボンのボタンをはめた。
「次は」
「靴の紐が、ほどけています」
こうして十数人の服装点検が、正英の手によって終了すると、今度は、
「最後に教官の服装を点検しろ」
と、金剛寺教官は正英の前へ立ちはだかった。
形のよい帽子、手入れの行き届いた洋服、よく磨かれた靴……、どこにも欠点は見つからない。すると金剛寺教官は、
「馬鹿だな、日比野」
と大声で、意地悪く笑い、
「真面目に教官の服装を点検する奴があるか。そういう時には、すぐ、欠点はありません、と言うものだ。だから、お前はとんまの抜け作というのだ。廻ってこい!」
そう言って、運動場をぐるっと顎でしゃくった。廻ってこい、というのは、運動場を駆け足しろということだった。それは正英が予想した通りの罰だった。駆け足は

肉体的にも一番よくこたえたし、また人目にもよくつくので、松並中学校の罰則としては一番効果的な、そして最も嫌われているものだった。

正英は銃を肩にかつぐと、運動場を駆け足で廻りはじめた。金剛寺教官の意地悪な眼と、全生徒の同情の視線を、背中いっぱいに受けながら。

春の乾いた白土が、靴の下でぽこぽこ鳴った。

生徒たちは、射撃の訓練に移っていた。それを横目で見ながら、正英は走りつづけた。

駆け足は、『よし』と命令が下るまでは、止められない。クローバの草原を赤煉瓦で楕円形に仕切ったコースを、三回、四回と廻っているうちに、次第に息が切れてきた。最初のうちは軽かった銃の重みも、次第に身体にめりこんで、走る度に肩の上で、びんびんと響いた。

正英はときどき、金剛寺教官の方に眼を向けた。だが、教官はそんな正英の駆け足など、もう忘れてしまったかのようだった。

ついに正英は動けなくなった。喉の奥が焼けるように痛く、息が苦しく、くらくらっと目まいがした。そして、あっと蹲くと、肩から銃を落してしまった。

「何をしておる！」

金剛寺教官の鋭い声が飛んだ。あわてて正英は、銃をひろった。が、

（しまった）

顔色が変った。落したはずみに、銃の吊り紐が、ぷつっと切れてしまったのである。金剛寺教官が走ってきて、

「銃を落すやつがあるか！」

そう叫んだかと思うと、正英の首根っこを摑んで、職員室まで引きずるようにして連れていった。

「ここに立っておれ」

それから二時間あまり、正英は金剛寺教官の机の横に立たされて、全教師と、職員室へ出入りする生徒たちの、曝しものになった。

「お前は銃を何と心得ておる」

金剛寺教官は椅子に横柄に座ったままで、正英の顔を下から見上げて、

「日比野、『銃は軍人の魂なり』ということを知っておるか。銃は命より大切なのだ。銃を失くした兵士は、お詫びに切腹しなくてはならない。それを、訓練中に肩から落して、両足で蹴とばし、吊り皮まで切ってしまうとは、立派なものだ。日比野、貴様は魂を持っているのか。大和魂だぞ。それで日本男子と言えるか」

（足で銃など、蹴とばすものか。吊り皮だって、もう弱っていたんだ）

正英は無念そうに金剛寺教官の方を見たが、その思いは言葉にはならなかった。

「日比野、お前は破壊者だな」

「……」

正英は返事をしなかった。

「おい、返事をしないか」

正英の喉が、ぴくぴくと震えた。

「でも…」

「でも、とはなんだ」

金剛寺教官の声が怒声に変わった。

「破壊者だと言え。日比野正英は兵器の破壊者ですと、そこで大声で言うのだ。さあ、言ってみろ」

金剛寺教官は昂奮して、正英の臑を、皮のスリッパで蹴り上げた。正英は痛さに顔をしかめた。

正英の眼に、くやし涙が溢れてきた。だが、涙は見せまいと、正英は瞼の奥をぐっと締めて、不動の姿勢を取りつづけた。その正英の懸命な姿が、ますます金剛寺教官には気に入らなかった。

（なぜ、こいつは俺の前で泣かないのだ。どんなに辛くても、いつもこうして我慢している。ええ、泣かなくたって、かまわない。泣かないで、立派に通してみろ。俺は泣かないかぎり、許さないからな）

この日最後の授業である六時間目の授業が終ると、教師たちはそれぞれ家へ帰りはじめた。やがて金剛寺教官も、正英へ何の指示も与えずに、帰っていってしまった。

（九）

急に職員室の中はひっそりとして、大型の柱時計だけが音を立てていた。

悲しみが、正英の心を少しぼんやりさせた。正英の視線は見るとはなしに、斜め左前の机を見ていた。それは、正英がこの中学校で最も尊敬している、辻村教師の机であった。

辻村教師は席には居なかったが、まだ家へは帰っていなかった。その時、廊下に、聞き慣れた大股に歩くスリッパの足音がして、辻村教師が辞典やノートをこぼれるように小脇に抱えて、図書館から戻ってきた。

辻村教師は正英へ近づいてくると、大きな掌で正英の肩を摑んで、

「どうしたのだ」

と聞いた。そう言われただけで、正英は涙ぐんだ。

「何でもないです」

正英は辛うじて、そう答えた。

「また、教官にやられたな」

正英はうなだれたままでいた。

「もう帰りなさい。いつまで立っていたって同じだ。教官へはわたしの方から、言っておいてあげるから」

だが、そんな簡単なことでは済まないことを、正英は知っていた。もし、正英がこのまま帰ってしまったら、どんなに金剛寺教官は激怒するだろう。そして、もっときびしい処罰が下るにちがいない。

しかし、そう怖れる正英の心に、しばらくすると、別

の考えが浮かんできた。

（わざと、帰ってやろう。無断で帰って、教官を怒らせてやろう。そんなことぐらい、俺にだって出来るんだ）

そう考えると、正英は思いきって職員室を出た。中央廊下を抜け、二階の階段をかけ上った。人気のない教室に入って、教科書を鞄につめこむと、校門を出て、走って家へ帰った。走りながら、幼いころ喧嘩して泣いて家へ帰った気持も、こんなふうだったと思い出した。

家に着くと、机の前に鞄を抛り出し、寝そべって、暮れていく春の空を、いつまでも眺めていた。

正英は辻村教師を、松並中学校へ入学する前から知っていた。

入学前といっても、入学試験からわずか一週間ばかり前のことだった。正英たちは小学校の受持の先生に連れられて、受験の下準備のために、松並中学校を見学にいった。その時、辻村教師と逢ったのである。

三月の初旬であった。受験生たちが大勢ぞろぞろと先生の後に従って、松並中学校に近づいていった。

その時、正英はある記憶を思い出した。それは、幼い頃、天守台を遠くから眺めた時の記憶であった。正英が小学校に入って間がない、桜まつりの日であった。母の手にひかれて、松並城跡へ一直線に伸びた、本通りを歩いていた。松並城跡は桜の花が満開で、町は祭り気分で浮足立っていた。商店の軒下には祭りの提灯が吊下り、桜の造花が風にゆれていた。

その時、正英が眼を上げると、正面の中空に、天守台が峯のように、立ちはだかって見えたのである。母親の素乃がその方を指さして、

「正ちゃんがね、もっと大きくなったら、あの天守台の下の中学校へ行くんですよ」

と言ったのである。

「中学校？」

「そう、小学校の次に行く学校、松並中学校ですよ」

正英は、その時はじめて、自分の将来というものを、子供心に漠然と感じたのであった。この時、正英の心に映った天守台の姿は、時間がたっても少しも薄れずに、残っていた。

その中学校の建物が、眼の前にあるのである。

（とうとう僕も、この中学校へ受験にやんてきたのだ）

と、正英は小さい胸を躍らせた。

天守台の森を背景にした松並中学校の建物は、美しく、巨大に見えた。中学校の前だけは特別、広い舗装道路になっていて、道路に面した正門の内側には、広い芝生が拡がり、クリーム色の講堂や校舎が光っていた。正英はそれを見ただけで、もう松並中学校へ入学出来たような昂奮にかられていた。

日曜日なので、中学校の内はひっそりとしていた。二十名ばかりの小学生たちは、小使いさんに鍵をあけても

らって、校舎の中へ入った。廊下、教室、机、階段、図書館、講堂、武道場などといった、はじめて見る未知の世界を、好奇心の眼で見て廻った。小学校のごみごみした、埃っぽい校舎に対して、中学校の高い天井や、光った廊下、広い教室は、清潔で、神聖で、大人の世界だった。

見学が終って、正面玄関前の庭に出たとき、一人の背の高い教師とぱったり逢った。日曜日でも、何かの用事で学校へ来ていたらしく、それが辻村教師であった。引率していた先生が、

「あっ、辻村先生」

と叫び、

「この小学生たちは、今年、松並中学校へ受験するのです。今日はその下準備のために見学に来たのです。どうかよろしくお願いします」

と頭を下げた。辻村教師は小学生たちに微笑して、

「しっかりやるんだね」

と励ましてくれた。この時から、辻村教師の存在は、正英の心に深く刻みこまれた。

入学すると、正英たちは、辻村教師から英語の授業を受けた。松並中学校の英語の授業には、「R」と、「C」と、「S」の三種類があった。Rはリーダーの頭文字で読み方、Cはコンポジョンの頭文字で英作文、Sはストーリーの頭文字で、物語りを読む授業であった。辻村教師の受持はその中のSで、Sのテキストにはグリム童話集が用いられた。

童話集の最初は、有名な「赤ずきん」の話で、題名は「Little Red Riddling Hood」となっていた。正英は真新しい紙の香りのする英和辞典を丹念にめくりながら、単語を引いたが、生れてはじめて読むこの題名をどう譯せばよいのかわからなくて、

「小さな赤い乗馬ずきん」

と直譯した。すると、辻村教師は少し笑った。正英は顔が赤くなった。

「物語りですから、『赤ずきんちゃん』ぐらいでいいでしょう」

辻村教師はそう説明してから、

「リットル　レッド　ライディング　フード、さあ、皆でいっしょに」

と、鮮やかな発音で促した。

「リットル　レッド　ライディング　フード」

生徒たちは何回も、教室の中へ響き渡るような大声で、発音の練習をしたのだった。

（十）

その翌日、正英はおそるおそる登校した。

登校すると、すぐ金剛寺教官から呼び出しがあるかもしれないと思った。しかし、朝礼も無事にすみ、一時間

目の授業も無事に終った。
だが、午後になると、果して金剛寺教官からの呼び出しがあった。職員室へ入るやいなや、正英は金剛寺教官から続けざまに、鋭いビンタを食わされた。
「阿呆たれ、昨日、誰が帰っていいと言った。」
金剛寺教官は本来ならば、今朝すぐにでも、正英を呼び出す予定だった。それが、辻村教師の取りなしで、のびてしまったのである。そのことが、いっそう金剛寺教官の怒りに油を注ぐ結果になった。
正英はよろめいて、ドアの角に頭をぶつけ、頭の奥が痛みでキーンと鳴った。
「放課後、兵器庫の掃除をさせてやる。いいか、一人でやるんだぞ。一人で、全部の銃を、油で拭くのだ」
正英はまた昨日のように、職員室の中に、直立不動の姿勢で立ちつづけた。意地悪い教師が、通りしなにわざと肩をぶっつけて、
「おい、邪魔だな。ここは通路だからな」
と言ったりした。正英はくやし涙が出そうになり、
(なぜ、こんな中学校へ憧れて入ってきたのだろう)
という思いが、頭をかすめた。
(金剛寺教官なんて、早く戦地へ言ってしまえばいいのだ。金剛寺教官のような嫌な軍人が内地に残って、川島教官のようないい軍人が、戦地へ征ってしまうなんて、おかしいよ)
川島教官というのは、金剛寺教官の前任者だった。一年前に、南方戦線へ出征した。その後任に、金剛寺教官が配属されてきたのである。
松並中学校は、川島教官から金剛寺教官へ代わると、すっかり校風が変ってしまった。川島教官時代の鷹揚さは消えて、すべてがこせこせし、生徒たちは何事につけても、物事の裏を裏をと気づかうようになった。それは、ちょうど川島教官と金剛寺教官の身体のように、すべてが一まわり小さくなったのである。川島教官の身体は、肥満型で、堂々としていた。運動場を駆けると、どん、どんと、地響きがした。その相撲取りのように肥って、八丁眉で、眼が象のように細い、その人柄が正英は好きだった。峻厳さの中に、やさしさがあった。川島教官が戦地へ征ったとき、もしかしたら川島教官はもう帰ってこないのではないかと思い、正英は悲嘆にくれた。
それに対して、金剛寺教官に対する正英の第一印象は、ある淫らな行為だった。
それは、金剛寺教官の最初の教練の時間だった。金剛寺教官は、生徒たちが銃の手入れをしている側へ寄ってくると、
「なに、なに、ゲッケイチュウコウの工合がおかしいんだって」
などとつぶやいたり、
「月経が一カ月で止まった?」

などと、妙な工合に生徒たちを、笑わせようとするのだった。話すたびに、多少だらしなく外側へゆるんで、唾液で濡れた金剛寺教官の唇や、まだ若いのに、目尻に細い皺の寄るのが、妙に淫らがましく見えた。
性病の話に興が乗ってくると、金剛寺教官は、つと、近くにいた正英の手を握った。周囲の生徒たちは何事が起こるのかと、緊張した視線を正英の手に集中させた。正英は本能的に手を引っこめようとしたが、金剛寺教官の手に押えられて、動かせなかった。
金剛寺教官は正英の洋服の袖を、ひじの辺りまでまくり上げると、正英の掌を下に向け、軽く握らせて、ある恰好を作らせた。金剛寺教官をそれを左手で押さえ、右手でくねくねとしごいて、ちょうど衛生兵が兵士たちの性病検査をする動作をしてみせた。
「こういう工合にだな…」
金剛寺教官は半分独言のように言いながら、生徒たちの顔色をちらりと見た。
「は、は、は…」
二、三人の生徒が笑うと、笑いはたちまち生徒全体に拡がったが、その笑いは、戸惑ったような、まぶしいような、くすぐったそうな笑いだった。正英は、他人の精液を顔にびしゃっとかけられたような不快感にかられて、急いで手を引っこめた。
その日の教練が終ってからも、金剛寺教官のくねくねと曲った指先の動作、大勢の目の前で自分の右手が演じた奇妙な形が、いつまでも正英の眼の底から消えなかった。正英は水道の蛇口で、右手を何回も洗った。しかし、金剛寺教官のぬるぬるした指先の感触は、いくら洗っても、まとわりついて、落ちなかった。
やがて中学校の一日の授業が終わり、校内にざわめきが起った。校内全体が一番活気づくのは、放課後のこの掃除の時間である。八百人余りの腕白盛りの生徒が、いっせいに校舎の隅から隅まで、ばたばたと掃いたり拭いたりする。教室の窓に、ガラス拭きの生徒たちが鈴なりになる。机を引きずる荒っぽい音、バケツを持って廊下を走る者、雑巾を野球のボールのように投げあって教師に叱られる者。職員室の中へも掃除当番の連中がなだれこんできて、正英の周囲でも、ばたばた掃除をはじめた。
金剛寺教官が戻ってきて、どすんと椅子に腰を下すと、
「なんだ、まだ立っていたのか」
そう言って、煙草をすぱすぱ立てつづけに吸った。
そこへピストンが勢よく入ってきた。
「教官殿、兵器庫の鍵をいただきにまいりました」
「今日は兵器庫の掃除をやらなくていい。日比野が一人でやってくれるそうだ。どんなにきれいになるか、よく見せてもらえ」
「はい」
「は、は、は」

と金剛寺教官は正英を小馬鹿にしたように笑い、
「な、日比野、そうだな。日比野のぽんつく野郎」
言葉の後半では、からかっていた。
金剛寺教官はピストンといっしょに職員室を出ていったが、出なしに、
「いつまでも、ぼっ立っていないで、そろそろ取り掛っていいんだぞ」
嫌味たっぷりにそう言った。
正英は兵器庫の方へ歩いていった。
剣道場の前を通ると、道場の掃除はあらかた済んで、稽古の支度に取り掛っていた。正英は剣道部員だった。剣道場から首を出した五年生の主将が、
「おい、今日はさぼるなよ」
と声をかけたが、正英はそのまま通りすぎた。
重い入口の扉を開けると、兵器庫の中は、ひやっとしていた。それは銃架にぎっしりと整列されている、銃や剣の金属の冷たさが、室内の空気を冷え冷えとしたものにしているのだった。
正英は油の臭いの充満している、奥へ進んだ。
突き当りには小さな窓が三つあって、どれにも鉄の柵が牢獄のようにはめられている。兵器庫の中へは、その明り窓だけからしか、光線が入ってこなかった。
兵器庫の端から端まで並んだ銃の列は、夕方の光に、鋭く白く光っていた。それは、無造作に人の命を奪ってたじろがない武器の、不気味な底光であった。音もたてずに、中学校の兵器庫に納っているこの剣も、かっては、どこかの戦場で、人間の血糊を吸ったことがあるのかもしれなかった。
不意に正英の中に、
（自殺して、金剛寺教官へ復讐してやろう）
という思いが、きらめくように走った。剣を胸に突き刺して、この兵器庫の中で死んでいる自分の姿を、正英は想像した。
だが、そんな幻想は一瞬のもので、正英はすぐ油布を手に取って、銃や剣を磨きはじめた。彼は何十本という銃を磨いた。兵器庫の隅々の小さな塵まで拾った。正英は次第に疲れて、兵器庫の冷たい床の上に、ぺたりと尻をついてしまった。
兵器庫の重い扉越しに、運動場の遠くから、「エイ、ヤーッ」と響いてくる銃剣術の掛声が、聞えてきた。鉄格子の明り窓の中に、天守台の森が見えた。
不意に、正英は沼崎のことを思い出した。もし、沼崎が生きていたら、こんな時には、きっと正英を励ましにやってきてくれるにちがいない。
気づかれないように、沼崎は兵器庫の扉を開けると、銃を磨いている正英へ向かって、
（手伝うよ）
そう言って、すり足で近づいてくるだろう。すると、

正英はきっとこう言うにちがいない。
（いいよ、僕が一人でやるから。手伝ってもらうと、また教官が怒るにきまっている。ね、本当にすまないけど、先に帰ってくれよ）
心と言葉は反対である。だが、そんなことはもう単なる幻想だった。沼崎はもう生きてはいない。正英は絶望的な淋しさに、身震いした。

（十一）

「おーい、集合」
ピストンがわめくと、子分たちは何処にいても、たちまち集ってきた。
「例の所だぜ。今日は兵器庫の掃除当番が免除になったんだ。いいモクがあるからな」
ピストンは手近かにいる二、三人を連れて、た、た、た、と階段を駈け下りると、運動場の隅へ消えた。
彼等の溜まり場は、いくつかあった。弓道場の裏、農機具置場の裏の草地、使われていない野球練習場の小屋の中、それから、いまピストンが消えていった場所。そこは、建物と建物とが背中合せになった、細長く、曲った、袋小路の突き当りだった。
その十坪ばかりの陰気臭い場所は、南側は剣道場のはめ板、西側は化学実験室の壁、北側は兵器庫の壁と、それぞれに取り囲まれ、東側だけが、辛うじて人間一人が通れる広さに空いていた。だから、この辺に近寄る者は、ごみ捨てに来る者以外はめったになく、その奥に、そんなは場所があることさえ知らずに卒業してしまう生徒の方が多かった。
中学生の喫煙は絶対に禁止されていた。煙草を吸うことは、不良学生のレッテルを貼られることだった。が、同時にそれは、また、不良学生の資格を得るための、重要な条件でもあった。鞄の隅や、帽子の裏側に隠した煙草や、がん首と彼等が呼ぶ煙管を、自慢して見せたりすることは、若いヒロイズムを満足させるのに充分だった。
しかし、喫煙ともなれば、めったな場所でやるわけにもいかなかったから、時と場所とを、慎重に選んだ。喫煙の現場を押えられたら、軽くて禁慎、重ければ退学ということにもなりかねなかった。
一番器用に煙草を吸うのは、なんといってもピストンで、子分たちとは違って、煙草に酔ったように、眼を細めて吸っていた。早熟のピストンの身体は、もう一人前の青年に近く、男臭さが臭っていた。頬骨の張った顔には、他の生徒たちのような童顔の名残りはなく、煙草をふかして女の話をする眼つきには、男の欲情が光っていた。
それに較べれば、子分たちは煙草をのむというよりも、弄んでいる感じだった。口腔の中を刺すニコチンの味によって、彼等に大人の仲間入りをしているという興奮が

欲しいのだった。
「もう一服くれねえか」
少しいかれた恰好の渥美が、亀山から刻み煙草の入った布袋を受取ると、煙管に煙草をつめた。煙管は、渥美が父親のものをごまかして持ち出してきたものだった。それを横目で見ていたピストンが、
「おい、こっちへも廻しな」
と手を伸ばした。渥美は、
「へえ、どうも」
と返事をして、媚びた眼つきで、刻み煙草をピストンに渡した。腕力に自信のない渥美は、そうしたおどけた調子でピストンの気嫌をとり、自分の地位を保っているのだった。
「しけてるじゃないか」
とピストンは、もう袋の底にわずかにしか残っていない煙草の粉を、指先でつまんだ。
彼等がめいめい持っている煙草は、さして豊富であるわけはなかった。煙草は、米や塩や砂糖と同じように、日本全国に戦時統制が引かれていて、自由に買うことは出来なかった。だから、家庭に配給されてくる煙草の少量を、それと気づかれないようにかすめ取ってくる以外に、入手の方法はなかった。だから、刻み煙草が少々とか、巻煙草が二、三本とか、火鉢の中に捨てられた吸殻などが、彼等の貴重な供給源なのだった。
煙草を吸いながらの彼等の話題は、何年何組の誰と誰とが生意気だとか、隣町の商業学校の愚連隊の首将と一騎打ちをしても、俺は決して負けないぜというピストンの自慢話や、女学生の話などであった。
「おい、この間、校長の娘が、男と町を歩いていたぜ」
「校長の娘？　あの女学校へ行ってる方かい」
「いや、上の方の娘だ。毛をちぢらせている、ちょっと、はくい（美人）娘さ。男の方は、どうも菱沼の息子じゃないかと思うんだ」
「菱沼？」
菱沼教師は松並中学校の補導主任の地位にあった。
「俺は後をつけて行ったんだ。そしたら、天守台の森へ行ったんだよ。夕方だろう、裏側の崖の方は、もう真暗さ」
そう話す加賀山を、一同は眼を光らせて取り巻いた。
「俺はそれでも、どんどんついて行ったんだ。すると、藪の中へ隠れてしまった。そして、それきり、何の音も聞こえてこなかった。次の朝早く、その草むらを見にいったら、脱脂綿がいっぱい落ちていたぜ」
「うへっ…　本当に落ちていたのか」
「嘘など言うものか」
「へーッ、奴ら、本当にやったのかなあ」
雑草の上や、藪の茂みに、点々と落ちている脱脂綿から、彼等はあらん限りの想像力の手を伸して、その暗が

りで展開された男女の行為を、空想するのだった。ピストンは、永峯校長の長女の、外人を思わせるその横顔から、真白な身体を想像して、
（彼女とやったら、いい気持だろうな）
と、ため息をついた。すると、反射的にピストンの頭に一つの情景が鮮やかに浮かび上ってきた。彼は興奮気味に、
「俺はこの間、教官がやってるのを見ちゃったぜ」
わめくように話し出した。
「えっ、あのサエキとかい」
「もちろん、そうさ」
彼等はいっせいに、金剛寺教官の情婦である、サエキの淫蕩な肢態を頭に描いた。サエキは戦時中だというのに、モンペもはかずに、スカートに赤いセーターをひっかけて、平気で町の中を歩き廻っている女だった。時には口紅を真赤に塗っていることもあり、いくら料理屋の女中とはいえ、非常識だと顰蹙を買っていた。今のアパートをたたんで、金剛寺教官のところへ引越すという噂が一時立ったこともあったが、それはまだ実現していなかった。
「この前の土曜日にさ、俺は教官のアパートへ行ったんだ。夕方だった。俺が二階へ上っていくと、居るはずの教官が、居ないんだな。変だと思って、ドアを叩いた。返事がない。だが、教官は居たんだ。サエキが来ていたんだよ」
「……」
子分たちは、息を呑んだ。
「俺はしばらくドアに耳をくっつけて、部屋の中の様子を伺ったが、何の音も聞こえない。それで、今度はガラス窓の方へ行って、そこに顔を押しあてたのだが、下の方はすりガラスだから、中は見えない。だが、よく見ると、ガラスの下の方に割れ目があった。両手の指先で静かにそれを押し上げると、割れ目が少し開いて、中が見えたんだ」
「凄えな、どうしてた」
「下の方しか見えなかったが、教官のズボンが見えた。それと、女の足が…」
聞いている子分たちは、ぐっと生唾を呑みこんだ。
「なにしてた？」
「判らねえ、だが、重なってたよ」
「やはり…」
「俺はとっさに、物干台を思いついたんだ。あそこからなら部屋の中が見えるかもしれないと思って、物干台へ猫のように音を立てずに上っていったんだ。案の定、物干台からは、部屋の中がまる見えだった。カーテンが引いてあったが、レースのカーテンなので、透けて見えた。すると、畜生、やはり接吻してやがった。抱きあって」

「教官、なかなか、やるじゃないか」
「軟派だからよう、やつ」
「にやけているよ、少し」
「その代わり、話せるぜ」
子分たちはめいめい、勝手なことを喋りあった。
やがて、狭い空地の上空にも、夕方の光が漂いはじめてきた。兵器庫の格子窓に、夕日の光が赤く反射していた。
「おい、ちょっと、あの窓を覗いてみないか」
ピストンが言った。
「何かあるのかい」
「日比野の野郎が、中で、罰掃除しているはずだ」
「なんだ、つまらねえ」
「見たくなきゃ、よせよ」
だが、その時、渥美が頓狂な声をあげた。
「おい、兵器庫の窓から、誰かが、こちらを覗いているぜ」
「えっ」
渥美が足場を見つけて、兵器庫の壁によじ昇って、窓の中を覗いた。しかし、その時には、もう誰の顔も見えなかった。
「おかしいな。たしかに、この窓に顔が見えたのに」
彼等は、喫煙の現場を、誰かに、兵器庫の窓から見られたのかと思い、あわてたのである。彼等はピストンを先頭に、あわてて兵器庫の表に廻った。そして、荒々しく扉を開くと、
「おい、日比野、てめえ、その窓から外を覗いただろう」
奥の方で、油布で銃を磨いていた正英はふり返って、
「窓から？　覗くもんか。別にそんな用事ないもの」
「渥美が、窓に日比野の顔が見えたって言うぜ」
「知らないよ、そんなこと。気のせいだろう」
「ふざけた真似すると、ヤキを入れるぞ」
「ふざけた真似って、何だい」
「うるせえな。黙れ。日比野、やる気か」
ピストンの声がうわずった。
その時、不意に金剛寺教官が、兵器庫の中へ入ってきた。
「何だ。そうぞうしいぞ」
金剛寺教官は兵器庫の中央まで進むと、周囲をじろっと見渡した。銃身や剣を指先で撫ぜ、埃がつかないかを意地悪く調べた。
「なかなか掃除に時間がかかるな。その割には、あまりきれいになっておらん」
（文句は何とでも言え）
と、正英は内心で思った。
「俺はもう帰るからな。鍵をしめなきゃならん。日比野、早く片付けろ」

兵器庫の扉に施錠するのは、配属将校としての金剛寺教官の任務なのだった。
正英は手早く後片付けをした。
金剛寺教官は兵器庫の扉に鍵をかけると、ピストン達を引き連れて、昇降口の方へ歩いていった。
実を言えば、さきほど兵器庫の窓から、正英はピストン達を見ていたのだった。銃架に並んだ銃の吊皮が釘に引っかかったので、木箱に片足をのせ、他の足を棚の片隅にかけて、手を伸したとき、明り窓が正英の眼の前に来たのである。すると、今までそのような位置から覗いたことのない兵器庫の裏の空地が、正英の視界にとび込んできた。正英はそこに、ピストン達の秘密を目撃したのだった。だが、渥美が明り窓に駆け昇ったとき、正英は反射的に首を引っこめて、兵器庫の床にとび降りたのである。
夕方の光が校舎全体を赤々と照し出し、廊下の出入口や、窓の鍵を、小使いさんが締めて廻っているのが見えた。
正英は運動場の方へ歩いていった。
緑のクローバの拡りは、夕方の風にさざ波をたて、白い花が斜めの夕陽の中に揺れていた。
運動場には誰もいなかった。正英は鞄を投げ出すと、クローバの上に寝そべり、草の匂いを嗅いだ。夕方の空を見上げて、しばらくそうしていたが、やがて正英は裏門を出ると、松並城跡へ裏道を登っていった。
細い坂道をしばらく登ると、道は石畳となり、右手には木立が茂り、天守台の崖がその上に覆いかぶさるように聳えていた。左手には、半ば崩れた白壁の塀が、残っている。
木陰の湿っぽい石畳を登っていくと、小さな池があり、雑草が水面を覆って、真赤な小さな花が咲いていた。小径が右に折れると、ふたたび木立に入り、朽落葉が湿った匂いを発散させている、山陰の道へとつづいていた。一歩登れば、一歩高くなる、その心の緊張感が正英は好きだった。
天守台の高みに着くと、雑草だけが、春の夕日を受けて、いちめんに拡っていた。草原には所々に樹木が新緑を燃え上らせ、北の端には、十数本の杉木立が見えた。
正英は草原に寝ころがった。
草の蒲団は柔らかで、背の高い草の中にうずもれてしまうと、空のほかには何も見えず、草の葉や茎が、耳や首筋に当って、くすぐったかった。
天守台の草原は、正英の最も好きな場所の一つで、日曜日の午後になると、よく天守台へ登ってきた。家での勉強に飽きると、この草原へやってきて、豊かな日光を浴びながら、英語の単語のカードをめくったり、幾何の問題を解いたり、歴史の年代表を暗記したりした。それ

には、この草原は快適だった。草の匂いが新鮮で、梢を渡る風の音の外は何も聞えず、精神の統一が出来たからである。

正英は立ち上ると、天守台の石垣から身を乗り出して、大空の果てや（その大空の彼方では、激しい戦争が闘われていた）、眼下に拡がる松並中学校の校舎の屋根、東海道の松並木に沿って東西に長く伸びる松並町の家並み、その外側に拡がる麦畑や野菜畑を、飽かずに眺めた。

町を取巻いている丘陵の斜面をびっしりと茶畑が這いまわり、茶畑は真新しい新芽の金属物な光で、きらきらと輝き渡っていた。

春の夕方の風が正英の首筋を柔らかに吹き抜けると、風は、正英の手にしみこんでいる、兵器庫の油の臭いを気づかせた。正英は両手を鼻に当てて、臭いをかいだ。油の臭いは再び正英を悲しませ、風に向かって、

「沼崎、沼崎…」

と叫んだ。だが、答えるのは風の音ばかりであった。正英はむなしさに堪えきれずに、ポケットに手をつっこんで、草原を歩き廻った。

正英の真上には、広い夕焼空が拡っていた。天守台から見る夕焼空は、まるで地平線から天頂へ向かってそそり立つ絶壁のようだった。地平線のあたりは真紅で、それが炎上するように中空に拡って、朱や黄金色に輝き、紫色から暗紺色へと、天を翔ける巨龍のように尾を引いていた。その下に、森や、田畑や、川や、人家や、鉄道のレールが、印象派の絵のように暮れなずんでいた。

正英は草をはらって、立ち上ると、灯のともりはじめた夕暮れの町へ降りていった。

正英の父のところへ召集令状がきたのは、その翌日であった。

（未完）

（後注）

㈠　この小説はまったくのフィクションで、事件、人物など、特定のモデルはありません。私が生きた昭和十九年～二十年という時代の雰囲気を、中学生に人物を設定して形象化した場合、このような小説が出来上ったということです。

㈡　当初この小説は、私の「チボー家の人々」を書こうと、二千枚の大作にと意気ごんで、かなり以前に書いたものです。五百枚ぐらいのところで中断していたものを、そのまま闇の中に埋れてしまうのは惜しいような気がして、引っぱり出して、手を加えたものです。

ただ、読み返してみると、肩に力が入りすぎて理屈っぽく、小説の態をなしておりません。不要部分をカットし、書き直したのが本篇です。そういう意味において、この小説は永久に「未完」という形になります。

（平成五年九月）

（小説）

近藤富蔵の生涯（二十一）

第二章　浮沈の近藤家三代

三　若鷲朔風に耳欹てる

金子正義

（一）

西蝦夷地の交易及び樺太見分に派遣された最上徳内は、寛政五年閏二月十日松前に到着した。

松前藩では既に早飛脚で江戸在府の藩主松前章広より「蝦夷地改正令」に因ってのアイヌ救済撫育と露西亜南下の警備の実施状況見分に幕府役人の巡検あり、準備万端遺漏なきよう」と知らされていたが、現れたのが前に幕府隠密と目して警戒し、折あらば命まで奪わんとした最上徳内で、今回は堂々たる普請奉行として小人目付和田平太以下六名もの下役を従えて上陸して来たのに驚き、

「今度の見分には松前藩より然るべき役人の同行を求む、尚、山丹人と言葉の通じるアイヌの手配をも頼む」

と要求し、更に天文・地形地質の観測資材の調達から其の担送人夫を傭うことから廻船のこと迄命じたので、家老以下啞然としたが幕命なので渋々と従った。

一行は準備が遅れ三月七日出帆し宗谷に向ったったが、途中強風に遭遇して石狩に上陸し、付近のアイヌから樺太東海岸のシャウニ（宗仁、北知床岬南端の北）にロシア人五人が滞留していると聞いた。

最上徳内は偶然に得た情報で予想通り露西亜人が樺太を南下していることを知った。

風が歇んで宗谷に着くと在駐の松前藩吏の松前平角が赤蝦夷（露人）五人は昨年の寛政四年五月頃より、北知床の北四十里程のツンナイ（遠内）迄南下していたと聞いたので、知らせたアイヌに帰国するようにと言伝けたと言った。

徳内はそれを幕府は勿論、藩にも報告しない国防意識の無さに驚いた。そこで随員を二手に分け、一隊は和田

兵太を長として宗谷に残し、宗谷場所周辺のアイヌの生活や交易を見分し、露人南下の情報を集めるように命じ、随員小林源之助、付添通詞俵藤善右衛門、アイヌ乙名リイシヤンタとアイヌ人夫を食糧物資を二艘のアイヌのイタオマチブネ（海洋船）で樺太に向い三月半ば頃樺太西能登呂岬の白主に着いた。

白主湊には7人乗りの山丹人の舟が数隻来ていて、駐在する松前藩吏の差配する交易場所で樺太アイヌと交易を開いていた。

徳内は天明六年の蝦夷地見分隊の大石逸平が樺太は多蘭泊より東海岸の加多留まで行っているので、西海岸を北上して大陸より山丹人が樺太に来る渡り口を確かめようと先を急ぎ、白主の山丹人には接触しなかった。

舟足を伸ばして北緯四十八度強のクシュンナイ（久春内）に到すると、恰度交易に来ていた山丹人の酋長ブヤンコに会った。色は白くアイヌと違って髯も無く日本人と同じ顔貌であった。

徳内はブヤンコの通訳カリヤシンのアイヌ語を通してブヤンコと親密となり接触中に多くの情報を得た。

先ず山丹からの経路を尋ね、樺太西海岸より大陸への渡り口が久春内より百里程北のノテトと、其の北ラッカ（拉喀）であると知った。ラッカは現地人ギリヤークはノッコウと言い、此のノッコウより山丹舟で一日の漕行で山丹人の住む大陸韃靼の地に到ることを知った。

渡り口の韃靼の海は冬は氷が張って犬橇で通行できるが、夏は海藻が海面を被って大船では航行できず、数隻の山丹舟で交易に来るのであった。

山丹人酋長ブヤンコは、清朝の満洲官吏よりハラダ・の官職（総乙名、民族長）を与えられ、毎年一回交易の総支配に渡って来ると言い、昔は西蝦夷地の宗谷・石狩にも行ったのに、数年前松前の役人が蝦夷地での交易を禁じて樺太南端の白主以北とした、交易は他にも西樺太はトンナイ（富内）東樺太はクシュンコタン（久春古丹）と場所があるので、樺太アイヌの乙名が部落から交易品を集めて来るから良いが、蝦夷地アイヌとは出来ないと嘆いた。交易品は山丹より青玉錦織物、鷹の羽等で樺太アイヌは狐皮・ラッコ皮・鉄器・砂金・雑貨等を持って来る。アイヌにとっては山丹人から得た交易品は自分たちの生活には役立たず、場所請負商のシヤモ（和人）の手を通して米・塩・酒・衣料・鉄製品の鍋釜・斧・小刀から縫針まで交歓する。山丹人へ渡す品も和人より手に入れた物である。言わばアイヌが和人と山丹人との交易の仲継をするだけであった。各地の場所請負商人は交易品を蝦夷地の産物と称して、松前城下で許されている本土の近江商人等の大商人や、廻船問屋に高価に売り渡す。山丹交易品は蝦夷地・千島・樺太の物産と共に京・大阪・江戸・各藩城下町に広く売り渡るのであった。

蝦夷地の物産は、鮭鱒を始めとする海産物・干鮭・串

貝等の加工物・昆布・鮑・海苔・鯨肉・干鱈等の俵物から、銅・鉛等の鉱物迄、安く買い上げて本土へ運び大儲をする。俵物等は更に長崎で清国船に高価に売り捌くのであった。山丹の品々は熊の皮と同じく蝦夷地特産として特に高価に売れた。

山丹の錦織は蝦夷地の大酋長が松前の殿様に拝謁する時の晴れの装いとなり、本土では蝦夷錦として上流婦人の女帯や、高僧の袈裟となる。

元々山丹では清朝の役人が満洲へ赴任する時に着てくる官服で着古した物を、山丹人が貂等の毛皮で交換した物で、生地は中国蘇州産の錦織物である。山丹青玉も唐飾りの紅玉も同じ経路で交換して山丹を経て日本に入ると、蝦夷産青玉として蔥入や武士の印籠の根付となり、上流婦人の簪の玉となり、鷹の羽は弓道の矢羽となる。

アイヌより安価な物々交換で得た山丹品を本土の大商人は、大名貴人に法外な高価で売って大金を得、場所請負商より場所税として利得の上前を撥ね取る松前藩は富み栄えるが、アイヌは山丹人と交易する獣皮や鉄器が不足すると、自分の子供や女房までその代りの人質として連れ去られる。時には部落に働き手の若者も居なくなってコタンは消えて無人の原野ばかりとなる。

通訳のカリヤシンは、自分も子供の頃に借金で人質に取られて山丹の地で青年になった、故郷の地に通訳として来ても親すら見当らないと嘆いていた。

カリヤシンは、自分ばかりで無く、ナイボ（内幌）のイコイベや、ヌンガシ生れのケプラも人質であるが、今は山丹人として交易に来るのだと言った。

だが邪心の無いカリヤシンは直ぐ明るい顔になって、

「今は松前の役人様にも信用されて、色々頼まれるんだ。」

と得意そうに包みから見事な五色の糸の桐花の縫い取りのある鳳凰造りの満洲沓を見せて、

「宗谷の松前平角様に前から頼まれていたんだ、白主で渡すと約束していた、沓は手に入れたから渡せるが、困ったことに、松前平角様から満洲の役人様へ届ける文書は確かに渡したが、その返事を待っている間に交易に出発したので今は持って来なかったのだ、最上様からもよろしく言って下さい」

と何の疑いも無く、松前藩の役人が山丹駐在の満洲役人と密かに交易したり文書の交換までしていることを漏し、松前班が鎖国の国禁を破り密貿易の罪を犯すばかり密かに清朝満洲官吏と文通迄していると知った徳内は、更に天明六年に大石逸平も久春内より南三里のナヨロ（名寄）で会っているアイヌ乙名のヤエンコイノに面接して、父親のヨウチウテイの遺物に乾隆四十年（一七七五）の朱印満文書札のあるのを見て驚いて急ぎ模写した。

其の時ヤエンコイノが、父親は西蝦夷の宗谷と山丹との交易で度々山丹に行き、山丹を支配する清国の官人よ

り「楊忠貞」ヨウチウテイの名を与えられ、賞状として貰った文書であると言った。

徳内は、日本では蝦夷地全島のアイヌを蝦夷人と呼び千島列島の中程のウルップ（得撫）島以南のアイヌを千島アイヌと呼んで北千島のクリル人とは区別し、樺太アイヌを含めて全て蝦夷人として同じ日本人であり、従って蝦夷地本島・南千島・樺太は日本の領土であると考えていた。処が樺太アイヌの乙名の酋長が満洲官人より名を貰って臣従していたとは心外であり、まして松前藩の重臣であり、宗谷・白主を支配する松前平角が山丹人と交易したり、満洲官人と文通する等許し難き行為であると憂いた。

徳内の憤りにも気付かず人の良いヤエンコイノは、父親の遺品の中から更に、乾隆三十五年の漢・満両文字で記した反物封緘の印板書を取り出して徳内に進呈した。

貴重な証拠文書を得て喜んでいるところへ、偶然にも樺太東海岸に漂着した難破船の生残り露人がアイヌに案内されて現われた。徳内は天明四年の見分隊で得撫島で露人と談合しているので多少露語を解し、アイヌの通訳と合わせて生き残り露人より多くの情報を得た。

名を聞くとイワン・カレンショと言った。イワンは四年前暴風雨で船が難破し、助かった五人は樺太東海岸ウノ（北緯五十二度三分）より山越して西海岸キトウシ（北緯五十三度辺）に出たがギリヤーク人と闘争して四人は殺されイワンは右眼を潰されたが一人逃がれ久春内に辿り着きアイヌ乙名に助けられて今迄匿まわれていた。

徳内は疲れ切っているイワンに食物を与え乍ら聞き出すと、イワンは露米会社の貨物船の乗務員で、毎年夏にラッコ等の海獣を捕るためにカムチャッカより南下す露国船や、得撫島・択捉島へ移住した植民団へ物資を届けに航行していた。千島列島は得撫島以北のクリル人は露人宣教師によりキリスト教化され、服装なども露人と同じで毛皮沓を履き馴化されていると言い、前々より択捉島・国後島に入植した露人探検隊や露人植民団のように、銃で威してラッコ等の毛皮を税として取り上げるような乱暴な方法では、アイヌは南へ南へと逃げて仕舞うのでクリル人と同じようにキリスト教を伝えて手馴づけるようになり、今は植民団も露国の国策会社としての「露米会社」の植民団として入植し、従来のように恫喝して毛皮を捲き上げたり、原住民のアイヌから毛皮税として取り上げたりせず、適当な価格でラッコやオットセイ等を買い上げていると言った。

最上徳内は千島を露国は領土とせん為にアイヌを保護すると称して原住民を懐柔し、キリスト教化した乙名を通して毛皮税を取る巧妙な植民地拡大政策に転じたことを推察した。

イワンは更に近く日本人漂流民を送りに露西亜本国より軍船が来ると思う。その時自分も帰国したいので連絡

を頼むと言った。

徳内はイワンの持っていた地図等を写し取り身柄を白主駐在の松前藩吏員に委托するようアイヌ乙名に身柄を委ね、樺太東海岸に出る為に北緯四十六度の本斗付近より山越して亜庭湾の多蘭内に出た。其処より大泊に向い折から交易に来ていたオロッコ人（ツングース族）に会い、樺太奥地東海岸北方にはオロッコ人が馴鹿などの遊牧と魚介類の採集で家族単位で棲息し、北方西海岸は海獣や魚介類で生活するギリヤーク人の部落が点在していることが分った。

元々山丹人もギリヤークの一族で大陸のアムール河の沿岸より沿海州の山地韃靼の地に住むので山丹人と称されると、徳内は推定した。

徳内は大泊より亜庭湾岸を東行し遠淵に達し中知床岬を望見する処まで行ったが、此の先は既に天明五年六月蝦夷地見分隊の大石逸平が行っているし、天候が悪化し帰路も危ぶまれるので引き返して十月初旬に松前に帰着した。

折から寛政四年九月五日に蝦夷地根室港に露国船エカテリーナ二世号が入港し、露国女帝エカテリーナ二世の特使アダム・ラクスマンが漂流日本人船員の生き残りを届け、通商要望の国書を呈し度いと申し出た時であった。

（二）

漂流日本人は天明二年（一七八二）十二月九日、伊勢白子湊を出帆し江戸へ向う米廻船の神昌丸船員で、駿河沖で暴風雨に遭い七ヶ月余り洋上を漂流の上、生き残った船頭大黒屋光太夫等十七名は、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着、土民の中で四年間を過し、生き残った九名はオホーツクを越してカムチャッカに渡り、更に露西亜国に入った。寛政四年（一七九二）生き残った五人の内病気の者と残留を希望する一人を残した三人が女帝エカテリーナ二世の特別な計らいで特使ラクスマンに依って送り届けられたのであった。

根室よりの急使が松前に入り、更に幕府に急報された。幕府よりの指示を待つ間は、松前藩では鎖国の故を以って乗員の上陸を許さず、根室港北岸に淀泊させて待たせたが冬期となったので十月十四日漸く露国船員・漂流民の上陸を許して小屋掛け越冬させることにした。

松前よりの急使が江戸に入ったのは十一月十日であった。幕府は其の対応に連日閣老会議で苦慮した末、漸く、鎖国主義に徹していた老中首座松平定信が断を下した。

「蝦夷地はアイヌの土地であり自然荒蕪の儘にして一旦事ある場合の緩衝地として、鎖国の国是を守るが根本で、ラクスマンを長く留めず追い返す事が第一であるが遠路日本人漂流民を送って来た信義に反するとも思う。国書を受け取ることは出来ないが、漂流民返送の礼とし

て其の労を犒い、通商の望みあらば長崎へ回航せよと説いて引き揚げさせるが肝腎じゃ、其の主旨を宣べ諭す使いのみを差し使わせば宜かろう」

其れに従って宣諭使を出すことになったが、国書の受授交換をする訳で無いので正使で無い者が良いとして、西丸目付の村上大学義礼と目付石川六郎左衛門忠房を宣諭使に命じ、村上には布衣の位を、石川には将監の名を与えた。

然し冬期であるので出発は翌年の春を待てとの事だった。

だが幕府は斯うした北辺の事情や日本近海への異国船の出没に備えて、沿岸海防の備えを厳にすべしとの令を下し、特に安房・上下総・相模・伊豆の五ヶ国に砲台整備を命じ、諸大名に異国船渡来時の心得を諭したりの慌しさであった。

翌寛政五年三月となると更に「異国船漂着時の対応・海岸防禦令」を重ねて厳しく布告し、老中松平定信自から三月十八日より四月四日迄の間、房総・伊豆・相模より大島へも渡海して要害の地を巡視し、一層海防の備えを厳にするように命じていた。

五月二十二日蝦夷地へ向った宣諭使の一行六十名は、六月二十一日より、松前城下の松前藩家老松前勘解由邸で会見・交渉に入り二十七日迄に三回の談合によって漸く露西亜側の修好通商の要望を抑え、後日の長崎入港の信牌を与えて、送り届けた漂流民を受け取り、ラックスマン一行の船を去らしめることに成功した。

幕府より漂流民送還の礼として米百俵・日本刀三振等を贈り、アダム・ラックスマンは松前を去り、エカテリーナ二世号の碇泊する箱館に向った、去るに当り松前藩より煙草二十函・茶碗・漆塗盆一箱を贈った。箱館出帆の直前、幕府は漂着外国船を送り帰す例に習って船中の費用として大麦・小麦・蕎麦・肉などを与えた。

天候悪く出帆が遅れていたが漸く七月十六日順風を得てエカテリーナ二世号は箱館港を抜錨し訣別合図の号砲を発して沖合に去った。

一方松平定信は、宣諭使一行が漂民を引き取って江戸へ帰任する前に、突然として老中を辞任した。

松平定信は、性急な幕政改革への反感の昂まりや、露国船来航等で外交問題の未来に不安を覚え始めた処へ、江戸城大奥の醜聞処方で大奥や将軍家齊の反感を買い、更に、将軍家齊の実父一橋治済を大御所として西丸へ移し度い家齊に反対した為に突如辞任に追い込まれたのであった。

田沼政権を倒した時、定信は徹底的に蝦夷開拓に関わる者を一掃し、田沼の政策を一変させたが、今度の松平定信の辞任では他の老中には関係無く松平定信が首座となって幕政の基本は引き継がれていった。

送還された光太夫・磯吉は寛政五年八月江戸へ送られ町奉行池田長恵に身柄を預けられ、一応の取調べの後江戸城雉子橋門外の御厩の宿に入れられ数日にわたって目付中川忠英・間宮信如が異国放浪中の見聞について訊問し、幕府儒官篠本廉が奉行所の委嘱を受けて記録し、更に訊問が終ってから、篠本廉は光太夫・磯吉から知っている露語・露文を書き取り、此れをも記述して、後日将軍の漂流民御覧の際の参考資料として幕府に呈出した。

（三）

送還漂流民三人の内小市は根室越冬中病死し、最後に生き残った伊勢国の船頭光太夫と水主磯吉は、寛政五年九月十九日江戸城吹上げの庭の間で将軍家齊の御覧に供された。陪席を許された列座の中には、辞任した松平定信も特に許され、若年寄の加納遠江守久周、平岡美濃守頼長、高井主膳正清寅などが供伴し、尋問者として御納戸頭取亀井駿河守清容、小野河内近義、多紀永寿院元悳等が控え、将軍御下問は目付中川勘三郎忠英、矢部彦五郎定令が進行を執り、幕府奥医師桂川甫周が記述役であった。

此の日近藤重蔵は、吹上げの庭衛護の端にいて、定刻四ツ半（午前十時）目付石川将監忠房、村上大学義礼が召連れ来った光太夫・磯吉が紅毛人そのものの姿で入って来るのを驚異の眼で凝視めた。

将軍御覧の者とは言え、元より船頭に水夫、目付石川将監、村上大学の召連れた下僕として城内に入った身であるが、警護の幕府諸役人の居並ぶ中を少しも臆せず、背筋を伸ばして真直ぐに歩み来った。二人の姿を見た瞬間居並ぶ一同は思わず息を呑んで、紅毛人では無いかと目を瞠った。

駭きに胸躁ぐ近藤重蔵の前を緩っくりと二人が通って行く、幾度もの生死の難を超えた光太夫は、不惑二齢の落ち着きある顔貌で、髷は三つ組にして黒絹で巻いて後に垂れ、黒の氈笠を左脇にはさみ襟より胸に金牌を垂れ花模様のある桃色の筒袖上衣には、赤玉の飾り衣紐を多数つけ、同じ織物の袴を穿き、上衣の下は紺地綿の胴着で足は黒革の深沓を履いて右手に魁藤の杖を突いていた。

後の磯吉は、稍赤ら顔の男盛りの小気味よい顔をして髷はビロードで巻き結んで長く後に垂れ、紺の筒袖上衣に銀の飾り衣紐をつけ、首より胸に銀牌を垂らし、猩々緋に黒縁をつけた胴衣を着け、黄・黒間道のビロードの袴を着け沓は光太夫とは異って柿色の半沓であった。黒い中高広庇の笠を左手に持って右手には何にも持たず、右脇に下げて右股に付けていた。

両人の服装は、露国の礼服で、胸に下げた光太夫の金牌、磯吉の銀牌は、露国女帝エカテリーナ二世が特に光太夫等の帰国に当って自から授けたもので、露国の実情を上様に御覧に供せん為に特に其の服装を着けたものと、

取調べに当った中川忠英が後日、近藤重蔵に漏した。

両人揃って将軍御前にて笠を地に置き、深く拝礼して特に設けられた床几に腰を下し、好奇心の強い将軍家齊の次々の御下問に畏れ戦きもせず、露国風に堂々と答え正午迄の小半刻揺ぎもしなかった。

遠くにある近藤重蔵は耳を欹てて辛じて聴き取る断片にも、驚くべき北の国露西亜の国の広さや、産物、都の風俗や暮し方を知ったが、其の事よりも何事も無く国内にあれば、如何に豪気な船の船頭と言えども天下の征夷大将軍の前に出ては恐懼動天して言葉も出ないであろうに、何んと堂々として爽やかに信じ難き異国放浪の見聞を語ることか、と不思議であり恐懼すら覚えた。

後に、此の寛政五年九月十五日の漂流民御覧を記録した桂川甫周に依って『漂民御覧之記』として纏められた。

将軍御覧後も雉子橋門外御厩の宿に収監されていたが、其の後処分が決まって寛政六年六月、身柄は番町明地の薬草植付所に両人は収容され、月々の手当を受けて薬草栽培の手助で暮すことになり、妻を国元より呼んでも良いが、外国の事は猥りに語るべからずとして生涯飼い殺しの身となった。

桂川甫周は光太夫の軟禁された薬草に通って光太夫の漂流放浪の体験や露国の事情を『北槎聞略』として纏め幕府に納めた。

著作は鎖国の国是上厳重に秘密にされていたが、近藤重蔵は後に蝦夷地・千島の探検に関わる時、桂川甫周を尋ねて其の草稿を見せて貰った。

目付中川忠英は光太夫取調べを通して海外事情に通じ、辺境のことも明らかになった後、長崎奉行・勘定奉行を歴任し、長崎奉行の時、近藤重蔵、林貞裕等の助力で『清俗紀聞』を編纂し、外国事情を知る幕府の権威となるのである。

（四）

松平定信が老中首座を辞しても、定信が抜擢した閣老の会議制政治は継承され、残された改革課題は推進されていた。其の一つとして人材登用があり唐国の科挙の制の如き学問吟味制であった。

其の「聖堂学業試験制」は松平定信が老中就任直後より何度も唱えてきた、幕臣及び御家人の子弟で聖堂及び私塾に学ぶ有材の士を学問吟味によって登用せんとするものであった。

寛政五年十一月二十一日定例閣老会議でも、学業吟味のことを幕府各行政下の頭、支配役を通して、良く良く伝えて、学業に秀でた者、志ある者に受験するよう申し伝え洩れなきよう、と強調され、翌年以降も毎年執り行う学問所の行事となった。

近藤重蔵も評定所上司より、学問吟味を受けるように

伝えられていたが、寛政異学の禁に触れる山本北山門下の徒と目されいると思い、毎年の勧めにも応じなかった。

近藤重蔵は既に、評定所吟味方の見廻り役与力として、譜代席の二百俵取りであり、父守知は前将軍家治公身近くに使えた立派な旗本であるが、重蔵は未だ正式に将軍謁見を許されていなかった、従って身分はお目見得以下の御家人扱いなので父守知も気にかけていて、珍らしく「今度は、学問吟味とやらに応じてみたらどうじゃ」と勧めた。

重蔵も市中見廻り、評定所吟味方として四年の経験によって世の表裏や、様々の人の生き方を知って、門地門閥の上に胡座をかく幕閣重臣諸大夫より、世の知られざる秀れた人物の在るを知ったので、己れも其の能力を試みる為に登龍門の難関とやらに臨んで見ようと思った。亦、先頃は光太夫の異国放浪の見聞を聞いて、更に広い世界に対する興味関心を深くしたこともあって、他への転属を思うようになっていたからでもあった。

学問吟味は各奉行、諸政庁の通達が良く徹して受験希望者が参百名を越え、早くも十一月二十九日素読吟味より始め、経学・史学・課題論文・紀行文・報告上書能力を吟味して翌年三月に及ぶ厳しいものであった。

合格者は僅か十名に過ぎなかった。その難関を首席で通った者は、七十俵五人扶持の御徒・太田覃・直次郎（寛延二年一七四九年生れ）四十五歳であった。

太田直次郎は御家人の身で既に南畝・蜀散人として狂歌・俳諧の座で有名であった、天明期には田沼資次の賄賂政治を狂歌で嘲笑し、多くの洒落本・滑稽本を刊行していたが、次の老中松平定信の清廉に惹かれ、己れの才能に相応しく遇されることを試さんとしたものであった。

合格者の中で抜群の成績を得た太田直次郎始め、近藤重蔵他数名は四月二十七日江戸城内焼火の間に於て、若年寄堀田摂津守正敦より褒詞を頂いた。太田直次郎は不惑を過ぎた者として特に時服及び褒賞金を授けられた。

近藤重蔵は二十三歳の若さであるので特に、

「学問心掛一段之事、今後尚出精仕るべきこと」

と摂津守より励ましの言葉を与えられた。

学問吟味に合格したことは重蔵自身より、父守知は兎も角として母美濃の喜びは大変で褒詞を拝して帰宅すると、美濃の実家や親族を招いての内祝の宴を開いて呉れた。集まった者達は口ぐちに重蔵のような学風であるに拘らず学問吟味の難関を通ったことは重蔵の学殖が容易ならざるものだったから、と称賛した。

寛政六年五月二十二日文武出精の者が召出されて昇進栄達したが、重蔵には沙汰が無く、同じ学問出精の褒詞を授けられた二名の小姓組與頭高木彌十郎利直の子彌蔵利寛が両番へ組み入れられ、小普請方山上熊太郎博果の子藤一郎定保が小十組へ配された。

他に武芸・軍学出精の者一名、武芸出精の者九名が栄進したが、出精の者とされたのは本人でなく、父が武技出精とか、書物奉行であるとか、右筆等の特技の役で、其の子や養子等が家を継ぐ為に改めて召し出されたものだった。

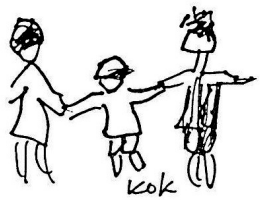
重蔵は栄えある上級登用にならないのは、昌平坂学問所に学んだことはあるが自分が山本北山の弟子で異学の徒として扱われたのであろうと憤りを覚えた。

だが、翌寛政七年二月五日評定所の目付中川勘三郎忠英が長崎奉行高野伊賀守に代って長崎奉行を命ぜられた。中川忠英は、市中見廻り役の近藤重蔵の精励振りと資質を見込んで、特に長崎奉行吟味役にして連れて行き度いと推輓したので、六月五日評定所奉行立花出雲守より書付を以って長崎奉行手付役を仰せ渡された。

両親の喜び様は大きいが、学問吟味合格のとき程では無かった。母美濃は重蔵が江戸を離れて遙か西の果ての長崎に赴くことに一抹の不安を覚えて案じていた。重蔵は兼てから長崎留学を望んでいたので我が意を得たりと未来への抱負に胸弾ませて旧師山本北山や本多利明に報告に走り、白山義学塾の同志達にも喜びを分ちに行った。

近藤重蔵と同じく学問吟味に首席で通った太田直次郎も次の年支配勘定に昇進して、勘定奉行所で古記録の取調べに従事し、『孝義録』の編纂などをして九年間を過した。上司にその実直な勤務振りや有能振りを買われて享和元年（一八〇一）五十一歳で大坂銅座に出役し、三年後（一八〇四）五十六歳で長崎奉行に出役し、調役下役となって一年間の長崎見聞を『沿海異聞』などに書いたが折から、十二年前に大黒屋光太夫等の漂流民を還送し、通商を求めに来航した、アダム・ラックスマンに、宣諭使を通して長崎入港の信牌を与えたが、又もや、其の信牌と露帝よりの国書を持って通商を求めに来航した露艦ナデジュタ号のニコライ・ベトローヴィチ・レザノフの対応に苦慮する長崎奉行及び幕府に役立つ、対外的知識能力を持ち合せなかった太田直次郎は、在任一年にして虚しく江戸に戻された。

家を継ぐ子も無く老いても尚食禄を離れることが出来ないので玉川水防の巡視役などをしていたが気分だけは江戸子直次郎に戻って蜀散人として文化活動を再び始め、最晩年には駿河台の幽霊坂上に住んで神田川を隔てた向う側の湯島の聖堂を睥睨し乍ら権勢に背を向け、蜀散人として狂歌詩文に興じて文政六年（一八二三）七十五歳で没した。



有院家の人々（十一）

大和禎人

第二十一章　主のみ許へ

ソフィア・アルベラ・アルウィン女史が平素抱いていた思想に触れてその語録を伝え、再現紹介する側近の教え子による記述がある。

私の幼稚園の小さな方たち、愛するお友だち、そして保育学校の卒業生や生徒さん方へ

みなさんは、私の幼稚園や保育学校に、どうして入っていらっしゃいましたか。

ご兄姉が入っているから、ご両親が知っていたから、お知り合いに紹介されて、学校の先生から教えられたから、丁度お家が近所だったから……。色々な理由がおありでしょう。でも私は確く信じます。みなさんが私のところへいらっしゃったのは神様のご意志なのですよ。そんなことはありません、偶然そうなったのですよとおっしゃるなら、その偶然こそは神様のご意志なのです。私がみなさんのおひとりおひとりを大切に、大切に思うのは、神様からみなさんおひとり、おひとりをお預かりしているからです。私の幼稚園も、保育学校も、大変人数が少ないですね。私の力が、あまり弱く小さいので、私の力にふさわしい私の目の中にはいるだけの方たちしか私はお預かりできません。毎日毎日私は、神様からお預かりしたおひとり、おひとりにどうしたら私のありったけのものでおつくしできるか、それだけを祈っているのです。

（金井うた謹記）

（謹記）としてベラ女史の言行を写した金井うた女は保育学校第十回の卒業生である。「荒野に水は湧きて」と題する学園史、かねてベラ女史の伝記がアルウイン学園から一九八〇年（昭和五十五年）三月発行された折の編集委員の一人である。かの女は右の本の中で尊敬をこめて、恩師の語録をそのままの話し言葉で忠実に再現しているのである。録音テープなぞを駆使する時代ではなかったし、ベラ女はプライベートにはノートを持っていて、創作童話など書きとめていたが、改まった日本語の原稿らしいものは残していなかったからだ。書画を良くし多くの作品を残していることとは別なのである。巧みな話し言葉をあやつったかの女だが、書くことはさすがに不得手だったのだ。

特にベラ先生の言葉は先生のあの涌き出る泉のような美しい言葉。幻想か、メルヘンか、比類ない想像と深い愛と信仰の上にたって語られたもののいくつかを、こわごわ文章にしたのであって、表現の不足をつくづく申し訳なく思う。

金井うた女は後記の中でこう述懐している。（謹記）と記したこの人の姿勢が滲み、ベラ女史の教育者としての像の側面が浮かぶようだ。

大正十二年九月一日、十一時五十八分四十四秒、その頃、皇居内一角で正午を知らせるため大砲を発射していたが、往時言うところの午砲の「ドン」を聞く寸前に、にわかな大地のゴォーという鳴動とともにこの世の終りを思わせる大揺れが起こった。関東大震災である。

母イキはこの年すでに古稀であったが、本邸にあって沈着、気丈に振る舞い、多くの使用人を叱咤したと伝えられる。

また、ベラの身を案じ、学園に駆けつけている。

「子どもたちに怪我はありませんか、よかった、よかった、なによりでしたね、そればかりが心配でした」

ベラの無事な姿をたしかめ、最初に言ったこの言葉はこの母にして、という感銘を深く刻むものであった。

「どうなのかしらね、砲兵さんはドンを忘れたんじゃないかしら、だれも聞いた人はいないものね」

「そうね、あの騒ぎですから、とてもドンどころではありませんでしたよ、お母さまは妙なことをおっしゃるのね」

大地震で動顛した砲手は午砲どころでなく止めたかもしれないし、沈着に撃鉄を引いたかも知れない。この際はだれも気づかないでいることをイキは言ったのだった。

ベラ女は麹町土手三番町十六番地にあった学園最初の建物をこの災害で失った。幸い、被災の打撃から立ち直り、市民一般が落ち着きを取り戻した頃、保母養成所については渋谷元治氏の好意の申し出により、小石川原町

一〇一番地の邸内にあった「子どもの家」を借り受けることができた。だが、一方に幼稚園の方は麹町上二番町三十一番地、松村真一郎邸内にいったん移転したが、後に、牛込区払方町の穂積重遠氏の邸内に移り、さらに三転して大正十五年四月には麹町九段の三輪田高女に隣接する民家を借りるという転々とする事情に会いながら、ベラ女は不屈を貫いた。これら校舎の確保についてはもちろん母イキの影の奔走なくしては考えられないのであった。

保母養成学校と幼稚園の校舎がこのように分離していることはもとより不本意なことであった。一日も早い学園の統合こそ大きなベラ女の課題でなければならないのであった。

原町の仮校舎の時代の四年間、ベラ女は自宅から遠く通勤した。巣鴨の駅まで生徒らに囲まれて歩く姿が町の人々の眼には珍しく写ったものだ。

この間、大正十三年四月にかの女は再々度の渡米をしている。コロンビア大学の夏期講習への参加をかね、校舎ならびに園舎を総合する学園の再建を計る募金という目的をかねたものであった。

だが、この外遊の帰途、大正十四年一月五日、船中にあって父ロパート逝去という悲報をうけた。これからの抱負を実現する上でなによりも大切な理解者であり、心強い経済的な援助者を失って、大きなショックにうちひしがれたのである。

だが、かの女の不屈は必死の祈りを捧げる中に取り戻され、帰国後、学園復興へ向けて東奔西走に全精力を傾けたのだった。

昭和二年四月、当時はまだ東京府下であった西高井戸一三三番地に念願の校舎の落成とともに、分散を余儀なくしていた原町から、そして九段からの移転を了えたのである。

市内に格好の候補地をすすめてくれる人もあったが、あえてこの地を定めた理由は、一つには付近に幼稚園が一つもないからであった。市内一等地の麹町から当時なお草深い武蔵野の一角に移ることは一大決心を要することであったが、幼児教育啓蒙に献身を神に誓うベラ女の固い決意によるのであった。この際は母イキを伴う移転であった。

昭和十二年蘆溝橋事変に端を発し、第二次世界大戦に発展した約九年の戦争はベラ女にとって、また母イキにとっても大変な苦難がもたらされた。人類平等をモットーとする教育の使命に生きるベラ女の身辺にも容赦なく戦時下教育、戦争防衛の訓練が強制されはじめた。

昭和十五年八月十七日、九十歳の高齢をもって、母イキは天に召された。R・W・アルウィン氏没後十五年である。勇気をもった国際結婚をし数奇の運命に生きたイ

キ女はやがて太平洋戦争という国民の塗炭を知らず生涯を閉じたのである。ベラ女の悲嘆は言うまでもなく、信仰に生きる強さをもつ身ながら、人間としての弱さには勝てず、しばらくは自失して悲しみから立ち上がれない日が続いた。

太平洋戦争に突入した昭和十七年に入ると、ベラ女に対し米国への帰国要請さへ迫られたのだった。しかし女史は学園を放棄することはとうてい忍びないことであったから、日本への帰化を決意し、一家をあげて「有院」と創氏し米国への送還を避けたのであった。

十九年になると、いよいよ戦況は逼迫し、校舎を軍需工場に転換、岩崎通信株式会社に強制買上げとなる事態を迎えた。

二十年四月、戦火さらに熾烈とともに伊豆長岡の武智家の別荘への疎開は先の章で触れたとおり、姪の雪子を伴ったものであった。

疎開先での生活はすでに帰化したとはいえ、白眼視に耐え、忍従の明け暮れが待っていた。負け戦の中、ことさらの四面楚歌はベラ女にとってどんなにか辛いものであったか、計り知れないものがあった。

昭和二十年十月、伊豆長岡から終戦後の戦禍生々しい東京へベラ女は帰った。西荻窪協会の牧師館（杉並区大宮前五丁目）に仮寓した。この教会は母のイキが里方の甥にあたる林香牧師のために献堂したものであった。

ここで一時、保母養成所は右の教会内に、幼稚園は同所に近い出張所に移り、さらに高井戸一丁目にあった養成所生徒の寄宿舎「玉成寮」移転するなどの困難を克服し授業を再開したのだった。

昭和二十三年四月、学制改革に伴い玉成保母養成所を改称してアルウィン学園玉成高等保育学校と呼ぶことになり、次いで五月には財団法人アルウィン学園の設立とともに、いよいよ基礎を強固にし、初代理事長ならびに学園長を有院ベラ女史が兼任することとなった。

昭和二十七年七月、現在地杉並区松庵南町十五に敷地千坪の校地を定め、建設を進められていた校舎の落成に伴い移転、ようやく学園の安定期を迎え現況を見るに至るのである。

幼児を愛し、幼児を信じ、その　無垢な心を尊び、幼児の真直ぐな成長に、人類の次の世代への無限の期待と希望を賭けて、そのことのみを自己の生きがいとし、しかも己自身幼児と同じように純真な魂の持ち主であった、女性……。

ソフィヤ・アルベラ・アルウィンは七十五歳の全生涯を通じ、日本の幼児教育「幼稚園の設置とその保育者の養成所開設」に全身全霊で献

身した。大正の初頭（大正四年）から昭和三十二年六月の彼女の修焉の日まで、日本の国の幼児の友として、彼女の持てるもののすべて、その生涯、その身体、その財産のことごとくを捧げつくして生き抜いたのである。……。

彼女は、キリストによる、信、望、愛の教えを守り、絶対平和主義と、全人類の平等とを目標にし、自身を絶えず自戒し、いつの場合にも節を曲げず、時流に迎合しなかった。また、自分を他にひけらかすことなく、黙々として忍耐し、ひたすらに幼児教育の世界にのみ生き続けたのである。

彼女の生涯は極言すれば、戦いに終始している。青春期には人種差別、偏見との戦い、壮年期には周囲との戦い、自己との戦い（結婚問題）日本の封建性との戦い（キリスト教迫害）、平和のための戦い（第二次世界大戦）、そして最後には病魔との戦い（癌）、それに貧困との戦いであった。……。

（謹記）の金井うた女はこのように本の序の部分でも健筆を振るっている。

そして、ベラ女終焉に先立つ数日前の貴重な語録を次のように伝えてくれるのだ。

「神様のお声が、この頃、早く早くと耳のそばで何だかせかせていらっしゃるのですよ。私はね、一生をふり返って本当に感謝です。私のような足りないろくでない者を幼児教育の道へまっすぐに歩かせてくださったこと、ほんとうにお恵みです。分にすぎた恩寵です。私にもう一度人生が与えられましたら、私はね、よろこんでまた、またこの道を歩きますよ。ええ、ええ、二度でも、三度でもね。私のこの感謝をよくよくおぼえていて下さい。神様、ありがとうございます……。」

昭和三十二年五月二十九日のことであった、……として、これは金井うた女が直々に語りかけられたものに思われるのだが、ベラ女史は苦しい息の下、その生涯を見事に締めくくり、まことに潔よい言葉を残した。

そして、言葉を言ってから五日目の六月二日の朝、起きだして学校の廊下や保育室を見回り、窓の枠にほこりがたまっていることを注意してから、自室に戻り、再びベッドに上がろうとして倒れ、昏睡状態におち入ったのであった。半年前の乳癌の手術で入院した国立第一病院に再入院したが、ついに意識を回復しないまま、主のみ許へ、父母や弟妹、教え子、友人のいる国へ旅立ったのであった。

第二十二章　金木犀の悲しみ

「もし、有院さんのご縁故の方ですか、ご苦労さまです、外人さんのお墓にあなたのような日本のお方が珍しいですね、なんともご殊勝なことで……」

男は管理事務所の人らしい。それらしい腕章をつけていて、人影をみて近づいたものだ。

「はい、お邪魔を致しております。ベラさま、いえ、亡き先生をお慕い申しているものでございます、ご命日が近うございますので……」

「さようですか、ベラさまとおっしゃる？　ここに眠る有院さんのご一族ですな」

「はい、お父様、お母様とご一緒に、この右手のお墓がそうなのです、お名前はここに」

「それはどうも、余分のことを……、時にですが、あなたさまがこうしてお見えで、ご縁ある方とお見かけしたものですから、ご相談を申し上げたいのですが…」

「なんでございましょう？」

「実はこちらの金木犀をお切りになって頂きたいのです」

「えっ、なんですって、この木犀をですか」

いきなりのことで、婦人は驚きの声をあげた。

「そうなのです。もちろんあくまでもご協力を頂くというかたちでのお願いなのですが、あなたさまからしかるべきお方にお伝えを願えませんか」

慇懃の中に男の言葉はかなり強圧的な響きをもつものであった。

「まぁ、それは困ったことを、現在は有院さんのご一族みなさんアメリカに……」

「そのようで、存じています。ですからおいそれのご連絡のしょうがございませんので困っております。」

「はぁ、こちらの管理はたしか跡取りのお兄様のほうのお子で、ジョンさんとチャールスさんご兄弟ということになっているはずでございます。なんでしたら玉成学園の方へご連絡なさったらいかがでしょうか」

管理事務所では玉成学園と有院家の関係は知っているはずであったが、

「それが、事務室の方もお変わりになってから、ラチがあかんのですわ」

なぜかこんどは、いくぶん吐き捨てるような語気を返してきたのであった。

婦人は南富美代と言った。玉成保育専門学校の教師として最近まで籍をおいていた人だ。かつては絵画製作を担当する専任講師であった。

前の章で触れたアルウイン学園発行の「荒野に水は湧

きて」という五百余頁の大冊編集に際しては、金井うた女と同様に編集委員五人の中の一人でもあった。学園の第二十期生で、研究科を卒えてから母校に永く勤めたのだった。

ベラ女史の薫陶をうけた一人として、故人への尊崇の念はきわめて深く、神の名を唱えるような敬虔さに満ちて、声をかけた管理人の男をいくぶんたじろがせたようすだった。

「なぜでございましょう、お墓の内にあるものは有院家のものではございませんか。この金木犀はベラ先生が麹町のお屋敷からわざわざ移殖なさったものと伺っております。最愛の、慈しみを先生にお与えなされたお父様の大切になさっていたものと伺っております。そのお父様のみ霊をお慰めするために尊いご孝心から移されたものです……。なぜ切らねばなりませんの」

「いえ、ですから、このことは霊園ご使用の皆さま一様にご協力をお願いしているわけでして……、順次このお隣さまのように明るくして頂いております」

たしかに、右隣は切り株を無残に残していつか青空を仰ぎ、そちら側にある「亜氏略歴」の背後が明るんで、（おや、いつの間に）と気づきはしていたが、施主の都合で切り払われたものとばかり思ったのはどうやら間違いだったらしい、（ご協力）の結果として問わず語りに聞く結果になった。南女史は血のひく思いで、憤りの波立ちを押えかねた。

「お隣はお隣でございましょう。協力なぞとおっしゃって、お強いになるのは理不尽ではございませんか」

「理不尽」などという言葉が女史のお年のほどを物語って覚えず口をついて出た。年甲斐もないこうした老いの身の興奮は近頃とかく多く、慎まねばならないものとして自ら戒めていたものだったが、この日、思い立った墓参にあたっては、そもそもからかの女の心外とするトラブルに出会っていたのだ。

「お花を差し上げるのはベラ先生ご一人に限らせて頂きます。これまでご一族皆さまへお供えの慣例は以後はなかったことにお願いします。ええ、先生のお気持はお気持ちとして、割り切りませんことには理事会の監査もだんだん厳しくなっておりますので……」

ベラ先生以外はたとえお墓が同所とはいえ、関係がない方たちにまでの供花は無用という言い分だった。

事務長のニベもない言葉がよみがえり、いつになく今回は胸の悪い墓参だった。

夫の車で送られての墓園に入り、六月という季節にかかわらず落ち葉の散り積るにまかせ、だれも訪れた様子のない墓域を掃き清め、すべての墓塔に手桶の水を注ぎかけ香華を捧げる、日本式作法はいつもの慣いだ。地下にある有院家の人々のみ霊のひとつひとつに安かれと祈りを捧げるのであった。

有院家の墓域はここ青山霊園、第一種イー8号2側外人一号にあり、外人墓の一群の一角を占めている。およそ十五坪ほどの広さをもつ贅沢は往年の有院家の地位、名誉を物語り、同時に富をも象徴している。

階段を二段上り、鉄扉を排した高みの墓域は名刺受を右手にし奥へ石畳が広く延びて、正面右にロバートとイキ夫妻、左はFUSAKO（英子・長男ロバート二世の最初の妻）の二基。左手は奥にRICHARD（次男）、同じ左手前にMARY（次女）。相対する石畳の右にTSUNEKO（常子・長男ロバート二世二度目の妻）と並び、並ぶ奥手、ロバート、イキ夫妻の墓塔近くに「亜氏略歴」と玉成学園同窓会によるベラ女の顕彰碑の二つの碑石が並んでいる。墓誌としての「亜氏略歴」は序の章に写したとおり、簡潔の名文で刻字も鮮明だが、ベラ女顕彰碑の方は石材の白く、刻字の浅いため残念ながら判読しがたい。墓塔はいずれも十字だが、上方に円を背負う独自の形式をなして、仰ぎ見る高さのものだ。それぞれ円筒の花立てには五三の桐の紋章が配されており、氏名の刻字はさすが横文字だが、IN LOVING MEMORY OF という文字に続いて氏名、生年、没年を一様に認めるという形式のものだ。ベラ女は父母に合祀されて、右側面にその名を刻まれており、太平洋戦争に日本軍兵士として戦病死した武雄は父RICHARD の左側面に名を刻まれ、合祀されている。さらに、なんと正面FUSAKOの墓塔の陰にかくれ長男ROBART二世と三度目の妻千代の二人を葬る比翼の墓石が、これだけは平たく、金木犀の樹下に見出される。

有院家の人々、日本にその生涯を過ごし、そして日本の土に化した異邦人、そしてその人々の伴侶であった日本婦人たち、奇しき運命を生きたそれぞれに懇ろに手を合わせ、香華を捧げ深くぬかずく老女の姿は求道者さながらのものであった。

夫はかの女を車から降ろすと、別の所用に向い、また迎えに来てくれる約束だったが、かの女が心ゆく清掃に奉仕し、回向に要する時の間をはずす温かい配慮によるらしい案配でもあった。

そうした清浄な心を冒して、管理事務所の男は闖入してきたのだった。

なにか今日の霊園はそうでなくてもただならぬ雰囲気に包まれていた。とある通路にパトカーや機動隊の車が待機しており、霊園内のそこここに警邏の警察官が徘徊する異常さだった。赤坂通りから神宮前へ通じる大通りでは通行するタクシーまで検問し、トランクをあらためる光景を見うけていた。夫の運転する車は霊園の背後から乗り入れ、また老夫婦が乗っていることで見逃されたものかも知れないのであった。

ソフィア・ベラ・アルウィン女史の正命日は六月十二日だが、この日、六月六日は日曜日であり、晴れていて墓参に足を向けたのである。供花は家の近くで求めたも

のを六基分すべてに分けて供えられるように用意した。玉成学園から託された費用ではもとより足りるはずがない、花代は年々高く、かの女の支弁した額は学園からの支給額をはるかに超えていた。

（でも、よろしいの、これは気持ちの問題ですから）

学園の冷遇を恨んではならない。

（お世話になった学園を悪く思うことは止めにしましょう。ご恩あるベラ先生に申し訳ないことになります）

そんなふうに自らに言い聞かせたのである。

（在京し、しかも母なる学園に奉職したわたくしは、玉成の教育精神を体し、幼児教育に専心している全国に数多い同窓の皆さんを代表する気持なのです）

私の子どもは三人とも玉成を卒業し、成長して結婚した時、長男は自分の環境と同じように育った娘さんをということで、玉成の卒業生（五十七回卒業生）を娶った。長女の子どもは再び園児となって卒業した。私の家族は私と、子ども三人と、嫁と孫が玉成に育てられた関係から私は第二部第二章の幼稚園の推移を書かせて頂いた。（略）

「荒野に水は涌きて」の後書きにかの女は編集委員としてこのような文章を寄せている。その身辺を玉成一色に包まれる女性なのであった。

（そうでした、鈴木茂弘さんにもご相談してみよう）

有院家の縁者として頼れる人はこの人しかいない、ベラ女の従兄弟にあたり、母イキの里方林の家系で、他家を継いでいるが、西荻窪教会の林香牧師の令弟あたる人だった。もう一人、山本家に嫁いだその妹博子さんがいて、この人こそはベラ女史とともにイキ女の膝下に育てられた時期のある濃い関係であったが、いまは東村山の老人ホームに暮らしている。林香牧師はすでに故人でその弟妹にあたるこれらの方たちもみな高齢なのである。相談するとすれば鈴木茂弘氏しかいないのであった。

（有院家のただいまはなんとお淋しいことか）

いま、南富美代女史は墓参につけても、そうした思いが強く、つい泪ぐんでしまうのだ。

香華の予算を削った学園の現況もまた、ベラ女史の建学の精神から遠く、校長や園長はいまやベラ女のことを知らず、知ろうともしない行政区内公立の退職校長らにポストを占められているのであった。学校法人の理事に二人ほど卒業生が名を連ねていても、経営上の無力は覆いがたい実情であった。

管理事務所の係が去ってから、警邏の警察官が何人も垣の外からこちらを伺う様子で通っていった。

（そうだった、皇太子さまのご成婚のパレードが近かった……、ああ、それで、そうでしたね）

南女史は複雑な感慨にフーと息を吐いたのだった。

―完―　（五・九・二四）

「有院家の人々」参考文献・資料

旧ハワイ王国　「ロバート・W・アルウィン別邸」　伊香保町教育委員会（栞）
駐日代理公使　「荒野に水は涌きて」　アルウィン学園
「フランクリンの果実」　ーベラ・アルウィンの生涯ー　伝記編纂委員会
祖父の愛した伊香保へ再び　アーウィン・ユキコ　文芸春秋社
ハワイ移民の父の孫アーウィン・ユキコ女史　（昭和63年6月20日付）
半生記出版機にあす来県　町あげて歓迎式典　上毛新聞
ハワイ駐日公使アルウィンの伊香保別荘　木暮　敬　イカホカントリクラブ
神奈川県の歴史　県史シリーズ（14）　中丸　和伯　山川出版社
長崎県の歴史　県史シリーズ（42）　瀬野精一郎　山川出版社
横浜どんたく　上・下　石井光太郎　東海林静男　有隣堂
横浜・中区史　中区制五〇周年記念事業実行委員会　横浜市
図説「横浜の歴史」
明治大正図誌　4　横浜・神戸　筑摩書房
神奈川の一〇〇人　稲葉　博　かもめ文庫
現代日本朝日人物事典　朝日新聞社編　朝日新聞社
新潮日本人名辞典　新潮社
新編日本史辞典　京大日本史辞典編纂会編　東京創元社
江戸の旅　岩波新書　今野　信雄　岩波書店
アーウィン関係文書について　山田　宙子　外交資料館報
ハワイ移民その他外交資料（コピー）提供　林　正和（元外務省外交資料館室長・現「日本外交文書」編纂委員会委員）
ハワイ移民　国史大辞典　第十一巻　吉川弘文館
新修華族家系大成（上・下）大久保利謙編著　吉川弘文館
明治天皇紀　第五巻　吉川弘文館
図説横浜の歴史　市政一〇〇周年　横浜市：市民局

第五十記念号特集

牛歩ここに五十号　大和禎人
記念号に寄せて　青木昭成
「まんじ」五十号を讃える　井上二三男
五十号回想　金子正義
同人ご一同様（書信）　佐々木一郎
「まんじ」の思い出　三戸岡道夫
経理面から見た「まんじ」五十号　柴田富佐子

・これまでの印刷経費白書・参加同人異動の記録
・表紙絵のうつりかわり　・水虎洞くんのカットについて
・作者別掲載全作品一覧

牛歩ここに五十号

大和禎人

季刊で五十号という誌齢を歳月で数えるなら、足かけ十三年ということになる。季刊だからまさに牛歩、執念を燃やしつづけ到達したモニュメントとして少しは褒められてもよいのであろう。言うを許されるなら、よくぞ頑張りを続けたものと自賛の拍手をおくりたい。

いま時は、文芸同人雑誌発行を目論むよりは一発の当たり屋よろしく懸賞応募という挙に出る早道を選ぶのが大方だろう。執筆料負担の上、作品を活字にするなぞおぞましく、はなはだ不生産的な営みとして笑い捨てられるに決まっている。

だが、ここにその稀れなる愚行を厭わぬグループがあって、しかも結束固く、ひたむきの努力を積みここに至ったものだ。同人誌三号危機説は見事に覆されたのである。

「まんじ」の濫觴をもとめるなら昭和二十七年四月発行の「作家群」にさかのぼらねばならない。

いまに「まんじ」の発行所を作家群事務所とし、表紙の片隅に「作家群」のタイトルを掲げる所以はここにある、改めて明らかにしておこう。旧称へのノスタルジアをもつ同人もいて、このスタイルを固持してきた。

「作家群」はロシア文学者原久一郎氏がその息、当時東京外語在学中の卓也君のために、露文ほかの学生を糾合し、他に氏の門下、野にあった私などを加えて発行を千城書店に委ね創刊されたのが嚆矢である。

当時、ロシア文学者として双璧をなした一方の米川正夫氏の周辺にも同人雑誌があって、対抗する意識が手伝ったもののようである。原氏の住む椎名町が拠点になり「椎名町時代」を形成した。

すでにこの時期、いまのわが三戸岡道夫くんは第二号から仲間に加わっている。他に後に放送文学賞を「遠雷と怒濤と」という作品で受賞した湯郷将和（当時は吉岡昭碩）くんも同時期の参加だった。二人ともまだ学生で書店の店頭で雑誌を見て参加してきたものだった。

しかし、原氏の主宰はながくは続かず、いちはやく自ら去った。同人雑誌などという迂遠にあきたらず、または己れの不向きを自覚した離脱であったろう。かれは父の白光亭・原久一郎氏の訳業の後を襲うこともなく、母校の教授になり、学長になった。この時期の外語の仲間では桜井秀勲（当時の真山和夫）くん一人が後に文芸に縁ある道に就き、祥伝社の「微笑」の編集長に納まった。

続いては「巣鴨時代」を画する。三菱「養和会」に会合した時代である。原氏を欠いたが、その門下とされた年長の堀義久さんを中心に、意気はむしろこの時代に盛んであった。同人数もピークを迎え、いまの仲間では柴田富佐子（当時本橋姓）さんの参加はこの時期である。

いまにして思えば、この頃は戦後一種の文学渇きの時代であったかも知れぬ。同人雑誌簇生の傾向があって、「日通文学」の田代儀三郎氏が提唱して全国に呼びかけ「全国同人雑誌連盟」なるものが誕生している。結局竜頭蛇尾に終ったけれども、既成文壇に対抗する勢力を築こうという意図であった。「作家群」はその理事結社であった。そうした機運の中に昭和三十年三月発行の第九号に掲載された山本儀一くんの「古風な胸像の下で」という作品が第三十三回芥川賞候補に上った。この作品は右の全国同人雑誌連盟の推薦もうけて、東洋経済新報社創刊の総合雑誌「総合」に再録掲載された。

その頃の同人会はゲストを招いて妻木新平、榊山潤、有馬頼義、若杉慧、林富士馬といった人々を迎えたものであった。このへんを頂点として会合は続けながら、書き手が続かないまま、結局十三号で終止符が打たれた。オリンピックの年に復刊号をいったん出したが、それきりで後が続かずに終った。

焼けぼっくりに火といった、あんばいに「まんじ」は前記の旧同人を軸にして、結社の誕生を見た。MARUZEN FULAUTO 81という機種のタイプライターを私が入手したことが、ひとつのキッカケであった。柴田、森本、松野といった人たちが、折しも私の関係の出版記念会の帰途喫茶室で、私たちの雑誌を復活させたいという話題があって、印刷経費を私のタイプで製版し、安く上げようというものだった。余事であるけれども、私の「うえんむえん」という随想集三三〇頁はこの方法で仕上げているのだった。

かくて、「まんじ」創刊号はそうした方法で昭和五十六年三月に産声をあげたのである。初回の合評会は新宿の高層野村ビルで行なわれた。なお、第二号からは神田の加藤清耕社、加藤延久氏を煩わす発行が連綿第四十六号まで続いた。九段下の城南信用金庫の前に加藤さんが待っていてくれた初対面の日を鮮明に記憶を止めている。柴田さんがお店の仕事上知っていて紹介されたのだ。印刷費が都心の方が安いということを知ったのである。この第二号の合評会は同年六月で、青山の協和尚友会館で行なわれている。以来、三戸岡さんのご縁でこの会場を使わせてもらっている。「尚友会館時代」の幕あけである。

「まんじ」のこれまで、第一号から第四十九号に至る経費面の白書を別掲のように会計担当の柴田さんから出されたものを見ると、なんとこれまでの総額九百万円と

いう数字に驚く。見返りを期待しない日本文化へのささやかな投資である。因みにこれまで四十九冊の頁数のトータルは三、二三三頁であった。蟻の塔を積むような営みの総決算である。また、同じ表について発行の年月を見ると、第二十一号以降は季刊のサイクルを固定し、かつ厳守する方法を貫いている。この事実は「まんじ」経営の安定を示し、長もちを続ける所以はこのへんにあると明記しておきたい。原稿締め切りが守れずに、待ち合わせをするようだと、発行不順を招き、ついには行き詰まりを来し、廃刊に瀕するオチになる。幸いなことに、「まんじ」は書き手が揃っていたので、順風満帆のあゆみを続け得たのだった。

さらには「まんじ」が独立自尊のあゆみを保ち、右顧左眄を一切しなかったことも特色になろうか。既成作家に送るとか、「文学界」の同人雑誌評に供するとかをしなかったのである。文字どおり「私たちの雑誌」として心ある人々の閲覧に供する趣旨で、理解をもって援助の気持ちを寄せられる方には賛助会員となって頂き、経営維持への参加をお願いしてきたのである。

作家たちに送るにあたっては（お焚き付け）と表記するがよいという笑い話があるが、およそ無駄とわかりきっているし、「文学界」にしても送られた雑誌をリストアップし、横流しするらしく、某社から女性記者名を使った甘い自費出版の誘いがきて、呆れ返る始末である。すくなくとも「まんじ」は大人の集団として、どちらへ向いても断じて媚びることをしなかったことを誇りとしたいのである。

五十号に及ぶあゆみの中、同人の本が何冊か生れている。三戸岡道夫くんは「降格を命ず」、「支店長の妻たち」、「社長の椅子」、「凄腕人事部長」、「修羅の銀行」上下、などの企業小説、「男たちの藩」で時代小説をと、瞬く間に七冊もの仕事をした。才筆縦横、まさにこれぞ凄腕である。平成の牧逸馬、林不忘とニックネームがふさわしい実績である。昭和のはじめ谷譲二と名乗りメリケンものを書くなど、一人三役をこなした売れっ子作家に迫る活躍である。続いて柴田富佐子さんが「酒屋そだち」を世に問い、一方、金子正義くんは「ハイラル挽歌」を、また私の「雲南のピエロ」、「逆島記」、「烏川の畔」、「桃李庵のアルバム」などがこれに加わる。それぞれ「まんじ」に掲載され、連載された作品から生れたものだ。何れも栄光出版社からの刊本である。とくに企画出版の八冊は同社石沢三郎社長の伯楽としての慧眼により陽の目を見たことを特筆しておきたい。

いま、「まんじ」は青木昭成くんを迎えて、その詩編は毎号一味の清風を与え、井上二三男くんは私小説の滋味あふれる作品を、山根三枝子さんが Gone are the days の連作で、あの大戦中の体験にもとづきながら津

田女子英学塾の羨望すべき不許入山門的な学園生活の日々を描くと思えば、佐々木一郎くんは構想つねに意表をつく巧みで、推理小説の分野にわけ入る。金子正義くんは「ハイラル挽歌」の労作に次いで「近藤富蔵の生涯」を連載中であり、私もまた「有院家の人々」という長編を掲載中である。文事の旺盛、まこと慶賀に値しよう。

「まんじ」十三年の歴史の中に、何人かの厳粛な死があった。まずはその一人が同人山口健二さんだ。私は「送葬記」という短編を書き、哀悼の気持を捧げ、鎮魂のよすがとしたことであった。（太宰治や鈴木健二は旧制弘前高校の同窓だが、大嫌いだっ）と喝破した山口さんはつねに破格の小説を書き続けた。「なんぞ山口健二を知ることの遅かりき」と嘆じた愛読者の言がある。毎号欠くことなく死に至るまで作品を寄せてくれた。腰のすわった、しかも無縫瓢逸、ときに八方破れの作品もあったが、この人の書くものはホンモノだった。もっと早く書いていたら、それこそホンモノの作家になれたろうにと惜しまれる。

維持会員でお三人、日向卯七さん、内河弘さん、鈴木桂太郎さんが亡くなられている。そして、もと同人であり、表紙絵を描かれた岸田幸雄さんも最近亡くなられている。ご冥福を祈りたい。

加藤清耕社の加藤延久さんの急逝は「まんじ」発行上の痛手だった。「まんじ」は創刊号を例外としてタイプによる軽印刷という手法を頼ってきた。加藤さんの死により判明したことだが、タイプの清打ちは専ら川崎在住の藤井俊孝さんの手になり、二頁で一、八〇〇円という低コスト、しかも金子さんあたりの難字いっぱいの原稿をコナしてもらっていたことが分かった。よろず下請けに支えられる世の中がここにもあった。そうしたひ弱に支えられて、「まんじ」の今日ある事実を洩らしては申し訳ない。加藤清耕社への通い路は三ヶ月おき、入稿、初校、再校、発送、の手順で各号発行ごと少なくとも四回、第四十七号の入稿まで、十三年、ざっと一八〇回通ったことになる。地上げに変貌する神田の町並をつぶさに見てきた。清耕社も例外ではなく、薄暗い木造の取り壊しで、能楽の店「わんや」前のビルの一階に移転した。

さて、第四十七号の入稿は本年一月五日のことだったが、律儀な加藤さんはすぐに藤井タイプに原稿を渡す手配をしながら、ひっそりと孤独の生涯を自宅の床の中に終ったのだった。八日になって兄弟の方が発見されたものだ。葬儀は市ヶ谷の西念寺、奇しくも忍者服部半蔵の菩提寺とあって、加藤さんもまた忍者のごとく私たちの前から姿を消したのである。第四十七号はそんな事情もあり、タイプ清打ちの校正部分をワープロでという仕上げになった。第四十八号からは加藤さんとはかねてのお仲間のミナミ印刷賀沢康俊さんにまかせ、すべてワープロ印字の製版に変わり、いまに及んでいる。

記念号に寄せて

青木昭成

秋は「新米」の季節です、とまあ、稲作民族らしい口調で言い出してはみましたが、昨今の食生活のはげしい変革をみるにつけても、それはいささか陳腐な叙情というものでしょうか。

ただ、この日本の生活の用語「新米」は、それにひとこと副詞を加えて「まったく新米」とか、「まるで新米」とか言いかえると、語意が一変します。収穫したばかりの米に「まったく」や「まるで」の修飾語は、なじみがないからです。語感からすれば、あらためて「新前」と記すべき性質の語彙かもしれません。しかし、辞書はこの二つを併記しています。季節にちなんで「新米」のままおくとして、その語意を、人格にかかわる呼称として聞きとると、それが、たちまち揶揄的なニュアンスを持ってしまうのも面白い。

ところで、「まんじ」五十号にとって、私はその「新米」なのです。身勝手に、やや自虐めいて言ってしまえば、そうに違いないと考えます。

入会してわずか二年半、季刊誌五十号のうち、おわりの十号に参加させて貰った計算になります。その間、私は照れもせず、それらしい詩作品の発表に終始してきました。小説はもちろん、まともなエッセイの一編をも、ものせないでいます。同人三戸岡氏のふるい友人である縁からの参加ですが、私にはいまだに、「まんじ」は創作の、ことに小説の、発表の場であるという、へんな意識が消えません。

発表する作品のジャンルにはこだわらないと先輩同人諸氏は言ってくださる。その寛容さは、それはその通りにありがたい心づかいです。だが、それに甘えていてはいけないという自戒をこめて、あえて自らを「新米」と呼んでおきます。

これもまた旧弊で、当たりまえな認識だと言われそうですが、私はいまだに文学には、資質もさることながら、それ相応の修業が必要なんだと思い込んでいます。いわゆる「世にでる」こと、またその好悪とは別の次元で考えるべきことでしょうが、なまなかな修練では、作品は世間に通用しない。メディアがこれほどに発達した時代に、いや、それゆえに、私たちの目にとまる多くの既成作家の経歴が、それを如実に物語ってくれています。それにもかかわらず私はこの歳にいたるまで、ついに言うに値する修業を試みたことがありません。

それを若干の、詩らしい作品で誤魔化そうというのは、おこがましい話です。そして一方では、私はそれに救われ、「まんじ」が私の詩の唯一の発表の機関になってしまっていることに、満足しています。

もっとも、さらに正直なところは、単純に私が詩の同人誌に作品を発表する勇気をもっていないからだ、というべきかもしれません。

全国に詩の同人誌は、有名無名をふくめて、その数はおびただしい。一方で「現代詩は読者をうしなった」と指摘されています。多くの詩の同人誌はひっそりと、しかし、割合ねばりづよく、生きつづけています。だから決して詩人や詩が、どこにも見当たらなくなったわけではありません。勇気さえあれば、私はいつでも詩の同人誌に寄ることができます。けれど、それはそれだけで終わるでしょう。いまは、誰も詩に何かを期待してくれません。いまは、誰も詩を必要としない時代なのです。詩を作ろうと考えている人間には残酷なのですが、それが時流というものだと考えるしかありません。

当然、自分の作品が時流をうんぬんできるような域に達しているなどと、幻想を抱いて、言うつもりはありません。私にとって、詩作は無償の行為です。作ることでおのれの内部を見つめなおすチャンスがまだある、そう信じなければ、詩など作り得る筈がありません。

それにしても、諸先輩の精進には、ただただ頭のさがる想いです。いや、これは余計な間の抜けた賛辞、いまさらの言葉で誤魔化すのは止めにします。

「まんじ」の前身には三十余年に及ぶ「作家群」の歴史があると聞きます。「まんじ」が、その足跡を踏襲する性格の同人誌であるのかどうか、私は知らない。しかし、「まんじ」も創刊以来では、物故の方をふくめてかなりの数の同人の新陳代謝があったと聞きます。その諸氏が、さもありなんと思うのですが、たいへんな個性派ぞろいであったとも仄聞しています。「まんじ」に出会うことの、なんぞおそかりし、の憾みが残ります。

だからなんと言っても、「まんじ」四十号以降五十号にいたる間に知己を得た方々は、私にはまたと得難い先輩ばかりです。くり返しになりますが、私は小説のモチーフやプロットの、何たるかを知りません。しかし、そこに書かれている文体には人一倍過敏にならざるをえません。詩を作ろうという人間のわがままでしょうが、私にとって言葉は質量そのもの、思想そのものなのです。だから一層、それぞれの方の個性とそれぞれの方の文体で書かれた創作を読むのは、実にたのしい。

金子正義氏の剛毅と博覧はすばらしい。ただし、印象批評めきますが、私にはやや難解。文字のむつかしさが、字義を韜晦してしまって悩まされます。

大和禎人氏の理路と強記もまたかくべつ。氏のながい文筆歴がそうさせるのでしょう。角のとれた筆致は、人

「まんじ」五十号を讃える

井上二三男

「まんじ」が五十号を迎える。

「まんじ」は季刊であるから年でいえば十三年の歳月を閲することになる。十三年の歳月を思うと、これは実に貴重な、偉大な実績だと衿を正したい心境である。

季刊とはいっても執筆・編集の作業はその時期だけのものではない。自らも筆を執られ、編集、構成、発行から発送までを担当された大和さんの十三年間は、まさに「まんじ」とともにあって、「まんじだより137号」の継続にも現われている。払われたご苦心、ご労苦を思うと心底からの敬意と感謝を捧げたい。

もともと同人は、同好の士の集いであって、同人会は何ら強制力を持たない。同人が書くから「まんじ」があり、「まんじ」があるから同人は書く。雑誌の継続は、同人が自ら「書く」ことがなければ成り立たない。同人皆さんのご精進にも心からの敬意を表する次第である。

創刊の当初からお誘いを受けて、ものを書く才覚もなく、格を彷彿させ、畏敬の念をいだかせます。

山根三枝子氏、柴田富佐子氏ともに、そのナイーブさは女性特有のものでしょうか。山根氏の感性のきわだった瑞々しさ、柴田氏のときにみせる絵筆のようなタッチの比喩、がともに美しい。

井上二三男氏のつよさを秘めた日常性、佐々木一郎氏のねばり気のある描写を、同じ風土の上において眺めるのは短絡にすぎるでしょうか。次作をいつも期待させてくださる。

三戸岡道夫氏には同世代の共感があります。ただし、それが単なる同感におわらず、常識を越えてくれることを期待しています。筆力に感服しながらも。

以上、不遜な一言づつを蛇足として付け加えてしまいました。私の屈折した思いがなせる業でしょう。そして結局、私の願いは、「まんじ」の六十号、七十号にいたる道程が、この記念号をさらに意義ある存在にしてくれることであります。

（完）

いまま同人の端に名を連ねさせていただいた私は、身辺の雑事にかまけて書くことが少なく、同人としての責任を果たしていないことに自責の思いである。しかも、その少ない未熟な作品さえも「まんじ」がなければ書けなかったであろう。「まんじ」五十号への道程に尽くされた大和さん始めたゆまぬ執筆に打ち込まれた同人の皆さんに感謝し、その献身を心から讃えたい。

その間、大和さんご自身は長編・短篇・随筆・エッセイ併せて十二巻を上梓されている。特に、『烏川の畔』は、昭和六十二年二月二十二日、同人有志の群馬の地の清遊の折、私が烏川の川原にご案内させて頂いたのだが、その一カ月後には七十五枚の稿を済されている。かねてから腹案として熟成を期されていたとはいえ、その技は驚異であった。大和禎人小説集第十一巻の「ひとこと抄」に私は「まさに精進の鬼の為せる技」と表現するほかにことばを知らなかった。

今は亡き山口健二さんは、第一号から第三十五号まで書き続けられたが、第三十六号では既に病篤い床におられ、替わって筆を執られたご息女高戸なつみさんによる「父が酒を断ち筆を折りました」の中に記された山口さんの「まんじ」へ寄せられた並々ならぬご執心と最後の一言「私は次号には書けません。もう気力がありません。……」は壮絶である。「まんじ」に書かれた作品が集録されている『虚仮の歌』は、私の書架に他の同人の方々の作品と共にある。

金子正義さんは、平成三年八月、満蒙鎮魂の賦『ハイラル挽歌』を出版された。これは、「まんじ」第一号から第二十九号に掲載された作品である。装なった328ページの一冊を手にすると、毎回身近にあった作品のその重量感が感激に似て胸が熱くなった思い出がある。

三戸岡道夫さんは、「まんじ」の中から『降格を命ず』、『支店長の妻たち』、『社長の椅子』に続いて『凄腕人事部長』、『修羅の銀行上・下』そして『男たちの藩』と世に問うておられる。そして、制作のご苦労を承ると深く、広い知見の上に構成されておられることに驚くのである。いまや、企業小説作家としての地位を不動のものとされている。さらに、実は、私は三戸岡さんが江戸時代の町人社会の妖気の世界を書かれた作品を畏敬の念を以て見ている。三戸岡さんは偉才にして異才でもある。金子さんは、三戸岡さんを現代の泉鏡花に擬される。むべなるかなと同感である。

柴田富佐子さんは、お仕事がお忙しく、寡作を余儀なくされておられるが、作品はほのぼのとした情感溢れる佳作である。第四十号の「Liquor & foods」はこの六月栄光出版社から『酒屋そだち』として上梓され、全国の酒屋さんばかりでなく、家業にいそしむ女性の胸を熱くしたに相違ないと思う。後継ぎ息子の縁談の依頼があったというエピソードはそうしたことを物語っている。

山根三枝子さんの「Gone are the days」は、津田塾に集う良家の子女の青春の賦であるが、戦時下の緊迫した中での学園を書いて貴重だと考える。一巻を成すことをご期待申し上げる。

佐々木一郎さんは、第三十六号に「カステリオーネの夜は更けて」という異国情緒に溢れた佳作を発表されたが、続いての「三億円強奪事件の犯人を追った男」は、全同人が刮目の推理小説であった。佐々木さんの柔軟な構想力は独特の世界を成して、推理小説作家としての力量を予感させられたが、続く「千三百年目の仇討」、「前橋公園殺人事件」で本領発揮、予感的中の感が深い。

青木昭成さんは、「まんじ」としては少ない詩を発表されている。私は、平素詩を読む機会は少ないが、自らの心を磨ぎ澄まして、自己の深淵を歌い、無限の彼方を歌う「詩」には惹かれる。さきに、金子さんの『ハイラル挽歌』を満蒙鎮魂の賦といったが、「賦」は、辞書によれば「思うことをのべる。詩をつくる。」また「心に感じたことをそのまま詠じたもの」とされている。詩も小説も同根であると実感する。

毎号拝見している同人の皆さんの作品が見事な装いで出版され、私の書架の同じ棚に並ぶさまは壮観であり、その実績に感慨が深い。手にすると作者の精進の凝集がずっしりと重い。

職を離れて些かの時間が得られるようになって、合評会へ出席する機会が持てるようになり、これらの方々に直接お目にかかり、貴重なご意見を承ることができたことは、地方の文学老生にとって望外の幸せであった。私の文学への思いが細々と続いたきたのは、「まんじ」あってこそである。

「まんじ」五十号を讃え、同人皆さんの栄光を祝福申し上げる。

五十号回想

金子正義

旧作家群の人達が始めた『まんじ』創刊の年、恰度公職を退いたので同人に加わり爾来十有余年、五十号に至る迄勝手気儘に長編のみを書き続けた。

其の間練馬の郷土資料室で郷土資料の調査研究を委嘱されていて、三年目に肺炎となり昔の胸部疾患再発、続いて宿痾の耳病も悪化して入院手術等で二、三号は中断したが、老惚の長談義を同人諸賢姉はよくも許容されたものと内心忸怩たるものがある。

然かも此処二三年は聴力障害で合評会には読後偶感を

呈して出席に代えて頂いている次第で、改めて五十号回想を書く程の昂ぶりは覚えないが、幽明を異にする同人や消息を断った者達の残映が近頃脳裡に浮んでくる、特に沈潜とした白髪の常石三郎氏が折りにふれて点滅する。

氏は「まんじ」同人では無かったが、屢々大和禎人氏より其の人柄や深い教養の持主であったことを伺ったり、何時かの合評会の席で一巻に表装された長文の書翰を拝し、見事な筆跡と一流の文人をも凌駕する豊かな玉章を拝読して感嘆したり、まんじ十五号の常石三郎追悼号で多くの文人の追悼想起を読んで常石三郎氏の文才の容易ならざるを知り、「まんじ」同人で無かったことを残念に思った。

昔、結核を病み清瀬の病院で何度か氏の診療を受けた覚えがあるように思った。当時医師不信の増長慢であった愚生は、冷静な診療態度の氏を型通りの職業医師と軽く見て印象が薄かった。

大和氏の著作の折り込みの『同人聚記』等で随想文を読んで優れた人柄を想定して偲んでいたが、聾て郷里へ隠栖され晴耕雨読の如き「午前堂」なる医院を続けられ程なく不帰の客となられたと聞いて、やはり氏にとって医は仁道で無く、本願は文学をなさんとして生涯を終えたと想い、己れを含めて多くの文学愛好者の執念を惟った。

更にもう一人は、未だ生々しく独自の風貌が浮ぶ山口健二氏である。氏は江戸戯作者風のアイロニーと鋭い批判眼を以って、合評会等で克く作品を評価され時には遠慮なく異説を述べられた。然し軽妙洒脱な表現なので其の言辞に誰も毒されなかった。

其れは自然に人に親しまれる大らかさがあって、片肘張ったり深刻ぶった処がないからであった。然し彼自身は何物かを突き詰めんと厳しく生きたのであろう。恰度一休禅師のように、人間の欲求罪悪をも色即是空と肯定して全てを開け広げ、狂態とも見える型破りの言行をしていても、自己自身は厳しく真空真如に徹したのと同じであった。

其の意味で氏の最後の未完の作『語りたくない、でも、語らねば』が何にを吐露しようとしたのか、残念乍ら長逝されて未完成の余韻が美しく残るのみである。

氏が「まんじ」に一号をも休まず書き続けた多くの短編は表裏の二つのテーマに大別できる。

表は『さいたま屋風土記』に代表される風俗小説のジャンル、裏は『〇町〇丁目〇番地』や『老漢の系譜』等の長野の旧家の戦中戦後の人間像の利害得失や、古い家族の因習や道義等が崩壊してゆく明暗模様を書いた作品等で、期せずして秋声、花袋の自由主義リアリズムの流れに沿うものであった。

氏は此れこそ我が文学と本腰を入れて悪戦苦闘されたものと思う。前者の風俗小説は自由気儘に任せて気楽に

書かれたものであろうが、此れこそ氏の表のテーマと思う。

文学はどう捕らえようが人様様であるが、第一義とするところは書く者も読む者も共に作品を楽しみ、俗界の利害懊悩を暫し忘れて如何なる人生であれ全てよしと、生き甲斐を沸き立たせるものである。

山口氏も其れを目指したものと思う、今や二十一世紀を目前にして既成の諸価値がガタガタと崩れ去り、人間そのもののアイデンティティすら見失われようとする時、次の世紀の人間は唯如何に長生きするか、如何に肉体として大宇宙・自然・生物全体の中に生きるかが問題となると思う、斯うした意味で山口氏にも二十一世紀を覗かせたかったのに残念である。

扨て、紙幅も尽きるが「まんじ」が五十号迄続き得たのは中心に大和禎人氏が居られたからで、愚生も気が長い方であるが、氏は戦前の文芸首都以来文学の初一念を貫き通された。だが畏敬する処は其の長きが故ではない、著名な老大家のように文業を大成して令名を文壇に馳せたり、各種の文学賞に輝くからでも無い、生まれ乍ら文学が好きでそれに徹して文学が血肉となっているからである、自分だけでなく人間は誰でもそうだと思っているからである。然かも悠々と未来を展望し乍ら多く著作を成して淡々としている。

其の偉とする処はまんじ五十号を続刊した事もあるが、百四十号に迫る『まんじだより』である。如何に氏が文藻豊かであるとしても殆ど独力で毎月一回も書き続けて来たことは余人の為すところでは無い、時折り愚生は氏の作品よりも『まんじだより』に容易ならざる氏の力量を感じ、作家でなく大編集者の大器があると思い、出版業に入ったなら大成されるであろうと思う。勿も其の資質は父親譲りのものである事を著作の『桃季庵のアルバム』で知ったが、同時に厳父が岩波書店を範とする出版社を経営せんと悪戦苦闘した姿を見ているので、氏は出版業には手を出さなかった所以をも了解した。

然し、まんじ二十五、二十八、三十八号の『童子寸描』で愛孫幹人の天真爛漫自由潤達の新生人間の童心振りを読んで、これこそ、前述の二十一世紀の未知の文化を啓発し、父祖伝承の文業を展開する者たり得ると予感し、まんじの未来と併せてレインボウ・ドリームを覚えた。

了

同人ご一同様

佐々木一郎

拝啓　ご無沙汰しております。また、わたくしの病気に関して、いろいろご心配をいただきまして、恐縮しております。

さて、このたびは、「まんじ」五十号記念号を上梓されるとのこと、心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。同人誌を年四回五十号も発行することが、どれほど大変な仕事か、脇にいるだけのわたくしでもよく分かります。

大和さんはじめ、中心となっていらっしゃる同人の方々のご労苦に深い敬意を表するとともに、ここまで達成されたご満足はいかばかりかとお察し申し上げます。同時に、これを一つのステップとして、次の百号を目指して新しいスタートをお切りくださることを切望して止みません。

わたくしも、井上さんのご紹介で、数年前、同人の端に加えていただきましたが、執筆をしてみて始めて、同人の方々との間に各段の差があることを実感しました。長い間鍛練していらっしゃる方々ばかりの中に、はたして、私のような者が加わってよいものかどうか大分迷いました。

例えば、「降格を命ず」、「社長の椅子」、「支店長の妻たち」、「凄腕人事部長」、「男たちの藩」などの作者三戸岡さんの作品は、〈読んでいる限りでは〉、一見平易で、すぐ真似られるような文章に見えますが、いざ、真似て書いてみますと、とてもとてもそんな生易しい作品ではないことがよく理解できます。——そこではじめて——、眺めていた以上に、三戸岡作品が高い香りをもった芸術作品であることに気がつくのです。作品の構成、表現、語彙、会話、風景等の描写、などの見事さは、ある特殊な才能をもった方だけに許される特権なのか、とさえ思いました。

これは、大和さんの「桃季庵のアルバム」、井上さんの「まんじ」所載の諸作品、柴田さんの「酒屋そだち」、金子さんの「ニューギニア日記」、「ハイラル挽歌」などの作品に対しても、同じことが言えます。

「まんじ」を読むたびに、それぞれの方が、長い年月をかけて鍛え上げた文体をもっていらっしゃることがよく分かります。

ご恵送いただいた本の中で、金子さんの「ハイラル挽歌」には感動しました。主人公の宮坂少尉に私の半身を見るような気がして、夢中になって読みました。戦況も、実に生々しく書かれていて、何回も鳥肌のたつような思いをしました。

どうやら、その日は一日中わたくしは軍歌を歌ってばかりいたようで、妻が呆れて見ていたそうです。

また、忘れてならないのは、入田紹一さんの存在です。まるで、小林秀雄のような、——わたくしは、文学界のことはよく知らないのですけれども——「まんじ」文学のご意見番がいらっしゃることは、おおいに心強い

ことだと思います。該博な知識と的確なご指摘、わたくしはいつも感嘆の目で、ご意見を承ってきました。どうぞこれからも、ご健在で、「まんじ」の指針をお示しくださることをお願いします。

さて、わたくし自身はどうかというと、これはもう、いけません。

最初、自費出版したわたくしの「旅行記」の中から抜粋するようにとのご指示がありましたので、ヨーロッパ旅行をネタにして「カステリオーネの夜は更けて」を書きました。赤十字の父アンリー・デュナンの遺跡を訪ねた旅で、いく日か滞在した北イタリアのカステリオーネ村の印象が強かったものですから、ここを舞台にして、物語を展開してみたいと考えました。そこで、プロローグとして、イタリアの統一王ヴットリオ・エマヌエレ二世が戦勝記念に建てたサン・マルチーノという美しい塔の屋上で、この物語の主人公藤田と美登利を劇的に会わせることにしました。

しかし、九十三枚という長編にもかかわらず、気ばかり焦って筆が進まず、語彙の不足を嘆いたり、――作品の構成がしっかりしていなかったために――途中でとんでもない方向に筆が走ってしまったりして、何回も何回も書き直す始末でした。

（なにしろ、生まれて初めて小説を書いたのですから、無理もない話でした）

合評会では、新人へのいたわりや激励を込めた批評が多かったのですが、さすが、要所要所はがっちりと釘を刺されました。

構成に無理があるから前半だけを一つにまとめたらどうかとか、ふたりの愛情の表現が高校生の作文のようだとか、最後の数行は不要ではないか、または、紀行文に書き直したらどうかとか、いろいろと指摘されました。その中でも、この内容にさらに拡充させて、思い切った長編に書き直してみたらどうか、というご指導については、わたくしも、大分心を動かされました。これは、機会を見て、書き直してみたいと考えています。

続いて、「錫婚旅行は雲に乗って」「俗・錫婚旅行は雲に乗って」「三億円強奪犯人を追った男」「千三百年目の仇討ち1～5」「前橋公園殺人事件1～4」などを書きました。推理小説を書き出したのは、〈もちろん、推理小説が飯より好きだという理由もありますが〉作品の焦点ボケを防ぐ目的でした。これなら、〝犯人はだれか〟という焦点がつねに付きまとうから脱線の心配がないと考えたからでした。

しかし、今度は、文の構成やトリックに頭を悩ませるようになりました。なにごとにも浅い知識きり持ち合わせないわたくしには、いつの間にか、これも、苦痛になってきました。

「だいたい、十作までは習作を書いて、十一作あたり

から纏まったものを書こうという心づもりだったのに、いまだに下手な習作段階に愚図愚図していたのでは、スタートが切れないではないか」

と一念発起したまではよかったのですけれども、これも、病気のため挫折してしまいました。

第四十九号に「前橋公園殺人事件」を完結して、第五十号には、習作ではない、纏まった作品を出すつもりでいましたのに、突如、入院させられてしまったからです。

考えてみると、この病気は、数年前から始まっていました。

退院してから、古い日記を繰ってみますと、一九八九年ごろから病気は始まったようです。時々、苦しみを訴える文が出てきます。今考えてみますと、去年あたりから下血がはじまり、今年に入ってからひどくなったのだと思います。最後に合評会に出席したときには、随分苦労して東京を往復しました。妻が上野まで来ていると話したときは、実は付き添って来ていたのです。そして、六月になって倒れ、主治医の紹介状をもって前橋赤十字病院に行ったところ、その場で入院させられてしまいました。結局、六月十八日から八月十一日まで入院し、七月八日に手術を受けました。病状については省略しますが、毎日寝たり起きたり、軽い運動をしたり、社会復帰に努めています。ただ、まだ体の内外にある糸が抜けませんし、癒着が始まり、微熱と時々起きる痛みに苦しんでいますが、これは、時間が経たなければ回復しない性質のものですから、医者もどうすることもできないし、薬もありません。頼りにするのはわたくしの体だけで、体が回復するのを待つより仕方がありません。この間テレビで、私と同じような病状の方が、「靴下を履くのに、片一方を履き終えると、もうけだるくて、もう一方の靴下を履く気がしなくなる」といっておられましたが、わたくしも、そんなようなところです。

ですから、難しい本を読んだり、文を綴ったりすることもだめです。この短文を書くのに、なんと、十日間もかかりました。二、三行書くと、もう体がだるくなって書くのが嫌になってしまうのです。

そんなわけで、五十号記念には参加できません。残念です。ただ、主治医は今年一杯かかれば、かなり機能が回復するだろうとは言っていますが……。

「まんじ」の盛況を祈念しています。同人の皆様のご奮闘をご期待申し上げます。

同人ご一同様

「まんじ」の思い出

三戸岡道夫

仲間の雑誌を発行しないか、という話を大和禎人さんより受けたのは、昭和五十五年の秋か、冬ではなかったかと思う。

その頃、大和さんがタイプライターを買われて、それで印字し、印刷すれば、費用も安くつくから……ということが動機だったように記憶している。ただし、大和さんが原稿全部を打つのであるから、ボリュームが多くては困るので、一人当り原稿用紙に五枚という制限でスタートしたのである。昭和五十六年三月一日付で発行された第一号は、五、六枚程度の掌の作品集になっている。なつかしい思い出である。

しかし、同人諸氏の創作意欲は旺盛で、とても五、六枚程度の分量では満足できず、第二号からは枚数の枠がはずれて、のびのびと書くことになった。

その第一号に、私は「天明七年」という掌篇を載せた。その頃の私の頭の中に、松平定信が田沼意次から政権を奪取する長編小説の漠然とした構想があって、そのあら筋の一部を、原稿用紙五枚にまとめたものである。この構想はまだ頭の中に残っていて、いまだその実現を果たさないでいる。

それから十二、三年の時が流れたわけで、時の流れの早さを感じたり、また、よくも五十号まで続いたものだなと思ったりもするが、「まんじ」の運営については、とにかく長く続くこと、継続することを中心にやってきたと思う。「継続は力なり」である。書いて、発表しようとすれば、いつでも発表の場がある、これは貴重なことである。その安定した場を背景に、同時に、その締め切りに追いかけられながら、書きつづけ来たのが実情である。私が今日まで書きつづけてこれらたのも、まさに「まんじ」のお蔭だといってよい。

私は「まんじ」二十六号に「カラオケ挽歌」という短篇を発表したが、その頃、栄光出版社の石澤社長が企業小説の出版を計画していた。大和さんが、石澤社長に「カラオケ挽歌」を推薦してくれ、面白いからこれを芯にして長編小説を書いてみないかということになって、私の処女出版「降格を命ず」が生れた。そういう意味で、二十六号は私にとって、特に思い出深い号となった。

「降格を命ず」は夢中で書き、その時は気づかなかったのだが、本が出来上がってしばらくしてから、

（自分がいいと思っている小説と、読者がいいと思うのとは、違うんだな）

ということが判った。

「まんじ」に発表した「カラオケ挽歌」以前の作品には、いわば、自分として、いい小説を書こう、小説らしい小説を書こう、という気持が一杯であった。読者のことがあまり頭の中になかったと言っていい。しかし、次第に私はそうした態度で書く小説に、なにか飽き足らぬものを感じはじめていた。

（もっと他に書かなきゃいけないものが、あるのではないか）

銀行員生活をしていた私の周囲に、仕事の中でのたうち廻り、苦しむ、人間の生きざまが無数に転がっていた。

（これを描かなくて、他に描くものがあろうか）

これから眼をそむけることは出来ないと思った。そして、次第に、

（これを描けるのは、自分しかいないのではないか。これを描くのは、私の義務だ）

と思うようになった。だが、

（うまく小説になるであろうか）

という疑問がたえず頭をかすめた。しかし、

（いや、小説になっても、ならなくても、そんなことはどうでもいいのだ。たとえ小説としては失敗でもいい。とにかく、私は書きとめておかねばならぬのだ）

そう決心して書いたのが、「カラオケ挽歌」であった。その辺のことが、石澤社長の胸に響いたのかもしれないと、その時思い、私は眼が開かれる思いがしたのであった。

経理面から見た「まんじ」五十号

会計担当　柴田富佐子

「新雑誌創刊にあたり、同人参加へお誘い」というタイトルをつけた勧誘文が伊佐九三四郎・井上二三男・大和禎人・神原拓生・金子正義・岸田幸雄・小久保水虎洞・柴田富佐子・常石三郎・永原博人・松野優・三戸岡道夫・森本俊正・山口健二・山本儀一・弓削悟・渡辺啓雅の十七名に配られた。昭和五十五年十二月の事である。

内規として

・発行回数は季刊（一月・四月・七月・十月）
・発行部数は三百部
・同人会費は月額二千円とし発刊月に三か月分を纏めて納入
・誌名の提案として　まんじ・こちょう・われら・まん

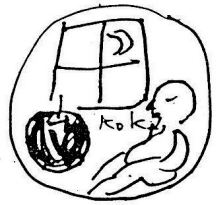
げ・あらべすく・さら・まんだら　などが挙げられている。

この勧誘に応じた人々で、第一回の会合が昭和五十六年一月十七日、谷中の山口健二氏宅で行われた。この時集ったのは、大和・山口・岸田・森本・三戸岡・柴田の六名であった。この会で誌名は「まんじ」と決定し、経理は私が委嘱された。

この時の記録をみると、「毎年末決算報告を文書をもって行う」という一行にあるが、私はこれまで一度も年度末の決算報告をしていない。これは、毎号ごとの決算にしたので、毎号の決算報告書は作って、集金させていただいている。

幸い皆様の御協力で、会費・維持会費・個人分担金のすべてが順調に入金しているため、印刷屋の払いに駆け廻るという苦労もせずに済んだ。「まんじ」が長続きした理由の一つは、この「会費と個人分担金の二本立て」のやり方にあるのではないかと思う。

「まんじ」一号から五十号までの足跡を、見やすいように表にしてみた。



「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切）

春季号……二月一日　十二月三十一日
夏季号……五月一日　三月三十一日
秋季号……八月一日　六月　三十日
冬季号……十一月一日　九月　三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。

「まんじ」五十号・これまでの印刷経費白書　1（会計柴田調べ）

号数	発行年月日	頁数	印刷経費円	執筆者
1	S56・ 3・ 1	36	62・100	9
2	S56・ 6・ 1	36	90・000	7
3	S56・ 9・ 1	64	160・000	7
4	S57・ 1・20	112	280・000	9
5	S57・ 4・30	78	184・000	8
6	S57・ 8・15	74	179・400	8
7	S57・11・15	92	222・000	7
8	S58・ 3・15	36	96・000	5
9	S58・ 5・25	62	154・000	6
10	S58・10・20	112	330・000	9
11	S59・ 2・10	92	276・000	8
12	S59・ 6・15	66	204・000	6
13	S59・ 9・25	32	104・400	3
14	S60・ 1・ 1	104	315・000	6
15	S60・ 4・15	82	249・000	12
16	S60・ 8・15	74	225・000	7
17	S60・11・ 1	46	144・000	6
18	S61・ 2・27	54	162・000	4
19	S61・ 4・ 1	48	144・000	9
20	S61・ 7・ 1	98	300・000	8
21	S61・11・ 1	50	150・000	4
22	S62・ 2・ 1	70	198・000	6
23	S62・ 5・ 1	56	150・000	4
24	S62・ 8・ 1	42	110・000	4
25	S62・11・ 1	76	204・000	9

＊特別寄稿者を加える）、但しコラム欄を除く。
右のうち、創刊号の印刷経費は自家製版による刷り代のみの数字。執筆者の項は延人数（第十五号常石三郎追悼号は

「まんじ」５０号のあゆみ　参加同人異動の記録

同人費負担の記録から
会計柴田調べ

S 56	井上・大和・金子・岸田・柴田・三戸岡・森本・山口・神原（6月まで） 柴田保（7月より）松野（4月から9月まで）山根（10月から）金井義子（10月から12月まで）
S 57	井上・大和・金子・柴田（保）・柴田・三戸岡・森本・山口・山根 山本（4月から）岸田（6月まで）
S58	井上 ～ 大和・金子・柴田（保）・柴田・三戸岡・森本・山口・山根・山本
S 59	井上・大和・金子・柴田（保）・柴田・三戸岡・森本・山口・山根・山本 松野（10月より P・N 八十島）
S 60	井上・大和・金子・柴田（保）・柴田・三戸岡・森本・山口・山根 八十島（松野）山本（3月まで）
S 61	井上・大和・金子・柴田（保）・柴田・三戸岡・森本・山口・山根 八十島（松野）
S 62	井上・大和・金子・柴田（保）・柴田・三戸岡・山口・八十島（2月まで） 森本（5月まで）佐々木（5月から）
S 63	井上・大和・金子・佐々木・柴田・三戸岡・山口・山根 柴田（保）3月まで・以後維持会員）
H 1	井上・大和・金子・佐々木・柴田・三戸岡・山口・山根
H 2	井上・大和・金子・佐々木・柴田・三戸岡・山口・山根・小久保（1月から）
H 3	井上・大和・金子・小久保・佐々木・柴田・三戸岡・山根・青木（1月から） 芹沢（1月から9月まで P・N 有香六月）山口（8月まで、9／19逝去）
H 4	青木・井上・大和・金子・佐々木・柴田・三戸岡・山根 小久保（6月まで以後維持会員）
H 5	青木・井上・大和・金子・佐々木・柴田・三戸岡・山根

「まんじ」五十号・これまでの印刷経費白書 2

（会計柴田調べ）

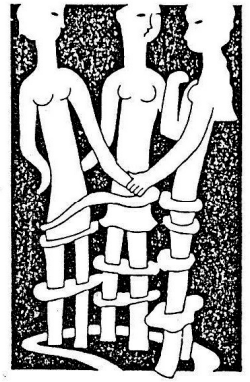
号数	発行年月日	頁数	印刷経費円	執筆者
26	S63・2・1	62	145・200	5
27	S63・5・1	68	180・000	6
28	S63・8・1	50	143・000	5
29	S63・11・1	70	187・000	6
30	S63・12・1	101	275・000	6
31	H 1・2・1	52	135・000	4
32	H 1・5・1	78	240・000	6
33	H 1・8・1	42	130・000	4
34	H 1・11・1	70	209・000	7
35	H 2・2・1	34	105・000	4
36	H 2・5・1	78	214・500	7
37	H 2・8・1	62	180・000	6
38	H 2・11・1	88	264・000	7
39	H 3・2・1	46	140・000	6
40	H 3・5・1	130	390・000	10
41	H 3・8・1	48	150・000	6
42	H 3・11・1	58	180・000	7
43	H 4・2・1	60	180・000	7
44	H 4・5・1	56	165・000	7
45	H 4・8・1	76	228・000	7
46	H 4・11・1	60	180・000	6
47	H 5・2・1	48	164・271	5
48	H 5・5・1	46	94・039	5
49	H 5・8・1	48	109・180	4
合計	白書1＋2	3,223	9,081-090	

＊以降はミナミ印刷によることとし、ワープロによる製版に推移した。五年正月、同社主急逝により、第四十七号は藤井タイプ清刷をワープロ校正の上、三鈴印刷により印刷。第四十八号印刷所は第一号のみ清水孔版印刷、第二号～第四十六号まで一貫して加藤清耕社によりタイプ製版であったが、平成

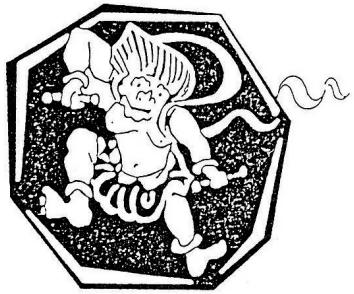
まんじ 作家群

表紙絵のうつりかわり
岸田幸雄装画

創刊号～第10号
昭和56年 3月　58年10月



第11号～第20号
59年 2月　61年 7月



第21号～第30号
61年11月　63年12月

第31号～第40号
平成 1年 2月　3年 5月

第41号～第50号
3年 8月　5年11月

水虎洞くんのカットについて

「まんじ」を飾り、二〇〇点を超える

水虎洞は河童を愛するかれの俳号であり、かねてその書斎の雅称でもある。本名小久保勝義として本誌の目次に正規に登場し、継続してカットを受け持つようになったのは第二十三号からである。それ以前にも旧作から採って飾らせてもらっているが、

「こんな絵をオレ描いたのかねぇ」

と本人が記憶にないような、「作家群」時代に描いてもらったもののストックからの採用だった。「まんじ」のそれまでは、わたしにかかわりのあった他誌から借りて大方糊塗してきたものだった。また、表紙の岸田さんが描かれたり、三戸岡さんの令息大貫雄司郎さんに登場を願ったりもしている。印刷屋さんまかせで、カット集などから借りるのでは曲がなさすぎるし、雑誌の品位にかかわるという考えを強く抱いているからであった。

いま、五十号に達して、あらためてかれがカットを専任担当するようになってからの作品数は優に二百点を超えていることに気付かねばならない。包装紙やカレンダーを断裁した用紙に無造作に見えるタッチで描かれたコマ絵の一つ一つ、そこにこの人の情感がこめられていて訴えるなにかがある、そこが貴重なのだ。少年時代のかれは受験雑誌「考え方」の表紙絵募集に投稿し採用されるなど、絵心はすでにその頃から備わったもので、興にしたがい絵筆をとることを快とし、その才を遺憾なく発揮した「わが博物誌」という画文集の著作があるくらいである。多分に俳味を帯び、素人絵の恐れを知らぬ奔放さを魅力とする不思議な画境なのである。珍重する所以は実にここにある。

夫子は俳人としてその号水虎洞をもって一家をなし、講談社発行の草間時彦編「歳時記」などには例句として数多く引用されているなど、「雲」「氷海」の同人として重きをなし、句集「雉子車」「游神抄」など、作家としての足跡をもっている。

「まんじ」を飾るカットに独自の俳味を覚えられ、共感を呼ばれる読者があるとすれば那辺に由来するものかをこの際に明らかにしておかねばならないだろう。

雑誌におけるカットの存在はそれ自体が個性を持ち、片隅に甘んじながら、立派に芸術性を主張し得る作品でなければならないのである。

（お）

作者別掲載全作品一覧
（括弧内数字は掲載号数）

青木昭成
詩　セントポーリア　ほか三編　（41）
詩　蝉と抜け殻　ほか　三編　（42）
詩　風景断章　十二編　（43）
沖縄からの手紙　（44）
詩　風のふしぎ　三編　〃
詩　やまもも　ほか　三編　（45）
詩　茄子紺　ほか　三編　（46）
詩　火矢嶺　ほか　六編　（47）
詩　記念品　ほか　六編　（48）
詩　都会の海　ほか　二編　（49）
詩　鎮魂賦　ほか　二編　（50）
芭蕉のこと　〃

有香六月（芹沢純）
輝かしい夏の日々　（37）
輝かしい夏の日々（続）　（38）
夜曲ノクターン　（39）
青春の日々　（40）

井上一二三男
やきとりの夢　（1）
病室の窓　（2）
病室の窓（続）　（10）
電話　（19）
秋そぞろ　（25）
浪浪事始　（27）
浪々好日　（28）
ほたる　（29）
白き流れの思い出　（30）
万年筆　（32）
浪々好日（続）　（34）
雪の夜　（36）
浪々好日（三）　（38）
介護日記　（39）
介護日記（続）　（40）
隣の社宅　（42）
さくらさく　（44）
病葉の青春譜　（50）

大和禎人
母ひで　（1）
あるフィナーレ　（2）
呪縛の語り部　（3）
朱の数珠　（4）
演物・兵士・馬のラプソディ　（5）
勲章ばなし　（6）

李朝の壷　（7）
雲南のピエロ　（8）
七福雛　（9）
輝きの御国に　（10）
子の権現　（11）
モーニングコール　（12）
縁日屋の平さん　（13）
阿多多羅山涅槃　（14）
午前堂恒石居左文氏還浄図　（15）
『汽笛一声』今は昔　（16）
水出書店　（17）
玉千代の廃業　（18）
夢芝居　（19）
逆島記　（20）
偲び餅　（21）
作兵衛の槍　（22）
烏川の畔　（23）
柳眉抄　（24）
童子寸描　（25）
温泉女神（一）　（26）
温泉女神（二）　（27）
被爆者健康手帳　（28）
弥兵衛初夢　（29）
童子寸描（二）　（30）
利狂人銭形控　（31）
桃李庵のアルバム　（32）
ミニカメレオン伝　（33）
噴火島に生きる　（34）
北の門口　（35）
童子寸描（三）　（36）
まかり行かむ―神職連合―　（37）
送葬記　（38）
午後の肖像写真　（39）
童子寸描（四）　（40）
有院家の人々（一）　〃
有院家の人々（二）　（41）
少年素描　〃
有院家の人々（三）　（42）
東京錦絵　〃
有院家の人々（四）　（43）
有院家の人々（五）　（44）
有院家の人々（六）　（45）
相聞歌の女流　〃
有院家の人々（七）　（46）
有院家の人々（八）　（47）
有院家の人々（九）　（48）
有院家の人々（一〇）　（49）
有院家の人々（完）　（50）

小久保　勝義
陽気な患者　(37)
山の風山の音　(40)
金子　正義
ハイラル挽歌（一）　(1)
ハイラル挽歌（二）　(2)
ハイラル挽歌（三）　(3)
ハイラル挽歌（四）　(4)
ハイラル挽歌（五）　(5)
ハイラル挽歌（六）　(6)
ハイラル挽歌（七）　(7)
ハイラル挽歌（八）　(8)
ハイラル挽歌（九）　(9)
ハイラル挽歌（一〇）　(10)
ハイラル挽歌（一一）　(11)
ハイラル挽歌（一二）　(12)
ハイラル挽歌（一三）　(16)
ハイラル挽歌（一四）　(17)
ハイラル挽歌（一五）　(18)
李赤の雪隠の死　(19)
ハイラル挽歌（一六）　(20)
ハイラル挽歌（一七）　(21)
ハイラル挽歌（一八）　(22)
ハイラル挽歌（一九）　(23)
ハイラル挽歌（二〇）　(24)
陛下からの預かり物　(25)
ハイラル挽歌（二一）　〃
ハイラル挽歌（二二）　(26)
ハイラル挽歌（二三）　(27)
ハイラル挽歌（二四）　(28)
ハイラル挽歌（完）　(29)
近藤富蔵の生涯（一）　(30)
近藤富蔵の生涯（二）　(31)
近藤富蔵の生涯（三）　(32)
近藤富蔵の生涯（四）　(33)
近藤富蔵の生涯（五）　(34)
近藤富蔵の生涯（六）　(35)
近藤富蔵の生涯（七）　(36)
近藤富蔵の生涯（八）　(37)
近藤富蔵の生涯（九）　(38)
近藤富蔵の生涯（一〇）　(39)
近藤富蔵の生涯（一一）　(40)
近藤富蔵の生涯（一二）　(41)
近藤富蔵の生涯（一三）　(42)
近藤富蔵の生涯（一四）　(43)
近藤富蔵の生涯（一五）　(44)
近藤富蔵の生涯（一六）　(45)
近藤富蔵の生涯（一七）　(46)

近藤富蔵の生涯（一八）　(47)
近藤富蔵の生涯（一九）　(48)
近藤富蔵の生涯（二〇）　(49)
近藤富蔵の生涯（二一）　(50)
神原　拓生
忘れられぬリオ　(1)
岸田　幸雄
「うん」　(1)
まり子さんとこどもたち　(2)
可愛い登美　(3)
むうさん　(4)
志功頌　(5)
佐々木　一郎
カステリオーネの夜は更けて　(36)
銀婚旅行は雲に乗って　(37)
銀婚旅行は雲に乗って（二）　(38)
ゲートボールの青春　(39)
三億円強奪事件の犯人を追った男　(40)
千三百年目の仇討（一）　(41)
千三百年目の仇討（二）　(42)
千三百年目の仇討（三）　(43)
千三百年目の仇討（四）　(44)
千三百年目の仇討（完）　(45)
前橋公園殺人事件（一）　(46)
前橋公園殺人事件（二）　(47)
前橋公園殺人事件（三）　(48)
此木　田　保
メガルさんの夏休み　(3)
臨界期　(4)
扇子　(6)
此木　田　富佐子
男運　(1)
町までの道　(2)
遅すぎた春　(3)
浅草そだち　(4)
汗をかいた道　(5)
浅草の子ら　(7)
毛皮　(9)
藤木屋酒店の終焉　(11)
離婚届　(16)
競馬屋の加代ちゃん　(17)
結婚　(19)
ライスカレー　(20)
ハローニューヨーク　(22)
訣れ　(25)
働き手　(34)
Liquor & food　(40)

逆立ち (43)

二戸岡　道夫

天明七年 (1)
両殖人間 (2)
ソクラクレス (3)
セールスマンA&B (4)
ツッパリ君 (5)
一日違い (6)
別の世界 (7)
黒いバス (9)
夏に狂う (10)
鏡花の女（上） (11)
鏡花の女（下） (12)
絢爛のあわれ (14)
男たちの藩（一） (15)
男たちの藩（二） (16)
男たちの藩（三） (17)
男たちの藩（四） (18)
コマーシャルタイム (19)
老桜 (20)
男たちの藩（五） (21)
男たちの藩（六） (22)
男たちの藩（七） (23)
男たちの藩（八） (24)
派手なネクタイ (25)
男たちの藩（完） 〃
カラオケ挽歌 (26)
極楽楽園 (27)
西日 (28)
極楽楽園（改稿） (29)
こぼれ萩 〃
江戸妖草伝 (30)
柳の怪 (31)
駆ける銀行（一） (32)
駆ける銀行（二） (33)
支店長の妻たち（一） (34)
支店長の妻たち（二） (35)
支店長の妻たち（三） (36)
青山の土地をめぐって (37)
金融山脈（一） (38)
金融山脈（二） (39)
金融山脈（三） (40)
金融山脈（四） (41)
金融山脈（五） (42)
修羅の銀行（金融山脈改題）（六） (43)
修羅の銀行（七） (44)
お母さん会社へ行かないで (45)
銀線花の蔓 (46)
黒い影の絵 (47)
手紙 (48)
天守台（その一） (49)
天守台（その二） (50)

＊註
石三戸岡作品中「支店長の妻たち」、「青山の土地をめぐって」→後に改題「社長の椅子」、また「金融山脈」→改題「修羅の銀行」は各未完のまま中断、企業小説シリーズとして単行本化されている。「駆ける銀行」のみは未完、前記シリーズ初刊の「降格を命ず」は「カラオケ挽歌」（37）の長編化されたものである。

森　本　俊　正

（後に　茂　里　英　介）

下町風俗資料館 (1)
筆だより (4)
三河島物語 (10)
遠足 (11)
秋思 (16)
天皇誕生日 (20)

八十島　元

松尾芭蕉ー瓢の艶ー (14)
松尾芭蕉ー臨終の蝿ー (16)
吉原遊廓 (19)
松尾芭蕉ー貝おほいー 〃
松尾芭蕉ー坐り胼胝の蚊ー (20)
松尾芭蕉ー嵯峨日記・壁の跡ー (22)

山　口　健　二

（時により左老庵と称す）

鉄舟の行方 (1)
もの憂い小島 (2)
めぐむは走る (3)
つまみ食い (4)
陽の当たらない風景 (5)
日暮里界隈 (6)
さいたま屋風土記 (7)
○町○丁目○番地 (8)
○町○丁目○番地（二） (9)
狐里村センセVS井中センセ (10)
○町○丁目○番地（三） 〃
○町○丁目○番地（四） (11)
さいたま屋歳時記 (12)
○町○丁目○番地（五） (13)
さいたま屋歳時記（二） 〃
○町○丁目○番地（六） 〃
杖 (14)
さいたま屋曼陀羅 (15)
お遍路道中記 (16)
さいたま屋点鬼簿 (17)

編集室日誌

◆第五十記念号である。十有二年の歩み、努力、努力を集積して達し得た一つの彼岸である。

◆微小の作家集団という言葉を前号のこの欄で使っているが、微小なりとは言え屈することなく、魂を寄せ合い達した彼岸ゆえに意味深い。

◆仲間の毒舌に会って去ったり、同人費負担にルーズで長続きしなかったりの仲間の集合離散は多分に漏れず何人かを数えたが、基幹は揺るがず今日に至った。平俗な言葉ながら「継続は力なり」という自足を同人ひとしく胸に覚える。

◆三戸岡道夫が企業小説作家としての地歩を定め、さらに時代小説の分野に脚光を浴びようとする旺んな意欲は目覚ましく、わが陣営をエキサイトして止まない。

◆特集として三十一頁を組んだ。「作者別全作品一覧」ほか、これまでの総決算の意味あいをもった企画である。

◆末尾に第四十一号から五十号までの総目次を付した。合本の便宜に備えるためである。（お）

「まんじ」　第五十号

平成五年十一月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎〇三（三二六一）一六一〇